
転生者たちの軌跡

水野こころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者たちの軌跡

【Nコード】

N4227N

【作者名】

水野こころ

【あらすじ】

この作品では管理局や原作キャラに対するアンチは薄めです。そういった作品をお好みの方は楽しめないと思います。

リリカルなのはの世界に転生した5人の転生者たち。

管理局に追われながらも、彼らは『目的』のために暗躍する。

誤解と勘違いから始まる転生者たちと管理局の戦いはどこにたどり着くのか。

特にチートや特殊能力はなし、神様なんて欠片も出てきません。

『転生者たちの軌跡』 始まります。

ブローグ：オリ主にだけはなりたくない

とある管理外世界の森の中にその研究所はあった。

色あせた壁がその古さを証明しており、実際すでに廃棄されたと言われている。

「なんだよ、怪しさ爆発じゃねーか。

つーか電気通ってるし、外の水道から水出たしよ、杜撰なカモフラージュな事で」

その廃棄されたといわれている研究所を双眼鏡で眺める少年が近くの木の上にあった。

十歳程度の黒髪を肩まで伸ばしたの少年、ただしスーツにネクタイという場違いな衣装を纏っている。

彼は右手に持ったデバイスから表示されている画面に目を移す。

「ンで、気配の源はあの研究所か。

あーあー、聞こえてる？ 中々愉快そうなんだけど、ドクターちゃん」

『聞こえてますから少しボリュームを落としてください』

「オツケーオツケー、ンで研究所っぽい発見したぜえ。

ありやどう考えても魔法関係だな、かなりの数のサーチャー張り巡らされてんよ」

『前情報から管理局の所有物ということは分かってます。以前は真つ当なこの世界の前線基地だったようですね、今はどうか知りませんが』

この世界は無人世界である。かつては人が住んでいたと言われていたが、管理局が発見したときには無人だったらしい。

高ランクのロストロギアが質量兵器による戦争か、どちらにしろすでに人は滅んでいた。

管理局はこの世界に前線基地とも呼べる施設を建て、この世界を調べにかかったらしい。

この世界に人間はいないが危険な魔法生物はそれなりに存在し、それなりの防備を調える必要があったためだ。

だが、この世界で目ぼしいロストロギアを発見してからは特に用がなくなってしまった。

保護すべき魔法生物も守るべき人間も存在しない弱肉強食の世界、そこに人員を置いておく必要はない。

よって施設は破棄され、ここは管理外世界として特色の無いまま存在しているはずだった。

「人間の業は深く、目の届かない場所でこそ増殖していくってかあ」

『いいからさっさと働きなさい』

少年は空中で回転しながら木から飛び降りる。

「あいよつと、ご近所で正義感の強い美少年と評判の俺はこんな研究が許せない、なんてな」

『ロリコンが何を言ってるんですか。性戯感の間違いでしょう、幼女趣味』

「ツハ、日本人男性の97%はロリコンって誰かが言ってたぜ。なら俺は至って健全、むしろ模範的な男の子になるんじゃないの。くははは」

『それだけはありません、貴方は男性どころか人間としても非模範的です』

「おいおい、そりゃねえンじゃねえのドクターちゃん。まあ否定はしねえけどよ、『この世界』で模範的であることなんて無理に決まってるんだろ」

常識なんて持ち続けてちゃ、とうに狂い死んでるだろう。
少年がぼやく様に吐いた台詞に、携帯電話の向こうの相手は何も返さなかった。

「さあて、今日も一日精を出して働きますかね」と

『忠告しておきますが、相手にはA A相当の傭兵魔導師が確認され

てます。

油断して無様に惨めに哀れに敗北して生き恥をさらした拳句、のたれ死ぬことが無いように』

「くははは、俺を誰だと思ってやがるってか。

SSSランク魔力持ちのオリ主様だぞ、その程度の相手に負けるとかねーよ」

『その魔力を全然使いこなせてませんけどね』

「ああん？ しょうがねえだろ、元々俺は非魔導師だぜえ。

魔法を使う才能なんて持ってるわけねーだろ」

『では帰りにまた』

「おつよ」

電話の電源を切ると少年は格好をつけて空中に投げ、ポケットの中に見事に落とす。

少年はその結果に満足したのか、にやっと笑うと右手にナイフ型のアクセサリーを持ち、空にかざした。

「クレセント、セットアップ」

『Set Up』

灰色の魔力光に少年は包まれる。

光が晴れるとそこには、黒のコートに身を覆われた少年の姿があった。

「さあて、非人道的な研究者諸君、全員纏めて断罪^{アンチ}してやんよ」

右手に持ったナイフ型のデバイスの切っ先をその施設に向け、少年は宣言した。

「き、貴様ッ自分が何をしているかわかって　　が、は……」

「弱えなあ、おいつ！」

てつきり避けるか、防ぐかと思って斬りかかったらあっさり死んでしまった。

これでA Aランクというのだから驚きだ、案外自分は強いのかもしれないと少年は思う。

「えーと、これで全員、だよな。」

まあ幼女を人体実験の材料にするような輩に容赦は不要だよな」

彼は廃棄された少女だった亡骸を一瞥する。

残念、生きていれば俺好みに育ててやったのに、と少年は考えた。

8

「しかし、警備少なすぎねえかコレ。」

いや、いいんだけどさ。 手間が省けて」

この場にいた人間のほとんどは研究者のようで、抵抗らしい抵抗もしないまま死んで行った。

他のほとんどが並みの武装局員よりも少し下、といった程度の実力。

結局最後まで残ったのがA Aランクの傭兵だったのだが、わりと早くダウンしてしまった。

「プロジェクトFによる 魔導師 高ランク 血で汚れて読めねえ」

拾い上げた書類を丸めて、近くのゴミ箱に投げ捨てる。
しかし上手く入らず、壁にぶつかってゴミ箱の近くに落ちる。
だが少年は気にせず他の場所に向かう。

「まあ管理局の仕業だろうなあ、この惨状は。
何を研究してたのかはしらねえけど、どうせ碌な事じゃねえよう
だぜ」

ナイフ クレセントという名のアームデバイス に付いた
血を少年は拭き取る。
そして溜息を付きながら流れ弾や砲撃魔法でガラクタとなった機
材を調べ始めた。

「もっと機材は大切に扱おうぜ、もったいない。
中のデータとか取り出せそうに無いしなあ、どうしようかねえ」
しばらくガラクタとなった機材の破片を漁っていたが、飽きたの
か立ち上がる。

「まあいっか、これで向こうの戦力は削られたって事で」

そしてポケットから携帯を取り出す。

「ようドクターちゃん、任務は終わったぜ。

ただ流れ弾とかでデータ引き出せそうに無いんだわ」

『馬鹿なの？ 死ぬの？』

「悪かったって、でも俺に責任はねえぞ。

防御魔法使えねえ俺には相手の攻撃を避けるか斬るかしか選択肢ねえんだしよ」

俺の才能の無さが恨めしい、と少年はぼやいた。

「ああ、そういえば今日の前に、奇跡的に無傷で残った人造魔導師いるんだけど」

少年の目の前には培養槽に入った金髪の少年の姿があった。

薬品と思われる液体の中で目を瞑り、浮いている。

「どうする？ 管理局への忠誠とか刷り込まれてたら厄介だしバラすか？」

『そうですねえ、とりあえず起動するか試してもらえますか？』

「りょーかいつと。」

つかヤベエよ、こいつ結構存在感があるぜ。 案外俺らと同じかも」

『マジですか、それなんてテンプレ?』

「まあ俺らと同じだったなら、俺は喜んでオリ主の称号譲るわ」

『いい迷惑ですね』

「くははは、いいんじゃないねえの。」

テンプレオリ主の称号なんて、中々手に入るもんじゃないよ」

培養槽の隣にあった、少年曰くそれっぽいレバーを適当に引いた。培養槽が開き、中の薬品らしき液体が排出される。

そして、その実験体が外気に晒された瞬間、存在感が増した。

「ドクター、断定。 俺らと同じだよコイツ」

『五人目ですか、喜ばしいのかどうか』

「こづいこのアレだろ、役者は揃ったって言うんだろ。」

くははは、とうとうオリ主の称号ともお別れか、いやー寂しいなあー」

『白々しい台詞は止めてください、不愉快です』

「イエッサー、ってか。

ん、おお起きるぞコイツ、ここは決めないとな」

実験体である金髪の少年の瞼が動いたことに気づいた瞬間、
彼は懐から手鏡を出し、自分の顔を映して髪型をチェックし始め
た。

『アホですか』

「第一印象って大事じゃん」

そして実験体の少年の目が開いた瞬間、彼は言った。

「よお、起きたかオリ主。

俺の名前は『一梨いちなし一はじめ』
リリカルでマジカルな世界にようこそつ
てか、くははは」

笑顔の彼を緑と赤の瞳が見つめていた。

Ep・01：いままでのあらすじ

僕の名前はクエス・ベルリネッタ、ただし偽名。
今日から私立聖祥大学付属小学校の1年生。

正直、やってらんない。

小学生をもう一度することは、不満だけど妥協してもいい。
でも場所が原作の舞台である、原作には何があっても関わりたくないというのに。

まあ僕がなぜこんな状況に陥ることになったのかは、話せば長くなるだろうから心して聞いて欲しい。

僕には記憶が無い。

この肉体に憑依する以前の記憶が無い。
自分の名前も容姿も、どんな人間だったのかさえ思い出せない。

代わりというか、知識だけは忘れていなかった。

日本語から箸の使い方、そしてそれなりの数のゲームやアニメの知識。

それらがあつたからこそ、僕はこの世界の危険性や未来が理解できたのだけど。

さて、目が覚めたら幼児になつていた経験はあるだろうか。なんて聞いてみたけど答えは聞かなくてもわかるから無視しよう。

当然の帰結というか、当時の僕は滅茶苦茶混乱した。

自分が誰だつたのかわからないというのは、想像していたよりも気分の悪いものだ。

そんな右も左もわからない僕が今のところ平穩にいられるのは、不本意だが一人の少年のおかげだ。

一梨いちなし 一と名乗いちめつた彼もまた、この世界の人間ではなかつた。

まあ彼は記憶を失つていなかつたようだけど。

「リリカルでマジカルな世界にようこそつてか、くははは」

改めて思い返すと酷い。

何が酷いって、いきなり他人をオリ主呼ばわりするところがである。

僕の憑依先は金髪にオッドアイのF計画素体という中々に痛い容姿だつたので余計に効いた。

それにプラスして女性にも見える美形に記憶喪失、これではオリエントと呼ばれるも仕方がない。

それに良く考えたら金髪オッドアイって聖王クローンじゃないか。痛さのあまりその場で悶絶した。

その後、彼にこの世界の現状を説明された。

最初は原作のどの辺の時間軸かな、程度だったのだが最後まで聞き終わると啞然とする。

まず現在は無印から数年前、なぜそんな時期に聖王クローンが生まれているのか疑問だけど。

そして現在の世界情勢が問題だった。

曰く、転生者について予言が記されたらしい。

これはカリムさんあたりだろう。

まあこの辺は問題ない、バレなきゃいいだけだし。

曰く、転生者は世界を破壊すると記された。

いきなりアウトである。

え、この世界を滅ぼす？ 転生者が？

彼によると、この『世界』は『物語』という意味らしい。

ここで問題なのは、管理局側が『世界』を『次元世界』と解釈し

ていることである。

そりゃあ彼らには『物語』なんて解釈はできないだろうから当然なんだろうけど。

曰く、管理局が転生者を探しているらしい。

彼らにしてみれば、次元世界の危機なのだから、多少強引にでも探すのはわかる。

でもこれは危ない、捕まったら犯してもいない罪で幽閉されかねない。

曰く、転生者と原作キャラはひかれあう

一番まずいと思ったのがこれである。

どうやら原作キャラや転生者は存在感が普通よりも濃いらしい。

だからこそ彼は、僕のことを転生者だと見破れたようだが。

しかしこれではどこかに隠れ住むというのも難しくなる。

原作キャラとひかれあうということは、物語に巻き込まれやすくなるということだ。

何かの事件に巻き込まれて、事情聴取されたときに戸籍を確認できなければ疑いは濃くなる。

「そこなんだよなあ。」

管理局は今、戸籍を持たない次元漂流者（転生者候補）を集めま

くっっている。

次元漂流者を元の世界に帰すまで管理局が生活を保護するって言う名目でな」

そして元の世界に戸籍があれば白。

なければ黒ということどこかに連れて行かれるらしい。

疑わしき者は罰する。

人としてはともかく組織としては正しい判断であるといわざるを得ない。

もっとも本当に世界を破壊するのであればの話だが。

「結局は勘違いだぜ。

だがその証拠はねえし、向こうも自分たちが物語の中の存在だとは考えもしない。

唯一のプラスはあいつらが、『転生者』は必ず次元漂流者だって勘違いしてるって所か」

『決して交わることはない次元より5人の異邦人が現れる』

予言にはそう記されたらしい。

当然だが管理局側も、”魂”だけで来るとは考えもしなかったらしい。

だから次元漂流者という形だと、そしてこちらに戸籍はないはずだと考えた。

それが唯一の救いではある。

「俺は戸籍のない捨て子に憑依したからアウト。

お前を除いた残りの3人の内、2人には戸籍が存在する」

……あれ？

よく考えたら僕には戸籍がないんじゃないだろうか。

どうやら僕はF計画の素体に憑依したらしい……。

「アウトだな、喜べオリ主。

お前は自分の生存のため、俺たちと来るしかなくなったってわけだ」

選択の余地はなかった。

自分が誰かもわからない僕ではこの世界で生きていくこともできないだろう。

管理局に保護されればどうなるか、予想もつかない。
多分いい方向にはいかないだろう、組織とはそういうものだ。

そして一番重要だったのが

「俺たち転生者は、お前を含めて5人全員で組んでいる。
自分の安全のためにな、いわゆる相互扶助ってやつだぜ」

本来ならば転生者同士が手を組むことはなかったと思う。
だが状況が悪かった、常に命の危機を感じ、なおかつ自分を理解
してくれる人間がないのだ。

それはきつと孤独で、だからこそ仲間を求めたのだろう。
同じ境遇の同胞を、同じ立場の仲間を。

「管理局は決して悪じゃねえ。
質量兵器の廃止も子供を戦力にするのも文化のひとつだしな」

ただ、彼らは世界の平和のためなら犠牲を許容する。
原作のリンディ・ハラウンですら、闇の書の間にもアルカンシェルを撃ちかねなかったのだ。

代案がなければ、彼女は海鳴市を焼け野原にすることを躊躇わなかっただろう。

「俺たちはむぎむぎ捕まる気はねえ。

だからといってたつた1人で組織から隠れ住むのは難しい。

いざというときのために、匿ってくれる仲間が多いに越したことはねえ」

僕はそれにYESと答えた。

結局僕に選択肢はなかったし、共感できたというのものもある。

1番の理由は、僕の記憶を取り戻すためだ。

前世で僕がどんな人間だったかは知らないが、

前世の記憶を取り戻すのなら、できるだけ同じ環境にいたほうがいい。

けれどこの世界で同じ環境は不可能だ、だからこそ彼らの側にいたほうがいい。

それを少し後悔するのに、その時間はかからなかったけれど。

それから色々あって、冒頭につながる。

僕は主人公組みを見張る役目を押し付けられたのだった。

「引き籠もりになりたいなあ」

仲間の一人、ドクターちゃんが戸籍を用意してくれたおかげで学校には行ける。

管理局に目をつけられなければ偽造とも見破られまい、そこは感謝している。

だからって此処はやバイと思うのだが。

だが僕らの目的のためには頑張るしかあるまい。
願わくば原作に関わることがありませんように。

EP・O1:いままでのあらすじ(後書き)

批判、誤字脱字報告などを送ってくださると助かります。

EP・02：僕らの目的

入学式も終わり、各自は今後1年間過ごすことになるクラスに向かう。

金髪碧眼の少年 クエス はため息をつきながら辺りを見回した。

自分と同じく、珍しい金髪をした釣り目の少女
主人公の日常の象徴、アリサ・バニングス

不安そうに顔を俯かせている、紫髪の少女
同じく主人公の日常の象徴、月村 すすか

そして、物珍しそうに周りを見渡している、茶髪をツインテール
でまとめている少女。

この世界の主人公、高町 なのは。

この3人は、あのロリコンが言っていたように、確かに存在感が
違った。

それにひかれあうというのも本当のようだ、同じクラスになって
しまったし。

そして、偶然にも高町なのはと目が合ったときである。
僕はその瞬間、此処にいることを後悔した、

はつきり言ってしまうえば、おぞましいと思ったのだ。

自覚なき魔力、圧倒的な存在感。

そして何よりも、『世界』に愛されているその瞳。

彼女は僕と目が会つと、笑顔で返してきた。

体全体に鳥肌が立った。

吐き気すらする、ただの小学生に戦慄すら覚える。

認めよう、僕はこの主人公に恐怖した。

原作の知識など関係なく、ただその存在が怖いと思った。
アレはいずれ、僕たちの前に現れるだろう、敵として。

僕は彼女の笑顔に何も返さず、顔を背けた。
恐怖に引きつった顔を見られないように

今、彼女はどんな顔をしているだろうか。

できれば彼女には今後絶対に関わりたくない。

その後、教室で各々の自己紹介の時間があつたが何を言つたか覚えていない。

ただ、1秒でも早く家に帰りたいと僕は思つていた。

『くははは、お前も苦労してんじゃねえか、オリ主』

「そのあだ名で呼ぶ名と何度言えばわかるロリコン。
魔法関係の原作キャラってあんなにも気持ち悪いとは思わなかつたよ」

『まあ、気持ちわかるけどなあ。』

俺も道で八神はやてを見たときの感想は忘れねえよ。
まあその後、仮面の男とガチで殺し合いになったから、それ以来
近寄って無えけどな』

この男は何をやっているんだろう。

一応、仮面の男（猫姉妹）は転生者にとっての鬼門の1つだろう
に。

『まあ我侬はよくねえな、一応皆だって苦労してんだよ』

「そりゃそうなんだけどさ……」

話は、また少し遡る。

確かアレは、仲間たち全員で初めて顔をあわせての会合だった。

当時は特に目的も無く、ただ生き延びることだけを目的に活動し
ていたわけだけだ。

「貴方たちは、元の世界に帰りたくないんですか？」

記憶の戻っていない僕はそう聞いた。

他の4人は啞然としてたっけ、まるで考えてもいなかったように。

僕はそれを無視して言葉を続けた。

「僕は帰りたい、だってあの世界じゃないと僕は記憶を取り戻せない気がする。」

それに、もし家族が友人が待っているなら、僕はそこに帰りたい。だってあの世界には、魔法なんて無いけど、この世界よりはマシだったはずだから」

この世界が悪いとは思わない。

魔法なんてロマン溢れる物が存在しているのだ。

この世界に来たいという人だって、数え切れないほどいるだろう。

でもこの世界は駄目だ。

この世界に来たものは、本質的に孤独なのだ。

誰にも理解されず、命を狙われ続ける。

『物語』は僕らを排除しようと動く、いわゆる世界の修正力というやつだ。

『転生者なんていうのは、物語の癌細胞見てえなもんだ』とあのロリコンは言った。

本来あるべきものを食いつぶし、他の場所にも転移して影響を広めていく。

だから世界は『転生者』を排除しようと動く、本来の物語を守るために。

その事実が無ければ僕らは団結できなかったらろつ。

だから、元の世界に帰りたいたいと思うのは当然のはずだ。

「僕は記憶を取り戻すためにも元の世界に帰りたい。
貴方たちにまでそれを強要するつもりはありません。
でも、邪魔にならない位の範囲で手伝ってほしい」

1人じゃきつと無理だ。

元の世界に戻るのはいきつと容易ではない。
どんなロストロギアを使えばいいのかもわからない。

そもそもそんなロストロギアが存在するのかさえ

「くはははははははははは。

いいんじゃないの、そういうのも悪くねえだろ」

意外にも食いついてきたのはロリコンだった。

「俺も『魔法少女リリカルなのは the movie 2nd』

見てえしな」

……動機はともかく素直に嬉しかった。

動機はともかくである、というかなんだその理由は。

「私もちょうど『ハンターハンター』の最終回が気になっていたところですよ」

これはドクターちゃんだ。

だからその動機はどうかと……

というか完結するのだろうか、あの作品は。

「ふつ、難儀な性格だな君は。

まあ私も型月のない世界などに未練はないし、協力しよう」

「そうだね、あたしもコミケが恋しいし。

それにニコニコ動画が存在しないとかが、やってらんない」

残りの2人までこれである。

協力してくれるのは嬉しいけれど、幾らなんでも酷すぎである。

こいつら馬鹿だ！ 僕の真面目な演説を返せと叫びたい！

(まあそれでも)

この馬鹿なやり取りが僕らなのだから。
うん、実は照れ隠しであることを祈ろう。

「じゃあ全員役割分担を決めましょう」

ドクターちゃんの発言に僕らは頷いた。
その結果、僕には原作キャラの監視を命じられたわけなのだが。

「どうした？ 急に黙り込んでしまったよ」

「僕らの仲間の非常識さに頭を痛めていたところだよ。
というか何で君たちはそんなに個性的な変人なんだよ！
向こうでもそんな性格だったの？」

「なわけねえじゃん。」

俺は向こうではいたって普通のサラリーマンだったぜ」

「初耳だよ！」

つかじゃあ何でそんな性格になっちゃったのかと小1時間程問い詰めたい」

「そりやお前、キャラ作りだろ」

これである、このロリコンはそんなふざけた理由で僕の胃を痛めつけているのである。

「そしたらあいつらも好みのキャラ作りしやがってよ。
なんかブームになっちまったってわけだ、まあ今はこれが素みてえなもんだ」

「テメエら全員、最悪だ！」

もう引き籠もろう。

明日から僕は引き籠もろう。

まあそういうわけにもいかないんだけどさ。
やっぱり1人だけサボるのは良くないし。

「頑張れよ、オリ主」

「わかったよ、ロリコン」

それに、こんな状況でも孤独に感じないのはきっと、こいつらのおかげだから。

「そういえばドクターちゃんが服が透けて見えるメガネ開発したぜ」

「人がせつかく綺麗にまとめようとしている時に！」

あの人は腕は確がなくせに、時折変なものを作ること知られている。

半ば欲望の赴くままに作る辺り、性質が悪いと言わざるを得ない。

「でもあの人のことだから……」

「正解、服どころか肉体も透けるぜ」

それはもはやレントゲンである。

僕と、めずらしくロリコンもため息をついた。

「あの臓器フェチが」

EP・02：僕らの目的（後書き）

こんな小説をお気に入りに登録してくださる方がいて感激しています。

Ep・03：ついカツとなってやった、今は反省している

入学から3日後のことだ。
いきなり実力テストがあった。

おそらく現時点での個人の成績を把握するためだろう。
とはいえ足算引き算、九九が精々である、簡単すぎてつまらない。

というか授業がつまらない。
誰だって、わかりきった問題を延々と説明される授業はうんざり
だろう。

よく小説に出てくる最強オリ主の皆さんを尊敬しなくなった。
これを卒業まで続けるとか無理である、僕は絶対に不登校になる
だろう。

「ちょっといい？」

問題はそのテストで満点を取ったことだ。
いや、ついその場のノリで解いてしまったけれど、よく考えたら
アウトである。

二次創作小説でよくある、頭のいいクラスメイトに突っかかる金
髪存在を忘れていた。

「聞ってるの!?!」

「聞ってるよ」

そういうわけで今、僕はアリサ・バニングスに絡まれている。
唯一の救いは、まだ高町なのはとの喧嘩が起っていないことだ
ろうか。

「何か用? バニングスさん」

もしここで返答を誤れば、なし崩しに高町なのはと関わりかねな
い。

僕の目的は監視であって、友人関係を築く事ではないのだから。

『なんなら原作キャラでハーレム作ってもいいぜ、くはははは』

いかん、ロリコンの台詞を思い出した。

「あんだ、日本人じゃないわね」

さて、どう答えたものか。

体は外国人、魂は日本人と答えたいところだが殴られそうだし。

「この髪と名前で見ると思っけど」

「わかってるわよ、確認しただけ」

流れが怪しい。

このままだとライバル宣言されちゃうんじゃないだろうか。

「あなた、さっきのテストで満点だったわよね」

「バニングスさんと同じくね」

「ふうん、決めたわ！」

あなた、あたしの友達になりなさいっ！！」

「嫌だ」

とっさに答えてしまった。

実はさっきから僕は彼女が怖かったりする。

高町なのはほどではないが、彼女も十分おぞましい。

「な、なんでよっ！！」

このあたしが友達にしてあげるって言ってるのよ！？」

……あれ、彼女はこんな性格だったのだろうか。
すごく上から目線で、まるで我侭なお嬢様といった感じである。

(ああ、まだ喧嘩してないからか)

ならば災い転じて福となす。

このまま彼女に嫌われるよう努めよう。

嫌われるのはいい気分ではないが、高町なのはに関わるよりはマシだ。

「そんな上から目線の人と友達になりたくない。

僕は、バニングスさんみたいな我侭なお嬢様は好きじゃないし」

「なっ……!!」

あたしだってあんたみたいな暗い奴大っ嫌いよ!」

「じゃあそれでいいと思うけど。

僕はバニングスさんが嫌いだし、そっちも僕が嫌い。

ならお互いこれ以上関わらないほうがいいと思うけど」

「何いってんのよ!」

あんたみたいな暗い奴の友達になってくれる人なんているわけ無いじゃない!」

「暗いのは否定しないけど、そこまで断定される謂れは無いよ」

「だいたい何、その左右で違う目の色は？」

カツコイとでも勘違いしているのかしらないけど、はつきりいって気持ち悪いわよ！」

激しく胸に突き刺さった。

この小娘、こっちだってなりたくてなったわけじゃないと言つのに！

オッドアイの痛さは僕のほうが、何十倍も理解してるさ！

「そつちこそ、自分が偉いと信じて疑わないお嬢様キャラなんて今時流行る分けないだろ！」

はつきり言つて時代遅れなんだよ我俣娘、そんな性格だと君こそ友達なんてできないよ」

「なっ！！ 偉い人間が偉いって言つて何が悪いのよ！」

「だいたい、黙っているクールな僕カツコイとか思ってるつもり？ 周りの空気が暗くなるからそういうの止めてくれる？ 見ててイラつくの」

「ハッ、偉い？ 笑わせないよ我俣娘。」

働いたことも無い小学生が偉いわけが無いだろ。

それに人のことをそんな厨二病患者みたいに言わないでくれるかな！」

「何それ、今度は『人は平等』って奇麗事かざしてる自分に酔ってるの？」

それに『ちゅうにびょうかんじゃ』って何よ、訳のわからない単語使わないでくれる?」

「ああ、君には少し難しすぎたか。
ごめんね、次からは君にわかりやすい言葉を選ぶように努力するよ。」

それに僕は別に自分に酔ってる訳じゃない! 勘違いしないでくれるかなあ」

「今度は『僕は頭がいい物知りですー』ってこと?
いちいちカツコつけなくていいから、キモイし。」

「だいたいクエスって何? 顔も名前も女の子みたいだし制服間違えてるんじゃないの?」

「あたしの家にある女子用の制服、余ってるから貸してあげようか?
クエスちゃん」

「ちゃん付けで呼ぶな、こっちだって気にしてるんだよ。」

「君こそ『金持ちで美人なあたしは偉い』とか愉快的勘違いしてるんだろ。」

「どうせ君は誰かに叩かれるまでその自己中な性格は直らないんだから誰かに叩いてもらえば?」

「そ、そんなこと思っていないわよ!

「自分に誇りを持つのはいいことだってあたしのパパが言ってたのを守ってるだけ!」

「それに何? その確信したかのような台詞は。そんなにいうならどうすれば良いのか言ってもらおうじゃない!」

「そうだね、そこでオロオロしてる月村さんのヘアバンドでも奪えば良いんじゃない?」

そしたら友達思いで親切だけどトラウマ持ちの頑固な女の子が叩きに来てくれるだろ」

「何それバツカみたい。

なんであたしがあんなへアバンドを欲しがらなくちゃいけないの？

それに何？ 結局はあの月村さんに厄介ごとを押し付けて逃げようって言うの？

そういうところが暗くて女みたいなのよ！ 顔や名前だけじゃなく性格まで女じゃない！」

「なら僕がその腐った性根を叩きなおしてやるっじゃないか。

もう二度と僕を女みたいとか言わせないよう、その体に刻み付けてあげるよ！」

「こっちこそ、もう二度とあたしを我仮娘なんて言わせないよう体に教えてあげるわ！」

「外にでろ、この馬鹿！！！」

その後、先生に止められるまで僕たちは殴りあいをしていた。

授業そのものは終わっていたので、先生に止められ、今日はもう

帰りなさいと帰される。

そして現在、僕は現住所であるボロアパートの一室で反省中である。

冷静に考えれば、状況が最悪であることを理解するのに時間は要らない。

僕が気にしている部分を突かれたからといってヒートアップし過ぎた。

さりげなく、喧嘩フラグも折ってるし。

これでは3人娘誕生するのかさえ疑問である。

「明日は引き籠もろう」

そもそも何でアリサは僕に絡んできたのだろう。

テストが満点だったくらいで本当に友達になりたいと思うのだろうか。

確か最初に外国人かと聞かれて

ああ、そういうことか。

結局彼女は怖かったんだろう、自分が皆とは違う外国人だということが。

外国人という理由で気持ち悪いとか、差別されるのが嫌だったんだと思う。

そこで同じ外国人である僕を狙ったと。

テストの点数はおそらく口実のはずだ。

ただ話しかける機会を狙っていた彼女が、今日その機会を得て話しかけてきただけ。

上から目線は虚勢だったんだろう。

断られるのが嫌で、無理やりにでもといったところか。

「ツンデレ、になるのかな」

こんな頃からツンデレの片鱗を見せるとは恐るべし。

「ああ、月村すずかのヘアバンドを奪ったのも、
実は話しかけるきっかけが欲しかっただけなのかな」

小学生の心理も人間関係も複雑である。

このままでは原作が始まる頃にどうなっているかもわからない。

原作ブレイク自体は構わないのだけど、先読みが難しくなると辛

い。

(それに、このままだとアリサが流石に可哀想だ。

あの性格だと友達できないこともありえるしなあ)

もしかしてこれが、原作キャラとひかれあうということか。

このまま突き放したままはさすがに良心が痛むし、そこまで『世界』は計算済みとか？

かといってアリサの友達になるのも難しい。

転生者と原作キャラがひかれあうように。

原作キャラ同士もまた、ひかれあうらしい。

ということではある。

アリサと友達になったはいいが、そのアリサに高町なのはを紹介される可能性もあるわけで。

理想は僕は関わらずとも、彼女ら3人が親友になってくれて。

それでいて僕は3人に避けられればいいのだが……

「明日が怖い、本当に引き籠もりたいなあ」

EP・O3…ついカッとなってやった、今は反省している（後書き）

おかしい。

プロットでは、『アリサを無視して嫌われる』だけのはずだったのに。

EP・04：ろくでも無い変人たちと僕

学校を休んだ。

いや、アリサと会うのが結構辛かったし。

授業にうんざりもしていたので自主休校という奴である。

まあ様子を見たかったというのが1番の理由だ。

高町なのはたちの喧嘩騒動がいつだったのかはしらないがもうそれは起こりえない。

できれば僕がいない間に、アリサが腹いせに月村すずかに絡んだりして欲しい。

無いだろうけど。

話してみてもわかったが彼女はプライドが高い。

我侭という点はあるが、自分が悪いと思えば謝るし、自分が正しいと信じていれば屈しない。

そんな彼女が自分の発言を覆すことはないだろう。

覆すことは、プライドを、自分を貶すことに等しいからだ。

この状況から、高町なのはたちを友人にする方法が僕には思いつかない。

「というわけでアイディアをください、ドクターちゃん」

『いきなり何をやっているんですか、貴方は。』

「というか貴方までそのあだ名を使うとは思いませんでした」

「だってドクターだと、被るじゃないですか」

『そうですね、私もジェイル・スカリエッティと同じ呼び方は御免
こうむります』

「……仲、悪いんですか？」

『そうですね、目指すものが違いすぎますし。』

「大体なんですか、他人の体いじってニヤニヤしているあの変態は」

「ドクターちゃんも、同じレベルでは？」

『違います、あの変態は生命を弄び、』

「生命操作技術とやらを完成させる夢を見てニヤついているマッド。」

「対して私は純粹に、他人の臓器に欲情して笑っているだけです、
レベルが違います」

「変態レベルでいえば貴方が上です、という言葉を飲み込んだ。」

「この闇医者は1度拗ねると、中々機嫌を直さないのだ。」

ドクターちゃん。

部屋着の感覚で白衣を着ている、紫髪をポニーテールにしている少女。

こちらの世界では本名も戸籍も存在しない。

前の世界での名前は『羽間 詩』、医学生だったらしい。

彼女はあの『無限の欲望』の予備として生まれた。

ジェイル自身が忙しくなったために、彼のほかの研究を完成させる存在が必要だったとか。

もっとも目覚めてすぐに現状を把握し、脱走した辺りはさすがである。

その後、ATMなどにハッキングを仕掛け、脱走資金を確保した後には地球に身を隠す。

『無限の欲望』の予備だっただけはあり、前世の知識もあいまって凄腕の闇医者として有名になる。

地球どこるか管理世界の裏社会で、訳ありの客を治療したりしている。

現在は管理局に指名手配されているらしく、ロストログアの研究や仲間たちの補助を担当。

蛇足ではあるのだが、あのロリコンと旧知の仲、転生者同盟を作ったのもこの2人である。

臓器フェチという点がなければ、パーフェクトな美少女である。医者という職業を選んだのも、新鮮な生の臓器が見たかったからという変態染みた理由からだ。

ちなみにスカリエッティとはたまに連絡を取り合う仲。仲は悪くはないが、彼女曰く『利用し利用されあう仲』らしい。

そんな彼女だがそのチート頭脳によるデバイスは一級品といわざるを得ない。

あのロリコン殺人鬼のアームデバイス『クレセント』も彼女の作品。

才能の無い凡才どころか落ちこぼれの彼を、陸戦SSに変えている時点でその出鱈目さがわかるだろう。

まあ、それもあの常識はずれの魔力量があつてこそなのだが。

『私も忙しいんですよ、メイド型ガジェットを開発しようと思いまして』

「待て」

方向性は違うが、彼女も十分変人である。

『いずれ私たちは管理局と前面衝突するでしょう。今の戦力では勝ち目がありません、ですからガジェットドローンのような兵士がいるのです』

「理屈はわかるけど、なぜメイド？」

『あのマッドの作品と同じ形状というのが気に入らないからです』

「……そうですか」

『そして動力源はジュエルシードを企画しています』

AMFを起動するための動力として、アレ以上に都合のいいものは無いだろう。

ああ、何となく彼女の言いたいことがわかった。つまり

『ですので今の現状を何とかしなさい。できるだけ原作に近づけないと、ジュエルシードを掠め取ることが難しくなります』

「ごめんなさい、善処します」

『最後に一言』

「何ですか？」

『戸籍、今なら女子に変えられますけど』

「死ね！」

特にすることも無く、家でゴロゴロしていた。

本屋で適当に見繕ったラノベの山ができているが読む気がしない。

とにかく、頭が痛い問題である。

原作に近づけるにはとにかく、あの3人を友人にし無ければならない。

このさい、僕の安全は考慮せず、最悪付き合いの悪い友人ぐらいなら妥協してもいい。

「高町なのはとの接点を作らないとなあ」

高町なのはと月村すずかなら、今のままでも友人になりそうではある。

なにせ高町恭也と月村忍という接点がある、だから放置しても問題はないだろう。

放っておいても2人は友達になる気がする、そう願いたい。

しかしアリサは難しい、接点が皆無といえる。

「どうしてこうなった」

原作を見張るだけでよかったはずなのに。

今、僕は深入り寸前の状況である、自業自得だけども。

もうアリサいなくてよくな、という考えが脳裏をよぎった。

いやいや、アルフを保護するのは彼女なんだから必要だと自分に言い聞かせる。

「しょうがない、もう1人に聞いて見るか」

ドクターちゃん特性『次元携帯電話』のアドレスから目標の人物に電話をかける。

この次元携帯電話は世界が違ってても電波が届くという便利な携帯である。

仲間内では基本、これで連絡を取り合っている。

『はいはい、どうしたの王様ちゃん』

「その呼び方ヤメロ」

この不愉快な呼び方をするのは『山中 あげは』
時空管理局本局所属の魔導師である、無論転生者。

あげはさんが憑依した先は、前世と同じ自分の肉体だったらしい。
いわゆる同位体というやつだ、この世界での彼女の両親は管理局員。

初めは『転生オリ主キター』と調子に乗っていたらしいが、転生者の危険性を知って恐怖したとか。

この世界での彼女は天才だった。

若干8歳にして執務官試験を一発突破してしまうほどの頭脳。
空戦S+という破格の戦闘力に、ユーノ・スクライア並の情報整理能力。

『万能の天才』と管理局では持て囃されたらしい。

本人も調子に乗っていて、いくつかの難事件を知恵と戦術と力押しで解決。

管理局でも『将来はストライカー間違いなし』と太鼓判を押されるほどだったとか。

余談だがこの頃のことは本人にとって『黒歴史』だとか。

しかし上層部の人間に『予言』の内容を知らされて一変。

上層部はこの予言の成就阻止のために彼女の力を使おうと思ったらしい。

広告塔としても戦力としても申しぶんないはずだった、誤算は彼女が転生者だったこと。

予言を知ってから彼女の彼女は周りが敵に見えて仕方が無かった。そのプレッシャーに耐え切れず、周りが引き止めるのも構わず執務官を辞職。

無限書庫を整理するという名目で無限書庫に入り、そのまま引き籠もってしまったらしい。

しばらくした後、ここでもロリコンが登場。

なんと本局に忍び込んで接触という非常識極まりない手段を使ったとか。

不安の真っ只中、信頼できる仲間に飢えていた彼女はあつという間に懐柔された。

仲間ができたおかげかどうかは知らないが、すでに恐怖は無いらしい。

ただ引き籠もり期間が心地よかったのか、未だに無限書庫に引き籠もっている。

まあ無限書庫で帰還のための手段を探してくれているあたりは感謝せざるを得ない。

ちなみに管理局側は前線に戻したいらしいが、

『前線に戻るくらいだったら管理局辞めます』との発言で動けないらしい。

そして無限書庫の整理は進んでいない、ほとんど役にたたないけど手放すには惜しい人材という位置。

運動不足解消のためか。

たまに出てきては逃亡中の指名手配犯の居場所を無限書庫で検索し

知恵と戦術と力によって捕まえてくることから、役に立っていないわけではない。

管理局では『無限書庫の引き篋もり』『残念な天才』『元最年少執務官（笑）』と呼ばれている。

『ふひひ、話はドクターちゃんから聞いてるよ。』

金髪ツンデレにフラグ立てたんだって？ やる〜』

「相変わらずですね、あげはさん。」

事情が伝わってるなら話は早い、どうすればいいかな」

『いや無理でしょ、4人で友達になるくらいしか。』

というか私に人間関係云々聞かれても困るよ』

「ああそうでしたね、友達いないからね」

『うぐっ、何気ない言葉の裏に隠された棘が胸に突き刺さる！』

「隠してないから」

『いるもん、たまにあのクロノちゃんの模擬戦相手だってしてるんだよ。』

今のところ私の全勝だけどね、元最年少執務官の面目躍如だよ』

「初耳なんだけど。」

てかそれは模擬戦相手なだけで友達とはいえないんじゃない？」

『王様ちゃんは酷いなあ。』

君こそ友達はいるのかな？ 私たち以外からのメールとかあるの

かな〜？』

「……………スパムは友達です」

『うわあ、駄目人間がここにいるよー』

「引き篋もりに言われたくねえ！」

『こんな時間に電話をかけてくる王様ちゃんに言う権利は無いよ。学校、サボってるんでしょ。学校をサボるのは良くないなあ』

「正論を引き篋もりに言われるのって、かなり腹が立つんだけど」

『その台詞、クロノちゃんも言ってたなあ』

「無性に会いたくなかったよ、クロノに」

ピンポン

インターホンが鳴った。

こんな昼間に誰だろう、訪ねてくるような知り合いはいないんだけどなあ。

いるとしたらあのロリコンぐらいだが、奴はインターホンなど鳴らさず入ってくる。

「ごめん、誰か来た」

『オツケー、助言できなくてごめんね』

「いいよ別に、期待してなかったし」

『酷い、私のことは遊びだったのね』

「むしろ暇つぶしだったよ」

さて、いい加減でないと

「いるんでしょ！ 開けなさいよ！…！」

なんて大声が聞こえた。

このアパートはちゃん作りのなので少し大声を出すだけで聞こえるのである。

EP・04：ろくでも無い変人たちと僕（後書き）

感想を待っています。

感想が来ると作者が小躍りして喜びます。

EP・05：金髪と僕と提督と元執務官と（前書き）

管理局と前面衝突はまだ先ですが小競り合いは別。

ちなみにこの作品でロリコンという言葉は『一梨 一』の代名詞です。

EP・05：金髪と僕と提督と元執務官と

「ボロっちい部屋ね」

「1人暮らしなんでね。」

あまり無駄遣いするわけにも行かないんだ」

「じゃ両親はどうしてるの？」

「さあ、もう顔も覚えてないよ」

「……辛くないの？」

「同情してくれるのは嬉しいけど止めてくれるかなあ。」

君のその顔を見ると罪悪感よりも吐き気がするんだ」

「あ、あんたって本当にいい性格してるわよね！！」

吐き気を催すのは本当である。

まだ慣れていないためか、彼女らはおぞましくて仕方が無い。
今はただ、嫌われるように努めよう。

それが僕の思いついた策。

高町なのはに月村すずか、そしてアリサ・バニングス。

この3人に積極的に関わり嫌われるような言動をとり続ける。

そうすれば彼女らは仲良くなれるんじゃないだろうか。

僕への愚痴を吐き、聞き、そのうちに親友になることもありえる。

というか、それしか打つ手が無い。

訪ねてきたアリサを見て、やはり僕は彼女たちと関わりたくないと思った。

「それでお金持ちのお嬢様が何の用かな？

こんなボロアパートにわざわざ来るなんて、昨日の続きなら受けてたつけど」

ちなみに昨日の結果は引き分けである。

いや、あのロリコンに鍛えられたから、それなりに戦いの心得はあるのだけど。

やはり小学1年生の女子相手に拳は振るえないので、だいぶ手加減していた。

「あ……その、えと」

「言いたい事があるならばつきりと言えば？」

そこでアリサは勢いよく息を吸う。

顔を真っ赤にして、これでは告白ではないかと思った、100%ないけど。

「ごめんなさい!」

「え?」

「無理やり友達になろうとしてごめんなさい!

暗いとか気持ち悪いとか女っぽいなんて言っでごめんなさい!」

何コレ? デレ期?

いや落ち着け僕、冷静になれ。

「い、いきなり何かな?

正直状況がうまく掴めないんだけど」

「あ、謝ってるのよ! 見ればわかるでしょ!」

「それはわかるけど何でいきなり……」

「実は今日、高町さんにね……」

あれ、二つで出てくるの!?!?

アリサ曰く、今日学校で僕が休みだということに気づいたとか。それでクラスの全員の前で僕を『臆病者』と罵ったところ、いきなり高町なのはに叩かれたらしい。そしてクラスメイト全員の前で

『痛い？ でも、自分の気にしていることを言われた人の心は、もつともつと痛いんだよ』

とか言っただらしい。

そこで喧嘩になりかけたところ、担任の先生より先に月村すずかが止めたとか。

あのオドオドした子があんなに大きな声で止めるとは思わなかったとはアリサの弁。

なんとという世界の修正力。

さすがの僕も予想してなかったぜ。

しかしこの時間ならまだ学校のはずなのだが。

「早退してきたわ。」

少しでも早くあなたに謝りたかったし」

少しときめいた。

いやいや、幾らなんでも変わりすぎだろ。

「あ、ああ、そうなんだ。」

別にもう気にしてないよ、だから謝る必要なんて無い」

「そ、それでなんだけど」

顔を真っ赤にしながらもじもじしている。

なにこのかわいい生き物、もうおぞましいなんて欠片も思えない。

「うん、何かな？」

「我儂なところは直すから、

あたしと、友達になってください!!」

「うん、喜んで」

何も考えず言ってしまったけど、後悔はしていない。

いいさ、高町なのはに関わらなければいいだけだと楽観的に考える。

というかここで断れるほど、僕は恥知らずじゃない。

まあ彼女が高町なのはだったのなら、断っていただろっけどね。

その後、とりあえず備え置きのお茶を軽く振舞った。
意外とお茶に煩いロリコンがたまに置いていく高級品である。

お茶の入れ方なんて知らないので適当に入れたところ、不味いと怒られた。

それでも最後まで残さず飲む辺りには好感を覚える。

「友達、って何をすればいいのかしら？」

「さあね、バニングスさんは知らないの？」

「友達なんて初めてできたのよ、悪い？
というかバニングスさんなんて呼ばないでくれる？」

「わかったよ、アリサさん」

「さんもいらないわよ！」

「了解、それに僕も友達なんてほとんどいなかったからね。
何をすればいいのかなんて知らないよ、まあおいおい掴んで行けばいいさ」

「ふうん、まあクエスに友達が少ないとは確信してたわ。
友達の多いクエスなんて予想もできないし」

「嫌な確信のされ方だね。
で、家まで歩いてきたの？」

「なわけないじゃない、車で来たわよ」

「車ねえ……ってベンツじゃねえか！」

このボロアパートの前にベンツなんて止めんな！ よけいみすぼらしく見えるだろ！」

「だってこの辺、駐車場ないじゃない。

あたしだってこんな所に止めたくは無かったわよ！」

「文句があるなら来るなよ！」

とりあえず早く帰れ、このアパートの評判が落ちる前に！」

「あたしだって長居する気は無かったわよ。

そろそろ帰るつもりだったの、明日はちゃんと来なさいよ！」

「善処します」

「学校に来る気無いの!？」

アリサに不満は無いのだけど。

高町なのはに会いたくないし、授業もつまらないし。

でもアリサはちょっと寂しそうなので心揺さぶられる。

「な、なんならあたしが明日迎えに来るけど?」

「明日学校で会おう」

このボロアパートからベントツで登校する小学生。
きつとご近所の話題に上がるだろう、そんなの御免だ。

アリサはやはり複雑な表情をしている。

「色々言いたいことはあるけど、まあいいわ。

じゃあ明日学校にちゃんと来るのよ、クエス！」

「え、ああ了解」

「あ、そうそう、携帯のアドレス交換するわよ！」

「あーいいけど」

これ赤外線とかできるのか？

と少し不安だったが何の問題も無くできてしまった。

「じゃああたしは帰るけど、そういえば高町さんもあなたにお話があるって言ってたような……」

「ちよっ、おま」

「じゃあまた明日！」

そうしてアリサは帰った、爆弾を残して。

高町なのはのお話って『OHANASHI』なのかな。

結局アリサとは友達になってしまったし。

高町なのはとのフラグも立ってしまった、何とかしなければ。

そこは時空管理局本局内にあつた。

気の遠くなるほどの本棚が延々と並んでいる部屋。

世界の記憶を収めた場所ともいわれている巨大データベース、通称『無限書庫』。

あまりに巨大であるがゆえに、整理もできず数年前までは訪れる人もいなかった。

そう、数年前までは。

「ねえ、あげはさん。

そろそろ執務官に復帰する気は無い？」

言葉の主の名はリンディ・ハラオウン

緑色の髪をした、妖精という言葉が似合いそうな時空管理局提督の女性である。

リンディの前にいるのは、数年前まで表舞台の注目を集めていた少女。

『万能の天才』『未来のストライカー』とまで呼ばれたエース、山中あげはだ。

彼女らの関係は5年前まで遡る。

当時、執務官を目指していたリンディの息子、クロノがあげはに絡んだ事から始まった。

クロノは、最年少執務官と呼ばれるあげはにアドバイスを貰おうと思っただけらしい。

しかし彼女は当時、執務官をすでに辞しており、無限書庫に引き籠もっていると知って憤慨。

自分よりも1歳年上の彼女に模擬戦を仕掛け、自分が勝ったら執務官に戻るよう言った。

当時のあげはは周囲の人間すべてが敵に思えて怯えていた。

そんな時、敵筆頭候補であり、後のクエス曰くおぞましいオーラ

を纏った原作キャラが絡んできたのだ。

当時のクロノは8歳、あげは9歳。

クロノの魔導師ランクはAAというその年齢にしてはかなりの才能の持ち主だった。

しかし相手は8歳の時点でS+の実力を持つ天才である。

しばらく引き籠もっていたとはいえ、腕は鈍ってなどいなかった。むしろいざという時のために、トレーニングは欠かしていなかったのである。

勝負になるはずなど無い。

あつという間にバインドで捕縛され、容赦なく砲撃魔法でクロノは墮とされた。

これに怒ったのがクロノの師匠である猫姉妹。

特にリーゼロッテの方が激怒し、あげはに模擬戦を挑んだ。

この時のリーゼロッテは、監視対象である車椅子の少女の側をうるつく謎の不審者に襲い掛かるも

軽くあしらわれた拳句、返り討ちにあうという失態を犯して腹が立っていたらしい。

ちなみにその不審者は黒髪黒目のナイフ型デバイス使いの少年だったとか。

それはともかく、彼女は可愛い愛弟子であるクロノを墮とした少

女に八つ当たり気味に喧嘩を吹っかけた。

このときは、クロノを倒された怒りと、不愉快な黒髪の少年と同じ黒髪であることが理由だったらしい。

しかし彼女、あげははリーゼロッテにとって得意な接近戦で彼女と互角だったばかりでなく

遠距離から巧みな誘導弾とバインド、そしてフィニッシュの砲撃で敗北している。

その様子を見ていたクロノはあげはの強さを知り余計に憤慨。

「それほどの実力があるのなら、なんでこんな所に引き籠もっているんだ！」と言っただけらしい。

無論彼女にはそんな質問に答える余裕など無く、無視して無限書庫に戻った。

その態度に余計に腹が立ったクロノは1週間に1回の割合で模擬戦を挑みに来るようになったとか。

そのことを風のうわさで聞いた、どこぞのロリコン。

ひょっとしてアレって転生者じゃね、と思っ立ち接触。

あげはの不安や恐怖、そして孤独を取り除くことに成功する。

本人はそこまで考えていたわけではないだろうが。

心に余裕を取り戻したあげはは、しかし引き籠もり生活が癖になっただけで引き籠もり続ける。

クロノも最初は嫉妬と怒りに燃えていたものの、
本来のあげはの陽気な姿を見て『彼女にも悩みがあった』と痛感。
力押しや強制ばかりでは、人は救えないと悟ったらしい。

そして改めて現場に戻るよう説得するも断られる。

クロノも少しは大人になっており、長い目で説得していこうと決心する。

そんなクロノを微笑ましく思っていたリンディだが、

やはりあげは程の戦力を遊ばせておくのは勿体無いとクロノとは別に説得に来るようになった。

無論、あげはが頷いたことは無い。

それは今回も例外ではなく

「働きたくないでござる」

と、いつもの台詞を返される。

リンディはため息をつきながらも

「そう言わないで、なんなら囑託魔導師からでもいいから、ね」

「何と言われようと私は働かないよ、リンディちゃん。」

私は今の生活に満足してるんだよ、もう黒歴史は繰り返さないの」

「でもそろそろ以前の貯金も尽きたでしょ。

いつまでも引き籠もってられないんじゃないかしら。

「ご両親から仕送りだって貰えてないんでしょう？」

「ふひひ、私には仲間がいるの。

お金を援助してくれるようないい仲間がね」

「それはむしろ駄目な仲間だと私は思うのだけど。

「なんならアースラに来ない？ クロノも久しぶりに貴女に会いた
がってるわ」

「クロノちゃんと私が長時間いたら胃に穴が開いちゃうよー。

「それにアースラとか無理、外出は1ヶ月に20時間って私は決
めるの」

「……色々突っ込みたいところはあるけど、どうしても駄目かしら
？」

「そうだね、諦めて帰りなされー！。

「ちなみに今どんな事件を追ってるの？」

「今は、第28管理世界で目撃情報があった指名手配犯。

「B級次元犯罪者『魔法喰い《マジックイーター》』を追っている
わ」

「……え？」

「クロノが乗り気でね、以前リーゼロッテさんが振り返りにあった

らしくて。

でもリーゼロッテさんが返り討ちにあうような相手でしょ、戦力が不安だったの。

それでよければ今回だけでも貴女に協力してほしかったのだけど

「

「御免、『魔法喰い《マジックイーター》』とは戦ったことがあるけど無理。

私でも勝率は五分五分だからね、チキンハートな私じゃ関わりたくも無い」

「貴女でも五分五分なの？」

「応援部隊の申請をしとこうかしら」

「うぐつ！？ ま、まあクロノちゃんなら大丈夫だよ。

「応援部隊の申請に使う時間があるなら早く捕まえに行ったほうがいいよ。」

「アレはすぐに他の世界に言っちゃう放浪者だからね」

「……随分と詳しいのね」

「だてに無限書庫にいるわけじゃないよ、ぶいぶいつ」

「そうね、今は早く行動することが大切ね。」

「気が向いたら連絡してね、いつでも待ってるから」

「じゃあねリンディちゃん、クロノちゃんによろしくっ！」

「リンディが無限書庫から出て行くと、あげはは携帯電話を取り出

した。

普段の掴み所の無い陽気な彼女とは思えないほど焦っている。

「あ、はじめちゃん？ 私、あげはだよー。

え、ディスプレイに表示されるからわかる？

う、うん、そうだったね。それで緊急事態なんだけど

」

そして、今日という1日が終る。

EP・05：金髪と僕と提督と元執務官と（後書き）

プロットからもう外れつつあるも、何とか予定通りに修正。
アリサにヒロインフラグが立ちましたが成就する予定は今のところ
無いです。

EP・06：魔法喰いと執務官（前書き）

初めての本格的な戦闘シーン。

あとロリコンのシリアス（笑）な過去話。

EP・06：魔法喰いと執務官

『はじめちゃん、そっちにアースラが向かってるから気をつけて！』

開口一番言われたのが死刑宣告だった。

今の時期だと、クロノは執務官になりたてのはずだが、正直洒落にならねえ。

「B級次元犯罪者『魔法喰い《マジックイーター》』！」

貴様は完全に包囲されている、武器を捨ておとなしく投降しろ！」

というかすでに来てんだよなあ、管理局の部隊。

アースラ組じゃない、この第28管理世界の治安維持用地上部隊が。

とりあえず軽くあしらってやるか、程度だったんだが

アースラが来るとなると話は別だよなあ、おい。

「それではテメエらの悲鳴を前菜にして

軽く管理局を断罪^{アンチ}してやんよ」

俺は愛用のナイフ型デバイス、『クレセント』をセットアップした。

「逃げんじゃねえぞ、楽しませろよお。

俺が殺人鬼だと知った上で挑む以上、殺されても文句言っんじやえぞ！」

『K o r p e r - V e r s t a r k u n g 』

魔力を惜しみなく使うことによる、肉体の過剰強化。
それが俺の十八番、カートリッジを必要とせずベルカの騎士すら
瞬殺を可能とする。

「くっ、総員攻撃開始」

誘導に直射型、全部で30前後の魔力弾が飛んでくる。

だが俺を殺すには遅い、『陸では最強』が俺の信念なんだからよ
お！！

弾道を見切り、直射型魔力弾をすべて避ける。

誘導弾はすれ違い様にクレセントで斬り落とした。

「な、なんだあの動きはっ!?!」

悲鳴染みた管理局員の眩きを聞き流しながら俺は進む。

そのまま直進した俺は、1番近くにいた管理局員の首にナイフを
突き立てた。

血飛沫が上がる。

慣れたくも無いが慣れてしまった感覚。

最初は嫌悪していたが、今では快感すら覚える感覚。

「まずは1人撃破ってかぁ。

いいぜ掛かってこいよ、幼女以外は解体してやるからなあ」

この世界に来たときは俺、『いちなしはじめ』は常識人だった。少なくとも、この時点で殺人鬼ではなかったしロリコンでもなかった。

当時の俺は5歳の無力な餓鬼。
リンカーコアも無い、非魔導師という絶望的なポテンシャルだった。

そして、憑依して数分後、テロに巻きこまれた。
それが偶然だったのか、あるいは世界による排除だったのかは知らねえが。

□。この世界では禁止されている質量兵器を使った非魔導師によるテロ。
魔法と銃火器が目の前で衝突していた、それを怖いとは思わなかった。

さすがに俺でも混乱していたんだろう。
足元に人だった物と、そいつの銃が転がってきたとき俺は狂った。

杖を向けられたから、撃たれる前に撃ち殺した。
銃を向けられたから、撃たれる前に撃ち殺した。

自分でも驚くほど体が軽く動いた。

何も考えずとも体が動くほど、相手の殺し方を本能が理解していた。

相手の攻撃の理想的な捌き方。

相手が見せる隙を捉えるたびに、トリガーを引き続けた。

一段落する頃には、生きているのは俺だけだった。

あとは皆死んでいた、血とか脳髄とか骨とか、いろいろな物を撒き散らして。

けれど、俺の目に映っていたのは、死骸の胸の中に輝く結晶だった。

それは手をかざすと簡単に抜き取れて、そのまま俺の胸の中に入っていた。

希少技能。

俺が持つただ1つの武器。

俺の能力は、死者のリンカーコアを吸収すること。

後に『クリスタル・アップ亡骸採集』とドクターちゃんに名付けられるスキル。

俺は生きるために、魔力を採集し始めた。

死者を冒瀆して、生者を足蹴にして、殺し続けた。

当時、俺がいた管理世界では、テロから非魔導師と管理局による抗争へと悪化していた。

殺す相手には事欠かない。

非魔導師たちのテロ組織に傭兵として雇われてからも殺し続けた。

そして理解した。

俺の1番の武器は、レアスキルじゃなく戦闘の才能だと。

本能で、自分のできる理想の戦い方を理解できることが俺の才能だった。

デバイスを使わず、見よう見まねで覚えた肉体強化で戦い続けた。時空管理局本局の魔導師たちが本腰を入れてくる頃には、俺の魔力はSSになっていた。

何度練習しても防御魔法や魔力弾、飛行魔法さえ使えなかった辺りは落ち込んだがな。

そして管理局の執務官を数人殺したあたりで、俺は雇い主に裏切られた。

非魔導師たちにとって、俺はすでに魔導師だったせいだろう。

桁外れの魔力、肉体強化による接近戦。

すでに俺は非魔導師を名乗れない存在になっていた。だから裏切られ、殺されかけた。

ただこの頃になると俺もドライになってきていたせいか、振り返り討ちにした。

魔力弾よりも早い銃弾の雨には苦戦したが、おかげで一段と戦闘スキルが上がった。

何しろ音速で向かってくる銃弾を避けるか弾くしか防げないのだ。これを比べれば、魔導師たちの魔力弾など遅すぎて簡単に捌ける。

銃火器相手にも慣れてしまえば、一般的な魔導師など木偶にも劣る。

俺はテロ組織からも管理局からも狙われ、そして生き残り続けた。

ただ問題があるとすれば1つだけ。
他人に飢えていた、仲間というものに憧れていた。
だから俺は探すことにした、この世界にいるかもしれない同胞を。

幸い、魔力による力技の転移魔法は戦利品のデバイスを使えば可能であった。

まずは『地球』に行こう、同胞がいる可能性はそこしかない。
そう思考した俺は、半ば自暴自棄になりながらも地球に向かった。

地球についた瞬間、異様な存在感を放つ人間の気配を感じた。
その気配のする方向に向かって走り出したあたりは、俺も限界だったんだろう。

寂しいのが嫌だった。
周りに敵しかいないのが嫌だった。

だから救いに思えた、その存在が。
このときの俺は、『ソイツ』に会えば何かが変わると確信していた。

やがてたどり着いたのは豪華なホテルだった。
どうするか悩んでいると、意外にも向こうから出てきた。

本人曰く、異様で懐かしい存在感に惹かれてきたらしいが。

俺の前にいたのは白衣を着た、紫髪の少女。

今までであった誰よりも強い存在感を持つ人間だった。

向こうも信じられないといった顔で、こちらを見つめていた。そして能面のような無表情で呟いた。

「リリカル？」

「マジカル」

俺は当然のように返す。

多くを語らずともお互いに理解した。

その日俺は、同胞を見つけた。

「今思うと昔の俺って青臭い餓鬼だったなあ。

そこん所どう思うよ、管理局員さんよお、今の俺は昔と比べてど

うだ？」

「ひっ
」

過去の回想をしている間に、1人を残して殺してしまったことに気付いた。

俺は残る1人を殺そうと思ってナイフを構える。

「ん？ お前、何歳だ？」

「じゅ、12歳……です」

「ふうん、魔力ランクは？」

「C、ですけど こ、殺さないんですか？」

12歳、ぎりぎりロリっところか。

Cなら将来的にも大した障害にならないだろう、と俺は計算する。

「いいぜえ、選べよ小娘。」

今此処で仲間の敵討ちを挑んで殺されると、管理局を辞めて平穩に生きるのをなあ」

「え？」

「管理局を辞めるなら見逃してやるっつてんだよ。

俺はできるだけ幼女を殺さないようにしてんだよ、だから引くなら見逃してやる。」

逆に挑んでくるようなら、痛覚を持って生まれてきたことを後悔させてやるぜ」

怯える幼女、少女かあ？

まあいい、その顔中々好みだし見逃してやろうと柄にも無く気まぐれを起こした。

少女はしばらく悩んでいたが、逃げることを選んだらしく仲間の屍には目もくれず駆け出していった。

「さて、お前たちのリンカーコア。

『魔法喰い』の名の下に、喰らってやんよ」

手をかざすと死体から、小さな結晶が抜け出し俺の胸に吸い込まれていく。

とはいえ、もう最大魔力は増えないのだが。

俺のSSSランク魔力というのは人間の限界値、いわばカンスト状態である。

これではいくら吸収しようと、魔力を回復する程度にしか使えない。

それでも万全でいなければならない。

今から来るのは、ある意味俺たちの天敵なのだから。

俺の目の前の地面に魔方陣が出現。

そこから黒のバリアジャケットに身を包んだ、禍々しいオーラを持つ少年が現れる。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン。
B級次元犯罪者『魔法喰い』、傷害致死、公務執行妨害、その他
諸々の罪状により

執務官権限によって身柄を拘束する、武器を捨て投降してもらおうか」

「へえ、お前が噂の執務官か。

俺の名は『一梨 一』、お前を断罪^{アンチ}してやんよ」

「抵抗の意思を確認。

投降の意思はないとみなして構わないな」

「ああ、つーかお前が俺を拘束できんのか？

第一俺がやったのは正当防衛だ、テメエなんぞに批判されるいわれはねえ」

「ふざけるな！？ 君は自分がいつたい何人の命を奪ったかわかっているのか！？」

「知るか、いきなり見知らぬ世界に投げ出された挙句、
見たこともねえヤツラの戦闘に巻き込まれたんだ。

それで正当防衛で生き残ったら、犯罪者呼ばわりで拘束しようとしてくる。

そんな奴らにおとなしく投降するほどお人好しじゃねえんだよ、
執務官様よお！」

「なっ、君は次元漂流者か！？」

「多分な、それでその事を踏まえたうえで俺をどうする？」

「……管理局は罪の無いものは罰しない。

だが君のしたことは許されることじゃない。」

「ここまでは予想通り。

さすがに殺し過ぎたことだし無罪は難しいだろう。」

「もし君が大人しく投降するのなら奉仕活動数年で済ませるよう僕が掛け合う。」

それに君の故郷の世界にも帰れるようにしよう、今の管理局は次元漂流者への保障が整っている。」

それは表向きの話だ。

確かに戸籍のある漂流者ならもとの世界まで親切に送り帰すだろう。」

だが戸籍が無い場合は話が別だ、嚴重な監視の下幽閉されることを俺たちは知っている。

ドクターちゃんがハッキングで調べたことだ。

あの引き籠もりが無限書庫で調べても同じ結果だった。

「君ほどの実力ならそのまま、管理局への就職もできる。

その比類なき強力な力は、自分勝手に使うものじゃない。

力無き弱い人間や世界を守るために使うべきだ。 どうだろう、

悪い話じゃないと思うが？」

答えは決まっている。

仲間を見捨てるつもりは無いんだよ、俺はな。

「 答えは絶対にNOって奴だ。
今更手を差し伸べられても嬉しくねえんだよ、餓鬼！
つつかそのバリアジャケットのデザイン何とかしろや、黒一色っ
てキャラが被るだろうが！」

「 なっ、バリアジャケットのデザインについては君には言われたく
ない！

「 それに僕を餓鬼と呼ぶな！ 君だって同じくらいの年齢だろう！
？」

「 ハッ 見てきた物が違いすぎんだよ。

「 大体世界のためだとかに使う力なんぞ、俺は持った覚えが無え。

「 俺は俺が守りたいもののためだけに戦う、誰かに押し付けられた
理由なんぞ足蹴にしてなあ！」

「 君が見てきたものは確かに地獄だったのかもしれない。

「 だけど、自分勝手な欲望に誰かを巻き込んでいい権利なんて、誰
にもありはしない！」

「 それは無知な餓鬼の戯言だぜ。

「 逆に言えば自分勝手じゃない、世界のための欲望になら巻き込ん
でいいともと取れんだよ！」

「 そういう意味で言ったんじゃない！！」

「 じゃあどういう意味だ？

「 世界のためなら多少の犠牲はしょうがない、それが管理局の正義
だったはずだよなあ？」

「多少の犠牲すら出さないために、僕らはいるんだ！」

「それには同感だが、だったら今の管理局はどうなんだあ？」

「……どういう意味だ。」

「次元漂流者を救うという名目で行っている行動。だが その裏には本当に何も無いと思うのか？」

「何が言いたい！」

「綺麗なもんばかり見過ぎなんだよテメエらはなあ。」

「そんなんだから無限書庫に引き籠もる奴だつて出て来んだよ！」

「君は、君はあげはを知っているのか!？」

「何度か戦ったからなあ。」

「強敵と書いて友と呼ぶ、みてえな間柄だぜ」

「 例え管理局の正義に闇があるとしても。」

「僕は僕が信じた管理局の正義を信じる、そしてもし間違えがあるのなら」

「僕が正す、そう聞こえた気がした。」

「ハッ テメエみてえな奴は嫌いじゃないぜ」

「向こうは杖を、俺はナイフを構える。」

「問答の余地はどこにも無い、お互いの信じる物のためにぶつかり」

合う。

「執務官権限で、君を捕縛する!!」

「できるのならやってみるよ、クソ餓鬼があ！」

『Körper-Verstärkung』

『Stinger Sniper』

クロノの操る誘導弾を斬り捨てつつ接近。

しかしさすが執務官というべきか、クロノは上空に逃げる。

「君は空が飛べないらしいからね。

それに接近戦ではロツテすら超えると聞いた、だから安全圏から撃たせてもらうよ」

『Stinger Ray』

直射型の射撃魔法が降り注ぐ。

「ちっ 対策はバッチリってことか!？」

『Beinmacht-Verstärkung』

脚力強化により、バックステップで避ける。

「ロツテの二の足は踏まないためにね！」

『Struggle Bind』

俺の周囲にバインドが出現するが、第六感に従って動くことで辛うじ捕縛されずにすんだ。

しかし、ストラグル・バインドだと、アレはこの時点で覚えてないはずだろう!?

「強化魔法をキャンセルするバインドだ。

君にとっては天敵の魔法だろう?」

「チツ

随分と嫌らしい戦い方じゃねえか執務官様」

「生憎、魔力以外の才能に恵まれなくてね。

搦め手でしか天才連中には勝つことすらできなかったんだ」

『Stinger Snipe』

際限なく降り注ぐ魔力弾に防戦一方に追い込まれる。

しかもこちらの避ける先に設置型のバインドまで仕掛けてくる。

まあただのバインドなら力技で抜け出せるんだが、ストラグル・バインドは確かに天敵だ。

強化魔法をキャンセルされるともう一度強化する前に撃ち落されかねない。

「だが、俺を舐めすぎだぜ、クロノ」

「何?」

「見せてやんよ、一芸を極めるつつつことをなあ!」

『K o r p e r - V e r s t a r k u n g 』

まずは肉体そのものを強化する。
これによって運動能力と、防御力が跳ね上がる。

『S p u r e n S i e - V e r s t a r k u n g 』

次に感覚強化。

視覚強化により、周囲の動きが遅く感じ取れる。

聴覚強化により、些細な音ですら逃さず聞き取れる。

そして触覚強化により、周囲の空気の動きから相手の動きをある程度把握できる。

『B e i n m a c h t - V e r s t a r k u n g 』

そして脚力強化。

肉体強化との重ねがけですでに俺の脚は人外の運動能力を持つ。

『W a f f e n - V e r s t a r k u n g 』

最後に武器強化。

これで俺のデバイスは振るうだけでカートリッジを使った攻撃並の威力を出せる。

「いくら強化を重ねても、君の攻撃は僕には届かない！」

『B l a z e C a n n o n 』

一撃必殺の威力を持つ砲撃魔法が来る。

周囲には設置型のバインド、クロノは詰んだと思っているだろうが。

「甘めえんだよ!!」

俺は脚に力をいれ、砲撃に向かって跳ね上がる。

今の俺のジャンプ力ならバツタも目じゃないほどの高度と速度で上昇できる。

「何っ!?!」

そのまま砲撃に向かってアムードデバイス、クレセントを振る。過剰強化されたデバイスと腕力による力技、名付けて

「暴竜翔破!!」

荒れ狂う竜のごとき魔力で強化された俺の一撃が砲撃を斬裂きながら上昇していく。

直撃すればSランク魔導師ですら一撃で堕ちる、力技の極み。

魔力を纏った斬撃はブレイズ・カノンを紙のように裂きながらクロノに襲い掛かる。

「ッ!!!?!」

『Round Shield』

咄嗟に防御魔法を使ったようだが、この技の前では無意味。

クロノはあえなく斬裂かれ、地面に落ちていった。

「空中から攻撃を仕掛けるだけで勝てるようなら、俺とあの引き籠もりは何度も戦ったりしねえよ！」

それに気付けなかったのがクロノの敗因。過剰強化された俺の肉体は、ジャンプだけで空中戦も可能。

まあ外から見れば人間魚雷なんだが。

「じゃあ俺はそろそろ行くぜ。」

今の感触なら全治2ヶ月って所だろうから死にはしねえよ」

「ま、待て……」

息も絶え絶えなクロノを一瞥する。

つつか出血の量もヒドイ状況だし致命傷のはずなんだがなあ。

「んじゃ、縁が合ったらまた会おう」

『Dimensions - Metastase』

ドクターちゃん特性『次元転移魔法用デバイス』（ジャミング付

き)を取り出す。

この場で止めを刺しとしても良かったが、やはり原作キャラを殺すのはもう少し先だ。

あ、そうだ。

引き籠もりにメールしとかねえと。

『口が滑って、クロノにお前のこと喋っちまった。色々言われるだろうけどはぐらかせよ、以上』

さあて、次はどこに行こうかねえ。

余談というか蛇足になるのだが。

後日、俺はあげはにボッコボッコにされることになる。

おまけ

『暴竜翔破』

使用者：一梨 一

過剰強化された肉体とデバイスから繰り出す体当たりからの一撃。デバイスが纏った魔力により、砲撃魔法どころか収束砲撃魔法ですら斬裂くことが可能。

分類上は、ベルカ式の魔力付与斬撃に位置するが、ベルカの騎士で

も正気なら使おうとは思わない。

なぜなら、発動中は自身の防御が困難な上に、消費する魔力量に比べて攻撃範囲が狭いからである。

威力はSランクの魔導師を防御の上から一撃で戦闘不能に追い込めるほど。

Ep・06：魔法喰いと執務官（後書き）

クロノアンチを期待している方がいたらごめんなさい。

この作品のクロノはかなりの善人です、ただ管理局の方針上敵になります。

またロリコンこと一君は陸戦SSくらい。

空を飛ばなきゃシグナムだって敵じゃありません。

まあ空を飛ばれると途端に苦戦するわけですが。

そんなわけで初の本格的な戦闘シーンですが大丈夫ただでしょうか？

ここはこうしたほうがいい、ここはこうじゃないだろという意見がありましたら送ってくださいると助かります。

それでは感想を待ってます。

Ep・07：戦闘機人（前書き）

最後の一人のターン。

変人萌えの作者は唯一の常識人である主人公を書くのに一番苦戦してますw

あと軽く管理局アンチ。

というかオリキャラ管理局員アンチ。

Ep・07：戦闘機人

僕の名前はクエス・ベルリネッタ、ただし偽名。
今日から私立聖祥大学付属小学校の2年生。

1年ほど時間が飛んだけれど、大して特筆すべきことはなかった。
アリサが結局、高町なのはと月村すずかと友達関係になったくらいである。

僕？ ひたすら高町なのはたちを避けている。
彼女には嫌われても構わない、むしろ嫌われたい。

まあそれでも嫌われるどころか、毎日声をかけられているのだけ
ど。

今現在でも、目の前には茶髪ツインテールの少女がいる。

「友達になろうっ」

「嫌だ、僕は友達は1人でいい」

「そんなこと無いよ、沢山いたほうが楽しいよ。」

友達は多いほうがクエス君も絶対に楽しいと思うの」

「多ければいいわけじゃないと思うよ。僕は友達は少ないほうが
好きだしね。」

たくさんの友達に囲まれている僕なんて、想像しただけで吐き気
がする」

これは半分本当。

友達は少ないほうがいい。

だって友達が多くなってしまったら、元の世界に帰るときに未練になってしまう。

この世界で生きていくなんて、絶対に嫌だと僕は思う。
それでもこの世界で生きていくと開き直れるほど、前向きにはなれない。

「むうーそんなに私と友達になるのは嫌？」

「高町さんの友達になるのが嫌なんじゃない。」

これ以上友達を増やすのが嫌なんだ」

半分嘘だけど。

「あ、また高町さんって言った！

ちゃんと名前と呼んでって言うてるのに！」

「呼んだ瞬間に僕らの距離が縮みそうで怖いんだけど」

「アリサちゃんとすずかちゃんと私とクエス君で遊ぼうよ。」

私達3人だけだと、アリサちゃんが少し寂しそうなの」

「なっ！？ あたしは別にそんなんじゃないわよ！！」

何だろう、このアタックは。

恋愛感情がない分性質が悪い、そんなハーレムごめんなんだけど。

「月村さんも何とか言ってくれないかなあ」

「私からは何も、でもホントにアリサちゃん寂しそうなんだよ」

「すずかまで!？」

あ、あたしは単に、こいつが独りきりなのが許せないだけよ!」

「だからツンデレは今時流行らないと思うんだけど」

「誰がツンデレか!！」

顔を真っ赤に染めてうがーと叫ぶ金髪の姿がそこにはあった。

……そしてこの光景を楽しんでいる自分がいるのに絶望した。

こんな関係が1年近く続いているわけである。

もう周囲からは友人認定されている、正直やってられない。

「今度の日曜に私の家でお茶会やるの。」

クエス君も来ようよ、私のお母さんのケーキは美味しいんだよ」

「心惹かれるけど、日曜には用事があるんだ」

「え、そうなの?」

素直に僕の言葉を信じて、残念そうな表情を浮かべる高町なのは、逆にアリサは額に青筋を浮かべている。

「またなのははそうやって騙されるんだから!」

いつも暇そうに家に引き籠もってゴロゴロしているコイツに用事

があるわけ無いじゃない！」

「え！？ 嘘だったの！？」

毎回同じ手法に引っかかるのが高町なのはである。

学習能力が低いのか、しかしその素直さには好感が持ててしまう。

そのままの素直な君でいてくれ。

「いやいや、今回は本当だよ。

生活費を支給してくれている知り合いに会いに行く予定なんだ」

「私達以外にも知り合いがいたの？ クエス君」

「月村さんの中での僕の評価が凄く気になったよ」

「そうなんだー、どんな人なの？」

「……無免許の天才外科医かな」

「無免許って犯罪じゃない！？」

これが僕の日常。

正直なところ、心地よいとは思っている。

知り合い以上友達未満。

それが僕と高町なのはの現在の関係である。

そして日曜、とある管理外世界に僕は来ていた。
この世界にドクターちゃん秘密基地の1つがこの世界にあるらしい。

あるらしいというのは、僕がまだ来たことが無いから。
一応待ち合わせ場所に迎えが来るらしいが誰が来るやら。

10分ほど待っていると、ようやく迎えが来た。

真紅のコートで着飾った白髪の少女が　この人かよ。

「遅くなつてすまなかつたな少年。

何気にするには無い、長い目で見れば今の待ち時間も悪くなかつたと思う時が来るさ。

それにしても君は相変わらず飾り気の無い服装だな、それではハ
ーレムは築けんぞ」

「んなもん築く気はねえよ」

「やれやれ、これだから最近の若い者は。

君も男ならデカイ夢を追いかけてみたらどうだ。

何のための人生だ、でかい夢の1つも持たない安定した生き方など家畜でもできる。

例えその先に、避けようの無い破滅が待っていてもドンと突き進んでこそ人間を名乗れるというのに」

「相変わらずの長台詞ですね、あたりさん」

「ふむ、少年は相変わらず常識人ぶっているのだな。

それではこの世界では生きていけんぞ、自分の個性を發揮せずどうする。」

君も他の連中を見習って少しは個性豊かになってはどうかだろう、人生観が変わるぞ。

お姉さんのお勧めは、右手が疼くと言って転げまわる訳ありの少年といったところか」

「あんたはこれ以上、僕に痛くなれって言うてんのか!？」

「確かに君はテンプレ通りのオリ主の素養を持っている。

金髪オツドアイで女顔の美形、クローンで辛い過去持ちにして記憶喪失。

途絶えたはずの古代の王の血をひいている……正直よく此処までテンプレだと褒めたいところだ」

「並びあげてんじゃねえ!!」

「それでも気にしてんだよ、その厨二設定!!」

「ふむ、確かに時間が少しばかり遅れてしまうな。

いいだろう、急ぐとしよう、走りたまえ少年。

何、私たちの同胞は心が広いからな、少しばかり遅れても文句は言わない。

むしろ彼らが時間通りに揃っているのが疑問だな、だが誰かを待つというのも」

「いいから急ぎますよー！」

『真中 あたり』

白髪で真紅のコートを愛用している少女。

やたら長台詞を好み、クールな大人っぽい美少女を装っている。

こちらの世界での本名は『浮舟うきふね 葵あおい』一応日本人だった。

ただし彼女は地球に転生した後、次元漂流者としてどこぞの管理世界に飛ばされる。

そこで管理局に保護されたものの、リンカーコアを持っていたことから状況は一変。

『足のつかない良い実験素材』として、当時研究され始めた『戦闘機人』として改造される。

そこら辺の詳しい事情は本人しか知らないものの、本人は語らないし、

語りたくも無いだろうと誰も尋ねない、ただこの事から僕たちの管理局への印象が余計に悪化した。

よくある存在自体がオーバーテクノロジーにはならず、後のナンバーズと比べるのも失礼なほど完成度は低い。

ISも発現しておらず、魔力もCランク相当。
いわゆる失敗作として処分されることが決定していたらしい。

だが　そこに現れたのがまたしてもロリコン。
その研究所を襲撃し、皆殺しにした後、彼女を保護。

まともに歩くことさえ困難だった彼女をドクターちゃんの元に連れて行ったらしい。

この事を話すときのあたりさんは、目をハートにしており恋する乙女のようなものである。

というか絶対恋している、あのロリコンに。
男の趣味が悪いとは思うが、恋愛は個人の自由なので詳しくは突っ込むまい。

そしてドクターちゃん自慢のチート頭脳により改造。
元がすでに修復不能なガラクタ状態だっただけにナンバーズレベルには至らないもの

当時の技術では破格の性能を持つ戦闘機人へと変貌したとか、相変わらずISは無いけど。

特殊能力が無い以上、戦闘方法は内蔵の武器しかない。
だが魔法主体の武器では火力が低く、大して使えないとドクターちゃんは判断。

そこで『魔力を使った質量兵器を内蔵』という管理局に喧嘩を売るような改造を施した。

この魔力も他で代用が可能な辺り、グレーゾーンどころかほぼ黒である。

だが管理局法では魔力を使っていれば例えソレがどんなものであろうと質量兵器とは呼べない。

そもそも質量兵器を軽視しているのだ、管理世界の人間は。

実際、魔法と質量兵器の両方を知るロリコンからすれば質量兵器のほうがかうざかったらしい。

そんなこともあり、彼女は戦闘経験豊富なロリコンとチート頭脳のドクターちゃんによって

対魔導師用に特化した戦闘機人として完成してしまったわけである。

もはや戦闘機人というより改造人間。

実際、あだ名も『仮面ライダー』『歩く火薬庫』『魔導師殺し』な辺り奴らは確信犯である。

「ふむ、少し待ちたまえ少年。

どうやら私たちははめられた様だ。

何、そう焦ることは無い、それでも私は戦闘機人だからな。

そう、例えるなら買い物から帰る途中に夕立にあったような、そんな些細な障害さ」

「結局何が言いたいんですか？」

「管理局員が近くにいる。

この魔力量からすると中々の実力者だ。

執務官クラスの単独行動が許される程度の実力者といったところ

か

「……そうですか、それで僕はどうすれば？」

「ここを真つ直ぐ行くと町がある。」

そこに一梨さんが迎えに来てくれるよう、今、念話で伝えた」

「一梨さん？ ああ、ロリコンか」

「そうだ、彼なら君に尾行が向かってても軽く排除するだろう。」

あの人がいなければ私たちは結束することなく絶滅していただろう。

あの人こそ、主人公にふさわしい、そう思わないか少年」

「……相変わらずぞっこんなんですな」

「な、ななな何をつかな少年。」

べ、別に私はそこまで彼に入れ込んでいる訳ではないぞ。

これはそう、自身を救ってくれた恩人に対する正当な評価というものであって、

よく羽間なんぞに、言われるこ、恋する乙女という奴ではない！
断じて！……」

相変わらずの長台詞だが要約してしまえば。

『恋してる』としか取れないことにこの人は気づいていない。

あたりさんはワザとらしく咳払いをすると僕に向き直る。

「君は私たちの中で最弱だ。」

だが、君こそが私たちの希望でもある。

記憶を失ってなお、こちらの世界を受け入れない者。
君こそが私たちに目標を与えてくれた、その事は誇りに思うとい
い」

「それ、なんだか死亡フラグみたいですね」

「ジンクスという奴だ。」

死亡フラグと自覚しながら口にしたものは死なない。

まあ1度は言ってみたい台詞だろう、『ここは私に任せて先に行
け』」

「了解、危なくなったらあのロリコンに助けを求めるといいですよ」

あのロリコンは、実のところ誰よりも仲間思いなのだから。
その言葉は口にせず飲み込み、僕は走り出した。

「さて、ばれているのだから出てくるといい。
かくれんぼは、鬼に見つかった時点で負けだと知らんのか？
鬼ごっこではないのだよ、捕まった時ではない、見つかった時が
死だ」

私の前に現れるのは20代前半ほどの青年。

この世界で見た目と年齢が釣り合わないことなどよくあるゆえに、
年齢の判断はつかない。

「時空管理局執務官『ケイト・グランフィールド』だ。

この管理外世界への無断渡航は禁止されている、事情を聞かせて
貰おう」

「ふむ正論だな、だがそれは君にも言えることだぞ。

なぜ君は此処にいるのか？ ああ、下らない答えは返さないでく
れたまえ。

まあ聞いても無駄だろうから、単刀直入に言わせて貰おうしよう。

お前は『魔法喰い』を追っているのか？ それとも『異邦人』
を追っているのか？」

「……やはり『魔法喰い』は異邦人か。

我々時空管理局はこの世界を破壊させるつもりは無い。

この次元世界の平和のため、貴様らを抹殺させてもらう！」

「捕縛ではなく抹殺とくるか。

なるほど、君がどこの所属かは理解した。

おおよそ言対策部隊の者だろう、まあ予想はしていたが対策部
隊まで出来ているはな」

「次元世界の平和のためだ。

裁判にかける余地すらない、世界の破壊など起させはしない」

「やれやれ、それは勘違いだというのに。

だがそれも理解できるはずもないか、箱庭の住人では。

信じてはもらえないだろうが私たちに世界を破壊する意思等無い。

そもそもよく当たる占い程度の信用度しかない予言を根拠に人を殺すことを許容できるのか？」

「すでに『魔法喰い』には多くの管理局員を殺されている。

奴がB級次元犯罪者で収まっているのは、奴の犯行と断定できる事件が少ないからだ。

疑いもあわせればA級の大量殺人鬼、そんな奴にかける情など存在しない!!」

「……」

「君は今までの会話から『異邦人』の可能性がある。

だが、君にはいかなる罪状も掛かっていない、無抵抗に投降するのなら」

「下らない、実に下らないよ執務官。

君には何一つ魅力を感じない、よくいるモブキャラ程度でしかない。

いや、モブキャラに失礼か、君のその薄い仮面で隠された腐った本性を知らね。

正義面で隠しているその薄汚れた本音、素直に吐いたらどうだ？」

「何だとっ!？」

「『ケイト・グランフィールド』 23歳。

第3管理世界『ヴァイゼン』出身のAAAランクの魔導師。資産家の両親の間に生まれた1人息子、何不自由なく育つ。

愛用のデバイスは誕生日に両親から送られたインテリジェントデバイス『グランブリート』

またその魔導の才をもって20歳の時に5回目の執務官試験をようやく突破。

その後、表向きには存在しない預言対策の特殊部隊『トライデント』にスカウトされる」

「なっなぜそれを!？」

「6年前、当時注目の的だった天才魔導師『山中あげは』に告白するも振られる、ロリコンか責様。

振られた腹いせに衆目の中での模擬戦でプライドをへし折ってやるうと挑むもあっけなく完敗。

嫌がらせに彼女の不名誉な噂を流そうとするも、直後に彼女は執務官を辞したため中止。

つい先日噂で聞いた『山中あげは』の好敵手と呼ばれる次元犯罪者『魔法喰い』の存在を聞き、

『山中あげは』の獲物を横取りし、彼女のプライドをスタスタにしてやるうとストーリーキングを開始。

本日この管理外世界まで尾行するも、途中で撒かれたため途方にくれている所、私たちを発見。

私たちの会話から『山中あげは』が『異邦人』の可能性を知り、彼女を脅迫して交際を強要するつもりだったと」

「ふ、ふざけるな!

何を根拠にそんな暴論を!！」

「君のデバイスが教えてくれたよ。

いや、さすが執務官どんなときでも自分の武器を手放すことは無かったようだな。

だからこそ私が君の詳細なプロフィールを知ることが出来たわけだが」

これがドクターちゃんこと『羽間 詩』の作品の1つ。
私の中に内蔵されている切り札の1つ、『ナスカ』

『ナスカ』とは破格の演算処理能力を持つスーパーコンピュータのようなもの。

これを利用して私は半径100m以内のデバイスやコンピュータをハッキングし、
中のデータを閲覧、保存、改ざん、消去するばかりでなく、機器そのものを機能停止にできる。

これを使い私は、この執務官のデバイスから全てのデータを引き出した。

それを閲覧することによって彼の経歴から戦闘手段、そして目的や性格を理解したわけだ。

「ふん、ならばここでお前を始末することにしよう。」

お前の魔力はCランク、お前に勝ち目は　グッ、な、何だ!？」

目の前の男は急にふらつき始める。

まあ、その理由も理解しているのだが。

「わざわざ私のお喋りに付き合ってくれてありがとう。」

おかげで君の体内に『細菌』を感染させることは余裕だったよ」

『ミスト』

ロリコンが発案し、取り付けられた機能。

魔力で感染力を強化、コントロールした細菌を作り出し、指定の相手へと感染させることができる。

ただ感染から症状発生までのインターバルが長く、戦闘時はできるだけ時間を稼がねばならない。

「ガハツ、ひ、卑怯だとは思わないのか！　グハツ！！」

「吐血しているところ悪いが、君にだけは言われたくないな。

それに私は戦わずして勝つのが信条だ、まあ正面戦闘も出来なくは無いがね」

「な、ならばせめて刺し違えてでも」

吐血し、ふらつきながらもデバイスを構える。

だがすでに勝負はついている、それを理解していないのだろうか。

「デバイス『グランブリート』、停止せよ」

『Function stop』

「な、グ、グランブリート！」

「無駄だよ、すでにそのデバイスは掌握している。

君は私の口車などに乗らず、さっさと殺しに来るべきだったんだ。

君が愚かで助かったよ、脅迫の材料にするために君は上層部に私たちのことを報告しなかった。

報告されていた場合、私たちは絶滅していただろう、戦力差は歴然なのだから」

「た、助け」

「では来世があれば会いに来るといい。

もっとも君が次にどの世界に転生するのはわからんがね」

魔法によって収納されている拳銃を私は取り出す。

そのまま目の前の男の額に銃口を押し当てた。

そして引き金を引いた。

人を殺した気分を久々に味わった。

EP・07：戦闘機人（後書き）

戦闘機人の長つたらしい台詞に読むのがウザいでしょうが

そこはキャラの個性として許容していただけると助かります。

実際、一番キャラを濃くするのに苦戦したのがコイツなんです。

主人公を除くと一番キャラが薄いかも。

それでは感想を待ってます。

あと2話ほどで無印開始の予定です。

EP・08：方針会議

予言対策部隊『トライデント』

地球では海の支配権の象徴とも呼ばれる武器の名を冠した部隊。決して表には出てこない管理局の中でも最強にふさわしい部隊だろう。

次元世界の平和を守るために作られた、陸でも空でも海でもない、ただ管理局そのものに属している。

AAAランクの執務官がただの一隊員クラス。

このことから、管理局がどれだけ戦力に力を入れているかわかるだろう。

戦闘機人、真中あたりが掴んだ情報。

何が恐ろしいかといえばその規模、そして

自分たちがコイツらの存在に数年間気づかなかったということである。

「つうかサボってたんだろ。」

正直に吐いちまえよ引き籠もりちゃんよお」

「サボった覚えはないんだよっ！

無限書庫内にあの部隊のデータは絶対に無かった。

時期からして、部隊設立時にはすでに各所に手を回して痕跡を消していたとしか思えないよ」

「おかげで設立から数年たってようやく存在が掴めた。
ふむ、その数年の間に向こうは有望な人材をスカウトして戦力を
拡大していたわけだろう。」

状況は不利としか思えないな、執務官すらただの一隊員にできる
とは背筋に寒気が走る。

まああの性格だからこそ、一隊員の枠に収まっていたのかもしれ
んが、それはむしろ凶報。

性格まで考慮して戦力を配置するほどの有能な人材が上にいると
見るべきだ、関わりたくもない」

「私も管理局のデータベースにアクセスしてますが存在すら掴めま
せん。」

バックには三提督どころか最高評議会までいる可能性があります
ね」

「私もハッキングしてみたが、あの執務官は全く別の部隊に所属し
ていることになっていた。」

どうやら本気でこちらに尻尾を掴ませる気はないらしい、厄介な
相手だよ全く。

各隊員はそれぞれ別の部隊に所属していることになってるようだ
しな、向こうの規模もつかめない」

「正面から行けば俺たちは全滅するわけだな。」

くはははは、やってらんねえよ、何だこの無理ゲー！

俺たちの潜伏場所がばれたら事前調査も無くアルカンシエルぶち
込まれかねえぜ！」

「今考えれば私に來たスカウトって此処だったんだよね。」

「うわあちょっと後悔、入っとけばよかったかなあ」

「無駄だよ、執務官のデバイスには仲間の情報が無かった。つまり隊員であろうと仲間の名前は知らない、秘密主義の部隊だ。こちらの現戦力では勝ち目など無い、メイド型ガジェットが完成してもだ」

「そうですね、AMFは確かに強力ですが対抗策は幾らでもありません。

あれだけのガジェットを揃えていたあのマッドでも、起動六課にすら勝てなかつたんです。

戦いを挑むならミッドチルダそのものを滅ぼすくらいの戦力を用意しなければ無理でしょうね」

「あー戦力が欲しいぜ。

いつそのこと量産型ヴォルケンリッターでも作らなねえか？」

「無理ですね、そこまでチートじゃありませんし。

やるなら核兵器作って本局に撃ち込む位でしょうか。

さすがに本局には指令官役の魔導師くらいいるでしょうし、割といい策では？」

「いやいや、無差別細菌テロというのはどうだ？

上手くすれば私たちに構うどころの話ではなくなる。

そうだな、いつそのこと感染者をゾンビ化させる細菌でも作ってしまえば」

「まさにリアルバイオハザード、なにそれこわい。

でもその場合ホントに世界を破壊することになるよね。

私としては犠牲は最小限で収めたいんだけど、人殺しとかあんま好きじゃないし」

「甘つちよろいぜ引き籠もりちゃんよお！」

向こうが喧嘩を売ってきたんだ、買ってやるのが筋つつうモンだろ。

来る者皆殺し、去る者追わずが俺のジャスティスだぜ、くはははは
「は

」でも確かに大量殺戮はマズいですね。

あまり攻勢に出られると元の世界に帰るのに支障が出ます」

「かといってチンタラやってても向こうの戦力が増える一方だ。

いっその事よおオリ主、『俺が聖王だ！』って宣言して味方増やす気はねえか？」

ロリコンが話題を振ってきた。

僕から言わせて貰いたいことは一つ。

「皆、この話題を大乱闘スマブラをやりながら議論するのはどうかと思っただけど」

ロリコンがため息をついた。

え、何？ 何かおかしい事を言っただろうか。

「いいじゃねえか、俺らの心が1つになる訓練だぜえ。

全員一致団結しなけりゃ勝ち目は無えんだ、だからそのために…
…っておい！？」

少し余所見をしてた際に全員でフルボッコにすんじゃねええ！？
死ぬだろうが！！

って俺のアイスクライマーがああ！！ しかも幼女のほう！
！ 喧嘩売つてののか！？」

チヨイスがおかしい。

これで全員の心が団結できるわけ無いだろ、ロリコン。

「大丈夫、ナナは死んじやったけどポポは残ってるよ！

片方がいなくなっただくらいで大げさだよ、はじめちゃん」

「テメエは俺に男キャラを使えつてののか！？」

「ポポを何だと思ってるの！？」

「ナナの武器」

「キャラ扱いすらされてなかった！！」

ちなみにスマブラはドクターちゃんがうる覚えのまま再現して作
ったものである。

「んで、最近ハーレムを作りつつあるオリ主よお。

ぶつちやけ何かアイディアあるか？ 大量殺人以外で」

「そうだね、あたりさんじゃないけど戦わずして勝つ、かな？」

「ふむ、それはどういふことかな少年。」

君のニュアンスだとも殺さないようだが。

ちなみに私の場合は、戦わず殺して勝つだ、勘違いはしないでくれたまえ」

「わかってますよ、ようは戦わなきゃいいんです。」

元の世界に帰る方法は十中八九ロストロギアになるでしょう？」

「まあ既存の技術では無理ですし、過去の技術にしか可能性は無いですからね」

「だからこちらの勝利条件はそのロストロギアを手に入れること。」

別に相手を全滅させる必要ありませんしね、相手をしなければ良いんです」

そもそも組織相手に5人程度で戦うことを考えるほうがおかしいのだ。

「しいていうなら、指揮系統の人間を発見し殲滅することですかね。下の方は仲間の顔も知らないようですから、上が無くなれば瓦解します」

「まあ、その辺りが無難でしょうね。」

ですがその上の人間を突き止めるのに骨が折れそうですが」

「まあA・Sが終るまでは情報収集に力を入れたほうが良いと思う

よ！

王様ちゃんの見解が1番無難だと思うし、私たちならできるっ！

「その根拠の薄いわりには力強い宣言はどうかと思うが、おおむね同感だよ。」

「まあ今後しばらくはこうやって全員で集まるのは自粛すべきだな」

「くはははは、テメエらも自信家だねえ、だが悪くねえ！

俺はいつも通り各地を放浪して、管理局の目を広域に散らしてやんよ。」

「それにもうすぐ無印だしなあ、ジュエルシードがあれば多少は楽になる」

「 凄く、プレッシャーなんだけど」

「頑張ってくださいね、オリ主。」

私のメイドガジェットたちの動力は貴方に掛かっています」

「僕は最悪、スカリエツティに手を回してもらえばいいと思うけど？」

「……私にあの変態マッドに頭を下げると？」

「すみませんでした」

自分でも惚れ惚れするくらいの土下座っぷりだった。

ドクターちゃんは1度怒るとあの手この手を使って嫌がらせをしてくる。

前回だって 思い出したくも無いや。

その後、全員の結束力強化のため5人でスマブラを楽しんだ。
むしろ結束力にヒビが入ったかもしれないけれど。

全員が集まってもやることは普段と変わらない。

「おっ、今週のロリロリマガジン、久々に当たりか？
いい貧乳っぷりしてんじゃんよ、くははははは」

ロリコンはいつも通りである。

ロリコンの名に恥じず、仲間の目の前でエロ本を広げている。
その度胸をもっと別のことに向けて欲しい。

「はああ やはり内臓はいいものですね。

特にこの肺の汚れ具合がハードボイルドな渋さをかもし出しています。
す。

逆にこの綺麗で小さな心臓も、無垢な美少年のようで、胸がと
きめきます」

ドクターちゃんも臓器フェチの名に恥じず、ご自慢のコレクションを眺めている。

傍から見るとレントゲンの写真を熱心に見ている医者のようなのだ。

本質的には隣でエロ本を眺めているロリコンと同類なのだが。

「ところであたりちゃん。」

あたりちゃんはじめちゃんに告白しないの？」

「なななな何を言っているあげは。」

それでは私がるで一梨さんのことがす、好きみたいじゃないか」

この2人は女子らしく恋話である。

ちなみに戦闘機人こと真中あたりは、鈍感である。

他人からの好意ではなく、自分からの好意にすら気づかない。

だから、自分がロリコンに恋をしていると気づかない。

正直どうでもいいんだけど。

「ところでドクターちゃん。」

僕のデバイスは完成したのかな？」

実は僕はまだデバイスを持っていない。

他の連中は皆持っているというのに、まだ完成すらしていないのだ。

いや、市販のストレージデバイスならあるんだけどね。

「それなんですけどね。」

レリックを内蔵したインテリジェントデバイスを設定済みです。あとはレリックさえ手に入れば、貴方にふさわしいデバイスが完成するんですけど。」

「ちょっと待て！」

レリック内蔵って滅茶苦茶ヤバくないですか!？」

「体に埋め込むよりはデバイスに埋め込んだほうが幾分マシです。まあ管理局に調べられたらアウトですけど、その場合は調べられた貴方が悪いだけですし。」

「……レリック内蔵じゃなくていいんで、作れないですか？」

「未完成の作品を世に送り出すことなど、私の美学に反します。」

「せめてもうちょっと性能のいいデバイスを作ってくれませんか。今のデバイスって面白味も無くて性能も一般人用の部類なんだけど。」

「私に、間に合わせのデバイスを作れと？」

これだから芸術家のようなものは扱いに困る。

今の僕が使っているデバイスは、ストレージデバイス『T2』
整備が簡単で壊れにくいものの、処理速度以外に長所が無いというデバイスだ。

一応地上の管理局員は大抵これを使っている、何しろ安いし手間

が掛からない。

というかデバイスの差を引いても僕はこの中で最弱だ。

転生者の強さを表すと上から

ロリコン（陸戦SS）

引き籠もり（空戦S+）

魔導師殺し（総合S-）

ドクターちゃん（空戦AAA+）

僕（空戦B）

となる、戦闘要員じゃないドクターちゃんにすら負ける聖王クロ
ーン（笑）

「てかこれだと、僕はジュエルシールドを封印すらできなく無い？」

「……確かに、盲点でした。」

ジュエルシールドなど封印できて当たり前と思っていたので

「耳に痛いです」

「しょうがありませんね」

『Photon Lancer』

ドクターちゃんが直射型魔力弾を生成する。
そしてロリロリマガジンを楽しんでいる変態の後頭部に

「ファイア」

「うぐおー!!」

直撃させた。

この2人、最古参だけあってお互いに遠慮が無い。

「何すんだよ、この変態ドクター」

「こんなところでエロ本を読んでいる貴方が悪いのです」

「テメエだつて同じ穴のムジナだろうが!!」

「つうか何か用があるなら口で言えよ、魔法なんて使っくんじゃねえ!!」

「私の臓器趣味と貴方の幼女趣味を同じレベルで語らないでもらえますか、不愉快です」

「何テメエの方がレベルが上みてえな発言してんだよっ!

俺のロリに対する愛とテメエのゲテモノ趣味を一緒にしてんじゃねえ!!」

「っ!?!?」

「いやいやっ! 何『心外だ』って表情になつてんだよ!

内臓のどこに萌える要素があるのか理解に苦しむぜ全く」

「ほほう、内臓の良さについて語ってほしいと。
いいでしょう、語ってあげましょう臓器の良さについて！」

コイツ絶対に本題忘れてやがる。

「そもそも人間の顔は整形手術で偽れます。

胸も、性別すらもこの世界の技術でなら偽れるのです！

しかし、臓器だけは、内臓だけは偽れない、すなわちその人物の
全てを表している」

ノリノリで語りだしたドクターちゃん。

誰も聞いていないどころか、相槌すら打ってない。

「臓器にはその人の人柄が現れます。

偽りの無い真実の姿、何一つ同じものが無いオンリーワン！

だからこそ臓器には夢や浪漫が溢れているのです、また」

僕は彼女が満足するまで待っていなくちゃいけないのだろうか。

もはや口癖になりつつあるけど言わせて貰おう、引き籠もりたい
と。

「ロリコンのせいで話題がずれましたが」

「いやテメエのせいだろ」

「それよりクエス・ベルリネットのデバイスの件です。ジュエルシードのこともありますし、予定を繰り上げて製作に入ります」

淡々と話すドクターちゃんに突っ込むロリコン。

それにしてもデバイスが完成するとはありがたい。

「それでロリコン、貴方にはレリックを最低1つは手に入れて欲しいのですが。」

聖王の真価はレリックを手に入れたときこそ、力を発揮するようですし」

「いいけど管理局に目をつけられるぜ？
さすがにロストロギア内蔵デバイスとなれば管理局が回収するだろ」

「バレないようにジャミングを施します。
多少、他の作業が遅れますができるだけ早く完成させたほうがいいでしょう。」

つきましては、あげはさんとあたりさん。クエスを鍛えてあげてくれますか？」

え、ちょっと待って

「ふむ、せっかくのデバイスも持ち主がアレでは宝の持ち腐れだろ
うからな。」

よかるう、私も協力しよう、みっちりと質量兵器の恐ろしさを教えてやるぞ」

「なら私も参加するー。」

レリックの場所は無限書庫で検索してはじめちゃんに送るね。

あと王様ちゃんには『元エース』の空戦技能を骨の髄にまで叩き込んであげるよ」

「くははは、モテモテじゃんかよオリ主。

あとテメエら、俺の分も残しとけよ、陸戦の極みを刻み込んでやんよ。」

喜べオリ主、無印開始までの1年間でテメエをAAAにまでは上げてやんよ」

「それは虐待だー!!」

こうして無印までの1年間、僕は地獄を見ることになる。

EP・08：方針会議（後書き）

こいつら揃いも揃って個性的で書きにくい。
誰だ、こんな性格にした奴、でてこい

EP・09：原作開始までの軌跡（前書き）

クロノとドクターちゃんのターン。

秋代様、ソラト様、赤地に金飾のパラドキサ様、感想ありがとうございました。

Ep・09：原作開始までの軌跡

【主人公 クエス・ベルリネッタの場合】

その日、僕はいつも通りに学校の机の上でダウンしていた。

あの方針会議からずっと、毎晩僕は訓練という名の虐待にあっているからだ。

世のチートオリ主の皆様は10年修行だけの日々すら楽にこなせるという。

その点で言えば、僕にはチートオリ主の素質は無かったようだ。

「クエス！ またあたしの誘いをすっぱかしたわね！！」

アリサが怒っている。

いやまあ、最近はその虐待のせいで遊びの誘いも全部断ってるから当然何だけど。

「いや、行けないって言ったよなね」

「此処最近ずっとそうじゃない！！」

何か困ったことがあるなら相談しなさいって何度言えばわかるの！？」

相談しても助けにはならないと思う。

確かにこの虐待は辛いけど、自分が強くなっていく感触があるし。

何より、もうすぐ無印が始まるのだからサボるわけにもいかない。

「別に困っているわけじゃないよ。」

自分の夢のために、ちよつと頑張っているだけだよ」

そういえばつい先ほど、先生が将来の夢について語っていたな。

「へえークエス君はもう将来の夢を持つてるんだ!」

そんな僕の前に凄いなあと言いながら近寄ってくる主人公。

何度断つても、めげずに僕と友達になろうとしてくる。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、将来の夢ってもう決まってるんだよね?」

「あたしはお父さんとお母さんが会社経営だし、

いっぱい勉強して将来跡を継がなきゃ、くらいだけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職を勉強しようかなって思ってるけど」

お前ら本当に小学生か、などとは突っ込むまい。

こいつらに限らず周囲の子供たちは精神年齢が普通よりも高すぎるのだ。

「ふうん、皆考えてるんだね」。

ねね、クエス君の夢って何?」

「あたしも聞きたいわね。」

あたしたちとの遊びを断ってまで頑張るくらいなんだから、さぞ

立派な夢なんでしょうね」

「アリサちゃん！ でも私も気になるかも、教えてくれないかな？」

さて、どう答えよう。

どう答えても満足の行く結果は得られない気がする。

「ちょっと答えにくいかな。

まあアリサと月村さんみたいに具体性のある夢じゃないよ」

「何よ、はぐらかすつもり！？」

じゃあその夢のために何を頑張っているのよ！」

ロリコンと捕まったら斬られる鬼ごっこだとか、

戦闘機人の絨毯爆撃の回避をしながら接近してタッチすることだとか。

引き籠もりに一撃いれるまで眠らせてもらえない、教導だとか。

そんなことは答えられない。

「何を頑張っているんだろうね」

ホント、何をやっているのだろう。

人殺しを許容して、戦い方を学んで、

そうして本当に元の世界に帰れるのだろうか。

そうして元の世界に帰ってどうなるのだろう。

戸籍も住む場所も無い、そんな状態で向こうの世界に帰って何が
変わるのだろう。

本当に、記憶を取り戻せるのだろうか。
取り戻せたとしても、前の日常に戻ることはできないだろうに。

僕は、何を願っているのだろう。

帰ることか、それとも記憶を取り戻すことだろうか？

それでも、帰る努力はしないわけにはいかない。

例えば帰れないとしても、帰ろうとしないわけにはいかない。

この世界は僕の世界ではないのだから。

(悩んでいても仕方が無いか)

結局やることは変わらない。

すでにこの願いは僕だけの物じゃないのだから。

『 助けて 』

そんな声が、聞こえた気がした。

【殺人鬼 一梨 一の場合】

「レリックは手に入れたけどよぉ!!」

降り注ぐ魔力弾の雨。

彼に向かって飛んでくるチェーンバインドの束。

砂漠の遺跡内に安置されたレリックを片手に、彼は走っていた。

「いたぞー盗掘者だ!」

「捕まえろー」

「重要な歴史的遺物を取り戻せ!!」

後ろからはレリックを取り戻すべく、

我先にと追ってくる『フェレット』の群れ。

そう、レリックがある遺跡は、すでにスクライアー族が発掘中だったのである。

「このフェレットの群れ、滅茶怖えー!!」

勘違いの無いように書いておくと、別にフェレットが殺せないわけじゃない。

ただ、小さくて攻撃が当てにくく、さらにバインド系の魔法を多用してくるのだ。

うかつに接近すればあっという間に捕縛されてしまう。

おまけに彼の天敵魔法である『ストラグル・バインド』を使うフェレットも混じっているのだ。

数の暴力に陸戦SSのロリコンは逃げるしか手が無かった。

「追え、歴史的財産を盗人に奪われて良いのか!!」

「「「「否!」「」」」」

「我々は何だ、ただの放浪の民か!？」

「「「「否、我らはスクライアー族!」「」」」」

「古代の歴史を解明するきっかけになるかもしれない宝をこそ泥に盗まれて良いのか!

否、いいはずがない、我らは歴史の探求者、人類の歴史は世界の宝!」

「「「「その宝を見つけることこそ、我らの悲願!」「」」」」

「ならばデバイスを取れ、出陣だ!!」

「「「「「おおー!!!!」」」」」

と、黒尽くめの少年を追う、フェレットの群れというシニールな光景が展開されていた。

補足しておくならば、空にも追っ手のフェレットが少年に向かっていたりする。

「聞いてねえぞ、スクライアー族がいるなんてよお！」

悲鳴とも怒声とも取れる叫びを上げながら彼は逃げ続ける。

ちなみに彼が無限書庫の引き籠もりこと、山中あげはから受け取ったデータは、

レリックのある遺跡の場所とその遺跡の地図だけであった。

「畜生、あの引き籠もり、帰ったら女として生まれてきたことを後悔させてやる！」

そんな犯罪予告のような叫びを上げながら逃げ続けた。

その後、フェレットを何とか撒いた彼はレリックをドクターちゃんに転送した後、

無限書庫に潜入しようとしてミッドチルダに移動するも、そこでクロノ・ハラオウンと運命的に再会。

結局、山中あげはに復讐することは出来ず、クロノと2度目の死闘を繰り広げたとか。

この出来事は無印開始の数ヶ月前の話である。

【魔導師 山中あげはの場合】

「あげは、いい加減に教えてくれ！

一体君は何を知っているんだ、管理局は何を隠しているんだ！」

あの『魔法喰い』との1戦以来、クロノの無限書庫訪問率は急上昇していた。

次元犯罪者『魔法喰い』が残した言葉がクロノの脳裏からは離れない。

「次元漂流者を救うという名目で行っている行動。

だが その裏には本当に何も無いと思うのか？」

「綺麗なもんばかり見過ぎなんだよテメエらはなあ。

そんなんだから無限書庫に引き籠もる奴だつて出て来んだよ！」

クロノは独自に調べたが、次元漂流者を救う以外に目的は見えてこない。

確かに、戸籍が無い出自の確証の無い漂流者は嚴重な調査が行われるがそれは当然だ。

だが、『魔法喰い』は裏があるといっていた。

クロノは気になり、ここ数年の次元漂流者リストと対応のまとめを担当者に求めた。

だが却下された。

個人情報保護のためという名目で提出はされなかった。

しつこく求めても所属が違う、貴方には関係ないと突っぱねられた。

ただのなわばり意識からじゃないと、クロノは直感で悟る。

だが結局は権限不足で引き下がらずに入られなかった。

なんとかしたいとは思っていても、彼は忙しい。

各地に根回しをする力も交友関係も、まだ持つてはいないのだから。

事件は次から次へと起こる。

怪しいからといって、事件を疎かにする訳にはいかない。

そして事件を解決しても、すぐに次の事件が飛び込んでくる。

歯がゆくて仕方が無い思いをしながら彼は真実を知るであろう少女に話を持ちかけた。

だが彼女は答ええない、それが腹に来てつい感情的になってしまうのも無理は無いだらう。

僅かな時間が出来るたびに彼は無限書庫に訪ねてくる。その誠実さとマメさに好感を覚えつつもあげはは答えられなかった。

「私から言えることは何も無いよ、クロノちゃん。クロノちゃんの権限では、知ったところで何も出来ない。なら知らないほうがクロノちゃんのためになる」

「何も出来ないからって知らないでいられるものかっ！
僕はアイツに言ったんだ、『管理局に間違いがあるなら僕が正すと！』」

あげはも悩んでいる。
教えてあげてもいいかもしれないと。

けれどこれは決して間違いではない。
模範解答の存在しない問いだ、教えてどうなる問題でもない。

実のところ、リンディやグラムは予言を知っている。
だから管理局が裏で行っているであろう事も予想がついている。

だが、それを黙認しなければ世界が滅ぶかもしれないのだ。
だから黙認しており、まだ若く理想に燃えているクロノには告げるべきでないと考えている。

クロノの周りに味方は少ない。

それでも彼は足掻き続ける、自分自身の正義のために

【戦闘機人 真中 あたりの場合】

戦闘機人、真中あたりがすることは情報収集である。
特定の情報を探すことなら山中あげはという適任者がいる。

が、彼女が探せる場所は無限書庫のみ。
そしてその無限書庫からは削除された情報があるのだ。

予言対策部隊『トライデント』
とりあえず彼女は管理局のお膝元、本局の前に来ていた。
かといって中に入るわけにはいかない、不審者として捕縛されて
しまいかねない。

彼女は本局の入り口を出入りする魔導師たちのデバイスに無差別
ハッキングを仕掛けていた。
しかし目的となるデータは存在しない、彼女はこれで尻尾が掴め
るのかという疑問に襲われる。

しかし何もしないわけにはいかない。
だからこそ彼女は僅かな可能性にかけてハッキングを続けていた。

【闇医者 羽間 詩の場合】

ドクターちゃんと仲間から親しみを込めて呼ばれる白衣の少女、
『オルタ・スカリエッティ』こと『羽間 詩』は悩んでいた。

目の前には赤い結晶。

王の証とも呼ばれる正体不明のロストロギア、レリック。

つい先日、ロリコンが入手し、送ってきた危険度の高いロストロギアである。

本来ならばその用途を研究し、危険性を把握してからデバイスに組み込む予定だった。

だが、入手までに多くの時間を費やしてしまった今、その研究に割く時間が無い。

研究し、デバイスに組み込む時間ならばぎりぎり残っている。
だが、その使い手となる少年がデバイスを使いこなせなければ意

味は無いのだ。

研究に時間を割けば、使用者が使いこなせない。研究を省略し、使用者に訓練させれば使いこなせるレベルにはなるだろうが危険をはらむ。

使用者の安全を優先するならば研究すべきだ。だがデバイスを使いこなせなければ戦力は低下し、ジュエルシード暴走体との戦闘が危険になる。

どちらを選んでも使用者が危険なのだ。だからこそ彼女は悩んでいた、しかしその悩む時間すら今は惜しい。

彼女は意を決して、モニターに手を伸ばした。

「やあ、そちらから通信してくるとは珍しいじゃないか」

「相変わらず不愉快な顔ですね、ジェイル・スカリエッティ」

一応の同盟相手。

お互いがお互いを利用しあう信用は出来ても信頼できない相手。血縁上は自分の兄ということになるジェイル・スカリエッティに彼女は連絡を取った。

「そちらは相変わらず、上の命令に従って人体研究ですか？」

「ああ、相変わらず上の老人たちに急かされてね。

まったく、こうして見ると早々に自由になった君が羨ましいよ。」

「御託は結構、本題に入りましょう。」

レリッククについてのデータ、貴方はどの程度持っていますか？」

「レリックク……ああ、あの結晶か。」

確か聖王クローンに必要なだからと研究したことがあったなあ。

そういえばあの聖王クローン、研究所が崩壊して行方不明だったかな。

老人たちが騒いでいいたから覚えているよ、君なら行方を知っているんじゃないかい？」

「さあ、私には心当たりがありませんね。」

「ふふ、まあそういう事にしておこうか。」

それでこのレリッククの研究データが欲しいということかな？」

「そうです、それを送ってはもらえませんか？」

「無償で、と言う訳にはいかないよ、わかっているだろう。」

私たち科学者は、自分の研究に誇りを持っている人種だ。

無償で渡すことは価値が無いといっているのと同義、ゆえに無償で渡すことは出来ないよ。」

「わかっています、その位。」

貴方は何を望みますか、私に出来る範囲でなら答えましょう。」

「……そうだね。」

では君が何故そこまでこのデータを求めるか、それを聞かせても

らおう」

「それはレリックを内臓したデバイスを作るために」

「いや違う、私が知りたいのはそういう事ではない。

プライドの高い君が何故、私に頼み込んでまでデータを欲しがるか。

レリックの現物はあるのに、何故自分で研究せず、私にデータを貰おうとするのか」

「……………」

「面倒だから？ 違うだろう、君は私を嫌っている。

嫌いな相手に頼み込んでまでデータを欲するからにはそれ相応の理由があるはずだ。

何故君は、自分のプライドを捨ててまで、私に頼み込んできたのか？ 私はそれが知りたい」

予想した以上に最悪だった。

彼の欲しりそうなデータはリストアップしてある。

だが彼はそれに目もくれず、こちらの本心を求めてきた。

ジェイル・スカリエッティの言うとおり、彼女はプライドが高い。自分から彼に連絡を取ること、彼に頼むことはさぞ屈辱だっただろう。

それでも、その屈辱に耐えて頼み込んだ。

その理由だけは、例え仲間にも話したくは無かったはずだ

「答えないのなら、このデータは渡せないよ」

「ッ!？」

間違いなく、彼は楽しんでいる。

自分が屈辱に苛まれている事を楽しみ、さらなる屈辱に襲われることを楽しんでいる。

だが、答えなければデータは手に入らない。

答えなければ、大切な仲間の1人が危険に晒される事になる。

彼女はぎり、と歯を喰いしばって、そう考えた。

それなら、取るべき手段は決まっている。

「そのデータが無ければ仲間が危険に晒される。

仲間の安全のためなら、私のプライドなど些細な問題でしかありません」

「そこまで、仲間が大事かね？」

「当然、彼らがいるから私は孤独じゃなくなったのです。

仲間を危険に晒してまで守ったプライドなど、味の無くなったガム程の価値しかありません」

「……データは転送させてもらおうよ。

君の屈辱に耐える表情とその本心だけで、十分楽しめた」

送られてくるデータに目を通す。
彼女の望んだ通りのデータだった。

これで安全に事を運べるだろう。

「それでは次の機会を楽しみに待っているよ」

「地獄に落ちろ、変態」

捨て台詞は、彼女の本心だった。

EP・09：原作開始までの軌跡（後書き）

戦闘機人ちゃんの影の薄さは異常。

いやごめん、まだ尻尾を掴ませるわけにはいかないのです。

対してクロノ君が主人公より主人公してる件。

たぶんお人好し過ぎて原作でもこうなると思って書きました。

そしてドクターちゃん屈辱に耐えるの回。

ノリノリで書きました、すみません。

それでは感想を待っています。

EP・10：高町なのは（前書き）

遅れてすみません。

少しプロットを見直していたのと諸事情で遅れました。

TOMOKICHI様、タカセ様、感想をありがとうございました。

Ep・10：高町なのは

決して交わること無き次元より5人の異邦人が舞い降りる。

法の番人たちは道化と成り果て、異邦人たちは舞台裏にて踊る。

道筋は歪み、かつての秩序は混沌と虚無の中へ消えてゆく。

異邦の知により運命は狂い、世界は破壊される。

聖王教会 カリム・グラシア 『預言者の著書』より

とある管理外世界にある秘密基地。
そこに2人の人間が滞在していた。

秘密基地といっても、その世界の住宅街の中にある屋敷なのだが。

彼らは、この手の秘密基地を各管理世界に最低1つは用意している。

企業のお偉いさんたちにドクターちゃんが手を回した結果らしい。

実のところ、管理世界でのドクターちゃんの人脈は幅広い。

『似非ブラックジャック』のあだ名は伊達じゃないのだ。

実際、当時の技術では手の施しようが無い患者を何人も救っている。

企業のお偉いさんにとっては、相手が次元犯罪者でも多少優遇しておいて損は無い。

いざという時管理局に追及されても、犯罪行為を隠匿したわけではないのでお咎めは無い。

デメリットよりもメリットが大きければ、それを選択するのが組織というものだ。

閑話休題、その秘密基地にいる2人のうちの1人は、ドクターちゃんこと羽間 詩。

もう1人は管理世界に広く名を知られている、殺人鬼『魔法喰い』こと一梨 一。

仲間内で最も長い付き合いの2人は、いつもの如く、無駄話に花を咲かせていた。

そのとき、モニターに一隻の船が映し出される。

スクライアからの発掘品を管理局まで運ぶ輸送船だった。

「始まりましたね、無印が」

「だなあ、確かこの船が落ちるんだよなあ。

つつても原作じゃあ原因が語られなかったから誰の仕業かわからないわけだが」

原作では語られなかった真実。

まあ十中八九、プレシアの仕様だと2人は考えていた。そして輸送船が落とされるの黙って待っていた。

が、一向に攻撃される気配は無い。

「……もしかして本当に事故だったのでしょうか？」

「マジかよ、引き籠もりちゃんとの賭けは俺の負けか」

「何してるんですか、貴方は」

「いや、誰が落とすのか賭けようぜって俺が持ちかけてな。

俺がプレシア、アイツがそれ以外に賭けたんだ」

2人で首をかしげている間にも輸送船は進む。

もうすぐ第97管理外世界の真上を過ぎてしまう。

「おいおい、マズいんじゃないこれ!？」

このままじゃ魔法少女始めらんねえよ!!!」

「……しかたありませんね」

予想に反して落ちる気配をまるつきり見せない輸送船。

プレシアからの攻撃どころか、それ以外のトラブルが起きた様子も無い。

「私が撃ち落します」

「は？」

彼女は滅多に使わない、彼女だけのデバイスを取り出す。
夜天の書を参考にした本型のストレージデバイス、『蒼き読み手』
スカイリーダー

その特性は、記録された魔法を本人の資質に関係なく使用できる
ということ。

『Thunder Rage Occurs of Dimensions
ion Jumper』

本から薄い青に染まった雷が天井に向かって放たれる。

しかしそれは天井には当たらずに次元を超え、そのままモニター
先の輸送船に直撃した。

輸送船は煙を上げて炎上し、高度を下げていく。

下手人である少女の隣では、冷や汗をダラダラと流している少年。
そして当然の帰結のように輸送船は爆発し、青く輝くモノが複数
個、地球に落ちていった。

「ふう」

いい仕事をしたと言わんばかりの笑顔で汗をぬぐう白衣の少女。
その笑顔は、事情を知らない者が見れば思わず見惚れてしまうほ
ど可愛らしかった。

だがしかし、まかり間違っても船を墜とした後にする表情ではな
い。

「おい、ドクターちゃんよお」

「何でしょうか、ロリコン」

「テメエ何やってんだよ!？」

「バレたら管理局がさらに追ってくるようになるだろうが!！」

「今更罪が1つ増えた所でたいして変わらないでしょう? 私も貴方も」

「まあ、そうなんだけどなあ」

今更罪が増えた所で、管理局に捕まったときの処遇は変わらない。輸送船を落としたぐらいでは変化しない立ち位置に、2人はため息をついた。

「さて、私は『週刊 美しき臓器写真集』を買ってきますね」

「俺は何であんなモノの流通が成り立ってるか、滅茶苦茶疑問なんだが」

「貸してあげましょうか?」

「幾ら金を積まれてもいらねえよ!！」

「今週は『特集 幼女の綺麗な心臓』ですよ」
ハート

「幼女趣味を公言する少年は唾然とした。

「これはもう出版社が病気としか思えない。」

「幾ら俺が幼女を愛する紳士だからってなあ……
さすがに幼女の臓器にまで萌えられるほど万能じゃねえよ!！」

『世界の敵』と呼ばれるモノがある。

世界が存在し続けるために、万難を排して打倒しなければならぬモノ。

『世界の敵』は転生者の別名では無い、世界の意思に影響されないモノの総称。

世界にはごく稀にはあるが、そういったモノが現出する事がある。

宿主である人体を殺す癌細胞のように、『世界の敵』は世界を、物語を壊す。

例えそこに悪意があろうと無かろうと

だからこそ世界は、ソレを排除しようとする。

物語を守るために、ありとあらゆる手段で排斥しようとする。

その中には当然、転生者も含まれている。

「だからってコレは無いだろうに！」

目の前には巨大な大蛇の姿。

首をもたげてこちらの様子を伺っている。

明らかにジュエルシードの暴走体である、原作にこんなものいたっけか。

「これが蛇に睨まれた蛙という奴かな」

「クエス君、何のんびりと言ってるの!？」

早く、早く逃げないと危ないよ、絶対食べられちゃうって!！」

隣で僕の腕に抱きついて、怯えながらも逃げるように訴えているのが高町なのは。

女子に抱きつかれるというのは男の浪漫なんだろうけど、全然嬉しくない。

高町なのはは僕にとって生理的に受け付けない存在だ。

抱き付かれてる今も、寒気と冷や汗が止まらない。

何故こんな状況になったか補足しよう。

僕は高町なのはの魔法少女デビューを見るために動物病院に向かっていた。

無差別念話があったので、今日がその日だと気づいた辺りまでは良かった。

問題は、道中で同じく動物病院に向かっていた高町なのはと合流してしまった事。

そしてユーノ・スクライアが相手にしているのは別の暴走体に襲われた事だろうか。

見た感じこの大蛇のレベルはAランクより少し上くらいだと思う。以前の僕ならともかく、今の僕なら勝てなくは無いだろう。とりあえず

「高町さん、ここは僕が囷になるから逃げて」

高町なのはに魔導師だと知られるのはまだ早い。

それに今の彼女はまだ、運動音痴の小学生でしかない。

二重の意味で足手まといであるため、早々に離れて欲しい。

「だ、駄目だよそんなのっ！

逃げるんだったらクエス君も一緒だよ！」

「いやいや、この蛇、僕らが背を向けたら絶対襲ってくるって！

このサイズなら丸呑みだろうし、二手に分かれたほうが安全だと思っ」

「それでも駄目なのっ！！

あ、そっだ！ 熊さんに会った時みたいに死んだフリとか……」

「それは迷信だし、そもそもこの蛇に効果は無いと思っ」

「じゃあ、じゃあっ！」

高町なのはは、必死に手立てを考えようとしてオタオタしている。

その姿は、飼い主を見失って必死に辺りを見回している子犬の様だった。

「と、とにかく1人で残るのは駄目っ！」

後で聞いたら、アリサちゃんだって絶対怒るもん、頑張って2人で逃げようよ!!」

彼女は、胸の前で両手を組んで力説する。

……この娘は、ユーノのことを忘れてるんじゃないだろうか。

そんなことを僕が考えているとは露知らず、彼女は僕の手を掴んで走り出した。

動物病院からは遠ざかっているが、もう動物病院に物語の舞台としての役目は無いだろう。

「って、逃げたら追ってくるって！ ほらなんか這って来てるし！
何で友達でも無い人間のために、無茶が出来るのかな高町さんは
！」

「友達じゃないと、助けちゃ駄目なのかな？」

今にも泣きそうな顔で、彼女は尋ねてきた。

後ろからは見たこともない怪物が追ってきているのだ、そりゃあ泣き顔にもなるか。

「いや、でも時と場所と人を選ぶべきだと思う」

顔見知りとはいえ、友達でも無い人間のために命を張る人間はおかしい。

ましてや自分の命すらも危ういこの状況で、他人を気遣うなど異常だ。

端的に言ってしまうえば気持ち悪い、その人間性が。
行き過ぎた美德や優しさ、他人を思いやる心も、極めてしまえば
恐怖の対象でしかない。

そんな人間は物語の中にしかないから

陰陽があつてこそその人間。

命を賭けてでも、誰かのために行動できる人間なんて、いてはい
けない。

なぜならソレはあまりにも正し過ぎるから　あまりにも理想的
過ぎるから。

……………ああ、そうか。

なぜ僕が、僕ら転生者が原作キャラを禍々しく感じたのかがわか
った。

原作キャラはあまりにも、人間離れしているんだ。

あまりにも正し過ぎて、理想的過ぎて、だからこそ醜悪にしか見
えない。

この世界は物語だ。

だからこそ、彼女らのような理想的な人間がそれなりに存在する。
僕らの世界には殆ど存在しない、『物語の主人公』のような人間
が。

無論、この世界にだって僕らのような普通の人間も要る。

僕らでも忌避するような下種な人間もまた多くいるだろう。

それでも僕らの世界よりも当たり前のように、そういった善人が
いる。

ソレが堪らなく居心地が悪く感じるんだ、僕らが物語の登場人物ではないから。

「行き過ぎた優しさは怖いだけだよ。

裏で何か企んでるのかもしれない、そう考えてしまうのが普通だから」

「っ　企んでなんか」

「誰かを助けるのには、やっぱり理由が必要なんだ。

理由無く誰かを助けるような人間は、少なくとも僕は間違っていると思う」

「ち、違うよっ！　人を助けるのに理由なんていらさないよ。

私は誰かが困ってたら手を差し伸べる、そんな子に　なりたいんだ」

「……………」

「運動音痴だけど、頭もそこまで良くないけど。

それでも誰かの役に立ちたい、誰かに笑って欲しい。

悲しそうな人がいたら私も悲しくなるし、誰かが笑ってたら私も笑える」

それは誰に向けられた言葉だったのか。

僕ではなく、彼女自身に言い聞かせているようでもあった。

息を切らして、僕を引っ張りながらも彼女は言葉を紡いでいく。

「そう、そうなんだ。」

特別な力なんて少しも無いけど、それでも私は」

誰かを笑顔に出来る人間になりたい。

そう呟いた彼女は、憑き物が落ちたかのように、輝いて見えた。

「そっか、ソレが私の将来の夢、なんだ」

誰もが見惚れるような笑顔。

それを綺麗だと思った。

『×× ××』はそういうキャラが好きな普通の

「うん、まずは、一緒に逃げ切ろう！」

そしたら、私と、私と友達なってください！」

思考にノイズが走り、何かを思い出しかけた気がした。

彼女の発言でそのノイズは消えてしまったけれど、
とりあえず

「それは死亡フラグだ」

「ふえっ!?!」

彼女は、しまったと言いたげに口を押さえる。

僕は思わずぐすりと笑ってしまった。

将来、僕らの敵になるかもしれない。
僕が本来の世界に帰るとき、未練になるかもしれない。

それでも、友達くらいなら。

そんな血迷った戯言を、一瞬でも思ってしまった。

「えっ ？」

だから気づけなかった。

前方の横道から、フェレットと『黒い異形の怪物』が向かってきている事に。

黒い異形の化け物は、高町なのはに突っ込んでくる。

轟っ！ と空気を切りながら迫る衝撃に、僕も彼女も、フェレットも反応できず

「あ

紙屑のように、高町なのはは吹き飛んだ。

本来ならそのまま地面に叩きつけられ致命傷を負うところだったが。

「危ないっ！！」

翡翠色の光にフェレットが包まれ、本来の少年の姿へと変わる。
彼はそのまま、高町なのはを掴み、一緒に地面を転がっていった。
少年が下敷きになったおかげか、高町なのはに目立った外傷は見られない。
ただ強い衝撃を受けたせいか、意識を失っている。

そして少年も、彼女の代わりに地面にぶつかったためか、意識を失っていた。
元の姿に戻ってから10秒もしないうちに、フェレットの姿へと戻る。

前には黒い異形の化け物。

後ろには首をもたげ、こちらを見つめている大蛇。

そして、フェレットの首に掛かっている赤い宝石から

『Please lend me power』

私に力を貸してくれと、懇願された。

……まさか僕に使えというんじゃないだろうな、レイジンググハ
ー。

EP・10：高町なのは（後書き）

高町なのはは、きっとこんな感じだと信じている。

あと結局主人公が俗物過ぎて書いてて魅力がないなあと呆れる。

もう主人公なのはとクロノでいい気がしてきた。

Ep・11：次元震（前書き）

更新遅くなってごめんなさい。

脳内編集長もご立腹です、タバコ吸いながら嫌味をネチネチ言ってます。

TOMOKICHI様、ソラト様、ゼハル様、感想ありがとうございました。

Ep・11：次元震

フェレットの首にかけられている赤い宝石。

インテリジェントデバイス、レイジンググハートが僕に向かって告げる。

私を使ってくださいと、私に力を貸してくださいと。

けれどそれは魔法に関わるということ、原作に関わると言うことだ。

原作に関わるのは確かに嫌だ。

だがそれは、平穩に暮らしたいからじゃない。

いずれ敵になる人間と仲良くできるほど、僕は器が大きくないからだ。

高町なのは、この世界の主人公。

何度も言うが、彼女は絶対に僕たちの敵になる。

元の世界に帰りたいという、僕の願いを邪魔しに来るはずだ。

そんな人間を、僕は守っていいのか？

There is no time. Please hurry up!

僕は高町なのはに僅かとはいえ好意を持っている。

それは認めよう、死んで欲しくないとも思っている。

でもそれ以上に死んで欲しいとも思っている。
高町なのはがいなければ、僕らが帰る為の障害は大きく減るだろう。

フェイト・テスタロッサはともかく、八神はやては助からない可能性のほうが大きい。

ならここで見殺しにしたほうが絶対に良い。
助けたところで何も得られない。　それどころかマイナスになるだけだ。

論理的に考えれば、ここで見捨てることが最善の策。
だけど決心がつかない、彼女が死ぬことを許容できない。

「なんで……」

おかしい、何故僕はこうなった。
こんな事にならないために、僕は彼女を避けていたはずなのに。
何処で間違えてしまったのだろう、何を間違えてしまったのだろう。

アリサ・バニングスと友達になったことか。
それとも高町なのはに近づくなと、公言しなかったことか。

いや、今することは後悔ではない。
助けるか、助けないか、それを決断するだけ。

助けたいと思う自分がある。
救いたいと思う自分がある。

だが助けてしまえば、救ってしまえば将来の敵になる。

僕1人が傷つくならまだ構わない、自業自得と諦めることも出来る。

けれど、傷つくのは僕だけではない、他の転生者たちにも迷惑が掛かる。

『The way things are going, The y will be killed!』

悩んでいる時間はないはずなのに。

目の前の異形も、背後の大蛇もいつ襲ってきてもおかしくないのに。

逃げられない。

逃げたくない。

見捨てたい。

見捨てたくない。

死んで欲しい。

死んで欲しくない。

どこで狂ってしまったのか、僕はただ記憶を取り戻せば良かったはずなのに。

空っぽの自分を埋めるために、満たすためにかつての記憶を求めていたはずなのに。

いつの間にか、満たされてしまっていた。

『××××』ではなく、『クエス・ベルリネッタ』という存在を享受していた。

ふざけるな。

こんな名前に未練は無い、僕はクエスじゃない。

こんな世界に骨を埋めるなんて、死んでもごめんだ。

ふざけるな。

僕は取り戻すんだ、『××××』という名前を。

だから

「出番だ、ネームレス」

そうだ、何も悩む必要など無かった。

記憶は無くても、知識から推測できることがある。

『××××』は絶対に、『リリカルなのは』が好きだったはずだ。

じゃなければ、何故こんなにもこの物語の知識が豊富に存在しているのか。

「ますたー、何か吹っ切れましたか？」

「知るか」

僕は『×× ××』を続けたい。
だから『×× ××』が好きだった『リリカルなのは』の主人公を守る。

そのために、この世界をこれ以上壊さないためにも。

『×× ××』という名前を取り戻すためにも、元の世界に帰ろう。

『せとあつぷ』

虹色の光が僕の周囲を渦巻く。

イメージするのは、白のマントに青い軽装の鎧。

バリアジャケットというよりは騎士甲冑のデザインに近い。

そして右手に出現する『赤の宝玉』を柄にはめ込んだ銀色に輝く剣。

インテリジェントデバイス『ネームレス』

王の証であるレリックを内蔵したドクターちゃん謹製のデバイス。

人体にレリックを埋め込まずにレリックの力を利用することができる。

これにより僕はレリック内の魔力を引き出すことが可能。

また、デバイスとしての機能も優れており、その性能は一級品。レリックによって強度を極限まで強化しており、アームドデバイ

スとしても扱うことができる。

「な　魔導師!？」

目が覚めたのであろう、ユーノが驚きの声を上げる。

「フェレット、君は気絶しているその頑固娘を守ってほしい。
とりあえずこの化け物たちの相手は引き受ける」

「わかった　チエーンバインド!」

翡翠色の鎖が、突進しようとしていた黒い異形を捕縛し、その場にとどめる。

倒すことは期待できないだろうけど、防御に長ける彼なら、高町なのはを守りきれだろう。

僕は身を翻し、背後の大蛇に斬りかかる。

無論、そう簡単に斬られてくれるわけもなく、咆哮と共に黒の魔力弾を放ってきた。

「ネームレス」

『いえす、ますたー』

レリックによる能力制御。

伊達に1年間、仲間たちに虐待され続けてきたわけではない。

僕は1年の特訓によって、この肉体本来の能力をコントロールで

きるようになっていた。

聖王の遺伝子に刻まれた固有スキル、質量兵器が跋扈する世界で生存し続けるための力。

『かいぜる・あーまー』

虹色の光が膜状となって僕の体を包み込む。

固有技能『聖王の鎧』、Aランクに及ばない魔法を無効化するスキルだ。

本来ならSランクの魔法ですら無効化できるはずなのだが、残念ながら複製である僕ではそこまでの領域に至れなかった。

だが、それでも目の前の大蛇のチンケな魔力弾を打ち消せないほどじゃない。

案の定、黒色の魔力弾は僕に触れる手前で霧散していく。

「ブレイブエッジ！」

魔力を纏った銀の刃が、大蛇に肉薄する。

刃は吸い込まれるように、大蛇の左脇腹を斬り裂いた。

しかし暴走体はそれしきでは怯まない。

巨大な頭を翻らせ、噛み砕かんと僕に迫る。

『ますたー』

「わかっている」

僕は刃を返し、巨大な牙を受け止める。

身体能力を強化しているとはいえ、刀身で2本の牙を押さえるのは結構辛い。

聖王の鎧は発動しているものの、物理攻撃に関しては文字通り紙なのだ。

オリジナルであれば物理攻撃も防げるのだろうが、偽者に過ぎない僕には不可能。

『ますたー、痛い！ 痛いです！！』

「おいこら凡骨、もう少し粘れ！」

手元の剣が泣き言をほざいているが無視した。

ギシギシ軋んでいる凡骨デバイスに魔力を流し込む。

「まずは部位破壊！」

『ぶれいぶえつじ・ぶらす！』

レリック内の魔力により、威力を上げた斬撃が2本の牙を破壊する。

痛みあまり後退する大蛇に追撃をかけるため、僕は一歩足を進め

「危ない！」

「っ！？」

背後から、ユーノの相手をしていたはずの黒い異形が突進してきた。

一対一の特訓ばかりだったせいで奇襲に対して完全に警戒して
いなかったためか、

背中に強い衝撃があったと感じた瞬間には既に遅く、地面に叩き
付けられる。

幸い、バリアジャケットを装着していたため致命傷にはならな
かったが、

それは目の前の大蛇にとってあまりにも、致命的な好機だった。

遠心力によって加速した大蛇の尾が、僕に向かって迫る。

こちらは体制を立て直せていない、防御できるはずもなく

「がはっ！」

あっけなく吹き飛ばされた。

だが、この程度ならまだ戦える。

背中に痛みは残留している。

それでも、まだ致命傷ではない。

自分に言い聞かせ、目の前を見据える

「……………」

大蛇が、黒い異形を食らっていた。

いや、あれは捕食ではなく、吸収。

より禍々しく、もはや蛇ですらない化け物へと変貌していく。

何より絶句したのは、その圧倒的な魔力。

「そ、そんな 暴走体がここまで強くなるなんて!？」

ユーノの言葉も、どこか遠く聞こえる。

2つのジュエルシードからなる化け物から目が離せない。

あまりにも異常、ランクでいうのならばSランクを超える魔力を
発している。

たかだか2つのジュエルシードで、ここまで強力な暴走体が生ま
れるのか!？

確かにジュエルシードは1つでも次元震を起こすほどの力を秘め
ている。

だが原作では、そんな事はありません。

「ネームレス、魔力チャージ」

『いえす、魔力チャージ』

一撃で切り伏せるしかない。

レリックから開放された魔力を剣に充填していく。

「無限書庫の引き籠もり直伝!」

『ばにしんぐえっじ』

魔力を付加した、僕の持つ必殺技。

斬撃そのものが魔力を纏った衝撃波となって相手に襲い掛かる。

が、直撃する寸前に世界が爆ぜた。

化け物の立っていた場所から、光の柱が天に向かって昇る。

そして刹那の内に生じる、圧倒的な衝撃。

空間そのものが揺れ、振動してこちらに襲い掛かる。

「まさか、次元震!？」

「ッ!？」

咄嗟にデバイスを盾にして、衝撃を緩和する。

だがその程度では効果は薄く、ガラスが割れるような音と共に剣が砕けた。

「しま……ッ!」

周囲の壁が砕け、街頭は割れる。

まるで大地震が来たかのように、震源地は目の前だが。

「このままじゃ被害が、くっ　封時結界!」

ユーノが機転を働かせ、結界魔法を使用する。
空の色が変わり、本来の場所からこの空間を引き離す。

『ま、ますたー』

柄だけになったデバイスがノイズ混じりながらも音声を発した。
ほぼ大破とあっていい状況、これでは目の前の化け物相手に勝ち目は無い。

「……これはヤバい、かな」

次元震を単独で起こせる暴走体。
想定外の範囲外の敵だ、勝つ方法が見つけれない。

「フェレット、何か策はある？」

「……」

無言、必死に打つ手を考えているのだろう。
だがそんなものがあるはずが無い、王将だけで将棋に勝てと言っているようなものだ。

しかし、まさかこんな初っ端から死ぬことになるとは予想外だった。

『ます、たー……諦めちゃ、駄目です』

「いや無理だよ、こんな化け物にかなうはずが無い」

嘘だけ。

この化け物を倒す手段なら1つだけある。

そう、簡単なこと、レリックを爆発させれば良い。

レリックは暴走すれば一都市を焼き尽くす程の火力を持っている。さすがにその火力ならば、目の前の化け物を倒すことは可能だろう。

だが普通ならば、近距離にいる僕どころか、この街の人間すべてが犠牲になる。

しかし今回は違う。

今、僕たちの立っている地面は、次元震のせいで軒並み傷つき罅割れている。

だが、化け物の立っている場所だけは無傷……次元震の影響を受けていない。

おそらく、あの化け物はジュエルシールド2つを使い分けている。

1つを攻撃用、次元震を起こしたり、自身の肉体を強化することに。

もう1つを防御用、あの化け物の周囲のみを、外部の空間とずらし隔離することに。

隔離するということは、外部からの影響を受けないということだ。逆に言えば、内部で何が起ころうと、外部には影響しないということでもある。

そして碎けたはずの僕の剣の一部が化け物の足元に転がっている。おそらく、完全な固体はその隔離された空間の影響を受けないという点だ。

つまり 僕があのかげ物に近づく障害は存在せず、
あのかげ物の近距離でレリックを暴走させれば、化け物だけを消滅させることができる。

いや、化け物だけではなく 隔離された空間内にいる僕も消滅するだろう。

僕が命を捨てれば何事も無く、ジュエルシードは封印される。

最小限の犠牲で最大限の人間を救えるよう、舞台は綺麗に整っている。

つまりはそういう事か。

世界は僕を排除しようとしている。

僕が高町なのはを、いやこの街を見捨てられないことをわかってこの街を守りたいなら大人しく死ぬ、そうすればこの街は救われると世界は語っている。

物語に影響を殆ど与えず、イレギュラーだけを排除する、僕のためだけに用意された処刑場。

そういう風に世界は舞台を整えたということか。

そこまでして僕を排除したいか、『魔法少女リリカルなのは』

切り札は僕の手の中に。

次元震の直撃を受けてなお、誘爆しないレリック。

ドクターちゃんがどれほど、安全に処理を施したかが良くわかる。けど、これしか手は無い。

どの道逃げる手段は無い、なら少しでも犠牲を抑えるべき。

(ネームレス、ドクターちゃんに伝言を)

『ま、すたー?』

(『ジュエルシード集めは、他の人に任せる』と)

『……』

化け物は不動。

待っているのか、僕が自爆するのを。

よほど世界は僕が疎ましいと見える。

そこまで露骨に干渉して、僕を殺そうというのか。

屈辱だった、結局はいい様に世界に踊らされていただけというのが。

何よりも、この街に愛着を抱くように誘導されたことが。

アリサと友達になったのも、なのはが僕にしつこく付きまとったことも。

全部彼女たちの意思ではなく、僕に愛着を抱かせるために世界が操っただけ。

「なんて 最悪」

右足を踏み出す。

レリックのコントロールは僕にある。

ドクターちゃんはきっと意図していなかっただろう。

彼女の自慢の作品が、暴走すら容易いほどにコントロールできることを。

化け物は相変わらずの不動。

世界の思惑通りというのは癪だが、この勝負は僕の負けだ。

あと3歩で、辿り着く。

レリックの中枢に意識を飛ばす。

あと2歩、レリック内の魔力を掌握。

あと1歩、掌握した魔力を全て、外部に向け

あと

「おいおい！ 日本はいつから魑魅魍魎が跋扈する時代になったん

「だあ？」

「黒衣に身を包んだ少年が、化け物の後ろにいた。

よく見知った顔、この世界で最初に見た顔がそこにある。」

「な」

「ロリコン、『一梨』がそこにいた。」

「あまりの展開に踏み出しかけていた最後の1歩を止める。」

「すでにセットアップしているのか、彼は黒1色のバリアジャケットに身を包んでいる。」

「しかしセンスのねえ姿だな、おい！」

「何だそのヤラレ役の怪人みたいな姿はよお！！」

「今時の特撮だってそんなデザインを採用したりしねえぜ、くははははは」

「化け物が吼える。」

「ぎいぎいぎいと、黒板を引っかいたような高い音が辺りに響く。」

「僕もユ一ノも、あまりの音に両手で耳を塞いでしまう。」

「化け物の狙いはソレだろう、両手を封じ、その隙に食い殺すつもりなのだろう。」

だが　　ロリコンは平然としていた。

「ああん？　なんだその音？

その程度で俺が怯むとでも思ったのか、三流雑魚妖怪。

こっちはこの世界に来たときからスタングレネードを山のように食らってたんだ。

音と光には慣れてんだよ、狙いは悪くなかったが　　相手が悪かったなヤラレ役！！」

過剰強化した右足で、ロリコンは化け物の頭部を蹴り飛ばした。見ただけではわかり辛いほどの圧倒的な破壊力が、化け物を側面の壁にたたきつける。

「くははははは、それともう一つの誤算を教えてやんよ。

俺の目の届く範囲で好きにできると思ってたんじゃないぞ、世界！！」

体勢を整えた化け物が天に向かって鳴き声を上げる。

その咆哮は、体内のジュエルシードから光の柱を上げ

「遅えよ」

ロリコンの右手で鈍く光る、鋼の刃によって一刀両断されていた。体内から転がり落ちる2つの青い宝石は宿主を失ったためか輝き

「それでは、縁が合ったら待った会おう、ってか。
ぶっちゃけ今はフェレットの姿なんて、悪夢が蘇るから見たくな
いんでな、くはははは！」

彼はそのまま、何事も無かったかのように。
背を向けたまま、次元転移魔法を発動させた。

（次、勝手に死のうとしたら、死にたくなるほどぶん殴ってやるか
ら覚悟しとけ）

そんな捨て台詞とも思える、念話を僕に残して。

Ep・11：次元震（後書き）

主人公、初黒星。

ロリコン、原作キャラ2人目に喧嘩を売る回でした。

前話であんなに綺麗だった高町さんは出番なし、すまない。

次回、主人公グレる。

それでは感想待ってます。

EP・12：茶番と奇襲（前書き）

主人公のグレっぷりは想定外。

もうなのはさんが主人公でいいと思います。

タカセ様、ゾハル様、感想ありがとうございました。

EP・12：茶番と奇襲

それはありえるはずの無い光景だった。

常識の範疇に収まりきらない程巨大な大蛇。

どの生態系にも属さない、黒い異形の怪物。

別の世界から来たという、フェレットの姿をした少年。

地面に転がっている少女、高町なのはの瞳には、正気を疑うほどの現実が映っていた。

強い衝撃を受け、意識が朦朧とする彼女は、それでもクラスメイトの心配をしていた。

（クエス君　　）

このままじゃいけない。

ここで自分が死んでしまえば、家族が友達が泣いてしまう。

自分が原因で誰かを泣かせたくない　　高町なのはは、ただそれだけを思っていた。

少しでも気を緩めれば喪失してしまいそうな、朦朧とする意識の中。

高町なのはは無心で、クラスメイトである少年クエスへと手を伸ばした。

そして何かの言葉を伝えようとした。

それは助けを呼ぶ言葉だったのか、それとも逃げる事を促す言葉

だったのか。

それは誰にもわからない。

なぜなら、その言葉が声になる前に霧散してしまったからだ。

え？

彼女の視界を七色の光が覆う。

光はクラスメイトの少年を中心に渦のように回転しており、刹那の瞬間、少年の衣装が虹色の光と共に変化していった。

白いマントに軽装の青い鎧。

右手には白銀の輝きを持つ剣。

金髪をたなびかせ、左右の色が違う瞳を持つ騎士の姿がそこにはあった。

その姿は意識せずとも鮮明に、彼女の脳裏に焼きついていく。

まるで 『どこかの物語に出て来る主人公』 のようだ。

景色が歪む、音が耳に入らない。

ああ、意識を失うのかと、高町なのはは悟った。

何が起こっているのかは、まるでわからない。

あの化け物のこと、自分呼んだ声の主のこと、そしてクラスメイトの正体。

薄れ行く意識の中、最後に彼女が見たのは、剣をかざして大蛇に

突っ込む少年の姿だった。

私も、あんな風に誰かを守れる人になりたい。

そこで高町なのは意識は、プツンと途切れた。

一戦終わり、現在僕らは近くの公園に来ていた。
なのは相変わらず意識を失っており、ベンチでごろんと横にさせている。

軽く一息を付いた後、フェレットの姿をした少年、ユーノ・スクライアが口を開いた。

「僕の名前はユーノといいます。」

今回は僕らのせいではら撒かれたジュエルシードの件に巻き込んでしまつてすいません！」

申し訳なさそうに頭を下げるフェレットはシユールだ。
いや、申し訳ないつて気持ちは伝わってくるんだけどね。

「いやそこは別に気にしなくてもいいよ。
それに敬語もいらない、早く本題に入ろつか」

「……わかつた、それじゃ敬語は止めるよ。
それで、質問んだけど……どうして君は管理外世界に住んで
いるの？」

ここは下手に嘘をつけない。
本来なら魔導師つてことすら知られない予定だったため、言い訳
すら用意していない。

下手な嘘は逆効果、ジュエルシードの落下先である管理外世界に
偶然魔導師がいた。
普通の人間なら何らかの関与を疑うはずだ。 最悪、ロリコンと
グルつて事まで読まれかねない。

「話せば長くなるんだけどね。
とはいってもそう複雑な話でもないか 人造魔導師つて言葉を
知っているかな。

言葉からわかると思うけど人工的に作られた魔導師のことで……
僕はソレなんだ」

だから、嘘はつかない。
幸い、ユーノはそれなりに善良な少年だ。

こちらがどれだけ不幸な境遇なのかをアピールして同情を買おう。

「そんな　じゃあ、あの魔力光は……」

「予想は付くと思う、僕は『オリジナル』の遺伝子情報から複製されたクローンだ」

さすがに考古学者だけはあるか。
少なくとも虹色の魔力光の特異性は知っていたようだ。

「じゃあ君は、君のオリジナルは……『聖王』ってこと!？」

「うん、まあそうなるかな。」

王様扱いなんて御免だし、管理世界だと大騒ぎになるからね」

「そうか、だから管理外世界に。」

……気になることがいくつかあるけど、聞いてもいい?」

僕は黙って首肯する。

「1つはどうやってここで住んでいるかって事。」

君が誰に造られたかは知らないけど、その人からは自由になっ
ているんだよね?」

「そうなるかな、僕を造り出した研究者たちはもういないよ」

「この世」。

「君のデバイス、インテリジェントデバイスだけど、どうして君が
持っているの?」

身寄りの無い人間が誰の援助も無く、高性能のデバイスを手に入れるなんて不自然すぎる。

おまけに管理外世界で普通に暮らすなんて、とても1人じゃ無理だと思っただけだ」

そう、インテリジェントデバイスなんてそう簡単には手に入らない。

そこら辺に落ちているものでもないし、買うとしても膨大な金が掛かる代物だ。

そして身寄りの無い子供が1人で生きることの難しさは良く知っているだろう。

スクライアー族はどうやら、そういった孤児を保護しているようだし。

きっと彼も、1人で生きていた孤児を見たことがあるのだろう。

「正解、ある人に助けられてね。

このデバイスと住むところ、金銭の援助とかをしてくれたんだ。いつとくけれど、その人の名前は言えない。立場とかの問題もあるしね」

「確かに、保護した魔法の使える孤児を管理外世界に送るなんて許されることじゃない。

君の場合は境遇が特別だからわかるけど、うん。下手したら犯罪者だもんね」

もうすでに犯罪者である。

しかし、これで9歳児なのかと疑いたくなるほど飲み込みが早い。伊達や酔狂で、発掘現場の指揮をしていたわけじゃないってことか。

「もう一つだけど、管理外世界にいるのは間違っていると思う。昔とは違って今なら、さすがに王様扱いはされないと思うよ。管理局か聖王教会なら安全に保護してくれるはずだし、そっちの方がいいと思うけど」

「それは」

言ってること自体は正しい。

管理外世界に魔導師はいてはならないものだ。

その世界でなら魔導師は完全犯罪でもなんでも楽にできるのだから。

倫理的に考えても、今の時代なら王様扱いはそこまでされないだろう。

「ユーノ、聖王の遺伝子って誰でも手に入れられるモノなのかな？」

「そんなわけないよ、君の場合、多分聖遺物から………そうか」

この時、聖遺物はまだ盗まれていない。

当たり前だ、盗む必要が無かったんだから。

僕は、『管理局』と『聖王教会』の上層部の一部が結託して造られた。

予言を成就させないための手駒として。

「でも、それならなおさら管理世界に行くべきだよっ！

そんな非人道的な行いをしている連中がいるなら捕まえないと」

「それは他の人間がすればいい、僕は絶対に御免だね」

納得いかないと無言で語るユーノ。

この世界のことを別に、どうでもいいというわけではない。

平和であつてほしいし、大量虐殺なんてもつてのほかだ。

だからといって僕が動く気は無い、下手に動けばまた世界が排除しようとしてくるだろう。

「君の事情は良くわかった。

わかった上でお願いしたいんだけど……」

ジュエルシードを回収するのに力を貸してくれませんか

「それは……」

これ以上、関わりたくない。

僕は元の世界に帰りたいたけなのに、全てが邪魔をする。

記憶を、名前を取り戻したいと思うことは、そんなに間違っているのだろうか。

この街が好きだ、住人が好きだ。

だから守りたいと思うことは当然なのだろうけど。

そう思うように、世界に誘導されているだけだ。

「私、私も手伝いたい!!」

突如言葉を発したのは、意識の無いはずなのはだった。

僕もユーノも驚きのあまり言葉が出ない、まさか起きているとは思わなかった。

「クエス君やユーノ君の言ってたこと、半分くらいしかわかんなかったけど。」

そのジュエルシードっていうのが危ないモノだっていうのはわかったから」

水を得た魚のように、高町なのはは饒舌に喋る。

「私も、この街を守るために何かしたい！」

だから私にもやらせて、ジュエルシードの回収!」

生まれた、魔法少女が。

なるべくして高町なのはは主人公になる。

なら僕は ?

「やるなら2人でやってくれ。」

僕は何もしない、もう関わりたくも無い」

え、と声を上げたのは誰だったのか。

僕は拒絶を選んだ、原作に関わらないことを選んだ。

「き、君は」

「もう限界だ、こんな茶番を続けてたまるか!!」

全部世界の思惑通りのくせに。

全部世界に操られているくせに。

僕を巻き込むな、僕を誘惑するな。

「もう2度と僕に話しかけないでくれ」

僕は高町なのはに向かって吐いた。

昨日までの、いや先程までの僕なら吐かなかった言葉を。

絶縁、君との関係を絶つ。

それが友達になりたいという彼女の言葉に対する返事だった。

「な、なんでかな……」。

私、何か悪いことしちゃったのかな？」

「……………」

「私は、クエス君と友達になりたいだけ。

それって駄目なのかな、クエス君は私が嫌いなのかな？」

その友達になりたいという願いも、世界に操られているからだ。

だからその涙も、その言葉も全部虚構に過ぎなくて、全部茶番なんだ。

アリサの言葉も、なのはの言葉も、今までの言葉も、僕が楽しいと思っていた日常も、全部ただの茶番で幻想だった。

終わらない悪夢。

逃げ道の無い迷路。

無限に広がる閉ざされた牢獄。

そんな世界から脱しよう。

高町なのはを嫌い、月村すずかを嫌い、アリサ・バニングスを嫌おう。

彼女らの吐く言葉は全て虚言に過ぎない。

だから信じるな、拒絶しろ、突き放してしまえ。

「僕は高町さんが大嫌いだ」

今にも泣きそうな表情の彼女を一瞥する。

その悲しみも幻なんだ、だから気にかける必要は無い。

胸をよぎる罪悪感も、自分自身に対する嫌悪感もある。

高町なのはを悲しませた自分が嫌いになった。

世界に踊らされて、真実に気づけなかった道化の自分が情けなかった。

何よりも、『クエス』のままでいいかな、とってしまった自分が一番憎かった。

その日から、僕は一人に戻った。

「……確かに、もしものためにスタンバイしておけと私は言いました」

2つのジュエルシードを入手してきたロリコンに向かって、
ドクターちゃんと仲間内で呼ばれている白衣の少女は吐き捨てる
ように言った。

「ですが、誰が堂々と名前を名乗って来いと言いましたか!」

おお、久々にご立腹だぜと、他人事のようにロリコンは呟いている。

それがさらにドクターちゃんの怒りに油を注ぐ。

「いや悪かったとは思ってるけどよ。」

アレはもう条件反射みたいなモンで、今思い返すとちょっと不味かったかなあなんて思ったり」

「ちよつと所ではありません!!」

いいですか、この件はいずれ管理局に知られることになるでしょう。

それに貴方の立場は『異邦人』として向こうにはつきり知られているのですよ!」

世界を滅ぼすと恐れられている『異邦人』

ソレが次元震を起こすことができるロストログアを手に入れた。常人なら絶対に繋げて考える、そしてこう考えるだろう。

異邦人たちは大規模次元震を起こすことで、この世界を滅ぼすつもりだと。

ドクターちゃんはそうなる事を恐れた。

だからこそ輸送船を襲撃して、全てのジュエルシードを奪うという手段を選ばなかったのだ。

下手に入手し、管理局が追ってきた場合、発見されてしまえば自分たちは全滅する。

理想としては聖王クローンであるクエスが独自に入手。それを送ってもらい、製法などを研究し、量産ができるようになり次第手放す予定だった。

「こうなれば、全ての罪を誰かに被せるしかありませんね」

まだ、管理局に狙われるわけにはいかない。

ならば、ロリコンは雇われただけで黒幕は別にいると管理局に思わせなければならぬ。

幸い、ロリコンはあくまで『異邦人疑惑』だ。

黒幕がこの世界の人間なら、今回の事件が『異邦人』によるものとは思われない可能性がある。

仮に思われたとしても、その黒幕が捕まってしまうえば、計画は失敗したと考えるだろう。

世界の破壊なんて、何度でも起こせるものじゃない。

防げたと相手に誤解させられれば、自分たちを追う力は弱まるはずだ。

「罪を被せるねえ……ってオイ、まさか」

「ええ、『黒幕』に相応しい人間がいるでしょう」

この世界の登場キャラで。

ジュエルシードを欲する動機がある人間で。

なにより原作を歪めずにすむ、黒幕に相応しい人物が。

「プレシア・テストロツサ、彼女に交渉してみましよう。

幸い、餌は揃ってます。必ず食いついて来るでしょう」

「なんとという外道、それでこそ俺らのドクターちゃんだぜ。

……しかしフェイトはやっぱり傷つくんだろうな、俺は少し心が痛むぜ」

「まあ私も心が痛みますが、原作からすればどの道死ぬ人間です。ならその死を私達に都合がいいように利用するまでのこと」

時の庭園の座標を調べるよう、ドクターちゃんは仲間である引き籠もりにメールを打った。

それを黙って見つめていたロリコンはふと思いついたように口を出す。

「そつえばジュエルシードで元の世界帰れるんじゃない？」

「そこまで都合がいいものではありませんでした。

構造自体は単純で、私やスカリエツィークラスの頭脳と知識があれば劣化品の量産も可能です」

ジュエルシード。

祈祷型デバイスの原型とも言われるロストロギア。

ドクターちゃんが調べたところ、このロストロギアは確かにデバイスだった。

能力は大まかに分けて3つ。

1つ目は魔力生成、いわゆる発電のように魔力を生成し溜め込む機能だ。

これ自体は次元世界で珍しい機能ではない、魔力炉など似たような機能を持つモノは多く存在する。

次元航行艦のエネルギー源や、アルカンシユルなどに用いられているのがソレだ。

ただ、さすがは遺失文明の技術というべきか、貯蔵量と生成量が比べ物にならないほど多い。

複数あれば、地球のエネルギー問題を解決できるという優れものでもある。

2つ目は魔法登録機能、魔法プログラムを保存登録できる機能。

これも珍しくない、ごく一般的なデバイスにすら搭載されている機能だ。

そして、ジュエルシールドには失われた古代魔法がいくつも保存されている。

例を挙げれば『巨大化』『肉体変化』『気象制御』そして『次元震動』

1つでも学会で発表すれば、次元世界中の学者が卒倒するクラスの理論が使われている。

そしてジュエルシールドの特徴である3つ目、祈祷機能。

これは使用者の願いを分析、それを叶えるに相応しい魔法を登録

されている中から選択し、

ジュエルシールド本体に保存されている魔力を使い、発動させるという非魔導師たちが欲しがるのであるう機能だ。

願い事を歪めて叶えるというのは、登録されている魔法から最も近いものを選択しているからだろう。

例えば『大きくなりたい』という願い事が合ったとする。

するとジュエルシールドはその願いを分析、『大きくなる』ことに最も近い効果を上げる魔法を選択し発動する。

この時、『成長する』という魔法が無かった場合、次に近い『巨大化』という魔法が選択されてしまう。

こうした使用者の願いと、登録されている魔法のズレが歪みとなって現れるのだろう。

「この機能を利用すれば、魔力を持たない人間でも魔導師になれるデバイスが作れますね」

「管理局が喉から手が出るほど欲しがるんじゃないかねえか、ソレ。

地上本部なんか何が何でもその技術を手に入れようとすんだろ」

「まあここまで解析できたのは、私のアルハザードの知識があればこそですが」

薄い胸を張って威張る白衣の少女に、ロリコンは冷たい目線を送った。

その視線に気づいたためか、コホンとわざとらしい咳払いで話を戻す。

「しかし、この登録されている中に、私たちの帰還に役立つ魔法は存在しません。」

同じく死者蘇生や時間移動なんて魔法も存在しませんので、アリシアを蘇生することは不可能です」

「なるほど、よくあるハッピーエンドは無理つつうわけか。」

生き返ったアリシアに『お兄ちゃん』って呼ばせてみたかったんだけどなあ」

「……貴方は本当に反省しているのですか？」

「だから悪かったって言ってるんだろ。」

んで今後の方針はどうするよ、俺としちゃあオリ主の様子が気になるんだが」

「では明日にでも来るように伝えておいてください。」

どうせデバイスの修理もしないといけませんし、お説教です。

私はメイドガジェットの製作、量産型ジュエルシード精製、プレシアとの交渉と忙しいので」

「あいよ、お互い苦労人だねえ」

「何を今更、手駒が少ないのが辛いですね。」

使い魔でも作りませんかロリコン、貴方の魔力なら良いのができそうです」

「いや、使い魔は主人に盲目的過ぎるんだよなあ、俺のイメージ的に。」

『主の助命のために』とか言いながら、お前らを管理局に売った

りしそうで怖いから作らねえ」

「何という暴論、しかし私たちのためとの言葉に、私の好感度が上昇しました」

「止めるよ、お前もうロリじゃないじゃん」

「前言を撤回します、貴方は……ッ!？」

天井が砕け、空から無数の光線が降り注いだ。

ロリコンと呼ばれる少年も、ドクターちゃんと呼ばれる少女も一瞬で反応する。

「ワイドエリアプロテクション!」

『Wide Area Protection』

白衣の少女は頭上に巨大な防御魔法を出現させ、砲撃ともいえる光線を防ぐ。

だが戦闘要員ではない彼女は、防御魔法を抜けてきた誘導弾を迎撃できず

「はあッ!」

アームドデバイス『クレセント』をセットアップした少年が誘導弾を斬り伏せた。

だが天から迫る攻撃魔法の群れに、2人は防御に手一杯で離脱する事もできない。

「なんだよ、どこからの攻撃だ!？」

「私たちに攻撃を仕掛ける連中なんて……心当りが多すぎますね」

「どんだけ敵作ってんだよ、もう少し慎ましく暗躍しろよ！」

「そういう指揮はお前の役目だろ、責任とって何とかしやがれ」

「貴方がそこら中に敵を作っている原因でしょう!？」

いつもの如く、互いを罵り合う2人。

余裕に見えなくも無いが、2人とも焦っている。

今いるこの場所は管理外世界にあるため、敵襲を想定していないのだ。

ある程度の警備システムは用意してあったが、遙か上空からの飽和射撃は想定外だった。

攻撃開始から数分足らずで侵入者を知らせるアラートになる。

だが2人は攻撃に気をとられ、正面の扉を打ち破り侵入してくる人間たちに反応できない。

『Chain Bind』

『Ring Bind』

『Struggle Bind』

空からの攻撃の対処に手が空いていない彼らを、各種のバインド

が縛り上げた。

身動きの取れない彼らに、天から裁きの如く砲撃魔法が降り注ぐ。

砲撃は、証拠になりえる可能性のある周囲のコンピューターなども壊していく。

普通に考えて捕らえてしまえば、勧告なり何なりがあるはずなのだが欠片も無い。

身動きの取れない彼らに追い討ちのように攻撃は続く。

1分ほどの後、攻撃が止んだ理由は魔力切れだろうか。

地面に横たわる2人のバリアジャケットは破れ、血は止まる事を知らず流れている。

一応非殺傷設定だったようだが、もう2人に戦う余力は残っていない。

幸いというか、さすがというか、それでも彼らは意識を留めていた。

「人生オワタ」

「何を、ほざいて……」

「ああ、さすがにあそこまで露骨にやられちゃ対応できねえよな。

もし次があるならもっと地下に作るうぜ……まあ次なんて無いだろうけどよ」

まだ悪態を付く力はあるようだが、少年にしては珍しい悲壮感あふれる台詞だった。

もっともそれは少女のほうも同じ、ここから逆転する術は思いつかなかった。

「つうか最期の瞬間を共にする相手がドクターちゃんとはな。死ぬときは、泣する幼女の胸の中でつてのが理想だったんだがなあ」

「何か文句でも」

「いや別に、それにまだ死ぬと決まったわけじゃねえしな、足掻けるだけ足掻くぜ」

ロリコンである少年は強かった。

少女もそれが強がりだと理解していた。

少女のほうはともかく、少年の魔力は尽きていない。

しかしバインドで強化魔法を封じられているため、抜け出すことは難しかった。

「良い様だな、『異邦人』」

そんな2人の前に、攻撃してきたこの連中の責任者らしき人物が姿を現す。

歳の頃は40ほどだろうか、鍛え抜かれ、引き締まった肉体持つ男だった。

「時空管理局特殊部隊『トライデント』所属、『ミラ・ケーニツヒ』だ。

大規模次元犯罪容疑で貴様らを拘束する、抵抗すれば容赦なく射殺する」

打つ手を見つけられず2人は諦めて空を見上げる。
空のどこかで、金色に光る何かが見えた気がした。

EP・12：茶番と奇襲（後書き）

ロリコンとドクターちゃん捕縛。

今回は管理局TUEEEEEEEの回でした。

次回は歌って踊って雷放つ魔法少女のターン。

EP・13：金色（前書き）

まさかここまで長くなるとは予想外。

絶対彼女が主人公になっても違和感が無いと思う。

ソラト様、くおんたむ・くおーたー様、感想ありがとうございました。

澄んだ青空が美しく感じられる昼下がりに、
ある管理外世界に、もはや廃墟と化した建物があった。

天井は崩れ、貴重な研究データが入っていたコンピューターなどはガラクタとなり。

その建物の持ち主であった、黒髪の少年と紫髪の少女は魔法により拘束されている。

とくに少女の方は血を滲ませ、所々が破けた白衣という、背徳感を醸し出す格好であった。

補足するならば、断じてR指定が入るような部分は破けていない。

そして少年のほうは、血を流してはいるものの魔力は依然尽きてはいない。

ダメージも大きいため呼吸は荒いが、拘束が解けさえすれば戦える程度の体力はあった。

しかし、現在の少年は、彼の戦闘の要とも言える強化魔法を封じてられている。

ミッドチルダ式魔法『ストラグルバインド』

強化魔法を封じるこの捕縛魔法は、彼にとっての天敵とも言える魔法だった。

そんなボロボロの2人の前に佇む中年の男。

鍛え抜けた筋肉は、ただ多いだけではなく引き締まっており、

歴戦の強者という風貌をしていた、そして実際にその戦闘力は管理局でも上位に入るだろう。

「良い様だな、『魔法喰い』」

これまで散々手間を掛けさせてもらったが……それも今日までだ」

「おいおい、この程度で俺を捕らえた気になってんのかよ。

それは気が早いんじゃないかねえの。俺はどんな逆境でも跳ね除ける男だぜ」

「ふむ、その可能性はあるな。

魔法も満足に扱えない欠陥魔導師の分際でここまで手間を掛けるような奴だからな」

その男、ミラは右手にデバイスを出現させる。

形状は無骨な大槍、おそらくはアームデバイスだろうと少年は思った。

（強化魔法を封じられちゃあ、両手をもがれたに等しいな。

魔力残量は良いとこ4割、力技で魔力を放出してバインドを破壊するのに大体1割）

「それにしても何で俺の場所がわかったんだ？

俺の転移魔法は高性能のジャミング付きで索敵不可能のはずなんだけどな」

マルチタスク
分割思考を利用しながら少年は反撃の手段を練る。

それを悟られないために、目の前の男に話を持ちかけた。

「ふん、こちらにも色々ツテがある。

世界を滅ぼす『異邦人』が狙いそうなモノは粗方マークしている」

「……つうことは何だ、ジュエルシード輸送船の撃墜を見ていたって事か？」

「然り、逆探知に時間が掛かったが、それで場所は特定した。

そこに貴様がいた以上、どうやらオルタ・スカリエッティも共犯のようだな」

共犯つうか同胞なんだけど、と少年は口に出そうとしてやめた。その勘違いはこちらにとってかなりのメリットになっているからだ。

「しかし見た目的には人間と変わらんな。

まあ、どんな体の仕組みをしているかは研究所の連中に任せるか」

「おいコラ、俺は一応人間だつっの。

それとも殺人鬼は人間じゃねえってか、勝手に解剖計画とか立ててんじゃねえ」

「生憎だが『異邦人』に人権は無い。

世界を破壊しようとしたのだ、むしろ当然の処置といえよう」

(バインドを解くのにかかる時間は1秒未満。

そこからデバイスを取って目の前の連中を退けるのは難しい。戦闘要員が俺1人つてのが一番厳しいな、なんつう無理ゲー)

考え込む少年を一瞥し、男は隣の少女に目を向けた。

「それにしてもまさか貴様が『異邦人』に力を貸しているとはな。兄の方と同様、まったく理解できない思考回路の持ち主だよ」

「勝手にあのマッドと私を兄弟扱いしないでもらえますか、心底不愉快です。」

確かに貴方のような脳筋では私の思考は理解できないでしょう、そこは同意します」

「ふん、評議会に作られたアルハザードの人形風情が良く吼える。貴様のほうはそうだな。この場で始末しておくべきか、不良品には処分がお似合いだろう」

「……」

白衣の少女は黙りこんだ。

処分される光景を想像したのだろうか、表情は青ざめているように見える。

それを見た隣の少年が、目の前の男に口を挟んだ。

「おいテメエ、少しでもコイツに触れて見やがれ。」

少しでも触れたのなら、俺がテメエを」

殺意、歴戦の戦士ですら出せないような禍々しい殺意が辺りを支配する。

「容赦無く躊躇無く手加減無く思いやり無く遠慮無く例外無く差別無く」

善意も悪意も常識も非常識も秩序も無秩序も全部飲み干した上で、
断罪してやんよ」
アンチ

並みの人間なら意識を失うほどの張り詰めた空気が漂う。だがしかし、それは表の人間であった場合の話だ。

目の前の男を含め、周囲の彼らは怯まない。

ただ平然と、2人の様子を油断無く観察している。

「ではまず、その右手を封じておこう」

一閃、男は右手に持った大槍を軽々と振るい

「がっ……！？」

バインドで縛られながらも、デバイスを手放していない少年の右手に直撃した。

遠心力で威力を増した一撃によって、鉄球の如き衝撃が右手を襲う。

ポキリと骨が折れる音がした。

あらゆる方向に曲がってしまったっている腕を少年は一瞥する。

この腕では　ドクターちゃんを抱えて逃げることはできない。

その致命的な問題に、少年は舌打ちをした。

（周囲の管理局員の人数は目の前の男を含めて20人。

上にいる管理局員は……いないな、魔力切れで艦に帰還したか？）

現状では打倒不可能。

その事実を、この時ようやく少年は受け入れた。

せめて戦える奴が2人、いや1人でもいれば

「それでは、貴様らを本局に」

男の言葉を遮るように雷鳴がした。

いったいこの場の誰が知るだろう。

雷雲ひとつ存在しない澄んだ青空の遙か上空で、巨大な雷が艦に落ちたことを。

「何だ、何があつた!？」

周囲の局員が戸惑う中、男の怒声が響き渡った。

それに応えるように、空中に巨大なディスプレイが表示される。

「しゅ、襲撃です！」

何者かによる次元跳躍攻撃が艦に直撃しました!!」

ディスプレイに表示された局員の悲鳴のような声に周囲の局員も戸惑いだす。

目の前の男、ミラはうるたえるなど一喝し、詳しい報告を聞こうと耳を傾け

金色の雷弾が”管理局員たち”に降り注いだ。

皮肉にも、先程少年たちが味わった攻撃を、今度は管理局員たちが味わうことになる。

金色の雷弾 フォトンランサー は一発一発の威力は高くない。だがソレは突然の奇襲、そして1024発というあまりにも馬鹿げた数だった。

それでも彼らは上手く対処した方だろう。

動揺する心を抑え、それぞれが防御魔法を形成し防ぐことに集中した。

拘束されている彼らは半ば呆然とその光景を見詰める。

2人の胸中に抱いている思いは共通していた。

『フォトンランサー・ファランクスシフト』

それはこの時点での『彼女』の最大攻撃魔法ではなかったか。

魔法が終了し、辺りの煙幕が晴れる。

管理局員たちは大なり小なりダメージを追っていた。

だが、誰1人として脱落していなかったのは、彼らの実力のためだろう。

実力でいえばAランク相当。

だが、咄嗟の対応力と精神の強靭さはそこらのエリートを凌駕する。

彼らは、あのかませ犬のような執務官とは違う、立派な戦士たちだった。

「何者だ」

その戦士たちを率いるミラに傷はない。

歴戦の武人の面目躍如か、自分に襲い来る雷弾を全て捌いていた。

そして彼女が姿を現す。

赤い狼を従え、戦斧のデバイスを持つ金髪の少女。

凛々しくも美しい西洋人形のような姿をした魔法少女^{ヒロイン}。

フェイト・テストロッサがそこにいた。

「その人達を、助けさせてもらいます」

歌うように、フェイトは宣言する。

それは絵画のような、あまりにも神秘的な光景。

「貴様も、『異邦人』か！」

狼の使い魔、アルフに管理局員10名が。

そしてフェイトに、大槍を携えたミラが突撃していく。

「バルディッシュ」

『Scythe form Setup』

フェイトのデバイス『バルディッシュ』が処刑鎌のように変形する。

金色の刃が空気を唸らせながら、ミラの大槍とぶつかった。

火花を放ちながら、拮抗する2つの武器。

お互いは後方へ弾き飛ばされるも、2人は武器を構えなおし、再度ぶつかり合う。

1合、2合、3合と斬り結びながらもフェイトは常に相手の後ろを取ろうとする。

速度では自分が勝ることを理解している彼女は、速さを生かせる接近戦に持ち込んだ。

時に斬りかかり、時にフォトンランサーで牽制、背後を狙いながらも彼女は焦る。

(私が押ししてるはずなのに、手ごたえが感じられない?)

一見するとフェイトが優勢に見える。

速度で劣るミラを、翻弄しながら彼女が押しているように。

だがどこから斬りかかろうと、どれだけ隙を作ろうと防がれる。

ミラのどこか余裕そうな表情に、フェイトは焦りを感じずに入らなかつた。

(あの大槍の突きは威力や貫通力が高い。

私の防御魔法じゃ簡単に貫かれる、なら)

実際敵は、ミラの突きを受け流しているバルディッシュにダメージを与えていた。

バルディッシュは確かに高性能のインテリジェントデバイスで、

フェイトも信頼している。

だが、頑丈さが売りのアームドデバイスと斬り結ぶのには向いていないのは明白だった。

「はあっ!」

「ふんっ!」

フォトンランサーを2発放つも、振り回される大槍が容易くかき消す。

その僅かな隙にフェイトはいったん下がりがり距離をとった。

(向こうの近接スキルは私より多分上。)

なら速度を利用したヒットアンドウェイの中距離戦闘で)

『Blitz Action』

相手が一瞬見失うほどの高速移動で、フェイトはミラの懐に飛び込んだ。

ミラの大槍は懐では役立たずになると彼女は考えたのだ。

「無駄だッ!」

だが懐に入る寸前に蹴り上げる右足がフェイトの腹にめり込んだ。バリアジャケットで覆われているとはいえ、衝撃は完全に殺せず思わず怯む。

「っ!」

その怯んだ隙を、目の前の強敵は逃すはずも無く。

遠心力で加速した大槍の柄がフェイトの頭部に迫る。

『Defensor!』

バルディッシュが咄嗟に発動した自動防御魔法。

だが一瞬拮抗したものの容易く碎け、フェイトを地面に叩き落した。

受けたのは一撃、しかしその威力は大抵の魔導師を沈めるほどの威力を秘めている。

ましてや防御の薄いフェイトの場合、戦闘不能になってもおかしくないほどであった。

「ぐ……あ……」

額から血を流しながら、それでも痛みを堪えフェイトは立ち上がる。

バリアジャケットの薄い彼女では、目の前の敵はあまりにも相性が悪すぎた。

この戦闘はフェイトにとって初めての实战。

彼女は愛する母親のために、何年も腕を磨き続けてきたのだ。

だから簡単には諦めきれない。

ここは敗北してでも退くべき場面だと、普通ならわかるはずなのにだ。

何のために魔法を練習してきたのか。

知れたこと、全てこの日のため　ならばかならず勝利しよう。

「バルディツシュ……いけるよね」

『Yes, Sir!』

柄に輝が入った彼女の相棒は、肯定した。

主のために、何よりも自分を作り出した山猫の使い魔の願いのために。

「ほう、未だ膝を折らないその闘志。

無謀や蛮勇と貶すのは些か躊躇しかねんな」

管理局でも数少ないベルカ式の使い手、ミラは苦笑いを浮かべる。目の前の少女は彼から見れば未熟なれど、かなりの才能の持ち主だ。

その得がたい才能の芽を摘もうとしている。

それでも彼は戦うことを、その芽を摘むことを躊躇わない。

「世界を守る礎となって、ここで死ぬがいい」

満身創痍の少女と、無傷の武人がぶつかり合う。

2人のデバイスは衝突しあい、火花を撒き散らし金属音を辺りに響かせた。

一方フェイトの使い魔、アルフも焦っていた。

自分の主は手練の管理局員に押され、満身創痍なのだ。
本来なら援護に行きたいところだが、周囲の管理局員の相手に手
一杯で抜け出せない。

管理局員1人1人の実力は、アフルより下だろう。

しかし巧みに連携することによって、アフルが苦戦するほどの状
況だった。

「くっ、フェイトの邪魔はさせないよ!!」

人型へと変身したアフルは目の前の管理局員に殴りかからんと迫
る。

だが周囲からの魔力弾によって、近づくことができず後退した。

「クソ、何であの鬼婆！ こんな所にフェイトをやったんだ！

管理局に正面から喧嘩を売るようなモンじゃないか、こんなの…

…」

フェイトを苛める、アフルが鬼婆と呼ぶ彼女。

プレシア・テストロッサは初めてフェイトに命じたのだ。

『この2人を、母さんの所に連れて来なさい』

初めて母親から頼られたとフェイトは喜んでいた、笑っていた。

だがアフルは笑えなかった、管理局に喧嘩を売れとプレシアは言
ったのだ。

それにアフルは知らないが、ここにいる管理局員は普通ではない。
人殺しすら躊躇わない、悪を持って善を為す暗部である。

「何で、何でフェイトがこんな酷い目にあわなくちゃいけないんだよー!!」

力任せに、激情のままに振るう拳が当たるはずも無い。やがて一瞬の隙を付かれ、誘導魔力弾が背中に直撃した。

「くっ……」

攻撃を受けたことによる一瞬の硬直を、彼らは見逃さなかった。発動したバインドが彼女に巻きついていく、アルフは必死にもがくが拘束は解けない。

そんな彼女、アルフの前で、フェイトが吹き飛ばされた。

大槍がバルディッシュを弾き、フェイトの腹部に迫る光景が彼女の視界に入った。

「フェイト!!」

幸い、弾かれながらもバルディッシュは自動防御を発動しており、まだ咄嗟に放ったフォトンランサーが、ミラの腕に直撃し麻痺させたこともあり、

大槍はフェイトを貫くことなく、衝撃で吹き飛ばすだけに終わった。

だが、それは命が助かっただけであり。

すでにフェイト・テストロッサに余力は残っていなかった。

「はあ、はあ、い……づう」

それでも立ち上がるのは、きつと母親のため。

無事なところが見当たらない怪我、それでも彼女は輝だらけのバルディッシュは手放していない。

つまり この馬鹿なご主人様はまだ戦う気だ。

「もう止めてくれよお、フェイト……」

アルフの咳きが聞こえたのか。

フェイトは明らかな作り笑いを浮かべた。

「大、丈夫だよ……私、強いから」

それを聞いてアルフは叫ぼうとした。

フェイトを苛める男を、そこにいくことを封じる周囲の管理局員に対する怒りを。

空も飛べないほどの痛めつけられた金髪の少女。

そして無駄な足掻きを続けながらも、その少女のもとへ馳せ様とする使い魔。

そして止めを刺そうと、地面に降りてきたミラの耳に

「ここまでされて、黙ってるつうのは……俺らしくねえよなあ!!」

出鱈目な魔力を全身から発することでバインドを引きちぎった、少年が叫んだ。

一瞬の、余りにも致命的な隙を見逃さず自由の身となった彼はそ

の場でナイフを振るう。

そして、隣の白衣の少女を縛っていたバインドは消滅した。

「そうですね、さすがの私もトサカにきました」

「とはいえドクターちゃん魔力切れだろ。」

「ここは俺に任せて安全な場所に避難しといたほうがよくな？」

「聞き逃せませんね、ロリコン。」

確かに私も魔力が残ってない上、余力も少ないですが。

「ここまで恩を売られて逃げるなんて、私のプライドに反します」

ちきりと少年はナイフを構え、

少女は懐から青い宝石を取り出した。

「これは『魔力の無い人間でも魔法が使える祈祷型デバイス』」

登録されている魔法を知ってさえいれば、願いは歪むことなく実現します」

「なるほどねえ、それでさっきの奇襲よりはかなりマシな戦場だが。」

それでも多少苦戦はすると思うんだが、覚悟はいいのかドクター

ちゃん？」

「決まっているでしょう」

見捨てる気は起きなかった。

「いずれ敵になるからといって、見殺しにできるほど彼らは冷たくなれなかった。」

冷たくなれなかったからこそ、こんな無様をさらした。

けれど2人に後悔はない。

できるだけ殺さず、原作キャラも傷つけず。

この世界を必要以上に乱さず、暗躍すると決めたのだから。

「「全員纏めて、断罪^{アムチ}」」

そして、三度目の舞台が開幕した。

「ジュエルシードの真骨頂、『氣象制御魔法』！」

少女が魔法を発動させた。

強風が吹き、あたりに竜巻が出現する。

空中にいた局員たちは慌てて竜巻に巻き込まれないように空を飛ぶ。

だが強風が邪魔をし、思うように移動できない。

「平行操作、来たれ雨雲！」

青空に黒雲が出現したかと思うと、激しい雨が降り注いだ。雨自体に攻撃性能は無い、ただ視界が悪くなるため彼らは思うように誘導弾を操れない。

「今のうちに脱出しなさい、狼！」

「うるさい、アタシを狼って呼ぶな！」

悪態を付きながらも緩んだバインドを引きちぎりアルフは脱出する。

そしてフェイトのもとへダッシュで駆け寄るが……

「させるかっ！！」

ミラの振るう大槍がアルフに襲い掛かる。

この悪天候での空中戦は不利と判断したのか、地に足を付けている。

それこそが畏 地上最強を自称する彼の独壇場のための。

「そつちがなっ！！」

振るわれた大槍は、強化された腕力から繰り出されるナイフの一撃で防がれた。

右腕は折れているため、左腕に構えた逆手持ちのナイフが鈍く光る。

「貴様」

「さあて、ロリコンである俺の前で幼女を黽つたんだ。死んでもいいってことだよなあ、そっだよなあああー！」

大槍が空を斬り、ナイフが空を斬る。

激しい雨の中、彼らは視界の悪さゆえに接近戦を強いられる。

しかしお互いに接近は望むところ。

懐に飛び込もうとする少年と、間合いを維持しようと大槍を振るうミレ。

金属音は苛烈さをまして響いていった。

「ぐっ、利き腕でもないのにその力 さすがは『魔法喰い』といつたところか！」

「ああん？」

激しい衝撃音と共に、2人は距離をとった。

「……実は俺、昔はピアニストになりたかったんだよな」

「何？」

「いや、幼少期の夢って奴さ。

んでピアノの練習をしていた時期があるんだが……あれって意外と難しいのな」

無論、前世の話だと少年は内心で付け加えた。

この世界で幼少期に練習したのは効率の良い人殺しの方法ぐらいだった。

「右手だけだと曲はひけねえし、左手は上手く動かねえ。
俺にしては珍しく長続きはしたんだ　結局大した成果も出な
ったがな」

「それが何だ？」

「そんな俺でも『猫踏んじやった』ぐらいはひける様になった。
つまり何が言いたいかって言うとな　俺は両利きなんだよ！
」！

『K o r p e r - V e r s t a r k u n g g』

強化された肉体から連撃を繰り出す。

無論、その程度ではミラの槍捌きを突破できない。

『B e i n m a c h t - V e r s t a r k u n g g』

脚力強化により、一瞬で後退する。

そのままの勢いを保ったまま横に飛びのき、斬りかかる。

『W a f f e n - V e r s t a r k u n g g』

強化されたナイフが大槍の柄と衝突した。

先程までとは違い、ナイフの刃は大槍の柄に食い込んでいる。

確かにミラのアームドデバイスは高性能だ。

だが、ドクターちゃん謹製のアームドデバイス『クレセント』に
比べれば性能が劣る。

武器の差がここで現れていた。

「ぐっ……はぁ……！」

ミラは大槍で、迫る凶刃を防いだまま蹴りを放つ。

だが少年は蹴りを自分の蹴りで防ぐと、そのまま折れ曲がっている右手を振り上げ

「おらよっ……！」

釘撃ちの如く、ミラの顔面に叩き付けた。

怯むミラに追撃をかけるため、少年はデバイスを持つ左手に力を込める。

「くっ　舐めるな、魔力充填……！」

大槍の先端が魔力に覆われる。

鼠色に染まった大槍はそのまま魔力を爆発させながら加速、少年を貫かんと迫る。

「これで決まりだ」

『K o r p e r - V e r s t a r k u n g』

『S p u r e n S i e - V e r s t a r k u n g』

『B e i n m a c h t - V e r s t a r k u n g』

『W a f f e n - V e r s t a r k u n g』

四種の過剰強化。

少年は強化魔法の重ね掛けによる必殺の一撃で迎撃するために、ナイフを構えた。

「雷竜一閃!!」

「凶爪一閃!!」

拮抗は一瞬、ナイフは大槍の穂先を砕き
白銀に煌く凶刃はミラの右腕を寸分違わず切断した。

「……………が……………!!」

切断面から噴出す返り血が、少年の髪やバリアジャケットを染めていく。

だが、穂先を砕かれてなお、加速は止まらず大槍は少年の左肩に突き刺さっていた。

「右腕の借りは返したぜ」

右手の切断面を押さえながら気絶しているミラに、少年は勝利宣言を下した。

その後、肩に突き刺さった大槍を勢い良く抜き、地面に投げ捨てる。

「ちっ、魔力もこれで使い切ったことだし。

左手は辛うじて動くが、右手はさっきの一撃のせいで動かねえ」

ぼやきながら少年は背後でアルフに抱えられたフェイトを見た。

血だらけで気絶しているが、あとでドクターちゃんが治すだろうと視線を相棒の少女へと向ける。

局地的な猛吹雪になっていた。

こちらは大雨に周囲が竜巻、しかし背後では吹雪とブリザードという異常気象。

所々で管理局員たちが倒れており、すでに戦い自体は終わっているようだ。

「終わったようですね」

「何だよ、この光景。」

異常気象起こしすぎだろ、ジュエルシード」

「猛吹雪＋強風で相手の動きを封じてから上空から稲妻。確かに、人間が制御するところまで酷くなるんですね」

「でも1人も死んでねえぞ、わざとかアレ？」

「無論、仮にも医者が人殺しをしてはいけません。貴方だってその男を殺していないようだし、お相手です」

「俺の場合、魔力が切れただけだからな。」

それに」

視線をフェイトに向ける。

結局あの状態になっても、彼女は非殺傷設定を切らなかつた。

だから少年は、フェイトに免じて殺さず済ませた。

「さて、使い魔さん……彼女をこちらに」

「フェ、フェイトに何する気だい!？」

フェイトを庇うように立ちふさがるアルフ。

「いえ、治療をしようかと。」

そのままでは消耗が激しすぎますし、感謝の印に

アルフは少し葛藤したようだが、フェイトの怪我也酷いため承諾する。

「もし、フェイトに何かしたら……その首噛み千切るよ」

「恩を仇では返しません。」

ああロリコン、デリートコードを起動してください。

もしコンピューターの中のデータが向こうに渡ったら危険ですし

「いや、まずは俺の怪我を治せよ。」

こう見えてボロボロなんだぜ……それに援軍来る前に撤退しねえとな

「援軍はまだ無いでしょう、次元跳躍攻撃でシステムがいかれているでしょうし。」

ジュエルシードの真骨頂、『治癒魔法』!!」

ボロボロの体を引きずりながらデリートコードを起動させる少年を尻目に、

少女はジュエルシードを使ってフェイトの魔力と肉体を治していく。

「あ、あれ……ここは」

「目覚めましたか、今怪我を治してますので動かないように」

目覚めたものの、戸惑い状況を把握できていないフェイトに話しかける。

やがて、傷だらけだったフェイトの体は特に目立つ怪我也無い状態になった。

「あ、ありがとうございます……」

「こちらこそ、感謝します。」

貴方が助けに来てくれたおかげで私たちは無事自由になれました」

俺の怪我也治せと傍で呟いている少年を、少女は華麗に無視した。そして思いついたように言葉を口にする。

「これで魔力は全快ではありませんが、怪我の方は完治しました。とりあえず急いで撤退しましょう、向こうもそろそろ復旧しそうですし」

「あ、私は母さんに貴方たちを連れてくるように言われて……」

「わかりました、行きますよロリコン。」

座標をお願いします、えーと」

「フェイトです、フェイト・テストロツサ。で、こっちが私の使い魔のアルフです」

ふん、とこちらに敵意を向けつつも顔を背けている狼。

「どうやら今のところ、友好的にはなれそうにない。

「私は『羽間 詩』、こっちの黒いのが『一梨 一』です。それでは向かいますしょうか、貴方のお母さんの下へ」

「はい」

フェイトが転移魔法を発動させようとする中。

2人は、フェイトの母親を黒幕に仕立てようとした罪の呵責に襲われていた。

（こないだの娘の母親を私たちは悪役にしようとしているんですね）

（ああ、良心が痛むな）

だがそれでも 結論は変わらない。

罪の意識に苛まれながらも、彼らは時の庭園へと向かった。

EP・13：金色（後書き）

激戦終了、そして舞台は崩壊した無印に。

原作キャラの純粹さとは対称的に、ろくな人間じゃない転生者組。

こいつらにも『ヴォルケンリッター』とか『ナンバーズ』みたいな
チーム名が欲しい。

けど思いつかないので募集するのもありかなと思っております。

Ep・14：悪が歓喜し、善が憂鬱になる日（前書き）

例えば手元にポケモンの最新作があるとします。

プレイしますね、ポケモンを厳選しますね、育てますね。

いつの間に11月になってます、ぜんぜん不思議なことじゃないです。

………すみません、ホントすみません。

くおんたむ・くおーたー様、マコト様、感想ありがとうございます
た。

時空管理局予言対策部隊『トライデント』

その中核となるメンバーの殆どは『暗部』出身である。

ここで管理局の暗部について記しておこう。

どの組織にも表に出せない部分というものは存在する。

それは管理局といえでも例外ではない、規模が大きければそれだけ暗部の規模も大きくなるものだ。

管理局暗部。

一言で言ってしまうえば、悪を持って善を為す管理局員たちだ。

拷問、監禁、私刑は日常茶飯事、彼らに倫理は無く、私情を挟むことも無い。

無論、表の人間……それこそ執務官にでも捕まってしまうえば、彼らは犯罪者として裁かれる。

管理局に籍を持たない彼らは、管理局員を騙る犯罪者という立場でしかないのだから。

「これはまた手酷くやられたものだ。

せつかく私が情報を与えたというのに不意にするとはね」

紫の髪を持つ白衣の男がぼやく。

性格の悪さはその喋り口調からだけでもわかるほど滲み出ている。

「ふん、貴様の情報通りいるのは2人だけだった。」

あの忌々しい小娘が来なければ、捕らえられたはずだ」

「はは、自分たちの無能をいたいけな少女のせいにするとはね。」

管理局暗部の隊長も地に落ちたものだとは思わないかね」

挑発するような言葉に、話し相手である隻腕の男、ミラは齒を食いしばる。

ミラ自身、予想外の援軍が来ても対処できる自信があった。

だが結果はどうだ、部下たちは死者こそいないものの全滅、自分は片腕を失った。

それはただ、自分たちが無能だっただけ

「その援軍も、貴様が仕込んだのではないか？」

「はて、何のことかな。」

仮にも君たち側に属する私がそんな事をして何の利益があるのかな？」

ミラは確信していた。

ジェイル・スカリエッティは、あの金髪の少女に必ず関わっている。

そもそも、ジュエルシードを異邦人が狙っていると密告してきたのはジェイルだ。

そして異邦人に自分の妹が関わっている可能性があるかと告げたの

もジェイル。

そしてそれは正しかった。

(だが、正しかっただけで済ましてはいけない何かが、この男にはある)

暗部として長年戦ってきた男の勘。

この男は自己顕示欲が強い、そして今の飼われている立場を疎ましく思っているはずだ。

素直に味方だとは思えない。

妹の方も変人だったが、この男は次元が違う。

(妹を助けたかったから、などという理由ではあるまい)

何を持ってこの男が、異邦人たちを売り渡そうとしたのか。

それでいながら、なぜ助けるような真似をしたのか。

「しかしこのジュエルシードというのは興味深い。

これは管理局が回収した暁には、いくつかこちらに回してもらいたいものだね」

ジェイルは、オルタ・スカリエッティの使ったロストログアの画像を眺めて呟く。

天候の制御すら可能にするロストログア、なるほど危険度がA級というのも頷ける。

「それは最高評議会に訴えることだな。

我々の関知するところではない……私の義手は早めに用意してお

画面に映る金髪の少女を凝視しながら、ジェイルは叫ぶ。
玩具を与えられた子供のように、ただ喜びを胸に抱いて狂ったように笑い続ける。

「プロジェクトFの成功作、さすがは大魔導師といったところか！
管理局の研究員なんかよりもよっぽど優秀じゃないか、母の愛とはここまでの物か！！」

既にジェイルの頭には、金髪の少女、フェイトの事しかない。
フェイトの戦闘データを眺め、満足げに頷きながら、通信機に手を掛けた。

「ウーノ、通信を彼女、プレシア・テスタロッサに繋いでくれ」

「その前に、ドクターに通信が入っています」

「ふむ、誰だい？」

「オルタ・スカリエッティと名乗っております」

<クエス>

波乱に満ちた夜も明け、数日が経過した久方ぶりの学校。
授業の合間、窓の方を眺めながら僕はここ数日の出来事を回想し

ていた。

次元震による影響は特に無いようだった。

新聞を読んでみたが、別に死者もいないし至って平穏なもの。

大人たちも、『また地震か』と話題にもしない辺り、さすが日本である。

そういえば神社やプールで一騒動あったらしいが、詳しくは知らない。

僕は休みの間、ずっと家に引き籠もっていたのだから。

お前オリ主だと、突っ込まれる気もするのだが、今回はしょうがない。

愛用デバイスであるネームレスは大破しているし、封印を手伝う気も起きない。

それに、何故かドクターちゃんとも連絡が取れないので修理ができないままだ。

それとは別にもう一つ、頭痛の種となる悩みがある。

(クエス君、ちゃんとお話しよ)

おそらく覚えてたての念話を使って話しかけてくる高町なのは。

絶交宣言してまだ数日だというのに、めげずに話しかけてくる。

(クエス君、私に嫌な所があるなら言ってよ。

ちゃんと直すから、そしたら友達になっってくれるよね)

無視しているというのに、なぜここまで話しかけられるんだろう。
これもアレか、世界が操っている結果なのだろうか。

そう考えると、イラつくな。

高町なのはは悪くない。

悪くない、むしろ良い容姿でもあるし、性格も好ましい。

傍目から見れば、美少女からアタックを受けている風に見えるの
だろう。

死んでも御免だが。

どこまでが彼女の意思で、どこからが世界の意思なのかわからな
いのが嫌いだ。

下手に関われば、いいように誘導された挙句、殺されることが容
易に予想できる。

彼女本人が悪くないのはわかっていても納得できない。

だからといって、邪険に扱い続けると罪悪感も芽生えるし、周囲
の視線も痛い。

いい加減、諦めてくれればいいのに。

(ねえ、何か言ってよお……)

しつこい位に会話のボールを投げてくる魔法少女。
こっちは精神的に参っているのだから止めて欲しい。

思考逃避、別のことを考えよう。

そろそろ本格的に、ドクターちゃんの安否が不安になってきた。
何かあったのだろうか、帰ったら他の奴らに連絡を取って聞いて
みよう。

ネームレスにも悪いことをしてしまった。

自己修復すらできない状態のままだし、最悪自分で修理しなければ。
ば。

ああ、アリサの件はどうしようか。

テンプレで判断するなら、そろそろ誘拐されるかもしれない。
でもやはり、アリサ達とは縁を切るべきなんだろう。

ホント頭痛いなあ、もう引き籠もりたい。

（むう、私、諦めないよ！ 絶対クエス君と友達になるんだから！
！）

さすがに頭に来た。

(この念話が聞こえたら右手上げて)

(え、あ……うんっ！)

喜び勇んで、勢い良く右手を上げる高町なのは。

「はい、じゃあ高町さん。」

黒板に来て、この問題を解いてね」

「え、ええっ!?!」

教師に誘われて黒板の前に歩いていく。

ちなみに国語の授業である、文系が駄目な彼女には辛かろう。

涙目でオロオロする姿を見て、溜飲が少し下がった。

放課後になった。

ひたすら近寄ってくる美少女から逃げ回るといっ、

それなんてエロゲな羞恥プレイを強要した休み時間を僕は一生忘れないだろう。

僕はホームルームが終わり次第、アリサやすすかを無視して教室を飛び出した。

一人で帰るのも久しぶりだなあ、と感慨深く思っていたのだが。

「一緒に帰ろうよ、クエス君」

背後から栗色のツインテールを振って走ってくる魔法少女が目に入った。

拒絶してなお笑顔で接してくる彼女に思わずため息を吐いてしま
う。

「だから、高町さんとはもう縁を切ると何度も言ってるじゃないか」
それに今日は、仲間たちに連絡を取らないといけないし。
もしドクターちゃんに何かがあったとしたら一大事だ。

もし捕まってしまったのなら、何としても救出しなければなら
ない。

ドクターちゃんを失ってしまったら、もう元の世界には返れない
だろうから。

「むう、なんで私と帰るのは嫌なの？」

「……巻き込まれたくないんだよ、厄介ごとには。」

高町さんは知らないと思うけど、今の君の立場はかなり危険なん
だ」

魔導師は、管理外世界にはならない。

管理局法にも定められているソレは、悪法ではないのだろう。

魔導師というのはとにかく厄介だ。

魔法文明のない世界では、Cランクであろうと容易に大犯罪者になれてしまう。

だからこそ、管理局は管理外世界の魔導師を取り締まる。

ソレは別にいい、筋が通っているし、管理外世界のためにある極めて良心的な法だ。

問題があるとすれば、今回の高町なのはどのような場合だろう。

偶発的に魔法の才能を開花させてしまった子供であろうと適用されること。

つまり管理局に見つかれば、高町なのはは管理世界に住居を移さなければならぬ。

原作では、囑託魔導師という事と子供であるという事を使って認めさせたようだけど。

「問題は芋づる的に、僕も見つかる可能性があるってこと」

そして僕には抗う術がない。

執務官クラスに勝てるとは思えないし、簡単に捕縛されるだろう。

そうなれば、管理局に僕の存在がばれることになる。

さすがに違法研究の塊である僕の存在を見逃したりはしないだろうし、

例えリンディ提督が庇ってくれたとしても、提督程度の権限で守りきることは不可能だろう。

「だから高町さんと友達になるなんてできない。

管理局には知られる訳にはいかないし、今の僕には戦う力もない」

それに

「第一、このままジュエルシードを回収していれば確実に高町さんは管理局の目に付く。

その結果、家族から切り離されて一人で管理世界に住むことになるかもしれない」

極論だが、ありえない可能性ではない。

僕の言葉を聞いた彼女は少し俯いた後、真っ直ぐ僕を見上げて言った。

「でも、あのジュエルシードっていうのは凄く危険なのっ！

私には黙って見過ごすことなんて絶対できない、だから私は止めないよ」

「それなら、いいんじゃないかな」

別に悪いことといってるわけじゃないし。

原作の展開を知っている身からすれば、放置されることのほうが問題だった。

世界に操られているのか、彼女の意思なのかはわからないけど。

命の危険がある事（自覚しているのかどうかは別として）をするのはきつと尊いのだろう。

「それに、クエス君と友達になろうとするのも止めない」

……それは勘弁してほしい。

ただでさえ、今日はアリサやすすかから冷たい目で見られ続けたのだから。

「逆に聞くけど、なんで僕と友達になりたいのかな？」

思ってたよりも冷たい言葉を吐いてしまう。

どうせ『世界』のせいだ、本心じゃないという思いが頭から離れない。

少し物怖じしたような表情を浮かべたが、彼女は

「だって、凄く寂しそうな目をしてるもん」

なんてふざけた事を言った。

言い返そうと、彼女の目を直視した瞬間、後悔が僕を襲う。

初めて彼女と会ったときを思い出した。

今まで慣れていたのか、それとも感覚が麻痺していたためか

久方ぶりに味わう『おぞましさ』がそこにはあった。

「私も知ってるよ、寂しいってことがどれだけ辛いか」

違う、寂しいだなんて思ったことは無い。

……他人との繋がりには確かに魅力的だし、心の底では寂しいと思っ
ているのかもしれない。

でも違う、僕が今求めているものは記憶だ。
自分が誰だったのか知りたい、ただそれだけだ。

親はいたのか、友人はいたのか、いたとしたらどんな人だったの
か。

それだけだ、失ったからって新しいモノで我慢しようと開き直れ
るほど僕は素直じゃない。

だから彼女の言葉は的外れなだけで

「私、思ったんだ。

もし私と同じように寂しい思いをしている子がいたら、手を差し
伸べようって」

それは慈愛なのか、自己満足なのか。
世界に操られている様子など微塵にも感じさせない笑顔だった。

それでも、友人になるわけにはいかない。

「なら僕以外の誰かに、その手は差し伸べてあげればいい」

それはいつもと同じ光景。

彼女が手を差し伸べ、僕が拒絶する。

孤独な人間ならそれこそ星の数ほどいる。
なら僕1人くらい放っておくと、捨て台詞のごとく吐き捨てた。

「違うよ、クエス君だから差し伸べ続けるんだ」

それでも高町なのは折れない。

神々しいまでのおぞましさは、一種のカリスマにも思えてしまう。

いけない、これではいけない。

このままでは僕は、彼女に惹かれてしまっッ！

高町なのはよりも先に、僕の心が折れようとした時

「よお美しいお嬢さん、俺と一緒にお茶しねえか？」

良く聞き慣れた声が、彼女の背後からかけられる。

振り向く高町なのはの後ろにいたのは、高校生くらいの少年。

……何故か水浸しで、髪から水滴がポタポタと垂れている。

ロリコン殺人鬼こと、『一梨一』がそこにいた。

ニヒルを気取った笑みがこちらの呆れっぷりを加速させる。

声をかけられた少女も、困惑のあまり絶句しているようだ。

「……えーと、何でそんなに濡れてるんですか？」

「ん、ああ……ちよいと時期の早い海水浴ってやつかな。

ちよいと素潜りで海中探索を終えたばかりで、暖かい茶でも飲もうかと思っただけな」

「はあ……」

先ほどまでのシリアスな空気なんてどこかへ行ってしまった。

しかしこの男、幾らなんでも小学生にナンパとか欲望に忠実過ぎである。

「今の俺……まさに水も滴るいい男って奴だろ！」

くははははは、というわけでそんなガキ放って置いて俺とお茶しようぜ」

「その、知らない人にはついて行かない様に言われてますので」

「ん、知らない人呼ばわりなんて悲しくなるねえ。

ああでもお嬢ちゃんはその時、気絶中だったしな、一応初対面になるのか？」

「へ？」

というかわけがわからない。

仮にも次元犯罪者の殺人鬼がわざわざ主人公の前に姿を現す理由が。

……ナンパをするため、じゃないと思う、思いたい。

そもそも彼が『魔法喰い』であることをレイジングハートは知っているはずだ。

そのレイジングハートのマスターの前に姿を現せばどうなるかなんて、わかりきっているのに。

『Master!!』

「だ、駄目だよレイジングハート、普通の人の前で喋っちゃ!!」

『He owns two or more Jewel See ds!!』

ジュエルシードを複数持っている。

レイジングハートの発言に耳を疑った高町なのは、話しかけてきた黒髪の少年に向き直る。

「くははははは、コレのことが幼女？」

彼は懐から取り出した『6個の青い宝石』を見せびらかすように手で弄ぶ。

どうやら封印処理は施しているようだが、あまりの展開に少女は思考がうまく働かない。

僕のほうはある程度、落ち着いていた。

わざわざ話しかけてきた理由はわからないが、海の潜った時点で予想はついていたからだ。

しかしとことん出鱈目な奴である、ロリコン。

『He is a famous horrific killer.
Please take care!』

「さ、殺人鬼!?!」

驚愕のあまりレイジングハートを落とすそうになる高町なのは、いや、それが当然のリアクションだとは思っただけれど。

「おいおい、何を吹きこんでんだよガラクタデバイス。
こつ見えても俺は幼女には優しいんだぜ、性的な意味で、なんて
な」

『Lolita complex』

「正解、ってちょっとその幼女怯えんなよ。

『来る者皆殺し、去るもの追わず』が俺の正義だ。

そつちから攻撃しなけりゃ俺は攻撃しないし、殺しもしねえ」

逆に言えば、そつちが攻撃してくるようなら必ず死んでもらう。

安心させてからの殺害予告という、『上げて落とす手法』の最悪な使い方だった。

「ひッ
」

悲鳴を上げそうになるが、高町なのははグッとこらえたようだ。予想になるが多分ロリコンは殺さないだろう、原作の展開が読みづらくなるし。

「あ、あのっ、ジュエルシールドは危険なものなんです!」

「知ってるぜ、つうかフェレットも似たようなこと言ってたしな」

「だ、だったら 私に渡してください!」

それはユーノ君の物なんです、ユーノ君に返さないといけないんです!」

殺人鬼と知ってなお挫折せずに渡すよう言える辺り、さすがは主人公なのだろうか。

その愚直なまでの真っ直ぐさは、利点というか欠点にしか思えないけれど。

「だが断るってか、くははははははは。」

こっちも集めるように頼まれてんだよ、諦めて帰れ」

「な、何で集めてるんですかっ!？」

これは凄く危険な物なんです、願い事なんて叶えられないんですよ?」

「知るか、雇い主に聞け。」

まあ欲しいというなら止めねえ、躊躇なく殺してやんよ」

そしてぶつけられる殺意に思わず身震いする。
直接向けられるわけでもないのに、背筋が凍るほどの殺意はさすがというべきか。

おそらく初めて受けるであろう殺意に、高町なのはは

「……………う、うあ……………」

折れてかけていた。

辛うじて起動したデバイス、レイジングハートを握り締めていたものの、

顔面は蒼白、誰が見ても戦える精神状態ではないと判断するだろう。

それでも杖を握り締めているのは、まだ心が折れていないからか。震えながらも、高町なのはは握り締めた杖を目の前の殺人鬼に向ける。

「さすがは魔法少女ってことか、何だよその精神力。

怖えよ、激怖えよ、相手にしてらんねえから帰るわ」

彼は踵を返し、こちらに背中を向け歩き出す。

その無防備な背中からは、高町なのはの攻撃なんて怖くないと語っているかのようだった。

「ま、待ってください」

「ああ、もし金髪の魔法少女に出会うことがあったらよろしくな。アイツを説得できるようだったら、このジュエルシールド、くれてやってもいいぜ」

それと、と彼は最後に付け足す。

「そういえば、聖祥大学付属小学校で1つ見かけたぜ。

面倒だから回収しなかったがな、欲しけりゃ早めに行ったほうが良いんじゃないのか」

付け足された言葉を聞いた瞬間、高町なのはは走り出した。

小学校に危険物がある、それだけで予想してしまったのだろう。

身近な誰かが傷つく可能性を

「さすがは主人公、行動が早いな」

「いや、何一仕事終えたぜ見たいな空気出してんの!？」

色々突っ込みたいことはあるけど、何でロリコンが此処にいんのさ!？」

いつアースラが来てもおかしくない状況なんだよ、と突っ込むクエスを少年は一瞥する。

実際アースラはもうすぐ近くまで来ているため、高町なのはと戦うつもりは少年には無かった。

「いや、ちよいと予想外のことがあったんでな。

詳細は省くが、結論だけ言うとプレシアに雇われた」

「はあ!？」

「まあ俺のほうは今、念願の少女と同棲中なんぞな。

人生不幸の後には幸福が来るって本当だったんだな、俺もビックリだぜ」

「いや、プレシアに協力って……」。

てことはその少女ってもしかしなくても」

「フェイト・テストロツサだ」

「アホかああああああ!!」

人気の無い道とはいえ、絶叫するクエスにナイス突っ込みと返す少年の姿があった。

「ああもう、突っ込みどころが多すぎて突っ込めねえ。

ってそついえばドクターちゃんと連絡が取れないんだ!

手遅れにならないうちに様子を見に行かないと、手遅れになってからじゃ遅いし」

「ん？ アイツなら今頃お前の部屋でくつろいでると思うけど」

「心配して損した！！」

クエスは無駄な心配をしたことが恥ずかしいのか、頭を抱えて蹲っている。

実際、かなり危ない状況であったため、無駄な心配とは一概に言えないのだが。

「んじゃ、お前の部屋に行くとするか」

「良いけど、何でロリコンまでついてくるのさ」

ロリコンと呼ばれた少年は、笑みを浮かべる。

獰猛な肉食獣を錯覚させるその冷笑は、非現実的な光景だった。

「第2回方針会議だ。」

覚悟しろよ、とつとつ管理局が動くぜ」

呆れたクエスはふと空に視線を向ける。

学校の方角の空に、桃色の光と金色の光が見えた気がした。

Ep・14：悪が歓喜し、善が憂鬱になる日（後書き）

主人公が関わると執筆速度が遅くなるのにロリコンが混ざると途端に加速する。

こいつは何なんだ、もうこいつが主人公のほうが良かったんじゃないか？

ウジウジする主人公は読んでいいモノじゃないでしょうが、見捨てないで上げてください。

こんな奴でも最後は成長するんです。多分します、きっとします、するといいなあ。

良ければ企画のほうも参加よろしくお願いします。

【企画（終了済み）】（前書き）

企画です。

お遊びのよつなものですので、気軽に参加してください。

【企画（終了済み）】

【企画内容】

現在、転生者と管理局の仲が険悪になっております。
おそらく本編中で2組の全面衝突が起きる日も近いでしょう。
大規模な抗争であり、かなりの人数の管理局員が出てくること
が予想されます。

そこでこれに乗じて、読者様よりオリキャラを募集したいと思
います。
ぶっちゃければ、読者様のキャラをこの世界に入れて遊んで見
ませんかということです。

募集要項をテンプレで置いていきます。

「名前」

「性別」

「年齢・容姿」

「魔導師ランク」

「使用デバイス、戦闘スタイルなど」

「その他設定などがあれば」

またそのキャラの所属を

「出向扱いの管理局員・予言対策部隊所属の暗部・雇われた傭兵」

上記の3つの内から1つを選んでください。

【サンプル】

「名前」ミラ・ケーニツヒ

「性別」男

「年齢・容姿」30後半、黒髭の巨漢

「魔導師ランク」空戦S

「使用デバイス、戦闘スタイルなど」

大槍型アームドデバイス（無銘）

リーチとパワーを生かした接近戦、破壊力と貫通力のある突きを多用する。

「その他設定などがあれば」

悪を持って善を為す。

世界平和のためなら、犠牲も惜しまない冷徹な武人。

「所属」

予言対策部隊所属の暗部

【注意事項】

実力については、S+程度までなら可能です。

さすがにSSSとか出されると、あっという間にBADENDになってしまうので、

オリキャラの強さについては、用法容量を守り、正しく設定してください。

自ら作り出したキャラクターですから、愛着も湧くと思います。

レアスキルや裏設定があればどんどんお送りください（絶対に必要というわけではありません）

ただし、全てが反映されたキャラが必ず出てくるとは限りません。というが無理です、そのキャラの過去話とか本編で出てくる可能性は極めて低いです。

また話の都合上、名前しか出てこないかもしれませんし、

逆に主要登場人物と戦い、本編に大きく関わってくるかもしれません。

そしてこれが一番大切なことです。

そのキャラに、ハッピーエンドなど待ち受けていない可能性があることを考慮してください。

敵が転生者組である以上、オリ主補正が働きます、大半が死ぬ可能性がります。

無論、見せ場は作りたいたいと思っております。
少なくともかませ犬等には使いません、大切に愛を込めて使わせてもらいます。

キャラは活躍と役割を持ってこそ、登場できるというのが私の持論です。

【その他】

ある程度、数がそろった時点で打ち切らせてもらいます。
そのため、1人1キャラまでとさせて頂きます。

また、あまりこちらの世界観を崩すようなキャラは登場できません。

具体例：特級レアスキル持ち、ユニゾンデバイス所有者

前者はオリ主勢が勝てないため、後者はユニゾンデバイスというキャラを書くのが辛いためです。

とりあえずクローン（聖王以外）、戦闘機人（IS所有）までなら可とします。

疑問がありましたら、どんどんご質問ください。

【この企画は終了しました】

【企画（終了済み）】（後書き）

創造意欲を掻き立ててくれるようなキャラ、お待ちしております。

【この企画は終了しました】 2010年11月10日

【企画整理】（前書き）

……どこの作品で主人公になれそうな逸材ばかり揃っちゃった。
皆さん、こんな逸材ばかり私の作品に出して良いんですね、本当で
すね。

とりあえず企画整理です。

【企画整理】

【企画整理】

企画整理です。

読者様から募集したキャラに私が勝手に肉付けをし、これでいいかな？と問うコーナーです。

「ここが違う」「こいつはこんな口調じゃない」「もっとこうして欲しい」

というご要望があれば、いつでも感想掲示板に気軽に書き込んでください。

また「これでいい」という許可もできれば書き込んでいただけると幸いです。

「名前」グラール・ベルヘライト（男）（17歳・真紅髪の金眼）

【キャラ概要】

役職は管理局執務官、現在予言対策部隊『トライデント』に出向している。

空戦AAAという稀有な才能を持っているが、自他共に認める変わり者。

管理世界の生まれだが、とある管理外世界の騎士のような立場『武士』という物に憧れている。

そのため、取り寄せた資料を基に作り上げた武士の魂『日本刀』型デバイスを愛用。

そのデバイスの利点『切断力』を利用した戦闘スタイルでどんな強固な防御魔法も切り裂く。

だが、接近戦オンリーというわけではなく、むしろオールラウンダー。

中距離攻撃『斬撃波』、遠距離殲滅用に2ndフォーム『バズーカ砲』を使用する。

武士だって大砲くらい使う、だからこそそのバズーカ砲であり、刀に拘らない柔軟性を持つ。

ちなみに火縄銃フォームを作れなかった点が彼の唯一の心残り、バリアジャケットは甲冑。

なお、一番得意なのは、高速戦相手に使用する『居合い抜き』

【戦闘で殺害した相手の首を奪う】という癖さえなければ、ストライカーになれていた逸材。

<サンプル台詞>

「その首、貰い受ける」

「もしも俺に勝てたのなら、俺の首を持って行ってくれ」

「誇りを捨てずに戦い、そして死す。

男として最高の死に様だ、なあアンタもそう思わないか」

「名前」ミハエル・マグヌス（男）（16歳・茶髪・茶眼の青年）

【キャラ概要】

元次元犯罪者、ロリコンが転生した世界出身の傭兵魔導師。

一時期は非魔導師たちの武装テロ組織に雇われており、そこでロリコンと多少交流があった。

『幼女とは何か』についてロリコンと熱く語り明かしたこともある『変態という名の紳士』

ロリコンが抜けたあと、その組織は本格的に管理局と衝突。

当時現役だった『万能の天才』に捕縛されるが、その才能を評価され、暗部に所属する。

高い索敵能力、ずば抜けた直感、巧みな魔法制御を持ち、さらにその眼力も一級品。

ロリコンと同じ存在感を持つ山中あげはを、異邦人と疑っている点はや異常の領域。

射撃の腕は平均的だが、策敵やバインドを生かした補助戦が主な役割。

勝つための戦いよりも、生き残るための戦いをするため、生存率は一番高い。

勝てないとわかり次第逃げ出し、次の戦いときは必勝の策を持って敵に相対する。

山中あげはにそれなりに執着があるようだ。

<サンプル台詞>

「殺されるのなら少女がいい、殺すのなら少女がいい」

「速い敵は遅く、強い敵は弱く、強固な敵は脆く、巧い敵は愚かにすればいい。」

相手の長所を封じ、短所を攻める、狙うなら背中、安全圏から狙い撃つ、それが僕だ」

「これは質量兵器、どんな状況でも一定の力を発揮できるジョーカーだ。」

知らなかったのかい、エースを殺すのはいつだってジョーカーだということを」

「名前」ガリヒム・ナゼール（男）（30歳・2mを超える巨漢）

【キャラ概要】

言葉にできないカリスマ性を持つ男、テロ組織『銃と杖（ガンズ&スタッフ）』首領。

実はロリコンやミハエルの所属していた組織は『銃と杖』の下位組織だったりする。

非魔導師の現在の『自衛手段』の無い立場を憂いており、質量兵

器の解禁を目指す。

ベルカ式レアスキル『堅牢なる鋼』の使い手、異名は『グランドゼロ』。

接触した金属の強度を物理・魔法の両面において跳ね上げるこの技能により、

砲撃魔法の重ねがけすら平然と無視する鉄壁の防御のため『現代の聖王の鎧』と謳われる。

その部下の慕われる気質と、敵に容赦しない精神から、人気は高い。

そのため、『銃と杖』は下位組織もあわせれば現次元世界最大のテロ組織という位置にいる。

硝煙と火薬の匂いが肌に染み付いているが、それすらも魅力と扱われる。

現在カートリッジの存在に目をつけ、唯一の弱点『戦闘時間の短さ』をカバーしようとしている。

<サンプル台詞>

「守つてやるから武器を持つな、だと。」

笑止、平等を謳いながらやることは搾取ではないか」

「貴様らの脆弱な魔法など、我が鉄壁の前ではそよ風にも劣る。」

質量兵器は魔法に勝る、人間の狂気と凶器の結晶だ、人間の知恵を舐めるな」

「歴史から学べ、勝った者こそ正義だと。」

ならば私が、君たちを正義に押し上げてくれよう 出撃だ」

「名前」アル（男）（17歳・小柄の黒髪黒眼）

【キャラ概要】

フリーの傭兵魔導師。

魔力はCランクだが、希少技能『魔眼』と並外れた頭脳を持つ天才魔導師。

『魔眼』は自称であり、正式には登録されていないため『無銘』のレアスキル。

その『魔眼』は、走馬灯のごとく、見たものをスロー状態で把握できるといふ突然変異の目。

また『自己式サーチャー』という改造型のサーチャーを撒くことで。

死角の無い360度完全把握した上で、詰め将棋の如き戦闘を行うことができる。

デバイスは死体から得たものを改造した『バリアジャケット専用』と『ストレージ型ナイフ』

魔力以外の才能に恵まれた捨て子で、魔力以外の才能に恵まれなかったロリコンの対極。

平和な世界の普通の家庭に生まれていれば、歴史に名を残したかもしれない天才。

多数を相手に、同士討ちを誘う動きをしながらの戦闘が得意という多数戦向き戦闘者。

生きるために戦うことが信念。

或いは生きていることを実感するために戦いを求めているのかもしれない。

<サンプル台詞>

「その動きは、想定範囲内だ」

「盤面を支配するプレイヤーが俺。

お前は盤上でしか戦えない『駒』に過ぎない」

「……これだから、人間の動きは”計れない”」

【名前】 カロル・ランバート（男）（19歳後半、痩せ気味の青髪青年）

【キャラ概要】

予言対策部隊『トライデント』に出向してきた管理局員。

中々部所が決まらず回され続けており、そこで常に厄介ことに巻き込まれ続ける薄幸青年。

攻撃力に乏しく、決め手にかける反面、集団戦においてのサポートなら超一流の天才。

全員合わせて5の力しか出ない部隊で20の成果をあげることすら可能にする『掟破り』

自分の安寧を求めるも、厄介ごとと両想いとまで言われるほどの巻き込まれ体質。

そのため、管理局の闇というべきものをそれなりに見ており、本人曰くうんざりしている。

上層部の評価は実は高く、そのため予言対策部隊に引き抜かれこき使われることになる。

兄は対一での天才であり、その劣等感からか自分を正しく評価できていない。

無論組織において、飛びぬけた1より、他を底上げする1の方が評価が上なのは知らない。

そのため真つ先に敵に狙われ続けるタイプであり、本人の希望とは裏はらに、安寧からもっとも離れた立場にいる。

「追加要綱」

管理局を内心嫌っており、事務に行きたいと公言している。

だがしかし、管理局が手放すはずもなく、いつも押し切られている。

全盛期（黒歴史）引き籠もりちゃんの補佐官。

破格の才能を身近で見て、年上のプライドが引き裂かれたこともあったりなかったり。

生来のお人好し気質から書類仕事や事後処理、情報収集に厄介こ

との肩代わりまで引き受けていた。

また、年相応に生きれない彼女の心配をしていた唯一の人間。引き籠もり以降、違う部に回される事になるも、いまだに彼の心配の種として残っている。

また、当時目に入るすべてが敵に見えていた彼女が、唯一味方に定義した人間でもある。

<サンプル台詞>

「胃に穴が開く程度の不幸ですんで羨ましいよ」

「質が充実した物量がどれほどの脅威になりえるか、味わってくださー」

「やれやれ、厄介ごととは死ぬときまで縁が切れなさそうだ」

【企画整理】（後書き）

肉付け終了。

多分私を書くとしたらこんなキャラになってしまいます、あと一点だけ言いたいことが。

見事に男ばっか、原作とは対称的に男だらけですね、この予言対策部隊。

だが、それがいい

EP・15：崩れるファーストコンタクト（前書き）

ロリコンは知らないところで影響を与えるキャラ。

わかっていたけど、ここまで引つかき乱しているのは予想外DAZE

タカセ様、感想ありがとうございました。

Ep.15：崩れるファーストコンタクト

聖祥大学付属小学校。

有名だが所詮ただの小学校でしかない此処は今、異界となっていた。

封時結界。

特定の空間を切り取るこの魔法で、今ここにいるのは魔法関係者のみ。

学校の屋上には、既に封印処理胃を施されたロストログア、ジュエルシードが放置されている。

そして 遙か上空では

「デイバイン、バスター!!!」

『Divine Buster』

高町なのはが持つデバイス、レイジングハートから桃色の砲撃魔法が放たれる。

狙いは、黒を基調としたバリアジェットに身を包んだ金髪の少女、フェイト・テストロツサ。

「サンダースマッシャー!!!」

『Thunder Smasher』

フェイトの持つデバイス、バルディッシュから放たれる金色の砲撃が放たれる。

放たれた金色の魔法は迫る桃色の魔法と衝突し相殺、空中で激しく爆発した。

煙幕がお互いの姿が見せなくなるのを好機とフェイトは考える。一連の攻防から、白の少女は自分よりも格下だろうと判断し、デバイスを変形させる。

「バルディッシュ」

『Scythe Form Setup』

ギミックとともに、バルディッシュはその姿を変える。

金色に輝く刃を光らせた鎌、それを構えるフェイトはさながら死神のようだ。

煙が明け、高町なのはの姿が視界に入るとともに、フェイトは動く。

『Blitz Action』

高速移動魔法による、加速を利用しフェイトは一瞬で少女の背中へ。

フェイトは両手持ちの愛用デバイスを相手の首に突きつけようと閃させる。

（貰ったッ！！）

傷つけないため、寸前で止めようと思っていた彼女はだからこそ戸惑う。

目の敵、高町なのはは振り向くことなく、デバイスを振るいバ

ルディツシュを防いでいた。

「なっ……」

欺かれた？ 本当は接近戦の方が得意だった？

敵の行動にいくつもの疑問が脳内を巡る、そしてそれは大きな隙だった。

「デイバイン」

『Divine Shooter』

目前に桃色に輝くスフィアが4基形成される。

瞬間、フェイトは自分の迂闊さを呪い即座に反転、距離を取ろうと離れ

「シュート!!」

4の誘導弾が炸裂、背を向けたフェイトに迫る。

だがフェイトもさるもの、バルディツシュを一閃させ、魔力弾を霧散させる。

「……………」

フェイトの思考に迷いが生じる。

偶然ではなく、先ほどこの敵は自分の必殺の一撃を防いだ。

背中に目が付いてるわけでもないのに、軽々と防いだ。

脳裏に浮かぶのは、先日戦い敗北することになった管理局の男の姿。

目の前の少女は自分より格下だという勘は今でも働いている。しかしそれは擬態ではないか、本当はあの男並みの接近戦技能を持つのではという思いがよぎる。

本来なら 例え、防がれていたとしてもここまで慎重にはならなかっただろう。

偶然だと自分にいい聞かせ、勘に従い、自分よりも格下だと判断し積極的に攻めただろう。

だが初の実戦、そしてそこでの敗北がフェイトに陰を落としていた。

初めての实战で負けた、そして母親に失望された。だからこれ以上は負けられない。

「行けるよね、バルディッシュ」

「Yes, Sir!」

頼りになる相棒を握るフェイトの手に力が入る。

今度こそ勝つと、これ以上失態は重ねないという決心がフェイトを燃えさせる。

「Photon Lancer」

周囲に金色のフォトンスフィアを形成。

同時に足に魔力を集中、どんな攻撃も回避できるように構える。

「ファイア!!!」

金色の槍が白に身を包んだ少女に向けて発射された。

高町なのはが正史において敗れた、サイズによる奇襲を防げたのは半ば必然だった。

今の高町なのはは正史とは既に乖離しており、同一視するわけには行かないのだ。

高町なのはが取ったことは簡単、自分に向けられた害意を感じ何も考えずレイジングハートをそこへ向けて振るっただけに過ぎない。

正史の彼女なら、害意を感じ取ることは不可能だっただろう。

だが、この世界の彼女は違う、原因は先ほど見ず知らずの殺人鬼にぶつけられた殺意だ。

本格的に戦ったことのない彼女は殺意や害意に鈍感だ。

だが、黒髪の少年が放った殺意は一流の戦士ですら萎縮するほど強力なもの。

それによって彼女は自分でも気付かないうちに”殺意や害意に敏感になっっている”

それはおそらく殺意を向けた本人も予想していなかった、偶然の産物だろう。

「び、ビツクリしたあ〜」

なお、本人は自分の状態に微塵も気付いていない。

背筋がゾクリとしたので咄嗟にデバイスを振ったらたまたま防げた、程度にしか考えていない。

「それにあの娘……凄く速いの」

『I prevent it when it is dangerous』

「うん、お願いね、レイジングハート」

高町なのはは目の前の少女に向けてデバイスを構える。

数瞬の沈黙の後、形成された金色のスフィアから槍型の魔力弾が飛んでくる。

だが、同時にゾクリと背筋が冷える視線が上から感じられる。

視線を上に向けると、金色の鎌を構えて突撃してくる少女の姿があった。

「同時攻撃!？」

目の前からは高速の魔力弾、そして上空からは鎌による接近攻撃。仮にプロテクションを張って魔力弾を防いでも、接近する鎌は防げまい。

「レイジングハート!!」

『Flash Move』

魔力を通し、加速。

高町なのはは迷うことなく、少女への接近戦を選択した。

「なっ!?!」

驚愕した金髪の少女の顔が視界に入る。

だが、それも一瞬……両者の距離は急速に縮み衝突する。

「はあっ!?!」

『Scythe Slash』

バリアブレイクの性能を持つ金色の斬撃が迫り

「やあっ!?!」

『Flash Impact』

魔力を纏ったレイジングハート打撃と衝突した。

激しい衝撃が両者の腕に伝わり、お互いの体にダメージを響かせる。

「…………ツ…………!?!」

火花とともに閃光が炸裂し、2人は弾かれ、吹き飛んだ。

高町なのはは校庭の地面へと衝突し、フェイト・テストロッサは屋上へと叩き付けられる。

この時、お互いが落ちた位置はまったくの偶然である。何かが違うていれば、フェイトが校庭に、なのはが屋上に落ちていても不思議ではなかった。

だが現実、なのはは校庭に落ち、フェイトは屋上に落下。バリアジャケットのため、戦闘に支障をきたす怪我はしなかったものの場所が悪かった。

屋上では、放置されたジュエルシードがあったのだから。

「しまったっ!!!」

アルフと牽制しあい、校庭を駆けていたユーノが声を上げる。フェイトは迷うことなくジュエルシードを掴み、バルディッシュへと収納する。

「やっと……1つ」

母親の願いのために、自分が役立てたと言う充実感がフェイトを満たす。

最初の時、目的は達成できたものの、フェイトは途中から気絶していただけなので不満だった。

だが今回は違う。

自分は役に立てたのだ、という満足感があった。

なまじ苦戦していただけに、自分の訓練も無駄ではなかったという思いが強い。

「アルフ、帰ろう」

「あいよー!!」

狼形態の使い魔、アルフがフェイトの元へと降り立つ。

ユーノは一瞬の隙を衝かれ、アルフにバインドで縛り上げられたため身動きが取れない。

「待つてー!!」

次元移動しようとしたフェイトを呼びとめたのはなのはだった。白いバリアジャケットはフェイトと同様に、所々が破け、汚れている。

「何で、ジュエルシードを集めているの!？」

それはとっても危ない物、ユーノ君に返さないといけない物なの
!!!」

「……貴女には関係ない」

フェイトからすればこの報告を早く母に知らせたいのだ。

たった1つだけけれど手に入れたと、役に立てたと報告したくて仕方がない。

そして 褒めて欲しくて仕方がないのだ。

だから自分の邪魔をするのはを見る目はアルフと同様に刺々し

い。

「関係なくないよ、私だって集めてるし！
それに、あなたが雇ったって言う黒髪のお兄さんにだって会って
るし」

「ハジメに？」

フェイトの顔が僅かに歪む。
自分の母親が雇ったという黒髪の少年。

不甲斐ない自分とは違い、自分を一方的に痛めつけた管理局の男
を打ち負かした少年。

母親がわざわざ自分に連れて来いと命じてまで会おうとし、協力を
要請（実際は脅迫）した男。

母親の役に立とうとするフェイトの邪魔になる人間。

「……ハジメなんて関係ない」

「でも、あの人はあなたを説得できたらジュエルシードを渡してく
れるって」

「ッ
」

フェイトの顔がさらに歪む。

自分がやつとの思いで手に入れたジュエルシードを既に入手している？

彼は最初から2つ持っていたはずだ。

うち1つは自分を治療してくれた羽間 詩と名乗る彼女に。

もう1つは母親であるプレシアに渡している ならもう1つを手に入れたってことになる。

(違う、私のほうが母さんを想ってるんだ。

私の方が母さんの役に立つんだ 私の方が！！)

見せ付けられる自分と彼の能力差にフェイトは胸を痛める。

(そうだ、ハジメは母さんのことなんて好きじゃないって……)

誰よりも一番母親を愛しているのは自分だ。

大切な母親のことを嫌っている男に負けるのだけは許せない。

それを許容してしまえば。

自分の愛など、何の役にも立たないと言われていた様で耐えられない。

(そうだ、私が母さんを笑顔にするんだ)

負けない、負けられない。

まだイーブン、お互いに1つ手に入れただけなら引き分けだ。

ならまだ自分は頑張れる。

(役立たずなんかじゃない、私は母さんの誇れる娘になるんだ！)

だから、見ず知らずの男に負けられない。
必死で自分に言い聞かせるフェイトに、なのはは口を開いた。

「あの人が持ってた6個と合わせて7個、ユーノ君に返して……お願い!!」

「……あ」

輝が入った、フェイトの何かに。

スタート地点は同じ、フェイトと彼は同時に此処に到着し、同時に探し出した。

自分が苦勞してやっと1つを入手しているときに。

彼は既に6つもの、目標数14個のうち半分に匹敵する数を入手していた。

「ああ……うあ……」

「フェイト!!」

顔を真っ青にし、地面に座り込むフェイトにアルフが駆け寄る。
だがアルフに抱きしめられても、フェイトの体の震えはとまらなかつた。

(私が 私より 母さんの役に立ってる)

ここで母親にジュエルシードを持っていった所で褒められるだろうか。

現在の此方の所持数は9つ、そしてそのうち彼が集めた数が8つ。

彼の方が先に集めていた、というのは言い訳にはならない。

だってフェイトが1つを手に入れる間に、彼は6つものジュエルシードを……。

「……かあ、さ………」

絶対に褒めてもらえない。

それどころか怒られるだろう、嫌われるだろう。

大魔導師と謳われるプレシア・テストロッサの一人娘。

それがこんな役立たずで、こんなに弱く非才で。

「……あ、ああ………」

勝てない、実の娘なのに母親の役に立てない。

これが、彼が今日入手した数が2つとかならまだ大丈夫だった。

次こそは、次は勝つと虚勢も張れただろう、努力できただろう。だが思い知ったのは自分の分、あまりにも遠い彼の背中。

フェイト・テストロッサの心は折れた。

「あああああああああ！！！！」

頭を抑えて悲鳴を上げるフェイトを、アルフは抱えて転移した。残されたのは、『自分が傷つけたのかもしれない』と思い、呆然としている高町なのはのみ。

ファーストコンタクトはあまりにも絶望的で、救いがなかった。

【高町なのは vs フェイト・テストロッサ 1戦目】

勝者 フェイト・テストロッサ（辛勝）

クエスの住むアパート。

築20年を超えるボロアパートの名に相応しい姿を持っている。

ちなみに家賃は表向き月1万円、最寄り駅まで徒歩40分ことになっっている。

持ち主はドクターちゃんこと羽間 詩。

住んでいる人間はクエス1人で他は空き部屋、何という曰く付き物件。

「第2回、転生者同盟方針会議!!」

「『『イエイー!!』』」

「……この異常なテンションはどうかと思うんだけど」

翠屋から買ってきたケーキを机に置き、部屋中に飾りが付けられている。

そう、まるでパーティのようだ……何を祝うのかはわからないが。

メンバーはこの部屋の住人『クエス・ベルリネット』

そしてロリコン『一梨 一』ドクターちゃん『羽間 詩』 戦闘

機人『真中 あたり』の4人。

無限書庫の引き籠もりこと『山中あげは』は携帯電話で参加。どうやら今月の外出時間である20時間を使い切ったらしい。

「まず近況報告ですね」

一息の後、白衣の少女は語り始めた。

「プレシア組、と便宜上呼びますが。

私とロリコンは管理局に奇襲されたときプレシア組に救われまし

た」

そして、プレシアと会談をしたらしい。

そこでプレシアから出してきた協力要請に乗っかったらしい。

1・一梨 一とオルタ・スカリエツティはプレシアのジュエルシード集めに協力する。

2・ジュエルシード集めは基本的に一梨 一とフェイト・テストロツサ、アルフが行う。

3・オルタ・スカリエツティはプレシアの延命に尽力する。

4・入手したジュエルシードは残さずプレシアに手渡すこと。

5・目的が済んだ後のジュエルシードは、全てオルタ・スカリエツティの物となること。

6・秘密厳守、双方お互いの秘密を管理局や第三者に渡したりしないこと

大雑把にまとめると、こんな所になる。

協力というよりは依頼や契約、といった方が正しいかもしれない。

「しかし羽間、これは向こうに都合が良すぎないか。

少なくとも報酬が使用済みのジュエルシードでは明らかに釣り合わない。

プレシアはこちらを使える駒としか見ていないことなど、その場になくてもわかるほどだ」

「そうですね、命を救われたという点を考慮しても不平等でしょう。ジュエルシードにしる、虚数空間を開けば全て正史どおり落下す

る可能性もあります」

だが、何も利点はジュエルシードだけではない。
まずは管理局の目をプレシアに向けることが出来る。
最悪、雇われただけで黒幕はプレシアと、罪を全て被せることは出来る。

次に、フェイト・テストロツサと面識が出来ること。
此処でオルタ・スカリエッティの印象を良くしておけば将来役に立つ。

簡単に言えば、表向きオルタ・スカリエッティは違法研究をしていない。
脱走したのを重く見た管理局が兄の協力をしたという冤罪を擦り付けてきただけだ。

その事をこの時点から刷り込んでおけば将来役に立つだろう。
無罪を証明してくれるかもしれないし、出会って即逮捕の可能性も低くなる。

まあ命を弄ぶような事はしてないが、違法研究自体はしているのだが。
ロストログアの無許可での所有、研究は法律で禁止されております、みたいなの。

「それに何より、ノウハウを入手できることですね」

プレシアの製造した時の庭園を守る『傀儡兵』の製造法を入手で

きる。

『傀儡兵』は正史ではヤラレ役だったが、実際大型のものなどはかなりの高性能だ。

「私はガジェット関係は専門外ですが、あの技術を応用すればすぐに作れるでしょう。」

AMFと高いバリア出力を持つ魔導兵、量産すればかなりの戦力となるでしょう」

プレシアは魔力炉を動力に利用していたため、魔力炉から離れた場所では活動できない。

だが動力源にジュエルシードを使えば、その欠点すらも補える。

「それに、フェイトに恩を返せる……これが1番の理由ですかね」

フェイト・テストロッサに原作よりも少しの救いを。

それが1番の理由だと、白衣の少女は自嘲気味に呟いた。

「甘いねえドクターちゃんよお」

その甘さ、嫌いじゃないぜ。

そんなカッコつけた台詞でフォローするロリコン。

そして他の3人も、反論はしなかった。

ようは全員、フェイトというキャラが大好きなのだ。

「さて次は私から言わせて貰おう。

「ここしばらく時空管理局本局に出入りする魔導師を調べ続けてきたが。

ようやく見つけたぞ、予言対策部隊のメンバーをな……芋づる式に数名把握した」

「ようやくですか……もう少し早ければ私たちも苦労しなかったでしょうに」

「きつついねえドクターちゃんよ。

まあ本格的にぶつかる前に見つけられてラッキーと考えればいいさ」

『「こつちも、ミラっていう男のことを詳しく調べておいたよ。

……管理局暗部、多分ほとんどの武装局員は暗部から補っているんだと思うよ』

管理局暗部。

管理局には存在しないことにされている局員たちの総称。

「暗部、厄介ですね。

問題は指揮官クラスの間人ですが、真中………続きを」

真中と呼ばれた白髪の戦闘機人の少女は無言でうなずいた後、手元の画面に視線を落とす。

「まず1人目、本局所属の執務官『グラール・ベルヘライト』」

首狩騎士とも呼ばれるエース魔導師で、ランクは空戦AAA」

「……首狩騎士って物騒な名前だね。この世界は変人しかいない

わけ？」

『何言ってるの、王様ちゃん。
多少個性的な人間のほうが、物語で重要な立ち位置にいるもんだ
よっ』

「いやこんなキャラ、アニメでも出てこないと思う」
間違いなく規制が入るだろうと、クエスと呼ばれた少年は呟く。

「さて次だ、本局所属の魔導師『カロール・ランバート』」

『ぶっ』

携帯電話の向こう側で何かを噴出すような音が全員の耳に入った。
普段陽気に振舞っている彼女が動揺するだけでも珍しいのに噴出
すとは何事か。

『あー、カロール？ カロール・ランバート？
うん、なるほど……マジ情報？ あっちやー』

「彼のことを知っているのですか、あげは」

『あーうん、知っているといえは知っている、かな。
……もう何やってんだよカロールちゃん、いつもの不幸属性ってや
っ？』

「……引き籠もりちゃんよお。
それはあアレか、仲が良かったりするわけか？」

『どつだろつねえ、まあ悪くは無かったのかなあ』

「あーまあ顔見知りとは戦いにくいだろう。」

俺が代わりにサクツと殺りにいってもいいぜ、戦場での躊躇いは致命傷だしな」

『……そうだね、最悪の場合はお願いするよ』

最悪の場合、という言葉が彼女は使った。

はたしてそれはどのような場合のことだろう。

その知り合いが完全に敵に回っていたときか。それとも山中あげは本人が殺せない場合か。

或いは両方が、それを口に出しかけたものの、一梨 一は飲み込んだ。

結局のところ、心の折り合いは本人が付けなくてはならないのだから。

「では私が発見した最後の情報だ。

名前は『ミハエル・マグヌス』、管理局暗部の中でもそこその地位にいるらしい……」

「『ぶつ』

またもや、何かを噴出す音が部屋に木霊した。

今回は2人、1人は先程と同じく携帯電話の向こうの引き籠もり。

もう1人は、黒髪の少年、一梨一。

「……二番煎じは受けませんよ」

「受けは狙ってねえよ!! 畜生アイツか……厄介だな」

『はじめちゃんの知り合いでもあるんだ、何という偶然。』

いや、もしかして必然なのかな、案外世界の仕業だったりして」

「何でもかんでも世界の仕業にすればいいというものではありません
ん」

携帯電話の発言を白衣の少女は一蹴する。

一蹴するとき、チラリとクエスの方を一瞥していたことに、クエス以外は気付いていた。

「つまりはアレだ、原作キャラ程じゃないとしても俺らと惹かれあう宿命なんだろうさ。

感動の再開は戦場でってか、くはははは……いいぜ、知り合いのよしみで解体してやんよ」

「……まあロリコンは置いておいて、あげは!

あげははこの人間もできれば殺したくない口ですか?」

『いや、コレはどうでもいいや』

予想以上に冷たいリアクションに部屋の空気が凍る。

先程とはえらい違い、どことなく嫌悪感を含んでいることを全員

が悟った。

『これは……うん、私が調子に乗ってた時に捕まえた犯罪者なんだよね。』

何か私を見る目が汚らわしかったから、全力全壊で吹き飛ばした気がする』

ロリコンは知っているようだが、黙して語らず。

山中あげはもあまり好きではない人種のようにだ。

そして　この議題は打ち切りになった。

「わかっているのはこの3名だけだが、他にも数名いるだろう。どう対処するかはまた話し合おうとして、今私は話したいことがある」

白髪の少女、肉体のほとんどが改造されている戦闘機人。

真中あたりは鋭い視線を、金髪オッドアイの少年クエスへと向ける。

「少年、いつまで無様をさらすつもりだ」

長台詞を好む少女には珍しい簡潔な言葉が投げかけられた。

どこかの管理世界に存在する建物。

そこには2人の男が向き合って座っていた。

片や右腕に義手をつけている巨漢の中年。

管理局暗部が誇る歴戦の戦士、ミラ・ケーニツヒ。

片や炎の如き赤髪が印象的な、まだ若い17歳の青年。

管理局本局が誇るエース、グラール・ベルヘライト執務官。

「……つまり、その『異邦人』って奴を討ち取っちまえばいいわけだな」

「ああ、だができるだけ生け捕りにしろ。」

仲間の居場所をはかせねばならんからな、首狩騎士」

「おいおい旦那、俺は騎士じゃねーって言ってんだろ。
これでも武士を名乗ってんだぜ俺は……つっても知らねえんだろ
うなあ」

マイナーだしな、とグラールは肩をすくめる。

別段、誰からどう思われようと自身の生き様を貫けるのなら文句
は無いのだが。

「ふん、噂通りの奇天烈な男だ。

腕の方も噂通りであるのなら、貴様が何を目指していようと構わ
んが」

「ああ、かならずその『異邦人』って奴を討ち取ってみせるぜ。

最悪首だけになっちまうだろうが、首からでも情報はある程度引
き出せるだろう?。」

「ああ、だかなるべく殺さず連れて来い。

生きてさえいれば構わん、そのためにわざわざこちらに呼んだの
だ」

「まあ、予言に関しては疑い半分なんだがな。

だが旦那の利き腕を奪うほど獲物となれば、刀を振るう甲斐もあ
る」

グラールは椅子から立ち上がり、転移ポートへと歩み寄る。

無然とこちらを見つめるミラに軽く敬礼をすると背を向け、次元
転移を発動する。

「じゃあ御先に失礼するぜ、旦那。

……ああ、それとコイツだけは必ず生け捕りなのか?。」

青年は懐から取り出した資料を突きつける。

相変わらず無表情の男は、無言のまま短く頷いた。

「あいよ、生け捕りは趣味じゃねえが君主の我俣を聞くのも武士の仕事だ。」

……しかし聖王クローンねえ、上の連中も何考えているのやら」

まあどうでもいいかと独り言を呟き、彼は移動魔法を発動させた。

EP・15：崩れるファーストコンタクト（後書き）

ロリコンによるフェイトフラグブレイク。

当たり前ですけど、自分よりも優秀な戦果を上げるオリキャラをフェイトは好意的に見れません。

よくある作品のように、フェイトを餌付けしたりして好感度を上げているならともかく。

ぽつとでの不審者に戦果のほとんどを奪われて、ただ素直に喜べるでしょうか？

一方、我らがオリ主は相変わらず。

そろそろ一皮向けて欲しいものです。

最後は無理やりねじ込んだサービス。

この部分を灰音さんに捧げます。

では感想待ってます

Ep・16：悩みは投げ捨てる物（前書き）

今まで出が一番長くなってしまいました。

何で26kbもあるかなあ、最高記録13話の21kbを軽く上回りました。

しかもこれでもカットした方とか、長いわりに読みにくいか。このペースだと無印はいつ終わるのやら……

そういえばお気に入り登録件数が100突破です。

皆様、このような原作をまったくリスペクトしていない作品を目に掛けてくれて感激です。

灰音様、タカセ様、愚者様感想ありがとうございました。

Ep・16：悩みは投げ捨てる物

「少年、いつまで無様をさらすつもりだ」

白髪の少女に投げかけられた、簡潔ながらも気迫のこもった言葉にクエスは怯む。

彼は心当たりはあるものの、とぼけた言葉を返すことにした。

「何のことですか、あたりさん？」

だが白髪の少女、あたりの目はさらに鋭くなり、クエスを睨み付ける。

「惚けるのも大概にしたまえ少年、今の私はマジだ。

ここ最近君は明らかにおかしい、自覚くらいはあるだろう」

「自覚といわれても……自爆しようとしたことですか？」

「それもある、私たちを巻き込んでおいて君だけ勝手に退場とは大層なご身分だな。

それに最近の彼女らへの対応にも文句はあるぞ、何だあの中途半端な対応は？」

苛立ちを隠そうともしないあたりの苦言にクエスは顔をしかめる。

自爆しようとしたのは悪かったとは思いますが、後者は文句を言われる筋合いは無い。

「自爆しようとしたことは悪かったと思っています。」

反省もしてますし、次はこんなことが起きないように努力もします」

「……その努力が、高町なのはたちとの絶縁ですか？」

黙って聞いていた白衣の少女、詩が口を挟んだ。

その口調はあたりと同様、怒りが籠っている。

「何ですか、ドクターちゃん。」

監視という目的はちゃんとやるのだから、文句は無いでしょう」

「私は絶縁自体の文句を付ける気はありません。」

ですがあの対応には苛立ちを隠せません、見ていて不愉快です」

携帯電話の向こうの少女、あげはは何も言わない。

おそらく彼女にも何か思うところがあるのだろう。

「はあ……俺は席を外すぜ。」

こういった空気はあんまり得意じゃないんだわ」

一梨 一は、いつも通りの飄々とした態度を崩さず出口へと歩む。扉を開き、クエスを一瞥しながらも何も言わず立ち去っていった。

1人いなくなったものの、空気は変わらない。

クエスは強めの口調で反論をしようと口を開いた。

「不愉快って、僕が彼女たちと縁を切ろうとしているのがそんなに気に入らないんですか？」

「いえ、そこはどうでもいいです。」

ただ、『世界』を言い訳にウジウジしているのがムカつくだけです」

「言い訳って……」

「言い訳でしょう、しかも酷く中途半端な。」

貴方は縁を切ると口ではいいながらも、心の底では未練タラタラです。

しかもそれを隠そうともしないからこそ、高町なのはは貴方を諦めきれない」

「……………」

「それは甘えだ、男の癖に女々し過ぎる。」

嫌いだと口ではいいながらも、寂しげな目で自分たちを見る貴方を、

物語の主人公になるくらいお人好しの彼女が見捨てられるわけが無い」

「そんな目でなんて……」

「自覚が無いのならより悪質。」

だいたい何でもかんでも世界の仕業にするなど私は言いました。

自分の弱さを認めず、都合のいいものに押し付けて被害者ぶるなど言語道断」

世界には意思がある。

定められた物語の通りに、事を運ぼうとする意思が。

だからこそ異物を、イレギュラーを排除しようと世界は動く。

……だが。

世界に人を操る程の力は無い。

あくまで誘導する程度、右か左かの選択肢で右を無意識に選ばせる程度の力しかない。

でなければ転生者たちは当の昔に駆逐されてしまっているだろう。

世界は『予言』という形で、転生者たちを排除するよう管理局を誘導した。

だが、本当に世界が人の心を自由に出来るのなら、管理局員を掌握すればいいだけの話。

つまり、それこそが世界の限界。

世界はあくまで都合のいい方向に誘導することまでしか出来ない。

「以前私が貴方に語ったことです。

確かに貴方を追い詰めたジュエルシード暴走体は世界の影響を受けていたでしょう」

だがアレも、ジュエルシードを2つも使えば可能な範疇でしかない。

世界はあくまで、『起きえる可能性』を超えることは出来ない。

あり得ないことは起こせない。

死者を生き帰せる事も、闇の書を勝手に暴走させることも出来ない。

「……何が言いたいんですか？」

俯いたまま、クエスは顔を上げない。

彼とて自覚はしているのだ、ただ受け入れられないだけ。

問いを投げかけるクエスに、白衣の少女の代わりにあたりが言葉を続ける。

「例えきつかけが世界の仕業だったとしても。

高町なのはが君を気にかけるのは、友達になろうとするのは世界の仕業ではない。

君を心配する心も、君の友達になりたいという気持ちも、全て彼女自身のものということさ」

「……」

「それに向き合ってから出した答えならば。

友情を育もうと、縁を断とうと私たちは支持しよう。

だが、向き合わずただ中途半端な態度を取り続けるのなら、言わせて貰おう」

甘えるな

部屋に残ったのは2人。

携帯電話は既に切れており、あげはとの通信は切れている。

ロリコンこと一梨　一は外に出たままであり、クエスもまた外に出te行つてしまった。

残った2人、羽間　詩と真中あたりは同時にため息を付く。

双方ともにそれなりに疲労しており、床に寝転がっている。

「……子供の世話なんて焼くものじゃありませんね」

「まったく、記憶が無いということがあそこまで未熟ということとは。は。

予想はしていたものの、社会適応力があまりにも低すぎると思わないか。

精神年齢が肉体年齢に引つ張られるのがオリ主の典型的なパターンとはいえ　」

何もそんな所までオリ主にならなくてもいいだろうに。

両者とも、クエスのあまりにも典型的なオリ主っぷりに半ば呆れていた。

「まあ甘やかした私たちにも落ち度が無いとは言えませんが。

どうやら子育てには向いてないようですね、私たちは」

「その点ではジェイル・スカリエツィは子育てに向いていたのかもしれん。

ナンバーズは意外といい子が多いからな……何故そこで落ち込む、

羽間」

あたりの視線の先には、膝を付き頭を垂れる羽間 詩の姿があった。

効果音を付けるならズーンといった感じが似合いそうだと、ふとあたりは思う。

「ふ、ふふふ……例え子育てという分野でも、私があのマッドに負けるとはッ！

何という屈辱、この上は育児マニュアルでも購入して読破しましようー！！」

変な方向にスイッチが入っていた。

あたりは頭を書きつつ、変な方向に進もうとしている少女の頭を軽く叩く。

「とりあえず、彼のデバイスから直すでしょう。

さすがに壊れたままというのはネームレスも可哀想だろう」

クエスは今、護身用に市販デバイス『T2』を持っていつている。

が、性能が一般の領域を出ないデバイスではクエスの力を引き出し切れないだろう。

「そうですね、ネームレスも一応功労者ですし。

……ところでそのネームレスは今どこに？」

「ああ、私が預かっていた。

自己治癒も出来ないくらいに壊れているからな、頑張っ直してやってくれ」

「勿論です、どれどれ……………ッ!？」

差し出された輝だらけのデバイスを受け取った少女は絶句した。
心なしか涙目になっており、ポロリと雫が一滴彼女の目から零れ落ちる。

「わ、私が苦勞して……………あのマッドに頭まで下げて作り上げた、自慢のデバイスが……………」

「こんな、無残な姿に　　ひ、酷い、どんな使い方をしたらここまで……………あんまりです」

わりとマジ泣きしている少女を珍しそうにあたりは眺める。
そんな彼女の心境には気づきもせず、白衣の少女は涙を流しながら修理を始めた。

「この恨み、忘れません……………ッ!
いずれキチント話し合うことにしましょう、ふふふふふ」

未だ涙目でありながら、怪しげな笑みを浮かべる不気味な少女の姿がそこにはあった。

陽も完全に落ち、月の光が周囲を軽く照らしている。

金髪オッドアイの少年クエスは、公園のベンチに座っていた。

「……向き合え、か」

薄々は気づいていた。

高町なのはは、世界に操られて友達になろうと言っているのではないと。
ない。

だが、そう簡単に割り切れるものでもない。

記憶が無い自分にとって、誰かとの繋がりは麻薬のようなものだ。

いつものメンバーである転生者たちとの繋がりはきつと切れない。
全員が全員を求め合い、依存しあっているというある種の理想的
な繋がりがりだ。

問題は 気安く会えないということだろう。

全員まとめて捕まっつてしまえばゲームオーバー、いざという時に備えておかねばならない。

だがそれではクエスは満足できない。

学校から帰ってきてても、家には誰一人いないというのは意外と寂しいものだ。

だからこそ高町なのは言葉は、クエスにとって甘美な毒だった。記憶の無い自分を、偽者の名前であるクエスとして見てくれる人間は貴重なものだ。

繋がりが、絆が欲しい。

好意を向けて欲しい、優しくして欲しい。

あまりにも子供っぽい感情が、時を経るほどクエスの胸の中で大きくなっていった。

ソレも当然、クエスは知識があるだけで、精神年齢は酷く幼いままなのだから。

「だからって 割り切れるはずが無いじゃないか」

一度得た友人を失うのは、自分にとって恐怖の対象だ。ましてや敵対するなど、拷問にも等しい所業。

だが、敵対するのは避けられない。

クエスが転生者で、高町なのはが主人公である限り。

自分に与えられた選択肢は2つ。

失うことを知りながら、麻薬の如き絆に溺れるか。

誘惑に耐え、孤独に苛まれながらも、記憶を取り戻すために歩き続けるか。

クエスはどちらの選択肢も選びたくなかった。

だからこそ、向き合うことから逃げ、自分に言い訳をしながら誤魔化し続けてきた。

それは女々しいと、不愉快だと、クエスは彼女らに否定された。

『世界』の仕業にしておけばクエスは楽だった。

向けられる好意が偽者だと信じていれば耐えられた。

だが偽者ではない。

きっかけは世界が作ったのかもしれないが、好意は本物だ。

だからこそ余計に魅力的に思えて仕方がない。それでも選びたくないクエスは思っていた。

「子供、か」

クエス・ベルリネットの精神年齢は低い。

記憶や経験がないということは人格がないということに等しい。

真つ白な生まれたての人格、それがクエスだ。
余分な知識だけをぶち込んだだけで、クエス自身は生まれたての
子供に過ぎない。

記憶が欲しい。

自分が誰だったのか、どんな人物だったのか。

元の自分に戻りたい。

家族隣人友人、教師にクラスメイト。

憧れの芸能人に俳優女優、好きだった芸人に野球選手。

失ったものは価値ある物から無価値な物まで様々。

その全てを取り戻し、『クエス・ベルリネッタ』は『×××××』
へと変化する。

白紙だった人格から様々な物が書き込まれたオンリーワンの人格
へと。

「そつだ、僕はそれだけを求めて」

敵は世界。

記憶《人格》を取り戻そうとする自分の敵。

世界には全てが含まれる、高町なのはが最たる例だ。
だが、一番の障害は本当に世界なのか、世界こそが一番の障害な
のか。

「……あ」

変わらない物なんてない、物体とは時間がたてば変化するものだ。それが成長であろうと、劣化であろうと、時を経れば必ずどちらかに変わる。

生きていけば、色んな物が書き込まれていく。

プラスであれ、マイナスであれ変わっていくのだ　そして零ゼロには戻れない。

一番の障害が世界？

なんて戯言、傑作　何も知らない子供の弁に過ぎない。

「一番の障害は『クエス』に決まってるじゃないか」

時が経つという事は、『クエス』が成長するということだ。目覚めてから既に3〜4年、書き込みがされたことになる。

そくだ、成長し始めている。

満たされ始めている、『クエス』でもいいかなと思ってしまっている。

最初の時ほど『××××』への渴望が無い。

きつと高町なのはがいれば、自分は『クエス』のままでも満足でききる。

世界に排除されないように注意しなければならなくなるが、きつ

とこの世界でも生きていける。

だからこそ高町なのはを受け入れてはいけない。

「なんて言い聞かせて済むぐらいなら、あんな嫌味は言われなかったんだろうね」

そもそも『×× ××』を取り戻そうというのが無茶な願いなのだ。

それこそ『死者蘇生』並みの不可能さ、過去へ飛ぶとかそういうたクラスの願い。

だって『×× ××』の記憶を取り戻したところで『×× ××』には戻れない。

出来上がるのは『×× ××』 + 『クエス・ベルリネット』だろう。

『クエス・ベルリネット』が加算される時点で既に『×× ××』ではない。

4年、目覚めてから今まで4年、それがどれだけの『変化』をもたらすのか。

式にすれば $60 \times 60 \times 24 \times 365 \times 4 \parallel 12614400$

1261万4400秒が加算されるのだ、元の人格に。

そうなってしまうはもはや『クエス』でも『×× ××』でも無い者になるだろう。

「僕は、そんなものは求めていない」

戻りたいのはあくまで『××××』

『クエス』でも『どちらでも無い者』では無い。

「けど」

戻るということは『クエス』を捨てるということ。

高町なのはに絡まれたことも、全部無かった事にする事。

「はッ それは今の自分を殺すってことじゃないか」

死にたくない。

記憶を取り戻すまでは死にたくない。

自分が誰であったのか思い出すまでは、死ぬわけにはいかない。

そう言っつて、今まで生きてきた。

だが、今の自分を殺さなければ、真の意味での『××××』には戻れないというジレンマ。

そして かつてならまだしも、今の自分を簡単に殺せるだろうか。

答えは出ている。

正直この世界にはろくな思い出が無い。

目覚めた場所は血まみれ肉片まみれの殺人現場。
初めてであったのはロリコン大量殺人鬼。

初めての学校ではいきなり高町なのはと目が合っし。
アリサ・バニングスと早々に喧嘩もした、月村すずかには冷たい
目で見られた。

ジュエルシードに備えて、1年間皆にボコられ続けて。
あげくジュエルシード暴走体と心中しかけたこともある。

この4年間、面倒な事ばかりに巻き込まれてきた。
喜びは少なく、苦渋や挫折ばかりの時間だった。

でも　それはクエスにとって、きっと掛け替えの無い物だった。

「消えたくない、かな」

今の感情を表すと多分そうなる。

かつての人格を取り戻したい、でも今の自分は消えたくない。

感情が増えすぎてしまった。

育ちすぎてしまった、僕の人格は。

消えてもいいよう、無意識のうちに成長を抑えてきたはずだった

のに。

そのために孤独も耐え、誘惑にもできるだけ耐えてきたはずだったのに。

もうそういう段階ではない。

絆が欲しいとか、寂しさを埋めたいとかそういう段階ではない。

未練になるから友達を作らない、とかそういう段階ではない。

未練にならないように友達は作らない？

なんて戯言、そんな戯言では自分1人騙せない。

もう騙し切れない、僕は記憶を取り戻すことに恐怖している。

どうすればいいのだろう。

単純に考えるなら、今の自分の記憶を消して《リセット》しまえばいい。

そうすれば、また何の悩みも無く、かつての自分を取り戻すために生きていけるだろう。

ドクターちゃんなら多分記憶の消去だってできる、本人がやってくれるかは別として。

「……いいさ、今は 開き直る」

どうせ答えなんてまだ出せない。

『クエス』を消して『×× ××』を取り戻すか。

『クエス』を消さず『××××』を諦めるか。

『2つが混じったどちらでも無い物』を求めるか。

そんな悩みは、放置しよう。

自分のたった4年の人生経験では答えなんてまだ出せない。

まずは向き合ってしまったおう。

より大きな悩みにぶつかってしまった今となつては、先程までの悩みが稚拙に思える。

あんなに向き合いたくないって逃げてた自分が、馬鹿らしく思えて仕方が無いほどに。

コレもあれだ、成長って奴だ　一皮向けたとか、きっとそんな風に言っただろう。

とりあえず向き合おう。

高町なのはと友達になるかはその時に決める。

未練なんていくらでも作ってしまえばいい。

既に消えたくないなんて思ってしまったているのだ、未練が1でも10でも同じことだろう。

これが前向きなのか、現実逃避なのかは知らないが。

それでも、逃げ続けることを止めようと思った。

「目標発見つと…… よお小僧！」

ちよいと俺に捕まってくんねえか、悪いようにはしねえよ」

「ッ！？」

明らかに魔力を持った魔導師と思われる男が空から降りてきた。

どこかの組織の物と思われる制服を着た、赤髪の青年。

どうやらデバイスを起動していないようだ、バリアジャケットを身に付けていない。

「捕まえるって表現な時点でアウトだと思っんですが」

「あ、確かにそうだな。 目敏いぜ小僧。

じゃあ改めて、ちよいと俺と一緒に楽しいところに出かけようぜ
！」

これでいいか、とでも言いたげに青年は此方に目で尋ねる。

そもそも言い直す時点で無理だろう、常識的に考えて。

「知らない他人に付いて行くな、と親に言われています」

嘘だけど、親なんていない。

多分以前は言われてたんだと思うけど、確信は無い。

「じゃあ知らない他人じゃなけりや言いわけだな。

まあ名前を問われたら、答えないわけにはいかないのが武士道って奴だし……」

青年は律儀に答えようと思案しているようだ。

僕は、どこか常識を逸した青年の飄々とした態度に確信する。

彼は絶対に変人だと。

そんな僕の第一印象はさておき、彼は相変わらずの態度のまま口を開いた。

「時空管理局執務官グラール・ベルヘライトつつうモンだ。というわけでこれで三度目なんだが、俺と一緒に管理局まで出かけようぜ小僧」

「嫌です」

「何だと小僧、今度は何処が駄目なんだ!？」

それで通じると思ってるのか。
青年の大げさも取れる態度に警戒の念が折られかけている。

「というかこの青年、よく聞くと先程の会議に出てきた予言対策部隊の男ではないか。」

「『T2』セットアップ」

『Set up』

白を基調としたインナースーツに青い鎧が申し訳程度にくっ付いたバリアジャケット。

ただネームレス時と比べるとデバイスの性能の差もあり、防御力はこちらのほうが低い。

杖形態のT2 をグラールと名乗った男に向ける。

2回目となる実戦、ジュエルシード暴走体には不覚を取ったが今回はそうは行かない。

「止めとけよ」

だが赤髪の青年、グラールは動じない。

向こうはセットアップすら行っておらず、状況はこちらが有利。

それでも余裕を乱さず、むしろ哀れむようにこちらを見つめている。

「俺は武士道を重んじている。

だから何があるうと、武士道に反することはしないようにしてんだ」

突如語りだす、明らかに外人とわかる男が武士道を語る。

観測者がいれば言うだろう、シユールな光景だと。

「武士はただの人殺しじゃねんだ。

お互いが命を奪い合うという約束の上でのみ戦う。

格好えじゃねえか、戦場以外では殺しはしない……人殺しだけど外道じゃない」

「……」

「だから俺もそれを遵守している。

武器さえ向けられなければ俺も極力、力を行使したりはしない。

だが、武器を向けてくるなら『命の奪い合いを約束した』って解釈するぜ」

つまり彼はこう言っている。
そのまま武器を向け続けるのなら、殺すと。

「ああ、勘違いしないように言っておくと俺の任務はお前の捕縛だ。生存が絶対条件だからな、殺しはしない……まあ手足は斬らせてもらうがな」

彼の言葉を見無視し、デバイスを強く握り締め魔法の演算を始める。

「まあそうこなくちゃ、面白くねえよな！

見せてみるよ、古代ベルカで最強を誇った聖王の実力って奴をよ
おー！」

『Photon Shooter』

フォトンシューター。

どちらかというところ接近戦向きなクエスが扱う射撃魔法。
設置した2つのスフィアから任意のタイミングで、魔力弾を放つ
ことができる。

いくなれば射撃砲台設置魔法。

真正面から放つても効果は無いと判断したクエスは、スフィアを設置するだけに留め、身体強化を施した肉体で接近する。

『Dagger Blade』

杖の先に短剣状の魔力刃を形成。

既に杖というよりは薙刀のようになっていて、デバイスをグラールに向けて一閃させる。

「了解、接近戦が好みなのはお互い様ってな！」

赤色の光に一瞬で包まれると、グラールの姿は一変する。

時代の彼方に消えていった鎧武者の如き甲冑、それがグラールのバリアジャケットであった。

腰には、デバイスの機械らしさが欠片も感じられない日本刀が鞘に納まったまま掛けられている。

通常デバイスというのは精密機械、よってデザインはどうしてもメカチックになる。

だが、彼のデバイスはそうではない。

取り寄せた資料を基に、極限まで日本刀に近づけたデバイス。

ギミックも無い、カートリッジも搭載されていない、本物とも見間違えるほどの真剣。

それがグラール愛用のデバイス、『サムライソード』だ。

赤色の甲冑に包まれた鎧武者が刀を抜く。
月光を反射し、怪しく光る細長い刃の切っ先がクエスに向けられた。

「はあ！！」

クエスは躊躇わずデバイスを一閃。
だが、鎧武者は日本刀で魔力刃を受け”流した”

「っ
」

「はっ、武器の使い方がなってねえよ小僧！！」

ひゅんという風切り音。

驚愕は一瞬、返す一閃でクエスのバリアジャケットは紙のごとく切裂かれる。

そして、勢いの止まらない刃がクエスの右腕に深々と食い込んだ。
幸い、腕が斬れる事は無かったものの、肉を切り裂かれた痛みのみあまりデバイスを落とす。

「づ　　ファイア！」

クエスは咄嗟に、設置されたスフィアから魔力弾を放つ。
そして射線上にいるクエスは足に力を込め全力で右に飛んだ。

死角からの攻撃、それに腕を振り切っている今なら当たるという確信があった。

が、その策は余りにも稚拙、グラールは腰に付けた鞘を左手に持ち一閃。

魔力弾を無造作に弾き霧散させ、ついでとばかりに右手の日本刀をクエスの体に振るう。

「が、あ」

ドスつという鈍い音と共に、クエスは地面に転がった。

あばら骨の2、3本は折れたかもしれないという考えが彼の脳裏をよぎる。

「安心しろ、峰打ちだ。」

そうだな 抵抗しないようデバイスは破壊しておくか」

地面に転がる杖のコアに向け、グラールは日本刀を突き立てる。

バキリ、という軋みと共にデバイスは待機状態のキーホルダーに戻った。

同時にバリアジャケットは解除され、クエスは普段の服装に戻りつつ地面に倒れ伏す。

「しかし呆気ないな、所詮は偽者^{クローン}か。」

少しは面白くなると思っていたんだが正直興醒めだ、つまんねえ任務だぜまったく」

痛みに耐え、地面に転がっているクエスの視界に怪しく光る日本刀が入る。

「まずは斬り損ねた右手から貰うとするか。」

本来なら首を奪うところだが、それは禁じられてるんでな」

あまりにも様になった刀の使い方は、一種の芸術のようだ。そう、クエスは知る由も無いが、グラールは独学とはいえ剣術を学んでいる。

日本刀で攻撃を受け流したあたりにそれが出ているといえよう。日本刀はそこまで頑丈ではないため、下手をすれば折れてしまう。

だからこそ受け流すという術が生まれており、それをグラールは会得している。

どんな強力なベルカ騎士の一撃でも、彼は受け流せる。そしてどれほど強靱な騎士甲冑を纏っていたようと、彼は斬裂ける。

日本刀の長所を余すところ無く理解している彼は、紛れも無い一流の剣術家だった。

「じゃあな、つまんねえ戦いだっただが、悪くは無かったぜ」

刃が弧を描き、クエスの腕を斬り捨てようと鈍く光る。

「ッ
」

避けきれないと、クエスは思わず目を閉じてしまった。しかし、いつまで経っても腕を襲う痛みは訪れてない。

そして、どこか聞き覚えのある気がする声が、響いた。

「うちの妹にナンパして来たって言う不審者を探していたはずだっ
たんだがな。

不審者は不審者でも、別の意味での不審者を俺は見つけてしまっ
たらしい」

クエスを襲う凶刃を、二本一対の小太刀で受け止めている青年が
そこにいた。

黒髪をした、グラールと同じ位の歳の青年が両手に小太刀を構えて立っている。

「はっ　もしかしてお前が『魔法喰い《マジックイーター》』か！？」

グラールはそう叫ぶと共に、日本刀と鞘を同時に振るう。

だが、それも容易く小太刀で捌かれ、目の前の青年の蹴りが顔を掠めた。

「ッ
」

「何のことだが知らないが、うちの町を余り荒らすな」

クエスにはわけがわからない。

位置的に背中しか見えないが、何故彼がここにいるのかという思考が高速の脳をめぐる。

念話で助けを呼んだ後、朦朧とする意識の中

「小太刀二刀御神流　高町恭也参る」

　　ただ原作キャラと引き合っただろう、転生者って。

　　そんな場違いなことを考えながら、クエスは意識を失い眠りについていた。

そして、何度目かになる剣撃が火花を散らす。

打ち合った回数は既に100を超えるだろう、状況はグラールの押され気味だった。

「ちっ、これが本当の剣術って奴か。

すげえな武士、いや剣士か！ ただの小太刀で俺の『サムライソード』を全て捌くとは！！」

グラールは高揚していた。

彼が夢にまで見た理想の武士の末裔が目の前にいるのだから。

「いや、間違っではないが……なんだその刀の名前は」

恭也からすれば戸惑いの嵐である。

きつかけは些細なこと。

妹である高町なのはが、ここ最近もなのだが今日は特に落ち込んでいた。

さすがに心配になり事情を聞くと、慌てて誤魔化そうとする。

それでも恭也はしつこく聞いた、大事な愛妹の悩みであるのだから。

結果、返ってきたのは所謂『ナンパ』されたとのこと。

ゆえに恭也は、斬って捨ててやるとばかりに小太刀を掴み夜のパトロールに出かけた。

まあ高町なのはが悩んでいたのはフェイト・テスタロッサの事であって、

ナンパしてきたという黒髪の少年の件は、咄嗟の誤魔化しに使うだけに過ぎないのだが。

無論、恭也とて小太刀を抜く気は無かった。

本来なら妹をからかうな、と一括する程度で済ませるつもりであった。

が、今夜ばかりは小太刀を携帯していて良かったと恭也は思っている。

何せ、時代錯誤な鎧武者（しかも外人）が日本刀をかざして少年を襲っているのだ。

ちなみにクエスが戦っているシーンを彼は見てはいない。

ゆえにクエスが魔導師だと気づくわけも無く、咄嗟に飛び出して行ったに過ぎない。

そして 今に至るのだが。

「強えな、武士の末裔！ 欠片も魔力を持たない身で何だっつてんだ、その反応は！」

ああ、俺は今本気で旦那に感謝している これだから戦いは止められねえ！！」

神速を使う恭也を、グラールは居合い抜きと呼ばれる抜刀術で迎撃する。

グラールは空を飛ばうとは思っていなかった それはフェアじゃない。

何より、この心躍る火花の散らし合いを止め、距離を開けるなど考えられなかった。

「おいおい、何だよその速さ！
本当に人間か疑わしいぜ、だがなかなかどうして 悪くない」

純粹な剣術という意味では、グラールは恭也に遠く及ばない。
筋は悪くないが独学という域を出ないグラールと、師範代という立場の恭也。

普通なら勝負にいなるはずが無い。

「ちつ これでも駄目か！」

不意をついた神速に反応するとは、余計にわけがわからない外人だぞ！」

だが、魔法というアドバンテージがグラールには存在する。肉体を強化し、デバイスの演算を利用した相手の動きの予測。

とはいえ、神速には辛うじて反応できるというレベルだが。

「しかし、これが本物の剣術か。

ああ俺の憧れは間違っていないかったっ!!」

歡喜の笑い声が、高らかに夜の公園に響く。

グラールの目は血走っており、地面に転がっているクエスの事など眼中にも無い。

「認めるぜ、高町恭也といったな。

俺はお前の首が欲しい、正直部屋に飾りたいぐらいだ!!」

グラールの日本刀が赤色の光を纏う。

勝負に出る気だと判断を下した恭也は、グラールの一挙一動を見逃すまいと目に力を込める。

「俺の名前はグラール・ベルヘライト、テメエを殺す男の名だ!

いくぜ武士の末裔、お前が勝ったら俺の首を持ってけ、俺が勝ったらお前の首は頂く!」

「いつの時代の人間だ……」

やたらハイテンションなグラールとは対称的に、恭也は若干引き気味だ。

だが張り詰めた空気は緩まない、赤く光る刃は弧を描きながら恭也へと向けられた。

「いくぜ、その首貰い受ける!!」

凶刃が煌く、恭也は迎え撃つために己が持つ最高の技を放とうと小太刀を握り、接近する。

2人の距離が急速に縮みながら、お互いがお互いに必殺の一撃を繰り出そうとし

横合いから放たれた水色の光弾が2人の間に着弾する。

グラールと恭也は即座に反応し、バツクすることで回避、2人の距離は再び開いた。

「そこまですよグラールさん。」

管理外世界の住民と何いきなりトラブルを起こしてるんですか」

横合いから現れたのは、杖を両手に持った青髪の痩せ気味の青年だった。

どことなく疲れた表情をしており、苦勞人気質だろうなと恭也は思った。

「おいおい、俺の楽しみを邪魔すんなよカロル。」

せつかく気持ち昂ぶっていたのに、興奮めだぜ」

「いや、魔力も持たない一般人と勝負とか、懲戒免職物ですよグラールさん。」

……個人的には一般人と認めたくないんですけどね、何ですかこの人」

「それが武士だ、生き様を貫くために生み出したある種の芸術を使う人間だ」

「ますます自分が惨めになりますよ、まったく。」

「とりあえず帰還命令です、グラール執務官、アースラが近くまで来ておりますので」

「なるほど、本当ならもう少しこの心躍る殺し合いを楽しみたかったが……。」

「しょうがない、今回は諦めるとするか。別段これで終わりってわけじゃないしな」

グラールとカロルの足元に魔法陣が出現する。

恭也は『もう何でもありか』と、混乱の余り逆に冷静になっていた。

「それではご迷惑お掛けしました。」

「魔力を持たぬ身でありながらその強さ、正直羨望と嫉妬に値します」

「あ、ああ……どうも」

恭也は礼儀正しく深々と頭を下げる痩せ気味の青年に、戸惑いながらも言葉を返す。

「いつの間にか倒れていた小学生は消えている件も含めて、恭也にはもう何もわからない。」

光と共に目の前の男たちは消え、夜の公園は平穏を取り戻した。
恭也は狐に包まれたような感覚に頭を悩ませながらも、帰路に着く。

「何だったんだ、いつたい……」

その問いには、おそらく魔法少女も答えられない。

そして、長い一日が今日もまた終わる。

【クエス・ベルリネット vs グラール・ベルヘライト 1戦目】

勝者 グラール・ベルヘライト（圧勝）

【高町恭也 vs グラール・ベルヘライト 1戦目】

第三者乱入のため無効試合

Ep・16：悩みは投げ捨てる物（後書き）

助けに現れたのがロリコンだと勘違いした人拳手。

見事に騙されてくれたなら幸いです、いつでもロリコンが来ると思うなよ！

でも結局ロリコンの影響……またお前か。

とりあえず理由付けに困ったらロリコンの仕業にしとけば、本当に通じてしまうから困る。

というわけで主人公、2戦目も黒星。

悩みを解決せず、開き直った拳句この仕打ち……これも成長になるのでしょうか。

そして本命はKYOYAとグラールの戦いです。

グラールのキャラを考えたときから、この組み合わせしかないと確信していました。

……でも多分KYOYAの出番は今回だけです。

もう君は忍さんとイチャイチャしていればいいと思うよ、見たいな。

それと一番悩んだのが視点移動。

未だに第三視点と、一人称視点の書き分けが上手くできません。

読者様が表現にアレ？と首を傾げたとしたらそのせいですが、ホント申し訳ない。

ライトノベル作成法を見てみたら、視点移動は究極のタブーだとか。

タブーに片足どころか、全身突っ込んでます。
この作品の文章力がアレなのはきつとそのせい……。

それでは、本日は此処まで。

次回、とうとう正統派主人公クロノ君の出演、だといいなあ。

Ep・17：裏側の話

第97管理外世界『地球』

その遙か上空、宇宙空間に場違いな戦艦が存在していた。

時空管理局・巡航L級8番艦『アースラ』

この世界で発生した次元震の調査のためにやって来た管理局の船である。

「A級ロストロギア『ジュエルシード』」

次元震すら可能にする祈祷型デバイスの原型、か」

資料を読み上げている少年の名はクロノ・ハラオウン。

時空管理局の執務官であり、ここアースラでは『アースラの切り札』とも呼ばれている。

今、彼の頭を悩ませている案件こそ、ジュエルシード回収任務である。

巡航中に次元震を感知したアースラはすぐに発生源と思われる世界に向かう事になった。

その時クロノは、知り合いである引き籠もりの少女に心当たりを調べるように要請した。

本当なら情報だけではなく力も貸して欲しかったのだが、クロノはもう半ば諦めている。

何せ1ヶ月に20時間しか外出しないと公言し、律儀に守り続け

ている少女である。

そんな彼女、山中あげはから届いた資料を、クロノは手元に持ち読み上げた。

周囲には補佐であるエイミィや艦長のリンディを含んだアースラスタッフが立っている。

「単体で次元震を起こせる代物ですが、これが21個、現地にはら撒かれたようです。」

ちなみに封印は解けており、現地で暴走体となって被害を出している可能性が高いと」

「そう、封印が……厄介ね」

「はい、輸送船は何者かによる攻撃で墜とされた可能性が高いとも書かれています。」

つまりこのジュエルシードを狙う何者かが関わっているという事、急いだほうがいいと」

「でもクロノ君、正直戦力が足りないよ。」

次元跳躍魔法が使える魔導師相手じゃ、いくらクロノ君でも分が悪いかも」

エイミィの放った言葉にクロノは眉を潜めた。

次元跳躍魔法は高ランク魔導師の中でも一握りの人間しか扱えない魔法だ。

それに対するクロノは総魔力量は兎も角、他の才能が乏しいと言

われている。

今までは戦術と魔法の組み合わせで補ってきたが、今回も通用するとは限らない。

おそらく正面戦闘になったとしても、勝率が高いとはいえないだろう。

さらに考えるのなら、敵はジュエルシードをいくつか手に入れている可能性がある。

それによる強化は未知数であるといわざるを得ない。

資料によれば無害な小鳥を巨大な怪鳥（Aランク相当）へと変貌させるほどの代物だ。

もしジュエルシードにより強化された高ランク魔導師が相手になった場合、

クロノの勝率は高くないだろう、例え武装隊の援護を受けていたとしても。

「その事について、私から本部に打診して起きましたが」

口を挟んだのは艦長であるリンディ・ハラオウン。

とても1児の母とは思えないほどの外見をしている。

「偶然にも、別任務で現地近くに来ている魔導師たちと合流しるとの命令を受けました。

彼らの任務を邪魔しない範囲での条件付で、2名こちらに回してくれるそうです」

「その2名のスペックは？」

「空戦AAAランクの執務官が1名。
その補佐で、支援型の総合Aランク魔導師が1名です」

周囲のスタッフが歓喜の声を上げる。
AAAともなればかなりの腕であり、執務官となればエリートである。

総合Aランクの魔導師の方も、彼らが上げた歓声の原因のひとつだ。

支援型の魔導師というのも実はかなり貴重だ。

大抵の魔導師はまず攻撃魔法を磨くため、支援魔法の錬度は低いのが常である。

そして数少ない支援型魔導師はこの部隊でも需要が高いため、たらい回しにされる。

つまり常時配属ができないのだ、実際今までアースラに支援型魔導師が配属されたことは無い。

「その2人を実際に見てみないとわからないけど、これは期待できるよ！」

「ああ、問題はその2人の人格かな。

できれば人を見下すような、嫌な奴じゃなければいい」

クロノの脳裏に浮かぶのは1人の執務官。

あげはという少女が『キモい』と毒を吐くほどの性格の悪さだったという男。

名前はなんといつたか、と思い出そうとして 思い出せなかつた。

まあそんな人間は稀だろうと、クロノは思考を止めた。

ちなみにその『キモイ』執務官の男はとある戦闘機人に殺されているが、それは別の話である。

「それは何ともいえないわね……。」

エイミィ、いつもの胃薬を用意しておいてくれる」

「はいはい、艦長」

「ちょっと待て下さい、母さ……艦長!!」

もしかしなくてもその胃薬は僕用ですよね!？」

そんな絵に描いたような展開はありえませんが、とクロノは言い切った。

その言葉を聞き、その場にいた彼以外の誰もがこう思った
『何という前振り』と。

2人の魔導師がアースラに着任する2日前の出来事である。

海鳴市から少し離れたある町。

そこには、月村家、バニングス家には劣るものの、十分に豪邸といえる建物がある。

とある名の知れた財産家が住む豪邸だったのだが、不気味なほどの静けさを保っていた。

元々人付き合いの多い家ではなかったため、隣人達は不審に思っていない。

そんな豪邸の門をくぐり、扉に向かって足を進める男がいた。

年齢30を過ぎているであろう、巨漢の男　名前をミラというだった。

彼はそのまま扉を開き、物珍しそうに館内を見渡した。

いくらか簡素な物もの、緻密にデザインされた壺が割れていた。

額縁に飾ってあったであろう名画は、赤い液体によって塗りつぶされている。

そして所々に転がる、おそらく使用人であったであろう人間の残骸をミラは踏み潰した。

「ふん、どうせあの男の仕業だろう」

鼻を鳴らし、ミラは大広間のほうへと足を運ぶ。

道中、いくつもの人間だった物が転がっていたが、彼は無視した。

大広間へとつながる巨大な扉の前に、彼はたどり着く。
煌びやかに装飾された扉を、躊躇せずミラは開いた。

地獄絵図が広がっていた。

元から赤かったであろう絨毯は、どす黒い赤に染められており。
さぞ高価であっただろう飾りは、無残にも地面に砕け散っている。

そして、30を超える使用人だった者の軀が無造作に捨てられていた。

ある者は腕を、ある者は足を、またある者は頭が無かった。

臓物をぶちまけて絶命している男もいれば、四肢を失って絶命している女もいる。

心臓を打ち抜かれ倒れている老人もいれば、脳髄を外気にさらしている子供のものもいる。

血溜りはあらゆる場所にできており、むせ返る様な鉄の匂いが充満している。

あたりに散らばる肉片は、もはや誰の物であったかも判別できないだろう。

常人が見れば発狂してもおかしくない地獄がそこにはあった。

あまりに醜悪で、残虐で、悪夢のような光景。誰もが目をそむ

けるほどの所業。

だがミラは特に困惑した様子も無く。
比較的血で濡れていないソファ―に腰をかけた。

「お前は有能だが、やる事が派手過ぎる。

現地に拠点を用意しろと命じたはずだが、まさかこのような手段
を取るとはな」

ミラの声に答えるように、2階から1人の青年が降りてくる。

まだ幼さを残す、優しげな顔の青年だった。この惨劇の下手人
であるのだが。

「これが一番手っ取り早いからね、この館の住人には死んでもらっ
た。

それに貴方は、無駄な犠牲を厭うなんて殊勝な性格ではないだろ
う」

「ふん、確かに 犠牲など最終的に救われる数より少なければい
いだけの話だ。

一応聞いておくが、この世界の司法組織に勘付かれる様な真似は
しなかったのだろうか？」

「無論、僕がそんなへまをする訳ないだろう。

結界を張って外界から隔離した後、皆殺しにしただけだ」

「目的のためには手段は選ばない点は私も評価している。

だが、なぜ此処なのだ、些か現場と離れ過ぎているのではないか
？」

「そう、現地にも2つほど拠点として有用な館はあったさ。
だがそこには幼女達がいたんでね、次に現場に近い此処に決定し
ただけのこと」

「相変わらずのようだな、ミハエル・マグヌス。」

その偏った嗜好さえなければ暗部でももつと評価されるだろうに」

「むさ苦しい男や無駄に歳を食った女たちからの評価なんて僕はい
らない。」

評価されるなら、相手は穢れを知らない幼女が良いと思うのは当
然だと思っけどね」

さも当たり前のことのように、ミハエルは語る。

この館の住人が悲劇に見舞われることになったのは、単に幼女が
いなかったからだと。

なお、彼があげた候補地は、月村家とバニングス邸である。

もしもそこに彼女らがいなければ、この館に起きた惨劇がそこで
繰り広げられただろう。

「お前の嗜好などどうでも良い。」

それで 他の奴らはどうなっている？」

「ああ、2階は比較的綺麗だからそこに待機させているよ。」

無駄に部屋もあるようだし、このゴミを見せても動じない保証は
ないからね」

「私がこの程度で膝を折るほどの軟弱者を選ぶはずが無かるう。」

さっさと全員を呼べ、このゴミを早く片付けねば機材も設置でき
ん」

念話で呼ばれた暗部の隊員たちは、特に動揺することも無く亡骸を片付けていく。

暗部出身の彼らからすれば、この程度の光景は日常茶飯事なのである。

しいて言えば、この館の主が飾っていたであろう日本刀を、目を輝かせて見物する赤髪の青年や、

ため息と共に犠牲者達を律儀に庭に埋めて、手を合わせている瘦せ気味の青年がいたぐらいだろう。

そして、隊員たちは掃除を終えると2階に戻り。

見違えるほど綺麗になった大広間には4人の男達が残された。

予言対策部隊『トライデント』を指揮する筋骨隆々の巨漢『ミラ・ケーニツヒ』

元次元犯罪者でありながら、その有能さから暗部に配属された青年『ミハエル・マグヌス』

管理局のエリート執務官であるが、性格に難ありと言われる『グラール・ベルヘライト』

管理局のあらゆる部隊をたらい回しにされる集団戦の天才『カール・ランバート』

「自己紹介、などという馴れ合いは私達に相応しくあるまい。

グラール、我らより先行していたからには、何らかの成果はあったか？」

「聖王クローンを確認した。」

実力的には凡百もいいところ、あんなに捕らえる価値もないぜ」

聖王クローンとの言葉に数名が顔を顰めた。

次元世界において信仰されるほどの対象だからだ。

「ふん、単体の戦力などどうでもいい。

大事なのは、そのクローンが『ゆりかご』を操作できるかの一点のみ」

「難しい事はわかんねえけど、旦那が言うのならすぐにも捕まえてくるぜ。

あの程度なら楽勝だといいたいが、仮にも聖王だからな 化ける可能性もある」

グラールは聖王クローン、クエスとの戦闘を思い返す。

それなりの実力は持っているようだったが、グラールからすればお粗末な物だった。

おそらく勝つこと自体は容易いだろう。

だが歴戦の勘がグラールには告げていた、化ける可能性がある。

そして、できるのなら化けたソイツと殺し合いたい。

「ではクローンのことは貴様に一任する。

そこまでの大言を吐いたのだ、しっかりと任務は果たせ、グラール」

「承知、主の命令を全うする事こそ武士の本懐だからな」

ミラはその言葉を聞くと、次に議題に移る。

「次だが、今のところ『魔法喰い』以外に異邦人だと思われる奴は発見できていない。」

次元漂流者を収容している施設の担当者も、めぼしい人物はいないと報告が来ている。」

すでに管理局内で、『魔法喰い』は異邦人として確定されていた。第一級捕縛対象として、表の局員達にも通知されている。

「とりあえず奴をA級次元犯罪者に格上げをするのは決定済みだ。」

『オルタ・スカリエツィ』と手を組んでいる以上、理由としては当然だろう。」

「ああ、その事でちょっと意見があるんだ。」

手を上げたのは、茶髪の青年ミハエル。

無言で続けると促すミラに従い、彼は言葉を続けた。

「実は僕は『魔法喰い』とそれなりに交友があるんだ。」

あの独特な存在感は今でも思い出せるよ　まだ生きていたとはね」

「交友か、まさか貴様も異邦人ではあるまいな」

「冗談はよしてくれ、といっても信じないだろう。」

まあ僕は戸籍もあるし、貴方もそこまで疑ってはいないはずだ」

ミハエルは一息を付くと、机に置かれたコーヒーを口にした。

「まあ証拠もない個人的な意見ではあるのだけど。
……彼と同じような、独特の存在感を持つ存在を、僕は知っている」

「ほう、興味深いな。

確かに根拠もない話だが、聞いてみる価値はあるだろう」

疑惑の目で見つめるミラに、ミハエルはため息をついた。

慎重なのもいいがもう少し信頼してくれてもいいだろうにと、内心で呟く。

「僕がその存在感を感じしたのは偶然だね。

気になって近づいてみると、それはもう見目麗しい幼女だったんだ」

ミハエルはその出会いを思い出す。

管理世界では珍しい黒髪の少女、圧倒的な魔力を秘めたその存在を。

かつてミハエル・マグヌスは次元犯罪者であった。

質量兵器と魔法を駆使し、多くの人間を手にかけて傭兵魔導師。

その中には管理局員も含まれており、当時はB級次元犯罪者として指名手配されていた。

そんな彼がある世界で偶然、一人の少女を見かけた。

黒髪をセミロングにした、鼻歌を歌って道を歩く、年齢にすれば8歳ぐらいの少女。

その世界で指名手配されていることなど気にせず、ミハエルは声をかけた。

仮に少女が管理局員を呼んだところで返り討ちにする自信が彼にはあった。

そして、少女が管理局員であったとしても組み伏せる自負が彼にはあった。

だが、蓋を開けてみればどうだろう。

彼女は管理局執務官であったばかりか、ミハエルを圧倒する実力の持ち主だった。

技術では、あるいはミハエルが上回っていただろう。

騙し合い、罫を張る技量において、少女はミハエル以下だったのは間違いない。

だが そんな小細工を力押しで突破する実力が、少女にはあった。

『ときめいて死ね!』

ミハエルはあっけなく砲撃魔法で吹き飛ばされ、捕縛された。

その少女の姿は、今でもミハエルの脳裏に焼きついている。

彼好みの幼さを残す容姿、穢れを知らないかのように白いバリアジャケット。

彼が頼る小細工を、力押しで破壊するほどの胆力と堂々とした立ち振るまい。

牢に送られ、暗部にスカウトされてからも忘れたことはなかった。それを恋と呼ぶには歪み過ぎているだろう、だがミハエルは思ったのだ。

その少女を、自分の物にしたいと。

「その少女が確かに、『魔法喰い』と同じ独特の存在感を放っていたよ。」

あの存在感は言葉にできないな……あえて言葉にするのなら「弾こうとする力に、抗い続けているような存在感。」

今にも消えてしまいそうなのに、その場に踏ん張っているような力強い存在感。

「ふむ　なるほど。」

証拠にはなりえない妄言だが、お前の勘は信用できるから……その小娘の名は？」

参考程度に聞こうと、ミラは耳を傾ける。

そんな彼に答えるために、ミハエルは脳裏に焼きついた名を詠うように呟いた。

「山中あげは」

リアクションは様々。

グラールは『ああ、どっかで聞いた覚えがあるような……』と呟

いており。

ミラは、『なるほど、可能性としてなくも……』と一人で頷いている。

そして、カロルは顔を言葉も出ないのか、口を開いたまま啞然としている。

「ふむ、以前此方にスカウトしたな。

それで『予言』の内容を知り、自分が狙われていると考え、安全のために無限書庫に引き籠もった……こじ付けのようだが、辻褄が合わなくも無い」

「へえ、下らんと一蹴すると思っただけだね」

「お前の勘は使えることを私は知っている。

时期的にも一致する、疑惑の域を出ないが頭から否定する材料もあるまい」

考えを巡らせているのか、眉間に皺を寄せているミラ。そんなミラの思考を遮るようにカロルは声を荒げた。

「ちよ、ちよつと待ってください!!」

今までも基本的に会話に参加しなかったカロルの声に、全員が内心驚く。

「彼女は管理世界の出身で、戸籍もあります。

異邦人だというのならその時点で矛盾するはずです!!」

「いや、そんな物は簡単に打破できる問題だと思っぞ。そうだな……例えば、擬態する能力を持っていれば、簡単に成り代わることも可能のはずだ」

カロルの言い分を、ごく自然にグラールが横合いから否定した。そしてその言い分はもつともであると、カロル自身も嫌というほど理解できた。

『魔法喰い』の持つレアスキル『亡骸採集』クリスタル・アブソープ

管理世界の歴史において発現した記録のない、この稀有な希少技能の存在を彼らは知っている。

もし『魔法喰い』が異邦人ならば。

他の異邦人も、彼のように奇怪な希少技能を持っていたとしてもおかしくない。

例えば……殺した相手の姿形へと擬態できるような能力だとか。

「8歳にして空戦S+、思えばもつと疑うべきだったな。

確かにこの小娘が異邦人でない証拠はない、ここまでの戦闘力を持つのなら……」

「いえ、そんな事を言ったら管理世界中の人間全てが疑惑の対象になります！

そんなことを考え出したらきりがありません、考えるだけ無駄です」

「ふむ、確かにその言い分は最もではあるが……」。

何故そこまでこの小娘を庇う、カロール・ランバート」

カロール・ランバートはごく普通の家庭出身の魔導師だ。兄は天才の名を欲しいままにするエリートの管理局員。そんな兄に追いつこうと、彼は血の滲む様な努力を重ね……挫折した。

何を鍛えようと天才には届かない凡才。

他人の援護に関してのみ兄を超えることができたが、それは彼の望んだ才ではなかった。

『器用貧乏』 『他者を利用して初めて一流』

そんな罵声を浴びせられながら、彼は部隊をたらい回しにされ続けていた。

そんな時である、彼はある執務官の補佐をすることになった。

カロールは執務官補佐の資格を持っていなかったが、その執務官のご指名らしかった。

『山中あげは』

当時名を馳せていた最年少執務官。

カロール・ランバートは山中あげはを補佐することになった。

初めての出会ったときの印象は、憐れみ。

歳相応に生きられない、大人の都合に利用されるだけの小娘だと彼は思った。

そんな印象は、他の誰でもない彼女自身によって踏みにじられることになったのだが。

風評通り、山中あげはは天才だった。

魔力だけでなく、戦術から頭脳、演算能力に情報整理。

単純な戦闘力では凡才の域を出ないカロルが、嫉妬する気すら失うほどの万能の才能。

カロルが補佐する部分など見当たらない少女。

それなのに彼女は、何故かカロルによく頼っていた。

書類仕事や情報収集だけならまだしも、朝食の用意から私物の買い物、部屋の片付けまで。

彼女は、自分がやった方が絶対の早い物まで平気で押し付けてくる、駄目な上司だった。

その癖、カロルがどれだけ遅くても平気で礼を言う。

天才の癖に、凡才に頼りきりの彼女を悪く言う物も当然いた。

その陰口が彼女の耳にできるだけ入らないよう、カロルは悪戦苦闘することになるのだが。

一言で言えば、山中あげはは子供だった。

『私は、主人公になる！』と公言するような、お気楽小娘だった。仮にも年上の彼に向かって『カロルちゃん』と、無礼な呼び方を続ける少女だった。

お人好し気質のあるカロルは焼かなくて良い世話まで焼き続け、調子に乗ったあげはがさらに頼ってくるため、さらに面倒を見るという悪循環。

『薄幸のカロル』と呼ばれるに相応しい活躍を、1年近く彼は続けた。

カロルからすれば、あげはは『出来は良いが世話の焼ける妹』だった。

自分が羨み、目標とした兄すら凌ぐ天才……の割には自分に頼ってくる変人。

そんな彼女は、なんて事のないある日、急に元気を失くした。

カロルがそれとなく問いただしてみても語らず、彼女は黙々と仕事をこなし続けるだけの日々。

そして彼女は執務官を辞め、無限書庫という古い部屋に引き籠もる事になる。

結局自分は肝心なところでは頼られないとカロルは落ち込む間もなく、次の部隊に配属された。

別れの言葉はただ一言、『お疲れ様』とだけ。

そして、おそらくは彼女の自作であろうストレージデバイスを彼は贈られた。

彼女らしく、本職で無い癖に無駄な才能を発揮して作ったであろうデバイス。

そこらの市販品を凌ぐ性能と、カロルが使いやすいように設計されたデバイス。

『高速演算魔術杖AAG』

それを受け取り、カロルは別の部隊で忙殺されることになった。彼は忙しさの中でも彼女の心配を続けたが、結局何も出来ず今に至ることになる。

なお、これは彼の知らないことだが。

贈られたデバイス『AAG』は『Affection And Gratitude』の略である。

意味は『感謝と親愛』、それが如何なる意味を示すのか語るのは野暮というものだろう。

「庇うわけではありません。

僕、いや私は『山中あげは』の補佐をやっていた時期があります」

へえ、と意味ありげにミハエルが笑うもカロルは無視した。

「その経験から言わせてもらえば、彼女に世界を滅ぼす意思はありません」

それは根拠の無い感情論だった。

ミラは眉を潜めながらも、カロルの表情を注意深く観察し言葉を紡ぐ。

「ほう、ならば聞こう。

何故彼女は、偶然にも『予言』を知った後、無限書庫に引き籠もったのだ？」

カロルは思考を高速で巡らせる。
否定する材料は無い、辻褄も一応合う。
だが、世界の破滅なんて目的を彼女が持っていないことなら確信
できる。

「それは彼女に聞いて見なければわかりません。
ですが、逆に言えば彼女が何か、世界を滅ぼす行動をしましたか
？」

「そこだよカロル、僕は1つ疑問に思っているんだ。
何故、ろくに使われてもいない『無限書庫』に引き籠もるんだい
？」

会話を割り込んだのはミハエル。
カロルはミハエルを睨み付け、ミハエルはカロルを鼻で笑う。

どうやら2人は、お互いがお互いを好きになれないようだ。

「執務官を辞したとはいえ、一応管理局員です。
何らかの仕事として、偶々知った無限書庫という存在を利用した
だけかと思いますが」

「そうとも取れるね、だけど僕はもう1つの可能性を示唆するよ。
例えばそう　無限書庫内で得たデータを仲間達に流すとかね」

「それは暴論、証拠も根拠も無い言いがかりでは？」

「どうかな、僕はまだ疑問に思っていることがある。
無限書庫の整理と称して引き籠もって、もう5年になる。」

客観的に考えてくれ、あの才能の持ち主が5年も掛けて整理できないと思うかい？」

カロルは言葉に詰まった。

そう、カロルの記憶が正しいのなら、無限書庫は当の昔に整理など終わっているはずなのだ。

それくらい平然とやってのける才能の持ち主だ。

それが、依然として無限書庫は昔と変わらず埃に埋もれたまま。

だが

「確かに、彼女なら整理なんて当の昔に終わることが出来る。

ですが、こつも考えられます 意図的にサボっているとも」

「へえ、その根拠は？」

「これは経験からの台詞ですが、彼女は相当な怠け者です。

自分でやれば30分で済む書類を、人に押し付けて3時間待つぐらいには」

よく言えばマイペース、悪く言えば怠け者。

興味の無いことには、その才能を使いもしない。

「そうだな、今の段階で突き詰めるのは早計過ぎる。

あの小娘は、かのハラオウン一家のお気に入りという情報もある。確たる身分と家庭を持っている以上、納得の行く証拠が無くては捕まえることすら出来ん」

ミラの言葉は最もだ。
暗部とはいえ、そこまで好き勝手できるわけではない。

疑わしきは捕らえるが暗部の理念だが、強引過ぎれば暗部の存在そのものが潰される。

暗部は必要悪、管理局に必要な組織だ。ならばリスクはできるだけ避けねばならない。

「そこでだ、ミハエル・マグヌス。

お前は『異邦人』と『山中あげ』の繋がりを見つけて見せる」

「了解」

ミハエルは敬礼と共に、転移魔法を発動。

観客がいれば、優しそうな青年と表現されるであろう彼は姿を消した。

「グラール・ベルヘライト、カロール・ランバート。

お前たち2人にはアースラへの出向を命ずる」

「アースラて事はハラオウンの船じゃねえか」

「その通りだグラール、お前達は表向き『ジュエルシード回収』の応援として向かってもらう。

無論手を抜くな、ジュエルシードは危険だ。何としても敵から奪い返せ……殺してでもだ」

「表向き、ということは裏があるんですね」

「そうだ、お前達には何としても『聖王クローン』を捕縛してもら

う。

生きてさえいれば構わん、上の連中は私が説得する。無理しても身柄を確保せよ」

グラールとカロルは敬礼した後、ミラの前から立ち去った。

広間に残ったミラは1人、すっかり冷めたコーヒーを口にする。

はたして、何人が生きて帰ってくるか。

そんな疑問を抱きながらも、ミラは冷たいコーヒーを飲み干した。

EP・17：裏側の話（後書き）

企画キャラ3名の立ち位置表明。

前回はグラール中心だったので、今回はカロルとミハエルの話。残り2名はAS編になりそうです、申し訳ない。

しかしミハエルの性格が予定とはずいぶん違った感じに。

タカセ様、こればかりは水野の力量不足です、本当に申し訳ない。

ご意見陳情、『こんなミハエルじゃねえよ』という意見があれば
お願いします。

カロルとミハエルの仲は険悪。

きつと本能的な部分で合わないんです。

それではまた次回に会えることを祈りつつ

オリキャラ紹介(前書き)

転生者だけでなく、敵側も追加。
ネタバレ部分は?で表示しております。

オリキャラ紹介

【転生者組】

『クエス・ベルリネッタ』（性別：男 年齢：9歳）

金髪オッドアイの少年、高町なのは達と同じクラスに在籍中。

前世の名前は『×× ××』、記憶を失っており、前世とはもはや別の人格と思われる。

仲間内では一番の常識人と自負しているが、これはこれで変わり者。

度胸や覚悟も無く、悩みだすと深みにはまり、優柔不断で女々しい性格。

『記憶喪失』 『クローン』 『古代王族の血持ち』 『強力なレアスキル』

『金髪オッドアイ』 『巻き込まれ体質』 『女装の似合う中世的な美形』

と、かなり痛い外見と設定をしており、本人はとても気にしている。

魔力：A 魔力光：虹色 魔法形式：ミッド&ベルカ複合式 魔

導師ランク：空戦A

・レアスキル『聖王の鎧』

古代ベルカ王族が遺伝子レベルで所有している防衛能力

本人の力量不足のためか、クローンゆえの劣化か、オリジナルには到底及ばない。

Aランク以下の魔法をある程度無効化できる、Aランク以上の魔法は威力を緩和する。

・使用デバイス『ネームレス』

レリックを内蔵したインテリジェントデバイス。

強度はアームデバイス並みでありながら、かなりの演算能力を持つ。

特徴は内蔵したレリック内の魔力を引き出し、制御することで使用者を補助する事。

制御しているレリックを意図的に暴走させることで、町を火の海にする程の自爆が可能。

『一梨』いちり 『一梨』いちり (性別：男 年齢：15歳)

黒髪の少年、紛争中のある管理世界の孤児。

前世の名前は『一梨』、『物心ついたときには既に捨てられていた。

幼女趣味の変態であり、自他共に認めるロリコン。

前世がサラリーマンだったためか、スーツとネクタイを私服にしている。

『来る者皆殺し、去るもの追わず』が信念、殺人を何とも思っていない殺人鬼。

『異邦人』に認定されており、管理局に指名手配されている。

B級次元犯罪者『魔法喰い《マジックイーター》』、客観的に見て間違い無く悪人。

転生者の中において全員が最強と認める実力の持ち主。

魔力：SSS 魔力光：灰色 魔法形式：近代ベルカ式 魔導師
ランク：陸戦SS

・レアスキル『クリスタル・アブソープ亡骸採集』

人間の死体からリンカーコアを奪い、吸収する技能。
吸収し続けて来たため、彼の魔力は人間の限界値であるSSSランクとなっている。

ただし、彼自身は元々魔導師ではないため、魔法の才能はほぼ0といってもいい。

・使用デバイス『クレセント』
ナイフ型のアームデバイス。

強化魔法の補助が主な役割、切れ味と頑丈さにおいて右に出るデバイスはない。

カートリッジは搭載されておらず、特定の魔法しか使えない彼専用デバイス。

・次元転移魔法用デバイス『無名』
ジャミング機能搭載、転移魔法が使えない彼のために作られたデバイス。

長距離転移は不可、長距離の場合いくつかの世界を中継しながら転移しなければならない。

『羽間 詩』^{はひま うた}（性別：女 年齢：14歳）

紫髪ポニーテールの少女、常に白衣に身を包んだ闇医者。

ジェイル・スカリエッティのクローン『オルタ・スカリエッティ』
でもある。

仲間内では前世の名前で、その他の人間には『オルタ・スカリエッティ』の名で通している。

裏社会で活躍する無免許の闇医者。

前世が医学部学生であったため、ジェイルに匹敵する才能を医療方面に特化させている。

己の腕に誇りを持ち、自分の作品を芸術品として扱う。 仲間達のデバイスは彼女の作品。

A級次元犯罪者として指名手配されている。

仲間たちには『ドクター』ではなく『ドクターちゃん』と呼ばれ親しまれている。

人間の外見に興味はほとんど無く、臓器に性的興奮を覚える『臓器フエチ』

魔力：A A 魔力光：薄い青色 魔法形式：ミッド式 魔導師

ランク：空戦A A A +

・使用デバイス『蒼き読み手』^{スカイリーダー}

魔導書型のストレージデバイス。

登録された魔法を、デバイスだけの演算で発動させる事が特徴。

使用者は魔力の提供だけをしていればいいという、ある意味高性

能のデバイス。

『山中 あげは』(性別：女 年齢：15歳)

黒髪セミロングの典型的な日本人の様な容姿の少女。
転生者の中で唯一、前世と同じ容姿、名前、家族を持つ自分に転生した。

8歳の時点で空戦S+という、破格の戦闘力を持つオールラウンダー。

また執務官試験を一発合格するほどの頭脳と情報処理能力を持つ『万能の天才』

転生者内でも安定した戦闘力を持ったため、場合によってはロリコンより役に立つ。

一時期は『転生オリ主キター』な状態だったが、その当時のことは黒歴史認定された。

現在は執務官を辞し、無限書庫に引き籠もり、『外出は1ヶ月に20時間』と公言している。

管理局内での呼び名は『残念な天才』 『無限書庫の引き籠もり』 『最年少執務官(笑)』

魔力：S+ 魔力光：白色 魔法形式：ミッド式 魔導師ランク：
空戦S+

・使用デバイス『？』

『真中あたり』（性別：女 年齢：13歳）

白髪の戦闘機人少女。

地球で『浮船 葵』という一般人として転生したが、次元漂流の拳銃管理局に拉致される。

その時戦闘機人として改造されるも失敗、ISも発現しない粗悪品として処分されかけた。

しかし処分寸前でロリコンに救出され、ドクターちゃんに作り直される。

ISを持たないため、質量兵器などの近代装備で戦闘力を補うことになった。

体内内蔵のスパコンによるハッキングや情報操作を得意とする。
正体不明のハッカー『トリックスター』と、経歴不明の情報屋『』の側面も持つ。

長台詞を好む皮肉屋、しかし根はロマンチストな乙女。

魔力：C 魔力光：緋色 魔法形式：無し 魔導師ランク：総合

S -

・使用デバイス『電子の魔導師』
ナスカ

厳密にはデバイスでは無く、超高性能のスーパーコンピューター。

破格の演算処理能力を持ち、個人デバイスから政府コンピュータまで掌握できる。

・『ミスト』

魔力によりコントロールが可能な細菌を作り出す機能。

対策をしていない魔導師に感染すれば、およそ数分で全身麻痺に至る。

【管理局組】

『ケイト・グランフィールド』（性別：男 年齢：23歳）

真面目に研鑽をつめば天才だった青年。

魔法の才を鼻にかけ、格下の相手を見下す事が特徴だった。

本人は気づいていないものの、管理局でも有数の嫌われ者。

非魔導師を見下し、自分こそが英雄と信じて疑わなかった典型的なやられ役。

なお、彼は『妻』という存在を自分の顯示欲を満たす装飾品としてしか見ていない。

その装飾品として、当時名をはせていた『山中あげは』に交際を申し込むも玉砕。

魔力S+という才を持ちながら、空戦AAAランクでしかなかった才能に頼り切った凡人。

見下しきっていた低ランク魔導師（戦闘機人）により殺害される。因果応報、自業自得、捨て駒としてスカウトされたことを知らな
いまま最期を迎えた。

魔力：S＋ 魔力光：ライトグリーン 魔法形式：ミッド式 魔
導師ランク：空戦AAA

・使用デバイス『グランブリート』
財産家の両親に誕生日プレゼントとして贈って貰ったインテリジ
エントデバイス。

主人を諫め、忠告したりする事も無いまま道具として行動し、疑
問すら抱かなかった。

主人の死後、『真中あたり』によって証拠隠滅のために原形をと
どめないほど破壊された。

『ミラ・ケーニツヒ』（性別：男 年齢：30代後半）

黒髭が特徴の巨漢、空戦Sランクの騎士。

時空管理局の暗部の隊長であり、接近戦において一流の武人。

暗部の人間同様、管理局に籍は無く、表向き管理局員ではない。

悪を憎み、世界を守るために悪を持って善をなす信念の武人。

犯罪者を捕らえれば拷問してでも情報を吐かせ、殺すことすら躊
躇わない。

また彼本人が管理局に指名手配されることはないため、些か強引

さが目立つ部分もある。

テロリストが潜伏している町を皆殺しなど、残虐非道を地で行く。救われる人間が、犠牲になる人間よりも多いならどんな事でも是とする。

犠牲を最小限に収める、といった考えは無く、上層部と結託して信念を貫く。

現在、右腕をロリコンに奪われたため、義手を製作中。

魔力：A A 魔力光：鼠色 魔法形式：近代ベルカ式 魔導師ラ
ンク：空戦S

・使用デバイス『無銘』

大銃型のアームデバイス。

貫通力と破壊力に特化した、パワータイプのデバイス。

『グラール・ベルヘライト』（性別：男 年齢：17歳）

真紅の髪をした管理局執務官、予言対策部隊『トライデント』に出向中。

空戦AAAという稀有な才能を持っているが、自他共に認める変わり者。

管理世界の生まれだが、とある管理外世界の騎士のような立場『武士』という物に憧れている。

そのため、取り寄せた資料を基に作り上げた武士の魂『日本刀型デバイス』を酷く愛用。

そのデバイスの利点『切断力』を利用した戦闘スタイルでどんな強固な防御魔法も切り裂く。

戦闘スタイルは接近戦寄りのオールラウンダー。

高速で動く相手には鞘からの高速抜刀術『居合い抜き』を使用する。

【戦闘で殺害した相手の首を奪う】という癖さえなければ、ストライカーになれていた逸材。

なお、奪った首は防腐処理を施した後、自室に飾っている。

武士に心酔しているものの。知識は偏っており、本質とはかなりずれている。

一言で言うと『なんちゃって武士』

魔力：A A A 魔力光：赤色 魔法形式：近代ベルカ式 魔導師
ランク：空戦A A A

・使用デバイス『サムライソード』

日本刀+鞘のストレージデバイス。

無駄なギミックを取り払い、性能よりもデザインを重視している。強度はアームドデバイスに劣るが、相手の攻撃を受け流す彼にとっては些細な問題。

『カロル・ランバート』（性別：男 年齢：19歳）

青髪をした痩せ気味の青年。

予言対策部隊『トライデント』に出向してきた管理局員。

攻撃魔法の威力は低い物の、味方の援護にかけては超一流の天才。

不幸と両想いと言われるほどの巻き込まれ体質。

管理局の闇とすべきものをそれなりに見ており、管理局を信頼はしていない。

全盛期（黒歴史）引き籠もりちゃんの補佐官をしていた時期もある。

破格の才能を身近で見て、年上のプライドが引き裂かれたこともあったとか。

生来のお人好し気質から書類仕事や事後処理、情報収集に厄介ごとの肩代わりまで引き受けていた。

また、当時年相応に生きれない彼女の心配をしていた唯一の人間。彼女が無限書庫に引き籠もったため、違う部に回される事になった。

魔力：A 魔力光：水色 魔法形式：ミッド式 魔導師ランク：

総合A

・使用デバイス『AAG』

高速演算魔術杖、ストレージデバイス。

ある人物がプレゼントとして、彼用に設計し作成したデバイス。

旧式ではあるが、彼が使用する場合、これ以上に合うデバイスは今の所存在しない。

意味は『Affection And Gratitude』
直訳で『感謝と親愛』を意味するが、彼本人はまったく知らない。

『ミハエル・マグヌス』（性別：男 年齢：16歳）

優しげな雰囲気をした茶髪の青年。

いわゆるイケメンであり、本性を知らなければ凄くモテる。

元次元犯罪者、黒歴史時代のあげはによってあっさり捕縛される。

暗部にすぐ馴染むほどの冷静さや惨酷さを重ね持つ。

高い索敵能力、ずば抜けた直感、巧みな魔法制御を持ち、その眼
力も一級品。

自分を捕らえた山中あげはに歪んだ執着があり、彼女を異邦人と
疑っている。

魔力：AA 魔力光：銀色 魔法形式：ミッド式 魔導師ランク：
陸戦AA

使用デバイス：『？』

EP・18：壊れた末の決闘（前書き）

遅れて申し訳ない。

今回も予定より進まなかったです、きっと次回こそ話は進むはず。

愚者様、タカセ様、遊佐朦朧様、感想ありがとうございました。

Ep・18：壊れた末の決闘

物陰に隠れながらミハエルは様子を伺う。

此処はミッドチルダ廃棄都市区画、昼間でありながらも人気のない場所だ。

それも当然、管理局がランク試験に使うときぐらいしか訪れる人はいないのだから。

彼の任務は『山中あげは』と異邦人の繋がりを探ること。

証拠も根拠もないが、確実に繋がっているとミハエルは確信していた。

だがそれだけでは管理局は動けない、ゆえに上層部を説得する材料を探していたのだが。

「やれやれ、挨拶もなく不意打ちとは……」

彼は頬を伝う血を黙って拭う。

並の人間なら致命傷、頭部を狙った質量兵器による狙撃。

銃声はしなかったため、おそらくサイレンサーでも付けているのだろう。

ミハエルがその凶弾を避けたのは、一重に彼の並外れた直感のためだ。

反射的に横に飛びのくことで、頭部を狙った銃弾は頬を掠める程度に収まった。

第二射が来る前に物陰に隠れ、ミハエルは今一息をついている。

最低でも1kmは離れた場所に敵はいるのだろう、気配を感じ取ることも出来ない。

「恨みはそれこそ星の数ほど買ってきたけれど、これは私怨じゃないさそうだ」

復讐者に狙われたことが数え切れないほどあるからこそ彼は断言した。

この攻撃にはかつて復讐者たちのような感情が感じられない。

おそらくは『邪魔だから消す』といった動機だろうとミハエルは考えた。

このタイミング、こちらが『山中あげは』を探っていることを勘付かれたか。

あるいは、ただ単純に予言対策部隊の一員だから狙っているのかまでは判断できない。

(個人的には、前者であって欲しいけどね)

そうならば、状況証拠の1つにはなる。

決定的ではないものの、山中あげはへの疑惑を嫌疑ぐらいには変えられるだろう。

「まあ結局は口実だけだ」

そう、ミハエルは単純に彼女を襲う口実が欲しいのだ。

さすがの彼でも、管理局の真っ只中に存在する無限書庫に潜入することなど出来ない。

それこそ常軌を逸した存在である『知人』ならば話は別だろうが。

「幸いこの辺りは建物が多い。

壁となる建物に身を隠しつつ接近するのも可能だろう」

おそらく狙撃の主は、山中あげではないのだろう。

彼女なら問答無用の砲撃で建物ごと吹き飛ばしに来るはずだから。

「生憎この命、幼女以外にくれてやる気は無いんでね」

物陰に身を隠しながら、彼は走り始めた。

真紅のコートに身を包んだ少女、真中あたりは舌打ちをした。

「外したか、できればこの段階で仕留めておきたかったのだが」

彼女が立っているのは廃棄されたビルの屋上。

言い訳など出来ないガチ質量兵器であるスナイパーライフルから顔を外した。

確実に必殺のタイミングだった。

バリアジャケットを纏っていない標的に向けた必殺の一撃。

「しかしこの距離からの狙撃を直前で感知し避けるとは。

驚嘆というか啞然というか、どこかの誰かさんを思い出さざるを得ない」

苦笑いを浮かべると少女は再びスコープに視線を通す。

標的は物陰に隠れたままのようだ、標的が移動しているのかもわからない

「ちつ、埒が明かないな。」

赤外線モードに切り替えてと……もうあんなところか」

すでに200mほど進んでいたため、彼女は補足するのに少し手間取った。

無難に物陰に身を隠しているため、ここで撃ったところで致命傷は与えられないだろう。

「対象との距離は現在のところ、およそ1000m。」

ある程度接近してくれないと他の武装は使えないのだが」

だが此処に陣取る限り、彼女に負けは無い。

むこうに長距離射撃魔法が無いのは確認済み、狙撃手の基本は一方的な攻撃なのだから。

「とはいえこの距離ではハッキングも細菌攻撃も出来ない。」

向こうは着実と距離を詰めつつあるし、接近されると不利なのはこちらか？」

それに此処は破棄されたとはいえ、管理世界。

管理局のお膝元で質量兵器を湯水のごとく使うわけにも行かない。

物陰から一瞬姿を現した標的を撃つも、標的は次の物陰へと移動しており弾丸は当たらない。

おそらくこちらが補足していることも承知しているのだろう、やり辛い敵だ。

「しょうがない、此処で仕留めるのは難しそうだ」

スナイパーライフルから弾丸を抜き取り、別の弾丸を装填する。先端に致死毒を仕込んだ特注品、肉体にあたりさえすれば数分で死に至るだろう。

「掠った程度じゃ、少し痺れるだけなんだがね。まあ腕にでも当たればその時点でお陀仏のはずなんだが、当たるかどうか」

スコープに目を通し、物陰から物陰へ移る標的を狙い続けるも寸前で避けられる。

敵は僅かずつだが、確実に距離を詰めてきている。どの辺りが引きどころか。

「此方の姿を確認されるわけには行かない。しかしあれほどの手練を此処で逃していいものか」

脅威、あれは転生者にとってかなりの脅威となりえる。

単純な戦闘力では『どこかの誰かさん』には及ばないが、別の意味で恐ろしい。

「ハッキングだけでも行いたいだが、それにはかなり内側まで来て貰わねばならない。

だがスナイパーライフルの弾丸を前予告無しに避けるような奴と正面戦闘になりたくはないものだ」

どの辺りが落としどころか、彼女は頭を悩ませる。

同時に接近している標的に向け、トリガーを引くが依然として当たらない。

「引き金を引く前に回避体勢に入っていると、まるでニュータイ

プ。

生まれてくる世界を間違えているんじゃないか、他人のことは言えんが」

第六感どころか第七感以上もありそうだと突っ込みたくなるような直感。

少なくとも、こと戦闘技能に関しては自分より上のようだと彼女は判断した。

すでに距離は800mを切っている。

このままでは懐に入られるのも時間の問題だろう。

リスクは歓迎できない。

すでに5人のうち2人は面が割れているのだ。

さらに、自分を含め残った3人の内2人は下手に動けない。

功を焦るべきではない、リスクは最小限に収めておいた方がいいだろう。

そこで思考を終えた少女は、転移魔法用のデバイス（ジャミング付き）を取り出した。

「しょうがない、撤退するか……花火と共にな」

物陰に身を隠した青年は、肩で息をしていた。

さすがにこつも緊張状態が続くと体力の消耗も激しいのだ。

「向こうも中々の腕前だ、異邦人が質量兵器を使うとは予想外だったよ。」

こちらの位置も感知しているようだし、打つ手無しといったところだね」

なにせ攻撃手段が一切存在しないのだ。

常人なら撤退する場面だろう、極限状態での遠距離狙撃など避け続けられる物ではない。

1つのミスが死に繋がるのだ、此処は撤退するのが最善だろう。

だがミハエルは選ばない、せつかく得た『口実になりそうなモノ』なのだから。

「さすがに餌が目の前にあると、多少の無茶でも貫きたくなるね。管理局のお膝元でそこまで派手な武器も使えないだろうし、行くか」

建物の間を縫うように駆け抜ける。

瞬間、2撃の凶弾が彼が数瞬前までいた場所に命中した。

安全圏である次の物陰に滑り込むと、荒々しく深呼吸を始める。

距離は700mを切った、もう少しで彼にも攻撃手段が舞い込んできるところだろう。

「しかし何事もやってみるものだ、自分の才能が恐ろしい」

直感頼みのレース、ベットは自分の命。

スキップで綱渡りするような極限状態を何とかこなし続けた青年は笑みを浮かべた。

スナイパーライフルはその性質上、接近戦には到底向かない武装だ。

おそらく接近専用の武装もあるだろうが、相手は厳密には魔導師ではないだろう。

多角的にこちらを見張れるサーチャーを使わないのが何よりの証明。

ブラフの可能性もあるが、少なくとも魔導師としてのレベルは格下の可能性が高い。

「……………この感覚は」

次の物陰に移動しようとしていたミハエルは、ふと耳を研ぎ澄ませた。

まだ飛び出していないため自分は物陰にいる。なのに脳内でアラートが鳴り響いた。

直感が警告している、ここにはいけないと。

直感に頼ってここまで命を繋いで来たミハエルは迷わず物影から飛び出す。

視界には捉えられない。

当然だ、500m先の人を見分ける能力は彼には無い。

だが彼は明確な死の脅威を肌で感じ取っていた。

「ソニックムーブッ！」

『Sonic Move』

直感の信じるまま、ミハエルは後退した。

距離を詰めるなんて生易しいことを考えている場合ではなかったためだ。

魔力による強引な加速を利用して一瞬で距離を開く。

瞬間、閃光と爆発。

廃棄されたビルが一瞬で戦火に包まれ、崩れ落ちる。

爆音は空に響き、先程までミハエルがいた場所は粉々に砕け散っていた。

この爆破の主、真中あたりが使用した兵器の名は『RPG7』という。

それはもはや人に向けるものではない、対戦車兵器。

安価で簡便、そしてその強力さから『地球』において最も有名な武器の一種だ。

その凶悪さかと便利さから、地球では多くの武装組織が使用し戦果を上げたという。

その威力は高ランク魔導師であろうと、直撃すれば致命傷を与えるほどの威力を秘めている。

真紅の炎が地に咲き、黒い煙を吹き上げる。

すでに真中あたりは転移しているため、現時点でこの光景を知る者はミハエルだけだ。

「無人とはいえ、なんと過激な。」

「……今回はこれで痛み分けということか、やってくれる」

「この攻撃は派手過ぎた。」

「すぐにでも管理局が来るだろう、そうすると面倒なことになる。」

「なにせミハエルは書類上、監獄に収容されていることになっているのだ。」

「見つければ自分もただでは済むまい、被害者だったとしても。」

「質量兵器使いか、あの気配からして異邦人。」

「非魔導師も混じっているとまた厄介な……」

【ミハエル・マグヌス vs 真中あたり 1戦目】

「両者目的を果たせず、引き分け」

その出会いは偶然であった。

高町なのははユーノと別れ、1人でジュエルシードを探索していた途中であり、

フェイト・テストアロツサもまた、使い魔アルフと別れ、目的の寶石を搜索していた道中だった。

そんな2人が出会ってしまったのは、偶然としか言いようが無いだろう。

一触即発の空気を当たりに散らしながら、2人は身動き1つせず向かい合っていた。

高町なのはは目の前で自分を睨み付けている金色の少女の目を見つめる。

以前出会った時より、さらに悪化しているようにも思えるほどの虚無を幻想した。

この目を、彼女は知っている。

毎日のように鏡で見ていた時期がある。

そう、この目はかつての

「私、高町なのは!」

目の前の少女、フェイトが目を見開く。

射抜くような視線の敵意に怯むことなく、彼女は腹の底から声を上げた。

「貴女の名前は、フェイトちゃんって言うんだよね」

「……」

以前戦ったときはろくに話すことも出来なかった。

だが今は、警戒しているのかもしれないが戦闘には至っていない。話し合いのチャンスと判断したなのははこの機会を逃すものかとはかりに話し続けた。

「私がジュエルシードを集めているのはユーノ君のため。

ねえフェイトちゃん、フェイトちゃんは何で集めているの?」

「バルディッシュユ!」

『Get set』

フェイトは手元に出現した斧状のデバイスを叩きつけるように振る。

だがなのはも、瞬時にセットアップしたデバイス、レイジングハートでその一撃を防いだ。

火花を散らし組み合わせうデバイスを尻目に、なのはは声を荒げる。

「違うの、今日私は戦いに来たんじゃないの！」

フェイトちゃんとお話をしに来た、だからお願い　話を聞いて

！！」

「うるさいっ、私には話すことなんて無い！！」

風を切る漆黒の斧がなのはへと迫るが、彼女は愛用の杖で防ぐ。

キーン、と金属音が当たりに響くもフェイトは攻撃を止めようとはしなかった。

「私は、ジュエルシードを集めるんだ！」

褒めてもらえなくても、少ししか役に立てなくても　それでも

！！」

繰り返し激情と共に振り回される漆黒の斧をなのはは防ぎ損い、

横なぎの一撃が腹部に食い込む。

バリアジャケットがあつたため致命傷には程遠いものの、なのはは激痛と共に地面に叩きつけられた。

「……………！！！」

「私が言うことは一つだけ、君のジュエルシードを渡して」

激痛に耐えながらなのはは思考を巡らせる。

話し合えないのか、分かり合えないのか、どうすればいいのか。

レイジングハートを地面に突き立て体重を預けながら、彼女は立ち上がった。

「渡せないよ、フェイトちゃんが何を考えているのかわからないと。これはユーノ君のものだし、とても危険なもの……だからお願い、話を聞いて！」

「……………ッ！！」

フェイトは舌打ちをした。

彼女とて無抵抗に近い人間を蹴れるほど非情ではない。

いかに心情的に余裕が無く、必死になっていたとしても本質的には善人なのだから。

フェイト・テストアロツサは苦悩していた。

それは、ある意味病的なまでの信仰と言い換えてもいいだろう。

フェイトにとって母親の役に立つこと、母親に愛してもらうことは何にも勝る願いだ。

そのために彼女は魔法を磨き、修練を積んできたのだ。

そしてやっとその成果を発揮する日が来たと、フェイトは喜んだこともあった。

だが現実是非情。

初戦では、管理局の男によってボロボロに痛めつけられ惨敗し。

ジュエルシードを集めようと努力を重ねても、ぽっと出の他人に殆どの成果を奪われた。

母親の期待に答えようと頑張ってきたかつての自分は、現実の非

情さによって心を折られた。

慟哭と嘆きの中にいる彼女を慰める『都合のいい人間』は存在しなかった。

協力者という男はいたが、彼はフェイトにとって敵でしかない。自分の存在意義を奪った人間と仲良くなれるほど、フェイトは心広くない。

使い魔は必死にフェイトを慰めようとした。

全てを捨て、別の世界に逃げようと提案してきたほどだ。

だが使い魔とフェイトの間には決して越えられない壁がある。

使い魔がフェイトの身を第一とするように。

フェイトもまた、母親の身を第一とするのだから。

価値観が違う以上、使い魔はフェイトを真の意味で慰めることは出来ない。

もしここに、フェイトが無条件で信頼できる第三者がいれば話は変わっただろう。

だが現実にはそんな都合のいい存在は無く、フェイトは一人で悩み続けるしかなかった。

結局彼女が出した答えは、『手段を選ばずジュエルシードを集める』だった。

どんなに罵られても、罵倒されても、目的さえ遂げれば以前の優しかった母親に戻る。

きつと最後には報われる、心の底では母親はまだフェイトのことを愛してくれている。

そんな妄想を信じることで、フェイトは辛うじて自我を保っていた。

だがフェイトはなのはを攻撃することを躊躇った。

漆黒の斧を振り上げたまま静止するフェイトに、なのはは語りかける。

「私はフェイトちゃんと、友達になりたいんだ」

その言葉に、フェイトの視界は真っ白に染まった。

理解が追いついていない、フェイトは予想もしていなかった言葉に動きを完全に止めた。

その隙を待っていたかのように、虚空からバインドが出現した。息を付くまもなく、そのバインドはなのはとフェイトを縛り上げる。

「そこまでだ、管理外世界での魔法行使は禁じられている」

地面に魔法陣が刻まれ、そこから1人の少年が現れる。

まだ若いのか、なのはやフェイトと比べてもそこまで身長は高くない。

表情を硬くした黒髪の少年は右手を空にかざす。すると右手の中に映像が出現した。

時空管理局が発行している身分証明書である。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

ロストロギア、ジュエルシードの重要参考人として、話を聞かせてもらおう」

「ッ……」

もしここにアルフがいれば、きっとクロノへ殴りかかっていただろう。

だが此処にはアルフは存在せず、フェイトを助けに現れる人間もない。

しいていうのならばタイミングが悪かった。

もしアルフがいれば、もしフェイトの精神状態がもう少しまともなら。

きっとフェイトはクロノへ斬りかかったりはしなかっただろう。

「邪魔を」

バインドを引きちぎり、フェイトは目の前の執務官へと迫る。

敵対行動を取るフェイトを敵と理解したクロノは愛用のデバイスS2Uを構えた。

本来であれば、彼らの出会いはもう少し後で。

その場にはユーノヤルフが存在し、フェイトの精神状態も少しはまともで。

何よりその場にはジュエルシードがあったため、迎撃よりも回収を優先しただろう。

そう、既に世界は破壊されていた。

既に取り返しが付かないほど致命的なまでに。

「するなあああ！！」

金色の刃を形成したバルディッシュがS2Uにより阻まれる。

フェイトは至近距離でフォトンランサーを撃とうと魔法を発動し。

「させるかっ！」

クロノの回し蹴りがフェイトの腹部にめり込んだ。

バリアジャケットに身を包まれていても多少の衝撃は伝わる。

怯むフェイトにクロノはデバイスの先端を向け、躊躇せず

「ステインガー」

『Stinger Ray』

光の弾丸が高速で放たれフェイトを吹き飛ばす。

速射性と貫通力に優れた弾丸を受け、悲鳴と共にフェイトは地面を転がった。

「は あ」

「管理局員への攻撃、事件の関係者と見受けられる。

君を拘束させてもらう、下手に抵抗すれば罪状が重くなるだけだ」

うめき声を上げるフェイトに向かって、クロノは淡々と事務的な言葉を投げかける。

クロノは痛みに堪えながら立ち上がったフェイトへ追撃を掛けようと、杖の先端に魔力を集め

「撃つちや駄目え!!」

「ッ!?!」

バインドに縛られている、もう1人の少女の悲鳴とも呼べる叫びに一瞬を気を取られた。

その隙を見逃すかとはかりに、フェイトは勢いをつけて空へと飛び上がる。

おそらく勝ち目無しと判断し逃げるつもりだろう。

クロノは一瞬とはいえ隙を見せたわが身の迂闊さを呪い、慌ててフェイトへと照準を向け。

「油断大敵、といったところかハラオウン執務官。

だが安心しろ、この俺がいる限り敵の逃亡は許さねえよ!」

突如空中から出現した鎧武者が転移しようとしていたフェイトを蹴り飛ばした。

その外見どおり、並外れた重量からの一撃を受け、フェイトは重力に従い地面に落下する。

激しい音を立てて再び地面に横たわることとなったフェイトは声にならない絶叫を上げた。

「ッ」

「痛いか、だが戦うと決めた者の道に痛みは付き物だ。
女子の柔肌を傷つけるのは趣味じゃないが、戦場にいる以上俺は
お前を女子とは見ない」

ガシヤンとその鎧を鳴らしながら鎧武者は地面に降り立ち、フェ
イトの頭を踏みつける。

その余りにも非情な扱いに、クロノは多少の怒りを覚えながら話
しかけることにした。

「ベルヘライト執務官、幾らなんでもその扱いはどうかと」

「おいおい、敵に敬意は払っても加減はしないのが俺の信条だぜ。

第一コイツは公務執行妨害の現行犯だ、逃がさないようにするの
は当然だろう」

「だからって……君には良心の呵責というものは無いのか？」

「そんな物、母親の腹の中に置いて来た」

げらげら、と笑い声を上げる鎧武者の姿にクロノは頭を悩ませる。
腕は確かだが性格に難有り、前評判通りの行いにさすがのクロノ
も怒りを覚えずにはいられない。

彼、グラール・ベルヘライトは間違ったことはしていない。

確かに相手は少女とはいえ、管理局と聞いた途端に攻撃してくる
ような人間だ。

おそらく後ろめたい事情があるのだろう、逃がしてやるわけには
行かない。

そんな葛藤に襲われているクロノに追い討ちを掛けるがごとく、

鎧武者は言葉を吐いた。

「さて、逃げないように腕か足の1本ぐらいは奪っておくか」

「「なっ!?!」」

クロノも、バインドで縛られているのはも驚きの余り声を上げた。

それを不思議だといわんばかりに、鎧武者は首を傾ける。

「何を驚く必要がある。」

相手は犯罪者、抵抗しないように無力化するのが当然だ」

「当然なわけが無いだろう！」

公務執行妨害程度の罪状で、必要以上の攻撃を行っていいはずが無い!」

「おいおい、それは甘すぎるんじゃないのかハラウン執務官。」

それにコイツの罪状はそれだけじゃない、以前ある部隊を相手に派手に暴れたこともある。

何、いざとなれば義手や義足を用意してやればいい。何1つ問題は無いだろう?」

「大有りだ! そんな事が許されるはずが無いだろう！」

犯罪を犯したのだから、何か彼女なりの理由があったはずだ。

まずは事情を聞いて罪を裁く、そして償いの機会を用意するのが管理局の仕事だ」

「違うな、管理局の仕事は犯罪の防止と犯罪者の捕縛だ。」

犯罪者へ人としての配慮をしていたら逃げられました、何てなら

ないようにな」

鎧武者は腰に差した日本刀を抜く。

その自然な動作にクロノもなのはも、彼が本気だと理解した。

「駄目、フェイトちゃんを斬らないで!!」

「そうはいかないな、何 死にはしないさ」

荒い息を吐いて横たわるフェイトに向け、彼は凶刃を振り上げる。クロノは慌てて止めようと杖を向けるが、鎧武者は止まらない。

「駄目え!!」

なのははバインドを破壊してフェイトを助けようと駆ける。

クロノは隣の少女の暴拳に息を止め、一瞬出遅れた。

全てが一瞬遅かった。

凶刃は振り下ろされる動作に入っており、なのはの手は届かない。クロノも出遅れたため、鎧武者を止めようと用意した魔法を放つ暇が無い。

そして鎧武者の凶刃は 横合いから放たれた虹色の斬撃に弾かれた。

誰もが理解に一瞬の時間がかかる。

だがなのはだけは、何も考えずフェイトの腕を掴み

『Flash Move』

鎧武者から離脱した。

鎧武者とクロノ、2人と向かい合う位置に移動したなのはフェイトを起こす。

「大丈夫、フェイトちゃん」

「何で、君は」

「フェイトちゃんと友達になりたいから」

今度こそ、その麻薬のような言葉はフェイトの心に染み渡った。

「今の攻撃はどこから!？」

クロノが周囲を攻撃があつた方角を睨む。

木々に視界が阻まれているが、その奥に白と青の鎧に身を包んだ少年を捉えた。

「くっ　　管理外世界にまだ魔導師が？」

杖を向け、威嚇射撃とばかりに魔法を放つ。
放たれた魔法　ステインガースナイプ　は木々の合間を抜け、
敵がいるであろう位置に着弾した。
だが敵は、誘導弾を避けながら空へと飛び、2人の少女の下へと
降り立つ。

白いスーツに青の鎧を付けた金髪の少年だった。
特殊の体質なのか、左右の瞳の色も違っている。

少年は右手に持った剣を構えて、2人の少女を守るかのように立
っていた。

「よお、3日ぶりといったところか負け犬」

「貴方のような残虐な人間が法の側の人間とは世も末だね、勝ち馬」

鎧武者、グラール・ベルヘライトは旧知の人間に会ったかのように
気軽に話しかけ。

金髪の少年は親の敵でも見るような剣呑とした空気を隠そうとも
せず返した。

クロノは思考を巡らし、情報を整理する。

まずはあの金髪の少女　フェイトというようだ　は容疑者の
可能性がある。

その少女を庇った、白い服の少女はおそらく何らかの関係者だろ
う、仲間かどうかは不明だが。

そしてフェイトを助けに来たとも取れる金髪の少年。

彼も関係者だと思われる。　それも金髪の少女だけではなく、ベ

ルヘライト執務官とも。

(ベルヘライト執務官、彼との関係は?)

(3日前、生け捕りにしようと半殺しにした)

もはや言葉を返す気力も沸かないクロノはため息を吐く。

こちらに非が無いと言えないが、それでも彼らを逃がすわけには
いかない。

最優先目標は、金髪の少女フェイト。

杖の先端に魔力を込めると、クロノは相手の動作を見逃さないよ
う目に力を込めた。

(く、クエス君、どうしてここに?)

念話で疑問をぶつけて来るのはを僕は無視した。

一応監視のつもりだったのだが、後一步遅ければフェイトは隻腕
になっていただろう。

「落ち着いたほうがいい、高町さん。」

相手は正直ジュエルシードと比べるのもおこがましい奴らだ」

「わかった、でも後でちゃんと説明してもらおうからね！
それといい加減、高町さんって呼ぶの止めてもらうから」

「はいはい、それとフェイト……で構わないのかな。
君の使い魔を早く呼んだ方がいい、正直勝ち目は薄いからね」

「わかってる　君は何で私を？」

「助けに来たわけじゃない、ただあの鎧武者とは因縁があつてね」

少し嘘だけど。　やはり彼女達には5体満足でいて欲しい。

そう　癪なことにかつても今も、僕はこの魔法少女たちのこと
が好きなようだ。

いずれ敵に回るとしても、やはり助げたい。

きっと仲間達も笑って許してくれるだろう、それが僕の出したあ
まりにも単純な答え。

見捨てれば、もし記憶を取り戻したとしても良心の呵責に襲われ
る。

かつての自分に戻るか、今の自分のままでいるか、あるいは新し
い自分になるか。

その答えはまだ出ていないものの、やはり選ぶなら後悔が少ない
道を選びたい。

「さて、張り切つて断罪ファンチするのでしょうか」

右手に握つた剣、ネームレスを僕は強く握り締めた。

【なのは、フェイト、クエス vs ハラオウン、ベルヘライト執
務官 1戦目】

戦闘開始

Ep.18：壊れた末の決闘（後書き）

容量の問題で戦闘は次回。

出来れば土日仕上げるつもりですので、どうぞご勘弁を。

余談ですが、お気に入り登録が凄い勢いで伸びております。

基本的に更新日と翌日辺りが、閲覧者が増える日なのですが。

今までの最もアクセスの多い日が、更新も何もしていない12月3日でした。

どなたかが宣伝してくださったのでしょうか、それともモチ期？

お気に入り登録数 115件 194件

狂った速度。

EP・19：最初の壁（前書き）

すいません、間に合いませんでした。

その遅れた分を帳消しにするぐらいの出来であるといいなあ。

上海NEET様、Rair様、愚者様、月光様、タカセ様。
感想と報告ありがとうございます。

それはいつの会話だったか。

記憶は霞み、もう良く思い出せない遙か以前の会話。

「聖王クローン？」

「はい、結局僕は何のために作られたんですか？」

「私達異邦人対策の一環だったはずだが。

いざという時、聖王のゆりかごを動かす部品の1つとして、だったか」

むうと眉を潜める金髪の少年。

それを微笑ましく見つめる白髪の少女。

「ああ、だから君は絶対に捕まるなよ。

もし君が捕らえられれば、君は聖王のゆりかごの制御機構、部品の一部として扱われるだろう」

人間として扱われないと、当然のように白髪の少女は言った。

かつて人間として扱われなかった彼女は、ソレがどういふことが嫌というほど理解している。

「それと戦場に人々を駆り立てる御旗。

その類まれな能力を利用して前線で敵を滅ぼす、英雄の如き人形

だとかなんとか」

頼まれもしないのに人知れず調べていたのであろう。

たった今質問した事柄にスラスラと答える白髪の少女をクエスは複雑な面持ちで見つめる。

「質問なんですけど、予言って最長で数年先でしたよね。

たかが数年で聖王クローンってそこまで鍛えられる気がしないんですが」

「それは君がへっぴりだからだ、と普段なら返すところだが。

どうやらそれは研究者達も危惧していたらしくてな、対策を編み出していたようだ」

「対策？」

「製作段階のうちに、戦闘技術を刷り込んでおくのさ。

そうすれば多少調整するだけで、得がたい技術を持った人形の誕生というわけだ」

人を人とも思わぬ所業に少女のほうも嫌気が差しているようだ。

苛立ちを隠そうともせず言葉をつむぐ彼女に、クエスは疑問を口にした。

「それじゃあ僕にも？」

「さあ、大方憑依したときにでも上書きしてしまったのではないか？

何、他人から与えられた力をさも自分で得たかのように振るうなど情けないことこの上ない。

いいか少年、君は自分で自分を鍛え、一から育てるといい……そ

れが最も正しく尊い」

思考終了。

「この」

どことなく野性的な雰囲気を持つ女性は拳を力の限り握り締めた。握り締め過ぎたためか拳から血が垂れ、痙攣しているかのように小刻みに震えている。

「アタって」

だがそんな事は気にしないとわんばかりに彼女はその拳を振り上げた。

そして目の前にいる黒髪の少年の表情が引き攣っていくことすら認識せず

「奴は　　！！」

怒声と共に必殺の一撃を顔面に叩き込んだ。

みし、と少年の頬に心地よい音を立ててめり込んだ拳を引く。
一瞬の静寂の後、綺麗な右ストレートを受けた少年は弧を描いて
床を転がった。

そこはフェイトが拠点にしているとあるマンションの一室。
はあはあと荒い息を付く獣耳の女性と、地面に横たわり痙攣して
いる少年がいた。

女性の方をアルフ、少年の方を一梨 一という。

「つてえなこの年増狼!!」

頬を腫らした少年が口を開く。

アルフはチンピラのように切れる少年の襟首を掴むと、感情のま
まに言葉をぶつけた。

「今、フェイトが助けを求めてるんだ!

相手は管理局、本当にやばいつて事くらいアンタにだってわかっ
てるんだろ!？」

「わかってるに決まってるだろうが。

少なくとも世間知らずなフェイトや主第一のお前よりは余程な」

「なら何で助けに行かないんだい!

アンタ強いんだろ、フェイトを助けるって行ったのは嘘かっ!!」

アルフの脳裏を過ぎるのは、絶叫と共に涙を流したフェイトの姿。
使い魔契約のリンクから流れてきた、押しつぶされんばかりの感
情の濁流。

フェイトは今、苦しんでいるとアルフは心の底から理解していた。だからこそアルフも悩み苦しんでいる、何も出来ない自分に腹を立てている。

「あの子は今、苦しんでるんだ。」

誰かが助けてやらなきゃ、これからもずっと苦しみ続けるんだ」

「はっ、だったら尚更俺は行けねえよ」

激情と侮蔑、2つの感情がアルフの心を満たす。

それを察したのか、少年は落ち着けと掌で制した。

「いいか、俺はB級次元犯罪者だ……今更管理局に喧嘩を売っても問題は無い」

「だったら」

「そして俺がフェイトを助ければ、フェイトに余計な罪状が重なる。今のままなら、よしんば捕まったとしても大した罪にはならないはずだ」

その、「いずれ捕まることが前提」の発現に、アルフはぎりど歯を食いしばった。

気づかない。

調査が進めば、フェイトが次元干渉犯罪の片棒を担ごうとしたことがばれること。

その場合、フェイトには数百年以上の次元幽閉という処遇が普通だということ。

そして、間違いなく減刑されるという事を踏まえて少年が発言しているということ。

何1つアルフは気づかない。

「俺と共犯つてのは、実はかなりヤバいことだ。

だからフェイトのために思うのならば　俺とはできるだけ無関係を貫け」

「……それが、フェイトのためになるのかい？」

「そうだ、俺との関係を聞かれたら全部プレシアに擦り付けちまえ。そうすれば疑惑疑念悪意に憎悪、全部プレシアに向くことになるだろうよ」

「なッ　　そんなのフェイトが許すわけ」

「知られなきやいだけの話だろうが。
フェイトのために汚れ役を演じて見せる、使い魔さんよお」

くははははははと、少年はアルフの感情を逆なでするような笑い声を上げた。

顔を俯かせたアルフは、何かを決心したかのようにキッと少年を睨みつける。

「いいよ、アンタの口車に乗ってやる。

私はこれからフェイトを助けに行くから　　アンタは何もするな」

首肯する少年を尻目に、アルフは窓を開く。

全力で行けばフェイトの元まで10分といった所だろう。

そして今にも飛ばうとしていたアルフは、思い出したように少年
に向き直ると

「それとこれは、アタシの分だ」

全力で右フックを少年に叩き込んだ。

げふつと蛙が鳴くような声と共に少年は再び床を転がって行く。

アルフは自分が起こした結果を見届けることなく、大事な主の元
へ飛翔した。

桃色の光線が地面を薙ぎ払う。

金色のランサーが黒衣の少年を仕留めんと迫る。

「ぐっ　　落ち着け、君達！」

執務官の少年、クロノ・ハラオウンは手元に形成したラウンドシ
ールドで防ぐ。

彼は先ほどから防戦に徹し、必死で制止を2人の少女に呼びかけ
ているが望んだ反応は返ってこない。

「はあっ！ー！」

2人のうちの1人、フェイトはサイズフォームのバルディッシュを振り上げ斬りかかる。

クロノからすればその一撃は荒が目立つ、彼は杖で受け流すとカウンター気味の一撃を放った。

「ステインガー！」

先ほどフェイトを撃ち抜いた魔法がフェイトに当たらんと高速で向かう。

だが、横合いから放たれた桃色のスフィアに相殺され、途中で爆発した。

「そこっ！」

『Divine Buster』

もう1人の少女、高町なのはのデバイスに魔力が充填される。単純な威力ではクロノを上回る一撃に彼は舌打ちをすると

「ロングレンジバインド！」

突如出現した光の輪がなのはの体を拘束する。

「え、何これ!？」

発動体勢に入ったままその場に固定されたのはは身を捻るが脱出できない。

その隙にと言わんばかりに、クロノは空を駆けフェイトに接近する。

「フェイトちゃん!!」

「ッ フォトンランサー」

接近するクロノに気づいたフェイトはフォトンスフィアを形成。直進してくるクロノに向け、計8発にも及ぶ金色の魔力弾を連続で放つ。

「 マルチショット!!」

『Photon Lancer Multishot』

高速で放たれた雷の槍は空を裂きながらクロノを落とさんと迫る。

「この程度、執務官を舐めるな!!」

『Stinger Sniper』

クロノの周囲に、螺旋を描くようにして魔力光弾が出現。術者の脅威を撃ち落さんと弧を描きながらフォトンランサーと衝突し小規模の爆炎を上げた。

「まだまだ、スナイプショット!!」

再び出現した魔力光弾は加速しフェイトに向かう。フェイトは得意の速度を発揮し空へと逃げたため、その場にあったスフィアを破壊するに留まった。

「……………くっ、何て速度だ」

空へと逃げきったフェイトはバインドで縛られているのはへと直進。

空を駆けるフェイトは、他の2人に比べると随分と傷ついている。

が、彼女はそんなことはおくびにも出さない動きでなのは元へとたどり着き、

手中にあるバルディッシュを一閃させることでバインドを破壊した。

「あ、ありがとうフェイトちゃん！」

「それより油断しないで、あの人は強い」

「わかってる」

フェイトが自分を気にかけてくれたことが嬉しいのか。

こんな状況にありながらも、顔をほころばせ笑顔を浮かべる。

そして邪心のない笑顔を向けられたフェイトも少し頬を染めた。

そんな、微笑ましいとも思える光景をクロノは苦々しい思いで見つめる。

葛藤、疑問、自己嫌悪、襲い来る感情をひたすら抑えクロノは頭を悩ませる。

(今の僕は、時空管理局執務官だ)

きっと自分は今眉間に皺を寄せた表情をしているんだろうと、クロノは他人事のように思う。

この場に幼馴染の同僚がいればからかうか慰めるか、艦長である

母親は今の自分はどうか。

とりとめのない考えを巡らせ、頭を冷やしたクロノは相棒とも呼ぶべき杖を握り締めた。

「君達を 公務執行妨害で拘束する」

冷酷だろうと蔑まれようが、構わないと。

そんな心意気を胸に、クロノは脳内演算を行い魔法を発動する。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト」

『Stinger Blade Execution Shift』

環状魔法陣が1つ1つに取り巻いている魔力刃が100を超えて出現する。

一斉にその切っ先を2人の魔法少女へと向け、輝く魔力刃ステインガーブレイド。

処刑の名を冠した、その剣群が驚愕の表情を浮かべる魔法少女の元へ雨の如く降り注いだ。

示し合わせたわけでもないが、2人の魔法少女は一斉に防御魔法

を張り真つ向から受け止める。

『Protection』

『Defensor』

生存本能のままに、防御魔法を発動したのは結局のところ過ちであつた。

彼らが知る由も無いが、この剣群は盾の守護獣と呼ばれる者の防御すら超える威力を持つものだから。

空を切れきいくつもの魔力刃が防御魔法に阻まれ消滅していく。だが魔力刃と衝突するたびに防御魔法は軋み、悲鳴を上げ削れていく。

一発二発、終わりの見えない怒涛の攻撃に最初に悲鳴をあげたのはフェイトだった。

「ッ　！？」

元々、フェイトの防御魔法ディフェンサーはそこまでの強度を持つていない。

これはフェイトが防御よりも回避に特化しているため、防御魔法が得意でないという理由もある。

だが、どのような理由を挙げても結果は同じ。

なのはよりも強度に劣るフェイトの防御魔法は粉々に砕け散った。

『Sirr!』

バルディッシュの悲鳴のような呼び声も空しく響く。

一瞬の空白の後、10を超える剣の群れがフェイトを貫いた。

1本目は腕だった、2本目は足だった。
バリアジャケットなど威力を多少殺ぐ程度にしか機能せず、幾つもの刃が蹂躪する。

「あ」

激痛がフェイトの肉体を走る。

傷口は焼けたように熱く、視界はぼやけ上手く見えない。

幸いなのは、この魔法が非殺傷設定という事が、肉体を深刻に傷つける程じゃない。

「あああああああ！！」

フェイトは絶叫と共に、痛みを跳ね除けた。

我武者羅にバルディッシュを振るい、迫る刃を捌く捌く捌く捌く

「あぐつ　づう　は　」

だが全てを捌けるはずも無く。

捌き損ねた1本が胸を貫く、そこからは堤を切ったように更に数本が刺さる。

針鼠のように刃を生やし、それでもフェイトは我武者羅にバルディッシュを振るい続ける。

「フェイトちゃん！？」

先ほどまで共闘していたなのは声も届かない。

ドス、ドス、ドスと小気味の良い振動がフェイトの体に響く。

既に痛覚は無い、意識は朦朧としており、何のためにバルディッシュを振るっていたのかもわからない。

刃の怒涛の攻撃は終わり、煙幕が辺りを満たしている。

煙で遮られた視界の中、フェイトは体が地面に落下していることも気づかずにいた。

(眠)

ガシツ、と誰かがフェイトの腕を捕む。

手のひらから伝わり温もりを心地よいと感じたまま、フェイトの意識は闇へと閉ざされた。

流麗な剣閃が弧を描き、クエスの剣を受け流す。

そしてすれ違いざまに振るわれた鞘の一撃がクエスの体を宙へと打ち上げた。

「ぐっ」

「おいおい、前回よりはマシってレベルだぜ小僧。

確かにそのデバイスは前回とは打って変わって別物だが、使い手がその様じゃな！」

一息で二撃。

連続で襲い来る斬撃をレリックによる魔力で加速させた剣撃で弾く。

怒涛の鋭さと速さを持つ、目の前の執務官の攻撃を時に避け、時に弾く。

「防戦一方かよ小僧、お前も男なら攻撃して見せろつての！」

鞘と刀の二刀流。

凡そ独学で上り詰めたとは思えない、洗練された剣術がそこにはあった。

日本刀の鋭さを利用した斬撃、弱点である強度を考慮した受け流し。

鎧武者の姿をした魔導師はその見た目に相応しく、接近戦において敵なしと思えた。

「言われずとも」

西洋剣の形状をしたデバイス、ネームレスを一回転させるとクエスは正面から突っ込んだ。

必殺の意思を込めて振るった胴薙ぎは、しかし容易く受け流される。

しかしクエスも、この程度の攻撃が防がれることは計算の内

「ネームレス！」

『そにつくむーぶ』

ガシャンと、ネームレスから残留魔力が廃棄されると共に発動。

一瞬で間合いを開くと、再びレリック内の魔力をネームレスへと充填させる。

「バニシングエッジ！」

虹色の魔力を纏った斬撃が正面の鎧武者へと放たれた。

この攻撃なら受け流せまい、と甘い考えを一瞬でも持ったことをクエスは悔やんだ。

「この程度の攻撃で、この俺を仕留められると」

ひゅんという風切り音。

一旦鞘に収めてから放たれた神速の居合い抜き。

「本気で思ったか、小僧！」

虹色の斬撃は正面から2つに割かれ、左右へと別れていった。

あまりに出鱈目さに、クエスは驚嘆の表情を隠さずに入られなかった。

「破ッ！」

その隙を突くが如く。

赤色の魔力に染めた日本刀が空を切る。

「真紅斬」

真紅に染まった斬撃が、音速の速さで放たれる。

クエスのバニシングエッジと同質にして同種の技、斬撃破。

最もレリックの魔力やカートリッジを使用していないため威力は

クエスに劣る。

それでも、速さにおいてなら勝る一撃を、鎧武者は乱舞の如く次々と放った。

おそらく、相手がクエスでなければ敵の首は飛んでいただろう。威力は兎も角、鋭さと速さにおいてこの技は比類なき力を誇る。

実際、この技を受けた敵は防御魔法を使う暇すら与えられず首を飛ばされてきたのだ。

最もクエスには、クエスだけには通じない。

「聖王の鎧！」

『かいぜるあーまー』

次に驚愕の表情を浮かべたのは鎧武者グラールの方だった。

虹色の魔力が薄っすらとクエスのバリアジャケットを包む。

瞬間放った真紅の斬撃破が直撃するが、霧の如く霧散し傷一つ付けられない。

「……やるじゃねえか」

「褒められても嬉しくない」

劣化したとはいえ、ベルカ最強遺伝子が誇る固有技能『聖王の鎧』Aランクに及ばない威力の魔法を無効化する、クエスの唯一の切

り札。

それは威力よりも速度に力を入れたグラールの技の天敵だった。クエスは知らないが、グラールの持つ中距離技はこれ1つ。

故に 中距離戦ではクエスは倒せない

ひゅーと口笛を吹くとグラールは日本刀を肩に軽く担ぐ。

「今のは悪くなかった、タイミング、選択、効果。どれをとっても申し分ない、最高の技だった」

グラールはヒュンと日本刀を一閃、切っ先をクエスに向ける。向けられた瞬間、クエスの背筋に寒気とも取れない感覚が襲い掛かった。

「しかし困った、このまま続けると俺はお前を殺してしまうかもしれねえ。」

「一応生け捕り、捕縛が前提の任務だから傷を付けたくは無いんだが……」

「任務 ？」

「ああ、今受けている任務はお前の捕縛だ。」

「しかしあの金髪の小娘、フェイトっていたか……あれも生け捕りにしろって言われてんだよな」

「生け捕りが命令なら、何故腕を奪おうと？」

クエスは思わず声を震わせて尋ねていた。
目の前の男は強いが、それ以上に思想が危ない。

わけのわからない感覚を撥ね退け、クエスは直立したまま眼前の鎧武者を睨む。

「ああソレか、ハラオウンの奴も文句言ってたんだよな。

敵の抵抗を奪うにはアレが最も理想的な手段だから実行したまでだ」

「仮にも法の番人が随分と物騒だね。

冤罪の場合とか考えてたことがあるのかな？」

「冤罪だったら、詫びに俺の腕一本を自分で斬捨てればいいだけの事だ。

最悪切腹してやる覚悟だって出来ている、俺は俺の生き様を貫ければそれでいい」

あまりにも時代錯誤な発現にクエスは何も言い返せなかった。
頭が痛くなるほどの変人、だがだからこそその強さか。

「それに、あの小娘は旦那……俺の主君の腕を奪った間接的な原因だ。

主君への義理立てと思って俺は小娘の腕を奪おうとした、これで満足か小僧？」

これが高町なのはだったら、きつと言い返したのだろう。

それこそ『やったからやり返すなんて、絶対に間違っている』と
か言って。

だがクエスには返せない。
高町なのはのように奇麗事を唱えられないクエスには、何も返せない。

「……………」

「ん？ そういやお前は小娘とどんな関係だ？
生憎頭を使うのは苦手だな、洞察力には欠けるんだ」

「ただの、他人だ」

「そうか、まあそういう事にしておくとしてもだ。
ここらで決着と行くか、先日は出し損ねた取っておきの技だ」

グラールの持つ日本刀が真紅に染まる。
その禍々しいまでの赤は、幾人も人間を切った妖刀にこそ相応しいほどだ。

グラールは左手に持った鞘を投げ捨て、両手持ちへと変える。
おそらくこの技こそグラールの持つ最強の技なのだろう。

（なら これを防げれば）

鎧武者は自信に満ちた表情をしている。
おそらく彼にとっての必殺なのだろう、不安は微塵も感じられない。
い。

「いけるか、ネームレス」

『行けるかと問われれば不安です。』

相手は歴戦の猛者、単純な剣術だけで数多の魔導師を静めてきた武者です』

そう戦闘機人、真中あたりから貰えるだけのデータはもらっている。

グラール・ベルヘライト、魔法ではない単純な剣術だけAAAランクまで昇った男。

任務の成功率は意外と低い。

それは捕縛命令であろうと、犯罪者の命を奪ってきたからだ。当然何度も処罰されている、過剰行使ではないかと訴えられたこともある。

だが、彼はそれこそ1度も自分の行動も曲げなかった。

民間人は斬らない、斬るのは犯罪者かそれに順ずるものだけ。自分の刃を向けた敵は、死ぬ覚悟有りと判断し殺しにかかるのも、一種の礼儀なのだろう。

外道ではあるが悪人ではない。

そんな男が編み出した必殺技というのも興味がある。

「これを超えなければ、僕はどこにも辿り着けない」

これはクエスにとって最初の壁だ。

グラールという男は、これからの戦いを象徴する相手。

この壁を越えなければ、クエスは永遠に負け犬のままだ。

「いい顔だ、思わず首を奪いたくなる」

両手持ちの日本刀を正眼に構え、鎧武者が動く。
その重量級バリアジャケットからは想像も出来ない速さで距離を
詰めた鎧武者は

「『二の太刀要らず』」

ただ真っ直ぐに、正面からその刃を振り落とした。

『二の太刀要らず』

薩摩藩を中心に伝わった古流剣術『示現流』に伝わる言葉だ。

当時、二大流派となったこの剣術は最強の剣術の一角とも言われ
ている。

一部の技は、今の警視庁にも伝承されていることから、その一
端が伺えるだろう。

勝負の全てを初太刀に込めて斬りつけることが特徴。

グラールがどこでこの言葉を知ったかは不明だが、詳しい内容を

彼は知らない。

その語感を気に入って自身の技としてしまった辺り、彼は相当な馬鹿であった。

そして図らずも、この技はその名を違えない魔剣へと姿を変えた。

この技の特性は『魔力結合の切断』

魔力によって形成されたものなら、どんな物であろうと斬捨てる必殺剣。

A M Fというものがある。

魔力の結合を弱め、魔法そのものを消滅させてしまう。

この技は、偶然にもA M Fと同じもしくはそれ以上の威力を秘めているといえる。

どのような強固な防御魔法であろうと無意味。

魔力の結合で維持されている以上、この技の前では抵抗すら出来ない。

この技を防ぐとしたら。

それは魔力ではなく物体本来の強固さで防ぐしかない。

「……そこっ！」

クエスは真正面から両断せんと迫る刃を、ネームレスで受け止める。

火花と共に金属音が響き、一瞬の間2つの刃は拮抗した。

「無駄だ！」

ネームレスの強度はアームドデバイス並みである。

それは、レリックの魔力を利用して自身を強化しているためである。

だがその強化を無効化されてしまえば、普通のインテリジェントデバイス程の強度しか持たない。

故に

『ますたー！？』

「ッ
」

ネームレスの刃に、日本刀の凶刃が食い込む。

軋みを上げて切断されていく自身の剣を、クエスはスローモーションの如く見ていた。

走馬灯？

真紅の刃は、ネームレスの刃の中ほどまで食い込んでいる。

おそらく刹那のうちに自分もろとも両断するに違いない。

死ぬのか？

鎧武者の発言を考慮するならまだ死なない。
だが、腕を失うことにはなるだろうし、抵抗も出来なくなるだろ
う。

そうならば、自分はきつと唯の道具として扱われる。

『もし君が捕らえられれば、君は聖王のゆりかごの制御機構、部品
の一部として扱われるだろう』

真中あたりが残した言葉を反芻する。
死にはしないまでも死んだも同然の未来がこの先に待っている。

駄目だ

まだ死ねない、まだ死ぬわけには行かない。
自分の名前も知らないまま、自分の正体も知らないまま死ぬわけ
には行かない。

何のためにこの世界にいるのか。
何のためにここまで生き延びてきたのか。

終われない、まだ終われない。
何も為さず死ぬことだけは許されない。

自分が生きるために、散々人の運命を壊してきた。
本来あるべき道筋を破壊し、本来辿るべき結末を引き裂いてきた。

こんなところで終わってしまうのが僕の結末だとしたら。
僕は何のために生き延びてきたのか、何のためにこの世界に来てしまったのか。

ふぎけ、るな

このままじゃ顔向けできない。
今まで踏みにじった物、これから踏みにじる物。
これまで傷つけ壊し足蹴にしてきた運命にも、見放し蔑ろにして来た人にも。

思考が加速する。

脳神経の中を、破裂するほどの情報が巡る。

検索開始、キーワードは目の前の鎧武者グラール・ベルヘライトの打倒。

戦闘技術、立ち回り、魔力操作に信念。

何もかも上の相手、勝ち目のない相手 それを踏みにじれ。

「……………」

中ほどまで食い込んだこの凶刃を捌け。
防御できないなら受け流す、この鎧武者がやったように。

不可能、僕にそんな技術はない。

だからどうした。
ないなら生み出せ、今から作れ。

捌き方など、脳内には存在しない。

存在しなくても引き出せ。

僕は聖王のクローン、偽りの最強。

管理局が用意した、対異邦人用の刺客。

ならば用意されていないはずがない、インストールされていないはずがない。

元より管理局が求めた人造魔導師とはそういうものだ。

戦いかたを磨くのでなく、戦い方を予め組み込んでおくモノだ。
ソレならば、この僕に刻まれていないはずがない 戦い方が。

検索完了、『戦闘理論』の起動を開始します。

「何」

目の前の光景が信じられず、思わず呟いたのは鎧武者の方だった。必殺のタイミングを取ったのは間違いない、事実クエスは回避不能状態だった。

しかし、クエスは剣に食い込んだ日本刀を、その斬撃を受け流しつつ凶刃を逸らした。

日本刀はネームレスに食い込むも、両断できないまま刃を弾かれ虚空へと空しく落ちる。

それは流麗な動きだった。

熟練の強者にだけ許された、完成されたひとつの芸術。

そうするのが自然なように動くクエスの体は、凶刃を逸らし

「ッ!？」

刀を振り落としきつた、無防備な状態で硬直するグラールへ剣を走らせた。

『二の太刀要らず』

その名の通り二太刀目を必要としないこの技は、必然放った後一瞬無防備になる。

とはいえ既に敵を仕留めてさえ要れば幾ら無防備になろうと問題はない。

しかし今のように仕留め切れなかった場合、その必殺は相手のものとなる。

「」の

だが彼も歴戦の猛者。

無防備とはいえ、一瞬の隙を疲れたとはいえ即座に反応した。平時なら避けることも容易い一撃を、しかし硬直しきつた今の彼は避けられない。

『Jacket Purge』

瞬間、鎧が爆ぜた。

グラールはバリアジャケットに過ぎない鎧を自ら切り離れたのだ。

ジャケットパージ。

バリアジャケットに使っていた魔力を開放し、衝撃を起こす魔法。鎧が魔力へと変換され爆ぜ、衝撃がクエスとグラールの距離を引き離れた。

「づ」

「くっ」

無防備になったグラールは辛うじてクエスの剣閃の範囲から離脱。先ほどまでグラールが立っていた場所を鋭い一撃が通過していくのを、彼の瞳は捉えていた。

「何だ今の動きは？」

その素人とは思えない一撃を放った少年クエスは地面に倒れていく。

何があったのかは伺えないが、既に意識はないのだろう。

バリアジャケットを再構築したグラールは今度こそ腕を奪おうと日本刀を振り上げ。

「そこまでです、ベルヘライト執務官」

背後に杖を突きつけた同僚の姿を視認した。

彼の後ろには、傷つきバインドで捕縛された少女、高町なのはの姿がある。

「そつちも終わったようだな、ハラオウン執務官。」

それにしてもあの金髪の小娘の姿が見えないんだが、どうした？」

「彼女には逃げられました。」

使い魔と思われる女性に担がれ転移魔法で……」

「それで、俺を止めに来たというわけか」

「ええ、これ以上の暴挙は執務官として黙認できません。」

直ちに武装を解除してください……同じ執務官を撃ちたくはありません」

「確か、俺の任務の邪魔をしないという話だったはずだが」

「まだ僕は貴方の任務の詳細を聞いていません。」

「もしもこれ以上暴れるのなら、力づくでも止めます」

「そうかよっ！」

グラールは背後に向け日本刀を振るい、

クロノはその凶刃をデバイス、S2Uで受け止める。

「ちつ、同僚を手にかけるのは流石に気が引けるが……
主君への忠義を示すためにも、やるとなれば容赦はしねえぞ」

「いえ、その必要はありません」

「ん？」

その瞬間、グラールを囲むように複数の魔法陣が出現。
現れた武装局員達がグラールを囲み、杖を向ける。

「何の真似だ、艦長」

「これは命令です、ベルヘライト執務官。

武装を解除し、一時的に自室にて謹慎していなさい」

「これは契約違反じゃないのか。

それにアンタには俺に対する命令権は無いはずだが」

「これは私だけの命令ではありません。

貴方の補佐官が許可しました、故にこれは管理局が下す命令です」

「チツ、あの男……！」

グラールはしぶしぶとデバイスを解除し、クロノに投げ渡す。

そして不機嫌さを隠そうともせず魔法陣を通り、アースラへと帰っていった。

「それではクロノ、お客様を丁寧にアースラまでお連れして。

今回の件は私達にも非がありません、決してこれ以上の狼藉は避け

るように」

「了解しました、艦長」

クロノは気絶しているクエスとなのはを魔法で浮かせ、アースラに転送する。

そして、結界内の修復を武装局員に命ずると、彼もまたアースラへと帰っていった。

【なのは、フェイト、クエス vs ハラオウン、ベルヘライト執務官 1戦目】

なのは：戦闘不能、捕縛

フェイト：戦闘不能、戦線離脱

クエス：戦闘不能、捕縛

グラール：不完全燃焼

勝者 ハラオウン執務官

EP・19：最初の壁（後書き）

というわけでオリ主、またしても黒星。

一回も勝ててないので、そろそろ勝って欲しいものです。

ユーノ放置プレイ。

クロノ無双とオリ主覚醒フラグオンの回でした。

それではまた次回、ご拝聴ありがとうございました。

EP・20：女狐と陰謀と裏話（前書き）

女狐さんが思った以上に女狐さんになってしまった。

何分交渉事は苦手です、というわけで長らくお待たせしました20話です。

今回の主役は女狐さん、誤解と勘違いが増量中です。

カナメ・カノリ様、愚者様、タカセ様、上海NET様、鳥羽莉様
感想ありがとうございます。

この作品はアンチではありません、正義は管理局にあります

「さて、なぜ呼ばれたかは分かっていますね、ベルヘライト執務官」

リンディは、自室で謹慎を命じられていた赤髪の青年グラールを呼び出した。

デバイスを取り上げられているというのに、ふてぶてしい態度は相変わらずだ。

「俺は別段、文句を言われる事はやってないと思うんだがな」

「……それは、彼らの様子を見ても言える事ですか？」

リンディが手をかざすと、空中に立体映像が映る。

場面は医務室、未だに目覚めない金髪の少年を必死で看病する少女の姿がそこにはあった。

「幸い目立つ後遺症は無いようですので、いずれ目覚めるでしょう。ですが下手をすれば彼に癒えぬ傷を与えていた、それは理解できませんね」

「ああ、最初からそのつもりだったしな」

「……反省の色が見えないわね」

「反省？ 俺が？ そんな事をするわけがないだろう。」

敵に手心を加えるのは相手に対する侮辱だと、俺は考えている。

今回だけじゃない、今までだってそう行動してきたし、これからだって同じように行動するだろう」

「少なくとも管理局員には相応しくない考えよ、それは。」

今後同じような行動をとるなら、例え腕利きの執務官といえども私は貴方を罰するわ」

「はったりは止せ、女狐。」

お前には俺は罰せられない、そういう取引だったはずだ。

大体無理やり戦力として俺を組み込んだのはお前のほうだ、俺が譲歩する気はない」

確信を持って発せられる言葉にリンディはこめかみに青筋を浮かべた。

『彼らの任務を邪魔しない』それが目の前の男が協力する唯一にして絶対の条件。

艦長程度の権力では彼を止めることは出来ない、組織の一員である以上、これは覆せない。

事実、自室謹慎というのも名目上だけのものだったりする。

だが、それでいいのかという思いがリンディの脳裏を過ぎる。

幸い、この男の副官　確かカロールといったか　は比較的話の分かる人物だ。

「後一つ、あの金髪の少年を狙ったわけは？」

「任務だ」

それ以上語ることはないと青年は口を閉ざす。

リンディ自身、彼の任務に心当たりがあるため、これ以上聞く必

要も無い。

「……まあいいわ、とりあえず自室で謹慎しておきなさい」

無言で立ち去る青年を尻目にリンディは脳を働かせる。

事情を聞いて見なければ分からないが、当面の敵は金髪の少女『フェイト』だろう。

AAAランク相当である彼女相手では、並みの武装局員では歯が立つまい。

対抗できる手札は先ほどの青年グラールか、実の息子であるクロノぐらいだろう。

「……さすがに彼をぶつけるわけにはいかないわね」

となるとクロノをぶつけるのが最も妥当ということになる。

先ほどの一戦を見た所、多少苦戦はするだろうが捕まえるのはそう難しくない。

「問題は、相手が彼女1人とは限らないということかしらね」

脳裏に浮かぶのは金髪の少女を担ぎ逃げていった、おそらく使い魔であろう獣耳の女性。

AAAランク相当の魔導師が作るのだ、かなりの腕であることは想像に難くない。

アースラの切り札と呼ばれるクロノであれば、2対1でも勝つ可能性は十分あるだろう。

「けど、こっちの方はね……」

捕らえた少女、高町なのはデバイスから取り出したデータを眺める。

本来の持ち主である、ユーノ・スクライアも交えて話さねば詳細な情報は手に入らないだろう。

それでも、大まかな人物背景を理解することはできた、その結果にリンディはため息を吐く。

「『魔法喰い《マジックイーター》』」

リンディやクロノにとって因縁深い相手がそこにいた。

しかもフェイトと手を結んでいるという、これにはさすがに頭を悩ませてしまう。

『魔法喰い』

つい先日A級へと格上げされた次元犯罪者。

SSSランクという常識はずれの魔力を保有する手練の殺人鬼。

今まで数多くの管理局員や武装テロリストを殺害してきた大量殺人犯。

幸運、あるいは不運なことに彼に関する情報をリンディはかなり持っている。

というのもクロノが一時期目の敵にして追っており、そして幾度となく交戦したからだ。

未だ逃亡中ということからもわかるとおり、クロノは彼に一度として勝っていない。

「さすがにクロノには荷が重いわね」

この情報を渡せば、クロノは喜ぶだろう。

だが、フェイトと呼ばれる少女にその使い魔、そして『魔法喰い』

全てをクロノに押しつけるわけにもいかず、しかし他の局員では捕縛は難しい。

「ベルヘライト執務官を当てるといふ手もあるけど……」

あの青年が此方の言つとおりに動くだろうか。

むしろ余計に混乱するだろう、とてもじゃないが信用できない。

「そうなる……やっぱり」

リンディの視線の先にあるのは、立体映像として映っている一人の少女。

AAAランクの魔力という、破格の才能を持つ栗色の髪の少女、高町なのは。

幸い彼女は正義感が強いようだし、この事件が解決するまでは本人も手を引くまい。

ならば事情を説明すれば、こちらに協力を申し出る可能性は十分過ぎる程にある。

第一印象は最悪だろうが、その印象はこれからの行動と態度で埋めていけばいい。

人材不足の今、高町なのははとても魅力的だ。

将来的には管理局のエース、いやストライカーにまで上り詰めるかも知れない。

打算に満ちた考えだが、それはリンディの善意からの考えでもあった。

無理して管理局に属してもらおうとは、彼女も思っていない。

この事件が解決すれば、当面は平穏な生活に戻ってもらえばそれでいい。

だがAAAランクという魔力は管理局にとっても、『犯罪組織』にとっても魅力的だ。

どこからか情報が漏れれば、拉致されてもおかしくない。

そうなれば彼女に幸せなど望めまい、そうなる前に管理局に属し
てくれれば一定の保護も出来る。

リンディが後見人になれば、煩わしい組織の干渉からも守れるだ
ろう。

強制はしないが、将来の選択肢の1つとして考えて欲しいとリン
ディは考えていた。

「まあ将来のことはまた別の機会にでも考えるところとして」

とりあえず高町なのはに話を通してみよう。

結論を出したリンディはエイミィに通信をつないだ。

目が覚めた。

一瞬、何故ここにいるのかという混乱に襲われる。
周囲に誰も居ないのを確認すると、僕はベッドから身を起こした。

「知らない天井ですね」

「黙れガラクタ」

捨て台詞と共に、体調を確認する。
まだ少し熱っぽいが比較的好調だ、五体満足。

「腕はある……ということはあの一撃は防げたのか」

「ますたーは覚えてないんですか？」

「覚えてない、僕は何故ここにいたのかととりあえず説明してくれ」

ネームレスが語りだす。

執務官の一撃を受け流すと同時に気絶したこと。
クロノという執務官が医務室まで運んでくれたこと。

先ほどまで、先に目覚めた高町なのはが看病していたこと。その後、少し前にここに到着したユーノ・スクライアと一緒に呼び出されたこと。

「……概ね原作どおりか」

大筋は外れていないが、物語としては既に破綻している気がする。

「それで、僕は何故気絶したかわかるか？」

『おそらく情報の負荷に耐えられなかったからでしょう。負荷に耐え切れなくなつたますたーの脳が強制的に意識を落としたのではないかと』

心当たりはある。

むしろ心に当たらないところがない。

「……それって意味なくね？」

『そうです、下手すれば人格消えるので使わないように』

しかし、命の危機において秘めた力に目覚めるって。

そういうのはジャンプの中だけにしたい、割と本気で。

しかも使えないとか、目覚めたからには使える力であつて欲しかった。

現状を把握しよう。

高町なのはとユーノがいる。

呼び出されたということは説明でも受けているのだろう。

問題は僕のことである。

虹色の魔力光を撒き散らし、金髪オツドアイの僕の姿を管理局側は見たはずだ。

当然、なのはやユーノに僕との関係を尋ねるだろう。

「詰んだのかな」

ユーノは僕の事情を多少知っているから誤魔化そうと努力してくれるかもしれない。

問題があるとすれば、虹色の魔力光から『聖王』という考えまで向こうが至るかどうかだ。

魔力光というのは、実は意外と被ることが多い。

多少色の比率や光度が違う場合があるものの、ほとんど同じ場合だつてよくある。

そりゃあ全魔導師の数からして被らない方がおかしいのだけれど、それはさておき。

魔力光は被るが、レアな色というのは常に存在する。

虹色なんてその最たるものだろう、聖王以外に発現した記録は存在しない。

だが虹色＝聖王の魔力光、なんて知識を持っているのは教会か考古学者ぐらいなもの。

ぶっちゃけそこまでメジャーな情報でもない、トリビアや豆知識の類みたいなものだ。

だからバレない可能性はある。

希望的観測だけど、『珍しい魔力光だね』ぐらいで済ましてもらえば都合が良い。

はあとため息をついていると、不意にドアが開き、誰かが入ってくる。

「あら、起きたのね」

「ッ!？」

入ってきた人物に視線を向けると思わず身構えてしまう、この人物を僕は知っている。

世間の女性に喧嘩売るとしか思えない肌年齢とか、若々しさを持つ美女がそこに居た。

人の良さそうな笑みを浮かべて僕の前に歩み寄る、この艦の最高責任者。

リンディ・ハラウンが現れた、彼女は椅子を取り出すと僕のいるベッドの隣に座る。

「まずは自己紹介から、私はリンディ・ハラウン。」

この艦の艦長をしています、まずはこちらの不手際で怪我を負わせてしまったことを謝罪します」

「あ、いえいえ」

仮にも最高責任者が頭を下げるという事態に戸惑う。

組織のメンツとかもあるだろうから、そう簡単に謝罪はしないかと思っていたのだが。

「ではクエスさん、既にご存知かと思われませんが今の事件について説明をさせてもらいます」

語られたのは、概ね原作どおりのことだった。

ジュエルシードの危険性、ロストロギアという存在。

起こるであろう最悪の事態、フェイトという少女の取る行動の危険性。

だが、言葉の端々に僕がどの程度知っているかを把握しようとするような視線が合った。

「それでは、本題に入ります。

貴方は何故この世界に居るのかしら、本来なら管理局に保護を求めるのが筋でしょう」

「……何のことでしょう」

とぼけては見たものの、既に誤魔化しようがなさそうだ。

リンディはジュエルシードについては語ったが、なのはたちの反応については語っていない。

つまりこれがカマ掛けなのか、判断ができないのだ。

どこまで知られているのかは不明だが、疑惑の目は拭いがたい。

「そうですか、では順を追って質問させてもらいます。

……まず、貴方はどこの世界出身ですか？」

「地球です（書類上は）」

「確かに書類上、貴方はこの世界で生まれたことになっていました。ですが貴方の戸籍などをチェックしましたが、些か不審さが目立つのですが」

「異な事を、では僕が別の世界で生まれたと。」

別の世界に僕の戸籍があるのでしようか、僕の痕跡があるのでし
ようか？」

「ありません、ですから不思議なのです。」

逆に言えば貴方が生まれた痕跡がこの世界にしかない　でもそ
れも偽りだったら？」

「……」

顔が引きつる。

笑顔のまま書類を取り出すリンディの表情が逆に読めない。

「これは貴方の両親の戸籍です。」

ですが奇妙なことにこちらの方は不自然さが目立ちます……。
無職で友人も存在しない、学校に通ったという経歴はあってもそ
れを知っている証人が居ない」

僕の戸籍はある程度融通を利かせている。

それは裏社会に繋がりがあるドクターちゃんが頑張ったらしいが、
彼女にも無理なことがある。

僕の戸籍は偽造できても、親、祖父と偽造していくのはこの情報
社会では無理だということ。

少し調べたくらいじゃ気づかれない。

だがじっくり調べれば誰でも気づけるほどに粗い。
だからこそ僕は当初、疑われない、目に付かないよう行動しようと心がけていたのだ。

「それではお尋ねします、貴方の両親は今どこに？」

「……」

「無言ですか、では次です。」

貴方が住んでいる現在の住所、これは貴方のお父様の名義になっています。

ですがお父様を見たという人が居ません、実際貴方は1人暮らしをなさっているようですね」

「その情報は？」

「なのはさんが教えてくださいました。」

管理世界よりも就業年齢の高いこの世界で、貴方の1人暮らしを認められているわけがありません。

ですが現実問題、貴方は1人暮らしをされている。1人の親としてもこの事は看破できません」

「」

「それに貴方は先日、不審な鎧武者に襲われているようですね。」

それも子供の1人暮らしが原因と考えられますか？

例え窮屈でもしつかりとした施設に入った方が、安全な生活を送れるでしょう」

正論だ、そしてそうなれば僕の生活は一変する。

油断をしていたといえはソレまでだが、管理局の情報収集能力を甘く見ていた。

何より、管理局の失態をカードにして説得力を持たせている点が狡猾といわざるを得ない。

こちらが唯一持つ交渉カードは、『管理局員に不当に襲われた』
だがそれは一転してこちらを責める相手のカードへと切り替わってしまった。

「ですが、貴方が本当の事を語ってくれるのなら話は別です。
子供にとって今の時期は一番大切な時期、下手な環境の変化は望ましい物ではないでしょう」

正論攻めにしてから一筋の救いの糸をたらす。

わかっていても食いつくしかない意図に思わず顔をしかめた。

「では重ねて尋ねます、貴方はどこの世界出身ですか？」

この、女狐

「わかりません、僕はそちらで言う人造魔導師ですから」

「そう、やっぱりね。」

その容姿と魔力光、そしてベルヘライト執務官の態度から予想していました。

裏づけが取れただけで十分です、では貴方の事はできるだけ不問に処します」

どこまで気取られていたのか。

既に予想通りだったようで、彼女はそれ以上この事を尋ねなかつ

た。

自愛溢れる笑みが、非常に腹黒く思える。

さすがは艦長というべきか、やはり交渉スキルもかなりのものらしい。

「それでは、次の話です。

今回のジュエルシード事件、貴方も協力してもらえませんか？」

「……”も”？」

「ええ、なのはさんもユーノさんも快く協力してくれることになったわ。

そこでよければ貴方もどうかしら、何もそこまで無理をさせるつもりは無いわ」

どう判断したのか。

人材不足というのもあるだろうし、別段そこまでおかしい提案でもない。

だが、原作では決して自分から提案などしなかったはずだから何故今回に限って隠さない？ な

「……これは独り言のだけれど」

急にリンディはそっぽを向いて一人で語り始めた。

「今回の事件は、下手をすればこの世界を含めた周辺世界が滅ぶかもしれないわ。

いえ、最悪次元世界全てが滅ぶほどの事件かもしれない……これは占いの結果なのだけれどね」

占いと聞いて、ハツとしかけ 表情には出さない。

間違いない予言のことを言っている、とすれば今のはカマ掛けか。

「それ程の事件となると、私としても忙しくなるわ。

私や他の局員は事件解決のため、他の事に手が避けなくなるでしよう」

それはわかっている。

それをわざわざ言うからには、彼女なりの利があるはずだ。

それは一体なんだ、これ以上彼女にカードが残っていたらどうか。

「そうすれば、今は謹慎している彼の監視も緩むかもしれないわね」

ガリツ、と強く奥歯をかみ締めた。

なんてことは無い、そもそも僕に交渉なんてできるはずがなかった。

「そうなれば彼はどういう行動を取るのかしら。

貴方を目の敵にしていたような気がするし、あのフェイトという女の子も狙っていたわね」

「……………」

「もちろん私たちもできるだけ穏便な結末にするため努力するわ。

だけでもし、こちらの手が空いていない隙を付いて勝手に彼が動いたら？」

貴方が襲われるか、フェイトさんが襲われるか、どちらにしる穏便にはいかないでしょう。

もしそこになのはさんがまた割り込んでくれば、事態はさらに混

沌とする」

「……僕が、ここにいることのメリットは？」

「まず彼から襲われる事を可能な限り防ぐことができます。

無論上の命令には従わざるを得ませんが、あまりにも非人道的ならしかるべき場所に訴えることができる。

こちららも貴方を保護下に置くことで人材を使わずに済みますし、これが最善だと私は考えます」

そもそも交渉に使える手札などなかった。

向こうは大量のカードを持っていて、こちらに使えるカードは無い。

カード、交渉材料が無ければ作るのが一流だが所詮僕は三流。

何がオリ主だ。

「わかりました」

了承の言葉を聴くと、リンディさんは優しげに微笑んだ。

その、事情を知らない人が見れば見惚れるような笑みを、僕は苦々しく見つめる。

もし神様とやらが居るのなら、世界に意思があるのなら。

それは酷く悪辣で自分勝手に、どこぞで僕を嘲笑っているのだろ

う。

「ああ、それと最後にこれだけは聞いておきます」

相変わらずの笑みを浮かべたリンディは

「貴方、私の養子にならない？」

と、言った。

そのあまりにふざけた言葉に、熱が籠る。

「やっぱり1人暮らしというのは頂けないわ。

でも貴方はこの世界を離れたくないでしょう、だから私の養子にならない？」

言っている意味はわかる。

きっとこれは、彼女の善意からの言葉だ。

「私が保護者になれば、管理局の干渉から貴方を守れるわ。貴方に寂しい思いをさせないよう努力するし、子供らしく振舞える環境を作るわ」

敬語をやめ、1人の親として彼女は僕に手を差し伸べた。

このままいけば、原作どおりの結末になれば、きっとフェイトにもこの手を伸ばすのだろう。

結局、リンディ・ハラオウンは腹黒くて女狐だけとお人好しなのだ。

子供らしく振舞えない子供を見捨てられない、打算もあるけどそれ以上の慈悲もあつての言葉だろう。

「親の愛を、貴方は知るべきよ。

私が嫌だと言うのなら別に人を紹介するわ。

その人はね、貴方みたいな境遇の子供を2人も引き取っている人なの、きつと仲良くできるわ」

それは、もしかしてスバルやギンガのことだろうか。

「勿論、基本的には貴方はこの世界に住むといいわ。

でも休日とか、そういう日に此方に来て家族として過ごすのもいいと思うの」

仲良くできるかと聞かれれば、仲良くできるのだろう。

それに彼らと居れば、管理局に追われることも無く平穏な生活を遅れるかもしれない。

管理局に入れば、過去の記憶を取り戻すための活動も容易になる。世界も、傍に原作キャラ居る状態で無理に僕を排除しようとはしないだろう。

何とかなる自信もある、やっていける自負もある。

「どうかしら？」

けど……それでいいのか？

リンディを義母と呼び、クロノを義兄と呼ぶ。

フェイトはどちらだろう、義妹と呼び、仲良く過ごすのか。

あるいは、ナカジマ家のお世話になるのも有りなのだろう。

うまく立ち振る舞えば、クイントを死なせず、ゼストも死なせない未来も選べる。

管理局に入れば、何の気兼ねも無く自由に行動できる。

それは利点だ、他のみんなの協力もあれば今よりも早く記憶を取り戻せるかもしれない。

それはきつと当たり前のような幸せで、僕の心を腐らせていくのだ。

「嫌だ、僕はそんな未来は望まない」

「……どうしてか理由を聞いても？」

「僕が親と呼ぶ人は未来永劫変わらないし、それは貴方たちじゃない。

今のままでいい、今のままがいい、何も足さず何も引かず
今が一番いい」

「それで、後悔しないのかしら？」

断言するけど今のままじゃ貴方はまた襲われる、そしてもう守ってくれる人はいないのよ」

「守って貰いたいなんて思っていない。

僕にだってプライドがある、誇りがある」

管理局に恭順することで自身を守りたいなんて思わない。

僕を狙っているのは管理局で、身を守るために管理局に保護を求めれば。

それは滑稽な三流芝居で、自作自演もいいところで、何より『世界』の思い通りだ。

管理局が嫌いなわけじゃない。

彼らは正しく間違えているだけだ。

それでも、管理局のことを好きになる日は来ないだろう。

それに、家族ならもう十分足りている

『……以上が、ハラオウン艦長と目標の会話です』

外から見れば煌びやかに装飾された豪邸の一室。

1人の男がモニターに移る痩せ気味の青年から報告を受けていた。

男は毛嫌いする、女の声に不愉快さを隠そうともせず鼻を鳴らす。

「ふん、女狐め 自陣にあの人形を取り込もうとしたようだな。しかし感謝すべきか、無事失敗してくれたおかげで我らは暗躍できる」

『しかし、良いのですか？』

ベルヘライト執務官は謹慎しており迂闊に動けませんし、僕じゃ勝てませんよ』

「当面は泳がせておくさ、今のところは必要ない。」

それで、あの金髪の小娘の情報は手に入れたか？ カロル・ランバート」

『いえ、フェイトという名と使い魔がいるということ以外は此方も掴んでいません』

「間抜けな話だ、小娘が異邦人かどうかも掴んでいないとはな。」

だが未だに『魔法喰い』と繋がっているというのは朗報だ、上を説得する材料にもなるだろう」

『……それで話は変わりますが彼女、山中あげはの疑惑はどうなったのでしょうか。』

そろそろあのロリコ、ミハエル殿から報告が来ている頃ですよね』

「何だ、お前の元上司の話か。」

ふん、どうやら接触する前に異邦人と思われる人間と交戦したらしい」

『……………』

「相手は質量兵器しか使わなかったというが、それが山中あげはでない証明はできまい。」

ここでミハエルを殺しておけば疑いは強まると考えて、撃退する程度で済ませたと考えられるしな。

質量兵器というのも疑いを晴らすための策略だとすれば、そうとうに知恵の回る小娘らしいな」

急に黙ってしまった青年を男、ミラは訝しげに見つめる。

この青年は優秀ではあるが、決定的に暗部には向かないのではないかという疑問が浮かんだためだ。

過去に何かあったのか、随分と元上司に過ぎない小娘に入れ込んでいる……。」

まさかこの男も惚れているのかという考えが浮かび、下らないと一蹴した。

別段、能力さえあればどのような性癖であろうと構わないとミラは考えているからだ。

「ふん、普段の口調と振る舞いからは考えられない頭脳を持つか。」

あるいはあのふざけた口調も全て演技の可能性もある、元部下としてどう思う?」

『彼女は天才ですけど、基本的に一周回って馬鹿ですよ。』

その才能以外全てが駄目なのに、その才能だけで全てを補っている。』

「ほう、最年少で執務官の資格を取った類を見ない天才に対して随分な評価だな」

『それと、妙に格好を付けたがりです。
決めポーズとか、自分最も格好よく見える角度とか熱心に研究してましたし』

さすがのミラも呆れると同時に納得した。
天才といっても精神は子供、そこまで化け物ではなかったかと。

『それでは、明日からジュエルシードの搜索でこき使われるのでこれ』

カロルが通信を切る。

静寂の戻った一室で男は懐からこの世界で買ったタバコを加え
ると火をつけた

煙が辺りに充満するのも構わず、彼は吸い続け 思いついたよ
うに。

「ああ、それで今の通信の感想はどうだ？」

「曲がりなりにも彼女の奴隷をしていただけはあるね。

的確に彼女の性格を捉えていると思うよ、僕の印象とも一致する」

「ふん、それでもなお異邦人だと？」

「無論、あの口調も態度も彼女の本質だけど全てじゃないだろう。
少なくとも彼は彼女を庇っている様だしね、肝心なところは吐か
ないだろうさ」

男は背後の青年、ミハエルへと視線を向ける。

手元にもった吸殻を地面に投げ捨て、踏み潰すと青年に向かい

「それでは、小娘の本質を知るにはどうすればいいと考える？」

「貴方も鬼畜だね、『これ』を見れば思いつく方法は1つだろうに」

ミハエルが取り出したのは1枚の書類。

暗部の全員が持つ、デバイスの情報とその中に登録された魔法の一覧。

各自の戦力を効率よく運用するために、先日一斉に検査した、その結果。

「そうだな、『これ』を見れば結論は1つだ」

「……しかし、『魔法喰い』の件はどうするんだい。

最悪、彼1人で暗部が滅ぼされかねないし……ろくに対処できる人材もいない」

「情けない話だ、精鋭を誇る暗部が高々次元犯罪者1人満足に捕らえられんとはな。

確かに『個』としての奴の戦闘力は、悔しいが俺をも凌駕する」

「その腕を見れば一目瞭然だね。

……おっと、そんなに睨まないでくれよ、僕だって悪気があっていったわけじゃない」

「丁度1人手練の傭兵を拾っておいた。

奴ならあるいは『魔法喰い』を打破、最悪でも釘付けにはするだろう」

「手練の傭兵……ああ、最近巷で噂のアレか。

『魔眼使い』だっけ、限定的な戦闘ではSランクに届くフリーラ

ンスの魔導師」

「ああ、義手の試運転をしている時に見かけてな。

交渉自体は簡単な話だ、奴ならば『魔法喰い』相手でも引けを取るまい」

「確かに、もし彼の『魔眼』が噂通りのものなら『魔法喰い』に対する鬼札となるだろうね。

何せ彼はナイフの扱いなんて素人だし、強引な強化と加速こそ持ち味だからね」

「下らん、だがそろそろ此方も動かねば成るまい。

異邦人たちが何を考えているかは知らんが、ジュエルシードを使った次元犯罪ならば世界が滅ぶ可能性は否定できん」

「それで彼らの黒幕というか、主犯に心当たりはあるのかい？」

「無くも無い、不愉快だがアルハザードの人形を問い詰めれば答えは出るだろう。

奴は恐らく、フェイトとかいう小娘の先を知っているはずだからな」

ミラは眉間に皺を寄せたまま、扉を激しい音を立てて開く。

そのまま彼曰く『アルハザードの人形』という男の下へ行くのだから。

後に部屋に残されたミハエルはやれやれと手元の書類を眺めた。

その表情は、喜びとも怒りとも取れるような歪んだ笑みを浮かべていた。

「本当に彼が大事なんだろうねえ、君は。
ならその大事な彼が失われたときこそ、君の本質が見られるんだ
らうね」

ストレージデバイス 『高速演算魔術杖AAG』

所有者：カロール・ランバート

製作者：山中あげは

登録魔法一覧

(略)

『強制召喚魔法』

【詳細】

使用者が瀕死の重傷を負ったとき発動。

デバイスの本体に内蔵されている一発限りの高出力カートリッジ
をロードすることで、

使用者の魔力を使わず、使用者に負担を掛けず、その場に『召喚
対象』を強制召喚する。

なお、この魔法は最も強固なプロテクトを掛けられて隠されてお

り、持ち主は気づいていないと思われる。

召喚対象：山中あげは

EP・20：女狐と陰謀と裏話（後書き）

リンディさん、正直ごめんなさい。

嫌いじゃないけど、原作の行動省みたら腹の中真っ黒になってしまった。

所々で『善意』とかフォローしてるのはそのためです。

ちなみに補足。

なのは+ユーノの会話は、原作とほとんど同じ。

差異があるとすればリンディさんがその場で協力を申し出た辺り。

理由はオリ主ことクエスとの交渉材料に使ったため、あと罪悪感から。

番外編：ある少女の黒歴史（前書き）

地震とかスランプで大変ご迷惑をおかけしております。

TOMOKICHI様、タカセ様、褐色さん様、感想ありがとうございます。
ございました。

本編ではなく番外編ですが、これなくして今後の展開は進められないので我慢していただけると助かります。

今回の主人公は、今まで唯一戦闘シーンの無かった彼女です。

番外編：ある少女の黒歴史

トラックに引かれたら転生した。

なんて、妄想と現実の区別がついていない様な台詞を、実際に吐き捨てたのはいつの事だったか。

死の直前の記憶は、実のところ存在していない。

トラックに跳ね飛ばされ、宙を舞いながら『あ、コレ死んだわ』と呟いた辺りまでしか覚えていない。

おそらくそこで私の意識は途切れ、そのまま死んでしまったのだろう。

そして目覚めのある両親の腕の中で、私は目覚めた。

初めはタイムスリップかと思った、かつての両親と瓜二つだったからだ。

少し若いようだが、声も性格も、全てがかつての両親とそっくりそのままだった。

けれど、時が経てば嫌でも食い違いに気づく。

私の父は警察官だった。

厳格で他人にも身内にも厳しい頑固な父親だった。

決して『最近魔法の悪用が耐えん、けしからんことだ』などという人間ではなかったはずなのだ。

一旦違和感に気づけば、もう止まらない。

父親は警察官ではなく管理局員で、おまけに魔導師だった。

母親はかつてと同じく専業主婦だったが、以前は父と同じ管理局員だったらしい。

そして私は、前世と同じ容姿にも拘らず、破格の魔力と頭脳を持っていた。

私は不幸にも『魔法少女リリカルなのは』に転生した。
いや、幸運にも『魔法少女リリカルなのは』に転生したのだ。

かつて凡庸な中学生だった私は、魔法に溺れた。

超一流の才能を持った天才魔導師、物語の主人公に何と相応しい肩書きだろうと、歓喜した。

魔法は楽しかった。

鍛えれば鍛えるほど伸びる、だからさらに鍛えさらに伸びる。

魔法は娯楽だった。

娯楽だから楽しく、娯楽なのに実益を伴うのだ。

厳格だった父親に褒められた。

母親は私の出来のよさに涙を流した。

近所の人たちからは羨望の眼差しを向けられ、同年代の子供たちからは憧れの眼差しを受ける。

凡庸だったかつての私は、もうどこにもいない。

いるのは天才の二文字を欲しいままに振るう今の私だけだ。

だが、人間は貪欲な生き物だ。
そして人間の私は貪欲な生き物だった。

私は活躍の場を望んだ。
魔法少女に相応しい舞台を望んだ。

そして8歳のとき、私は最年少執務官という称号を手に入れた。

幸福という果実は実った。
そして大きく育ち続ける、
いずれ熟して腐り落ちるまで。

「おはようございます、あげは執務官。

さっそくですが書類が溜まっているんですが、片付けてもらえませんか？」

「興味ない、そんな誰でも出来る仕事はカロールちゃんに任せたっ！
私はカロールちゃんが片付けてくれるまでゲームやってる、ああ楽しんでなり」

「はあ、と溜息をついたのは私の副官。

支援魔法に長けたAランク魔導師、カロール・ランバート。

覇気のない表情と、溜息が特徴の痩せ気味のお兄さんである。

「まったく、しょうがありませんね。

それはそうとこの次の任務、目を通しましたか？」

副官が手に握った紙を受け取り目を通す。

書かれていたのは、とある管理世界で暴れている犯罪者の一覧と概要。

「……ふうん、紛争地域で管理局魔導師に被害を出している傭兵を逮捕しろってこと。

カロールちゃん、この任務他の執務官に回してくれないかな？ 面倒な案件だし」

「何言ってるんですか。」

あげは執務官がさんざん仕事を選び好みしているせいで、上のほうは御怒りです。

さすがに今回ばかりは受けなければ、ご実家のほうからも文句が来ますよ」

「うえ、うちのお父さんはいつもそうだ。」

帰ったら拳骨だろうし、ホント嫌になっちゃうよ」

「だからちゃんと仕事をしていれば、褒めてもらえますって。」

ほら、もう少しやる気を出してこっちの書類片付けちゃってくださいよ。」

あげは執務官がやれば3時間かかるところが30分で終わるんですから」

「自分でやる30分より、誰かにやってもらう3時間のほうが私は好きだよ。」

頑張れ、そんな健気で文句を言いながらも片付けてくれるカロルちゃんを応援してる！」

本日何回目かの溜息を零しながらも、彼は書類仕事を片付けていく。

『頼りになる副官を持って幸せだなあ』と私は幸福感に浸りながらゲームを続けることにした。

「大体面倒な事件はいつも私に回すんだから、あの上官。」

何が悲しくて8歳の美少女がテロリストの相手しないといけないわけ！」

「素直で単純な事件はつまらないって言ったからでしょう。だから向こうも、『なら面倒でひねた事件を任せる』とか仰ることになるわけで」

「大体テロリストの本拠地とか、そういったことが書いてないじゃん。

まさか私にーから調べさせようってわけ？ 面倒でやる気でねーだよっ！」

「安心してください。

現地の管理局員に怪しい人間が集まる建物を根こそぎ聞いておきました。

あとは何時も通り、あげは執務官が暴れた後、僕が戦闘不能になった人を捕らえて起きますよ」

「手が早いというか、何というか。

私のやる気を出させる方向にかけては、ホント一流だね」

「1年近く貴女の副官を務めてますから。

誰だつて操縦方法の1つや2つぐらい覚えますって」

「それ、私が操りやすい女って言われてる気がして不愉快！」

「貴女もまだまだ子供ですから」

書類から目を離さずに軽口を叩くくらいには、彼も染まってきたらしい。

管理局員の大半が私を尊敬の対象として扱う中、こういった軽口を叩ける彼の存在は貴重である。

「それで、このテロ組織　えと『銃と杖（ガンズ&スタッフ）』
っていうんだ。」

「こいつらが一枚噛んでるって書いてあるんだけど、大丈夫なわけ
？」

「『銃と杖（ガンズ&スタッフ）』……名前だけが一人歩きしてい
るテロ組織ですね。」

「今回活動しているのはその下位組織のようですが、上としてはこ
こで尻尾をつかみたいんでしょう。」

「おまけに正体不明の傭兵『魔法喰い』や『死角撃ち』が暴れてい
るとか。」

特に『魔法喰い』、SSSランクの魔力とか私超えてるんだけど
なんなのコイツ」

「ああ、『魔法喰い』なら組織から抜けたらしいですよ。
何でも身内から裏切られて殺されかけたとか、色々あったらし
いです」

「組織から離脱した最強クラスの傭兵。」

「凄く……ダークヒーロー、ちょっと興味あるかも！」

「馬鹿言っていないで、ちゃんと目を通して置いて下さいね。」

「それに貴女の方がよっぽどヒーローじゃないですか」

「ウツと私は言葉を返すのに詰まった。」

「そう、私が暴れるたびに犯罪者たちの間での二つ名が増えていく
のだ。」

『彷徨う逆鱗』 『善なる暴力』 『管理局の戦乙女』 『白衣の死神』

『気紛れ悪夢』

『天射無法』 『無秩序の天災』 『壹級災害』 『慈悲なき女神』 『蹂躪魔女』

一時期はかつこいいと思っていた。

けれど最近は、増えれば増えるほど痛々しさが増していくと思っている。

「何ていうかさ、このあだ名はさすがに無いと思うわけよ。」

私彼らの間でどんな扱いなの、凄く悪魔みたいな扱いじゃん！」

「そりゃアレだけ無慈悲に攻撃すればそうなりますよ。」

貴女のせいで、幼女がトラウマになった男だっているんですよ」

「自業自得だよ」

「逆に幼女限定のM属性に目覚めた男だつて」

「ごめんなさい、やり過ぎました！」

「他にも」

「やめてっ！ 私のせいで新たな扉開いちゃった人の話とか聞きたくない！」

果実は育ち続ける。

犯罪を犯す人間の絶望を肥料にして、大きく熟し続ける。

一面の荒野に硝煙の匂いが染み付いたとある管理世界に私はいた。
一応副官のカロルや、武装局員は艦で待機している。

任務のために私はその世界でそこそこ大きい町を闊歩する。

殺伐とした住人ばかりの町を、まだ年端も行かない小娘が鼻歌を
歌って歩くのだ。

こんな町でそんな無防備な姿を晒していれば、きっと無法者が絡
んでくるだろう。

そして 釣り針が動いた。

釣れたのは、大物で 最悪な男だった。

「やあ、お嬢さん。

こんな血と硝煙の匂いが染み付いた世界に何の用かな？」

「……………」

「よければ僕が案内してあげようか。」

なに、ムードは最悪だろうけどここは悪くない世界だ。

綺麗な光景は食傷気味じゃないかな、そんな君には飢えと荒廃が支配する無法地帯が珍しいだろうか？」

「別に、珍しくもなんとも無い。

こんな光景は有り触れている、戦争が日常の地域なんてどこもこんなものだよ」

「これは手厳しいね、お嬢さん。

おっと自己紹介を忘れていた、僕としたことが酷い失態だ。

僕は『ミハエル・マグヌス』、傭兵として生計を立てているフリーランスの魔導師さ」

「……巷で噂の『死角撃ち』」

「君のような若く美しいお嬢さんにまで知られているとは光栄だね。この出会いを運命と思って、僕と一緒にお茶をしないかな？」

「生憎私はコーヒー派なんだよ。

それに、管理局員として私は貴方を捕らえないといけないからお断り」

デバイスをいつでも起動できるよう握り締めながら、私は男の目を真っ直ぐ見つめた。

黙っていればイケメンと思える少年だった、私より少し年上だろう。

彼は呆気にとられたように口を開き呆然としていたが、やがて堰を切ったように笑い出した。

「ク　　ははは、それは失礼した。
てつきり『こちら側』と思って話しかけてすまなかったと謝罪さ
せてもらおうよ」

「『こちら側』?」

その言葉が何故か、はつきりと耳に残った。
私はオウムのようにその言葉を反芻すると、男は可笑しそうに
犯しそうに　　口を歪める。

「そう、君はまるで『僕の知り合い』とそっくりの気配をしている。
そっくりなんてレベルじゃない、まったく同じ　　歪み無く同じ
気配をしている。

君はまるで『彼』のようにおぞましく、禍々しい　　まるで僕ら
とは別の生き物のようだ」

「貴方と私が同じ生き物?
貴方のような殺人鬼と私が一緒に思っていたの?」

「殺人鬼も管理局員も関係ない。
君はまるで違うんだ、これは僕の主観で直感だから信憑性は無い
けどな。

まるで『別』のようだ、君や彼は、倫理から外れている『僕ら』
よりさらに『外れている』」

私には、彼のその視線が酷く不愉快に思えた。
汚らわしく、見つめられることさえ不快で腹が立つ。

「いや、『外れている』んじゃない。

『外れていた』ものが無理やり入ってきたかのようなのだ。
決して交わらないものが、無理やり混じってきたかのようなおぞましい存在感をしている」

「ッ
」

この男は危険だ。
これ以上乱される前に、打ち倒さなければ。

「
そしてその薄気味悪さ、魅力的だよ」

交差は一瞬。

バリアジャケットすら省いてデバイスを瞬時に起動。
愛用の白い杖状のデバイスで殴りかかるも、銃状のデバイスで受け止められた。

「『ヴァルキュリア』 セットアップ！」

私の魔力光 白色光が体に纏わりつき、バリアジャケットとなる。

手甲とブーツに白のスカートとスーツ、そして首筋に真紅のマフライ。

イメージとしては、所々に銀の鎧を付けた戦闘服が具現化する。
私は躊躇うことなく杖形態のインテリジェントデバイス『ヴァルキュリア』の先端をミハエルに向けた。

「おっと、僕が対策していなかったと思うのかい？」

砲撃で吹き飛ばそうとした刹那、いつ仕掛けられていたのかわからないバインドが私を捕らえた。

巧みに間接部分を捉えており、上手く動けず私は杖を向けたままの体勢でもがく事になる。

おまけにこのバインド、捕らえた敵の魔力を吸い拘束力を上げる効果がようだ、私の魔力が減っていく。

「僕の異名は『死角撃ち』だよ。

話しかけたその瞬間から君に攻撃を仕掛けていたに決まっているじゃないか」

隠蔽されていた魔力弾が私の周囲に出現する。

威力はともかく数は圧巻、視認した限りは100以上あるだろう。まさか会話の間、私に気づかれないうちにこれだけの数を設置していたとは思わなかった。

「ジ・エンド、続きの会話は目覚めた時にしようか」

じわじわと魔力を吸い取り、時が経つほど拘束力を上げるバインドに縛られ。

全方位からの一斉攻撃、なるほど奇襲という観点ではこの男は私以上の使い手だ。

『Fire』

だが

「舐めんなッ！」

『Jacket Purge』

バリアジャケットを構成していた魔力を全身から開放。
バインドを破壊すると即座に演算を開始し、防御のための術式を
組み上げる。

『Oval Protection』

球状の防御魔法が私を覆い、迫る魔力弾を防いでいく。

思ったとおり、数を優先したため構成は粗く、使用している魔力
も少ない。

「ハッ さすがにこの程度じゃ一撃与えるにも至らないか。」

だがバインドによる魔力吸収に加え、そんな大規模防御魔法だ。
さすがの君でも大分魔力を消費したと思うんだけど、どうかな？」

「生憎だけど、この程度じゃ私の魔力は尽きないよ。」

それに私にせっかく捕らえた私を解放しちゃったことのほうが失
態だよ！」

ジャラリ、と鎖状の魔力が音を立てた。

地面から突き出してきた白色の鎖は瞬時にミハエルを縛ろうと迫
る。

「ッ これはチエーンバインドか」

「貴方がどんな策を駆使しようと、私は王道でそれを打ち破る。」

そこまで演算を使わなくてもいい防御魔法とバインドなら、同時
発動くらい朝飯前」

チツと舌打ちをすると、彼は軽々とチェインバインドを避ける。つねに先読みしているのか、あるいはその並外れた直感のたわものか。

起動を読まれた鎖に照準を定めた彼は、蛇のようにしなるソレに向け引き金を引いた。

『Photon Bullet Assault Shift』

加速補助の環状魔法陣を使用した圧縮魔力弾が鎖を狙い撃った。放たれた魔力弾のが数発命中するだけでチェインバインドは砕け散る。

そして次なる目標に、私に銃状のデバイスを向け

「これは、避けられないな」

私の周囲に浮かぶ100の魔力弾を見て、言葉を吐いた。無論、いくら私だって数秒で100の魔力弾を用意するのは辛いのだ。

「数に重きを置いたため、使用魔力が段違いの上、構成は雑。魔力の大半を使用しているとみるが、どうかな 最年少執務官」

「私の正体に気づいたの？」

「その強引な力押しに圧倒的な魔力。なるほど、これは酷い 君もまたデタラメというわけだ」

「……さつきから誰と被せているのか知らないけど、不快だよ。」

もう会うことも無いだろうから、さようならとだけ言っとくよ」

低ランク魔導師なら一発で戦闘不能になるほどの魔力弾を1000発。

本来なら時間をかけて用意するのだが、これ以上この男と言葉を交わすも嫌なので強引に潰すことにした。

おかげで魔力の大半を使用した上、構成も拙い失敗魔法だ。

「どうか、君とはまた会えそうな気がするよ。」

まあどんな再会になるかと、また戦いになるんだらうけどね」

「無駄口をペラペラ、ここまで不快になったのは久々かも。」

貴方の名前は覚えておいてあげるよ、もう二度と会わない奴としてね」

「それは光栄、けどその台詞はまるで前振りのようだよ」

その、あまりにも余裕な態度に私は腹を立てて魔力弾を降らせた。

「ときめいて死ね！」

『Accel Shooter Judgment Shift』

『アクセルシューター応用編 アクセルシューター・ジャッジメントシフト』

100を超える誘導式魔力弾を雪崩の如く放つ、私の十八番。

それが避ける余地の無い絨毯爆撃として、不愉快な男を蹂躪した。

一発一発が相応の威力を誇る上、全方位から不規則に動きながら迫るのだ。

到底対処しきれるものではない。
文字通り、『ミハエル・マグヌス』は蹂躪された。

「到着早々、『死角撃ち』を捕縛。
いやさすがですよ、いつも通り嫉妬するのも馬鹿らしくなるぐら
いの優秀さ。」

だからといって街中であんな大規模魔法を使ってどうするん
ですか!？」

「ごめんなさい」

いや、さすがに街中で使う魔法じゃなかったなと思いつ返す。
そういうわけで絶賛お説教中である、今回はかりは私が悪いので
反論の余地が無い。

「幸いにも、戦闘が始まったとたん、近くの住民は避難してました
けど。」

「この対応の早さには僕も舌を巻きましたけど、それでも付近に気
を使うべきでした」

「返す言葉もございません」

「おかげで周囲の建物は半壊。」

「この世界の管理局員の皆さんに僕は頭を下げまくって来ましたよ、

まったく。

まあ向こうも『死角撃ち』を拘束したということで、不問に処す
そうですね」

「結果オーライ、みたいなの？」

「全然よくないですからね!？」

その上魔力の大半を使って来るとか、貴女らしくないですよ」

「うん、そうなんだけど。」

ぶっちゃけ触りたく無かったし、でも早く決着^{ケリ}を付けたかったし」

「何かあったんですか？」

「ううん、今回は全面的に私が悪かったただだよ。」

でもアイツの言葉をこれ以上聞いていたくなかったのも本当。
アイツの声を聞くのも、見られるのも嫌で 何でだろうね」

自分でも馬鹿馬鹿しいと思っている。

ただの犯罪者の言葉だ、意味なんてあるのかもわからない言葉だ。
それなのに私はこの上なく動揺し、余裕を奪われ、余力を残す余
地さえ無かった。

戦闘では勝った、大勝利だ。

だが、どうにも勝てた気がしない。

「魔力が回復したらすぐに次の仕事ですからね。」

今のうちに休めるだけ休んどいて下さいよ、あげは執務官」

「了解」

そして、私はベッドに横になった。

ただ一つの疑問、どうして私はあんなに動揺したのかを考えながら。

テロ組織の拠点つぶしは楽に進んだ。

途中現地の武装局員とか、他の執務官とかと合流したからだ。

私はカロールに支援魔法をかけて貰って適当に暴れるだけ、被害を気にしなくていいって素敵。

基本テロリストは低ランク魔導師や質量兵器使いなため、一定ランク以上の魔導師なら苦戦することも無い。

特に執務官クラスとなると、よほどの使い手でなければ質量兵器も怖くない。

そう、流れ作業だったはずなのだ。

本拠地だってそこまで苦戦しないだろうと、私を含め他の執務官も余裕を持って挑んだ。

予想通り、特に苦戦することも無く制圧も進んだはずだったのだが

「この程度か。」

管理局の執務官というのも大したことは無い」

言い知れぬ覇気を纏った大物がいた。

身長が2メートルを超えるのではないかという巨漢。

バリアジャケットなのか、青一色の全身甲冑フルプレートで顔が見えない。

彼の発言から推測するに、共闘していた2名の執務官は既に返り討ちにあつたようだ。

幸い転移魔法により撤退したため命に別状は無いようだが。

「『銃と杖』首領、ガリヒム・ナゼール。

噂の最年少執務官が直々に会いに来るとは想定外だったな」

「へえ、今まで散々隠れていた首領さんがやけに堂々と名乗るんだね。」

もう怯えて隠れるのは止めたのかな、それとも影武者か何か？」

「別段、隠れていたわけは無いのだが。

俺は俺でやる事があつただけのこと、表舞台で踊るだけが戦いではない」

「どうでもいいよ、そんなの。まあ一応お約束ということだ。

时空管理局執務官『山中あげは』です、武器を捨て大人しく投降してください、みたいな」

「断る」

ならご勝手に。

私はそう呟くとデバイスを槍のように構える。

だが目の前の男はうるたえもせず、直立不動のまま動かない。

「面白い　未来のストライカーの実力、見せてもらおうか」

「デイバインバスター！」

『Divine Buster』

白色の砲撃が空を裂き、不動の全身甲冑に正面から撃ち抜かんと命中する。

だが敵は不動、膨大な魔力の砲撃を受けなお平然とその場に立っていた。

ベルカ式レアスキル『堅牢なる鋼』

接触した金属の強度を物理・魔法の両面において跳ね上げる希少技能。

その防御力はSランクオーバーにすら至る、絶対防御。

「ッ　！？」

そしてその光景は私にとって、悪夢のようだった。

今まで砲撃魔法を避けられたことも防がれたこともある。

だが　今まで一度も、まったく通じなかったことは無かったのだ。

ガシャン、と全身甲冑が音を立てた。

平然と、障害など無いかのように一直線にこちらに歩み寄ってくるその姿が視界に移る。

「アクセルシューター、応用編！」

演算を開始、精密に粗を許さずスフィアを次々と周囲に形成して

いく。

今回は手順を省かない、正真正銘の全力全開。

「アクセルシューター・ジャックシフト！」

『Acceler Shooter Judgment Shift』

100を超える魔力弾を全て目の前の男に叩き込む。

だが届かない。全てが男に当たる前に甲冑に弾かれ、虚空に消えていく。

必殺と自負していた魔法をその身に全て受け、それでもなお目の前の悪夢は止まらない。

「ッ　なら、これなら」

先程防がれた砲撃魔法を再演算。

しかし砲撃そのものが螺旋状に回転するよう変化させる。

「デイベインバスター応用編！」

使用魔力は変わらず、威力も変わらない。

変わるのは貫通力、強固な防御を貫く事に特化させたオリジナル魔法。

「スパイラル、バスター！！」

『Spiral Buster』

螺旋状の魔力砲撃が、絶対防御を貫かんと迫り　衝突した。

ディバインバスター応用編、スパイラルバスター。
実のところ、副官のカロルにすら『いつ使うんですか』と言われるほどの役立たずの魔法。

ソレも当然、螺旋状に魔力を回転させるというのはかなりの魔力操作を必要とされる。

その上、上がるのは貫通力だけであり　そもそも螺旋状にする意味があまりないのだ。

正直な話、私の魔力ならほとんどの場合、ディバインバスターで十分事足りるのだから。

大抵の敵なら防御の上からでも削り落とせる。

ゆえに螺旋状に回転させるという労力に見合う使用機会が存在しない。

だが今だけは、過去の自分を褒めておこう。

よくぞこの魔法を用意していたと、過去の自分に感謝しよう。

螺旋状に回転する白色の砲撃が甲冑を削る。

未だその魔法は相手の身に届いていないが、確実に防御を削っている。

先ほどのように弾かれること無く、その場に留まり、火花を散らして男を貫かんと唸る。

「ぐッ　年端も行かぬ小娘の甘く見たか。

だがこれほどの攻撃、長くは続くまい　」

常に魔力を放出し続けているため、私の体力も削れて行く。
だがこれは根競べで、そして相手の魔力もガンガン削られている
はずなのだ。

あれ程の防御技能を常時使用しているのだ　辛くないはずが無
い。

「生憎、力押しは私の専売特許で得意分野だよ。

私の魔力が尽きるより早く、貴方のご自慢の甲冑は持たないし、
魔力も尽きるはず」

「下らない、才に踊らされ、大人たちの利用される小娘がよくぼざ
く。

魔法とは何で出来てるか知ってるかね？　悪夢と夢想で出来てる
のだよ」

「　そんな事に拘るなんて、そっちこそ下らない。

何で出来ていようと、何に使うかは私が決めるだけのこと」

「それがお前の答えか、では次だ。

逆に兵器とは何で出来てるか知ってるか？　分からのなら次回
までの宿題としておこっ」

突如語り出した男を訝しげに見つめる。

魔法は人々の夢で、誰も傷つけないクリーンな技術
なんて、そんな御伽噺のような妄言を信じているわけじゃない。

魔法は確かに溺れるほど楽しい。

それはかつて持っていなかった私だからはっきりわかる。

では兵器は何で出来ているのか。
魔法が悪夢だというのなら、兵器は？

まあ　私が返す言葉は一つなんだけど！

「次回があるとしても？　お前は此处で　ときめいて死ね！！」

螺旋状の砲撃が、ロボットののような全身甲冑の男を飲みこんだ。

そして戦闘は終わった。

テロリストたちの最後の拠点の制圧も終了。

大半は捕らえたものの、一部の構成員には逃げられたようだ。

例えば　あの全身甲冑とか。

「いねーし、倒したと思ったのにいねーし。

うん、そんな気はしたんだよ。　貫いた手ごたえ全然無かったし。

あのロボットもどき、決着を待たず転移魔法でいなくなっただけ
みたい、ざげんな！」

おそらくアイツの部下が転移魔法で移動させたんだろう。

私がギリギリの状態で、余裕に念話で脱出機会を指示していたりしたのだろう。

「何この不完全燃焼、男が正々堂々正面からのぶつかり合いから逃げんな！

腹いせにアイツの情報、根こそぎ管理局中に広めてやる！ ざまあ見る！

あの戦闘スタイルじゃ長時間戦闘は無理だろうし、これで次から他の執務官もむざむざやられないでしょ」

カロールに報告しよう。

彼なら効率よく情報をまとめて広めてくれるに違いない。

「それにしても、質量兵器を随分と信奉しているみたいだった。

質量兵器も魔法も結局同じものなのに、何を拘っているんだろうね」

今、私いい事言ったんじゃないだろうか。

そんなことを思考の片隅で考えながら、私はその場所を後にした。

そして時が来る。

熟しきった果実は腐り、地に落ちた。

アレから何日経っただろうか。

私は部屋から一步も出ないまま、暗闇に紛れ続けていた。

「なあにが、『君に相応しい活躍場所がある』だよ。

暗部とか真つ黒じゃん、その上、ターゲットは私だし」

『決して交わること無き次元より5人の異邦人が舞い降りる。

法の番人たちは道化と成り果て、異邦人たちは舞台裏にて踊る。

道筋は歪み、かつての秩序は混沌と虚無の中へ消えてゆく。

異邦の知により運命は狂い、世界は破壊される』

始めて見た時は理解できなかった。

そしてその予言の示す意味を、先を見て恐怖した。

即座にその場で『予言対策部隊』の勧誘を蹴ると、無限書庫に引きこもる。

そして知ってしまった。

『世界』のあり方を、『私』という存在の扱いを。

この『世界』には物語があり、それを道筋通りに進めようとするシステムがある。

そのため異物は排除する、ある種の自浄作用が存在し イレギユラーは排除されてきた。

これが無限書庫にあるということとは、このシステムに気づいた先人がいたのだろう。

それが私のような転生者だったのか、それとも「物語」から外れてしまった登場人物だったのか。

怖い、怖くて潰れてしまいそうになる。

誰も信用できないのだ、誰も頼れないのだ。

頼れるとしたら同じ境遇の人間だけで、でも この広い次元世界でどう探せというのか。

仮に地球にいけば会えるとしても 地球だけで60億の人間がいる。

その中から4人を探す？ 砂漠に落ちた針を探すようなものではないか。

下手に動けない、偶然を装って世界は排除してくるのだ。

デバイスの起動をするまもなく、上空から鉄骨が降ってきたら？ 食べ物に偶然、誰かが仕込んだ毒がまぎれていたら？

任務で怪我をし、治療をしているとき偶然、医療ミスが発生した

ら？

「世界にはこんなにも死が満ちている、みたいな……。
こんな事、知りたくなかった 知らなければよかった ツ！」

だがもう、知らなかったところには戻れない。
無知だったころの、調子に乗っていた頃の私には戻れない。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

「助けて、私を 助けてッ！」

嫌だ、死にたくない そんな理由で消されたくないよ……。
まだやりたい事、したい事、たくさんあるのに

「無知は命知らずだが幸せだ。
博識は賢いが不幸で孤独だ。」

後悔、しているのだろうか。
知ってしまったことを、知らないでいたことを。

「これ以上、壊れたくない ツ！」

私は一人で泣いた、独りで泣いた。
涙を拭ってくれる人は、どこにもいなかった。

そして、月日が流れる。

執務官を辞し、無限書庫に引きこもっている間にも様々なアクシヨンがあつた。

父親が母親が、尋ねてきた。

だが私にはもう、私を殺そうとする世界の手駒にしか見えない。叱咤の声を上げる父親を、激励する母親を私は拒絶し　縁を切つた。

『もう二度と、関わらないで』

この上なく、完膚なきまでに、ただ素直に拒絶した。

罪悪感で胸が痛んだけれど、それでももう私には2人が親だとは思えなかった。

原作キャラが絡んできた。

『クロノ・ハラオウン』が尋ねてきたのだ。

原作キャラに会えた感動よりも、吐き気を催す程のおぞましい存在に絶望した。

それでもただ正面から、穢れ無き善意からの言葉がたまらなくいらついた。

だから蹂躪した、その想いを、願いを、信念を踏みにじり、引き裂き、嘲笑つた。

酷い言葉をたくさん言った、模擬戦の範疇を越えた怪我を負わせ、溜飲を下げた。

リーゼロッテだかアリアか覚えてないけど、その片方と模擬戦になつた。

八つ当たり気味にクロノを傷つけたことがよほど頭にきたのか、かなり強引だった。

『アンタさえいなければ、黒助が最年少執務官だったのに』とか理不尽なことを言われた。

そして気づいた　　まだ見ぬ同胞に私の存在を知ってもらえる可能性を。

その同胞が善人とは限らないけど、よくいるハーレムを目指す最低な奴だったとしても。

もし会えたなら　　私は変われるのではないだろうか。

カロールが別の部隊に移ることになった。

私のような自堕落な引き籠もりの元で遊ばせておくには惜しい人材だと判断されたのだろう。

だからその場で上官に告げられたとき、胸を張ってやってやった、『今更気づいたのか』と。

別れ際にカロールに謝られた。

そのまま罪悪感に苛まれる彼を見ていられなかったので、密かに作っていた自作のデバイスを押し付けておいた。

性能は悪くないはずだし、ちょっとした隠し玉も搭載済みだ
恥ずかしいから教えてやらないけど。

こうして私はこの世界で1人になった。

そして

「酷えツラしてんな、最年少執務官様よお。

くははははは、俺も他人の事言えねえんだけどな。

まあ俺の予想は正しかったわけだ、こりゃあドクターちゃんも喜ぶぜ」

無限書庫に彼は来た。

私と同じ黒髪をした、チンピラのようなしゃべり方をする殺人鬼が。

「ようこそ、綺麗に素敵に狂っちゃってるリリカルでマジカルな世

界によ。

その様子だとお前もこの世界が優しさで出来ているんじゃないかって気づいてんだろ。

くははははは、良いぜ 最高だ、こりゃ危険を犯して来た甲斐があったってもんだ！」

その存在感を、どことなく懐かしさを感じさせる心地よい存在感で確信する。

だが声が詰まって上手く言葉に出来ない、言いたいことは山ほどあるのに、嗚咽しか出せない。

「さあ始めようぜ、同胞！」

陳腐だとか蹂躪物だとか……最低系だとか、アンチだろうがヘイトだと言われ様が。

誰に恥じることのない、『俺らの物語』を潰されないよう戦おうぜ

泣き声をあげた。

嗚咽は止まらず、しゃっくりと鼻声で上手く伝わらなかつただろうけど。

それでも私は目を真っ赤に晴らし、くしゃくしゃの表情で感謝の言葉を口にした。

その日、私は救われた。

番外編：ある少女の黒歴史（後書き）

実はオリ主よりも彼女のほうが厨二（前世的な意味で）でした。

当時の話を彼女の目の前で語ると枕に顔をうずめて足をバタバタさせます。

……の割には戦闘時にこの状態に戻るわけですが。

あ、最後の異様にハイテンションなアイツは言うまでも無いですよね。

ではまた次回、最低2週間に1回は更新できることを祈って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4227n/>

転生者たちの軌跡

2011年7月13日22時59分発行